



Unable to locate subtitle

AWS Data Exchange ユーザーガイド



AWS Data Exchange ユーザーガイド: ***Unable to locate subtitle***

Copyright © 2024 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

Amazon の商標およびトレードドレスは、お客様に混乱を招く可能性がある態様、または Amazon の信用を傷つけたり、失わせたりする態様において、Amazon のものではない製品またはサービスに関連して使用してはなりません。Amazon が所有しない他の商標はすべてそれぞれの所有者に帰属します。所有者は必ずしも Amazon との提携や関連があるわけではありません。また、Amazon の支援を受けているとはかぎりません。

Table of Contents

AWS Data Exchange とは	1
AWS Data Exchange におけるデータ許可とは	1
AWS Marketplace データ製品とは	2
サポートされるデータセット	3
AWS Data Exchangeへのアクセス	3
データレシーバー	3
データ送信者とデータプロバイダー	4
サポートされるリージョン	4
関連サービス	4
セットアップ	6
AWS アカウントへのサインアップ	6
AWS アカウントへのサインアップ	6
管理ユーザーの作成	7
ユーザーの作成	8
AWS データセットでの Open Data の使用	9
AWS Data Exchange コンソールを使って AWSデータセットの Open Data の使用を開始する	10
ステップ 1: AWSデータセットで Open Data を検索する	10
ステップ 2: AWSデータセットで Open Data を使用する	11
AWS アカウント を使わずに AWSデータセットの Open Data で開始する	11
ステップ 1: AWSデータセットから Open Data を検索する	11
ステップ 2: AWSデータセットで Open Data を使用する	12
内のデータ AWS Data Exchange	13
アセット	13
アセットの構造	13
アセットタイプ	14
リビジョン	16
リビジョンの構造	17
データセット	18
所有データセット	19
権限を持つデータセット	19
データセットタイプ	19
Amazon S3 データアクセスデータセット	21
AWS Lake Formation データセット (プレビュー)	21

AWS リージョン および データセット	21
データセットの構造	21
データセットのベストプラクティス	22
タグ	23
データ許可の作成	24
プログラマ的なアクセス	24
新しいデータ許可の作成	25
ファイルベースのデータを含むデータ許可の作成	25
API を含むデータ許可の作成	30
Amazon Redshift データセットを含むデータ許可を作成する	43
Amazon S3 データアクセスを含むデータ許可の作成	47
AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可の作成 (プレビュー)	61
AWS Data Exchange でのデータ許可の承諾とデータへのアクセス	66
関連トピック	67
データ許可の承諾後にデータセットにアクセスする	67
ファイルベースのデータを含むデータセットにアクセスする	67
API を含むデータセットにアクセスします。	68
Amazon Redshift データセットを含むデータセットにアクセスする	70
Amazon S3 データアクセスを含むデータセットにアクセスする	71
AWS Lake Formation データセットを含むデータセットにアクセスする (プレビュー)	74
組織内でのデータ許可ライセンスの共有	75
ライセンス共有の前提条件	75
ライセンスの表示	76
ライセンスの共有	77
データ製品のサブスクライブ	78
関連トピック	79
製品のサブスクリプション	79
データセットとリビジョン	82
データディクショナリ、サンプル	83
はじめに	83
ステップ 1: AWS Data Exchange をセットアップする	84
ステップ 2: カタログを参照する	84
ステップ 3 : (オプション) データ製品に関するレコメンデーションをリクエストする	85
ステップ 4: (オプション) データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する	86
ステップ 2: 製品をサブスクライブおよびアクセスする	88
製品のサブスクライブ	89

ファイルベースのデータが含まれる製品をサブスクライブおよびアクセスするには	89
API が含まれる製品をサブスクライブおよびアクセスする	94
Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする	98
Amazon S3 データアクセスを含む製品をサブスクライブおよびアクセスする	101
AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブしてアクセスする (プレビュー)	106
データディクショナリの表示とダウンロード	108
サブスクライバーのサブスクリプション検証	109
サブスクリプションリクエストの完了	109
保留中のサブスクリプションリクエストを確認する	110
E メール通知	111
組織内でのライセンスサブスクリプションの共有	111
ライセンス共有の前提条件	111
ライセンスの表示	112
ライセンスの共有	113
Bring Your Own Subscription (BYOS) オフアー	113
プライベート製品とオフアー	114
サブスクリプションの管理	116
サブスクリプションの表示	116
サブスクリプションの自動更新を有効にする、無効にする	116
製品のサブスクリプションを解除する	117
チュートリアル:AWS Data Exchange ハートビートにサブスクライブする	117
.....	117
AWS Data Exchangeハートビートにサブスクライブする	119
チュートリアル:API の AWS Data Exchange をサブスクライブする	120
API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) のサブスクリプション	120
API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) に使用	121
チュートリアル:ワールドワイドイベント出席登録を申し込む	123
Worldwide Event Attendance (テスト製品) へのサブスクリプション	124
Amazon Redshift クラスタ (コンソール) による Worldwide Event Attendance (テスト製品) データのクエリ	125
Amazon Redshift (SQL) での Worldwide Event Attendance (テスト製品) データのクエリ	126
チュートリアル: AWS Lake Formation の AWS Data Exchange をサブスクライブする (プレビュー)	127
(プレビュー) AWS Data Exchange で AWS Lake Formation (テスト製品) AWS Data Exchange をサブスクライブする	127

Lake Formation の AWS Data Exchange (テスト製品) のセットアップとクエリ(プレビュー)	125
チュートリアル: Amazon S3 の AWS Data Exchange をサブスクライブする	131
Amazon S3 (テスト製品) の AWS Data Exchange のサブスクリプション	131
Amazon S3 の AWS Data Exchange (テスト製品) のセットアップとクエリ	133
チュートリアル: AWS Data Exchange プロバイダー生成通知にサブスクライブする	135
プロバイダー生成通知 (テスト製品) AWS Data Exchange の へのサブスクライブ	135
Amazon を使用したプロバイダー生成通知の設定 EventBridge	136
AWS Marketplace へのデータ製品の出品	138
拡張プロバイダープログラム (EPP)	139
プログラムのアクセス	140
関連トピック	140
公開ガイドライン	141
製品の詳細	143
製品の可視性	144
機密カテゴリの情報	144
製品名	146
製品ロゴ	146
サポート連絡先	147
製品カテゴリ	147
簡単な説明	147
詳しい説明	147
リビジョンアクセスルール	149
データディクショナリ	150
サンプル	151
はじめに	151
ステップ 1: 登録資格を確認する	152
ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う	153
ステップ 3: データの適格性を確認する	155
新しい製品の公開	155
ファイルベースのデータが含まれる製品の公開	155
API が含まれる製品の公開	162
Amazon Redshift のデータ共有が含まれる製品の公開 (プレビュー)	181
Amazon S3 データアクセスを含む製品の公開	187
AWS Lake Formation データ権限データセットを含む製品の公開 (プレビュー)	204
製品の説明テンプレート	211

詳しい説明の汎用テンプレート	211
詳しい説明の金融サービス用テンプレート	213
詳しい説明のヘルスケアおよびライフサイエンス用テンプレート	216
詳しい説明のマーケティングおよび広告用テンプレート	218
詳しい説明のメディアおよびエンターテイメント用テンプレート	220
詳しい説明の公共部門用テンプレート	222
詳しい説明の小売およびロケーション用テンプレート	224
製品の更新	226
製品とオファーの詳細の更新	226
データディクショナリの更新	228
サンプルを更新する	229
カスタムメタデータの更新	230
データセットの新しいリビジョンを発行する	230
製品を発行解除する	233
リビジョンの削除	234
リビジョンの取り消し	234
オファーの作成	238
オファーの料金	239
米国の消費税と使用税	239
データサブスクリプション契約	239
返金ポリシー	240
サブスクリプション検証	240
オファーの自動更新	240
サブスクリプションの表示	240
カスタムオファー	241
プロバイダー生成通知	245
サブスクリプション検証	246
E メール通知	248
サブスクリプション検証リクエストの表示	248
サブスクリプション検証リクエストを編集する	248
リクエストを承認または拒否する	249
AWS Marketplace でのプロバイダー財務	251
支払い	251
米国の消費税と使用税	252
AWS Marketplace 販売者レポート	252
サブスクライバーの返金リクエスト	252

AWS Data Exchange のジョブ	253
ジョブプロパティ	253
AWS リージョン とジョブ	255
アセットのインポート	255
S3 バケットからのアセットのインポート	255
署名付き URL からのアセットのインポート	257
Amazon API Gateway API からのアセットのインポート	258
Amazon Redshift のAWS Data Exchange データ共有からのアセットのインポート	260
AWS Lake Formation からのアセットのインポート(プレビュー)	261
アセットのエクスポート	263
S3 バケットへのアセットのエクスポート	263
署名付き URL へのアセットのエクスポート	266
リビジョンのエクスポート	268
S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (AWS SDK)	269
プロバイダーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (コンソール)	270
サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (コンソール)	271
サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート	271
リビジョンをエクスポートするときのキーパターン	277
クォータ	279
Service Quotas	279
サービスエンドポイント	279
エクスポートとインポートジョブのガイドライン	279
リソースフィールドに対する制約	281
セキュリティ	282
データ保護	282
保管中の暗号化	283
転送中の暗号化	284
コンテンツに対するアクセス制限	284
Amazon S3 データアクセスのキー管理	284
AWS KMS 許可の作成	284
暗号化コンテキストと許可制約	285
AWS KMS keys での のモニタリング AWS Data Exchange	285
アイデンティティとアクセス権の管理	289
認証	290
アクセスコントロール	291
API アクセス許可のリファレンス	299

AWS マネージドポリシー	307
ロギングとモニタリング	323
モニタリング	324
Amazon EventBridge イベント	324
AWS Data Exchange イベントのユーザー通知	350
を使用した AWS Data Exchange API コールのログ記録 AWS CloudTrail	352
今後のログ記録の変更 AWS Data Exchange CloudTrail	356
コンプライアンス検証	359
PCI DSS コンプライアンス	360
耐障害性	360
インフラストラクチャセキュリティ	361
VPC エンドポイントAWS PrivateLink	361
AWS Data Exchange VPC エンドポイントに関する考慮事項	362
AWS Data Exchangeのインターフェイス VPC エンドポイントの作成	362
の VPC エンドポイントポリシーの作成 AWS Data Exchange	362
AWS Marketplace Catalog API	365
.....	365
AddDataSets	366
チュートリアル: 公開済みのデータ製品への新しいデータセットの追加	366
AddDataSets 例外	370
ドキュメント履歴	371
AWS 用語集	391
.....	cccxcii

AWS Data Exchange とは

AWS Data Exchange は、AWS で他の組織からのデータ権限を大規模に共有および管理することを容易にするサービスです。

データレシーバーは、すべてのデータ許可と AWS Marketplace データサブスクリプションを 1 か所で追跡および管理できます。AWS Data Exchange データセットにアクセスできる場合は、互換性のある AWS やパートナー分析、機械学習を使用して、データセットからインサイトを引き出すことができます。AWS Marketplace からデータ製品を購入する方法については、「[でのデータ製品のサブスクリプション AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

データ送信者は、AWS Data Exchange を使用することで、データ配信や権限基盤を構築して維持する必要がなくなります。AWS アカウントを持つすべてのユーザーが、データ許可を作成してデータレシーバーに送信できます。データを製品として AWS Marketplace で販売する場合は、ガイドラインに従って適格であることを確認してください。詳細については、「[AWS Marketplace へのデータ製品の出品](#)」を参照してください。

さらに、AWS アカウントの有無にかかわらず、誰もが [AWS の Open Data](#) プログラムの一部である公開されているデータセットを検索して使用できます。詳細については、「[AWS データセットでの Open Data の使用](#)」を参照してください。

トピック

- [AWS Data Exchange におけるデータ許可とは](#)
- [AWS Marketplace データ製品とは](#)
- [サポートされるデータセット](#)
- [AWS Data Exchange へのアクセス](#)
- [サポートされるリージョン](#)
- [関連サービス](#)

AWS Data Exchange におけるデータ許可とは

データ許可は、データセットへのアクセスをデータレシーバーに許可するためにデータ送信者が作成する、AWS Data Exchange 内の売買単位です。データ送信者がデータ許可を作成すると、許可リクエストがデータレシーバーの AWS アカウントに送信されます。データレシーバーはデータ許可を承諾し、基になるデータへのアクセス権を取得します。

データ製品は、以下の部分で構成されます。

- データセット — AWS Data Exchange 内のデータセットは、送信者がキュレートしたリソースです。データ許可の承諾後にレシーバーがアクセスできるデータアセットが含まれています。AWS Data Exchange は、ファイル、API、Amazon Redshift、Amazon S3、および AWS Lake Formation (プレビュー) という 5 種類のデータセットをサポートしています。
- データ許可の詳細 — この情報には、データレシーバーに表示されるデータ許可の名前と説明が含まれます。
- 受取人アクセスの詳細 — この情報にはレシーバーの AWS アカウント ID が含まれます。また、レシーバーがデータにアクセスできる期間を指定します。

AWS Marketplace データ製品とは

製品とは、プロバイダーによって発行され、サブスクライバーが利用できるようになる、AWS Marketplace 内の売買単位です。データ製品とは、AWS Data Exchange データセットを含む製品です。データプロバイダーがデータ製品を発行すると、AWS がガイドラインと利用規約に照らしてレビューした後で、当該製品が AWS Marketplace 製品カタログに掲載されます。発行する各製品は、製品 ID によって一意に識別されます。

データ製品には、次の部分があります。

- 製品の詳細 — この情報には、名前、説明 (簡単な説明と詳しい説明の両方)、データサンプル、ロゴ画像、およびサポート連絡先情報が含まれます。製品の詳細は、プロバイダーが入力します。
 - サブスクライバーである場合の詳細については、「[製品のサブスクリプション](#)」を参照してください。
 - プロバイダーである場合の詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。
- 製品オファー — オファーは、製品をサブスクライブするときにサブスクライバーが同意する条件を定義します。AWS Marketplace の公開カタログで製品を利用可能にするには、プロバイダーがパブリックオファーを定義する必要があります。このオファーには、料金と期間、データサブスクリプション契約、返金ポリシーが含まれ、カスタムオファーを作成するオプションもあります。
 - サブスクライバーである場合の詳細については、「[プライベート製品とオファー](#)」と「[Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)」を参照してください。
 - プロバイダーである場合の詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
- データセット — 製品には、1 つ、または複数のデータセットを含めることができます。AWS Data Exchange のデータセットは、データプロバイダーによってキュレートされたリソースで、レ

シーバーがデータ許可の承諾後にアクセスできるデータアセットが含まれています。AWS Data Exchange は、ファイル、API、Amazon Redshift、Amazon S3、および AWS Lake Formation (プレビュー) という 5 種類のデータセットをサポートしています。

- サブスクライバーである場合の詳細については、「[データセットとリビジョン](#)」を参照してください。
- プロバイダーである場合の詳細については、「[内のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

サポートされるデータセット

AWS Marketplace は、サービスの使用を通じて透明性を促進することにより、データトランザクションの円滑化に対して責任あるアプローチを取っています。AWS Marketplace は、許可されるデータタイプのレビューを行って、許可されない製品を制限しています。プロバイダーによるデータセットの配信は、AWS Marketplace 販売者向けの利用規約に規定された法的な適格要件を満たすデータセットに制限されています。

許可されるデータのタイプに関する詳細については、「[公開ガイドライン](#)」を参照してください。

Important

AWS のお客様には、独自のデューデリジェンスを追加で実施して、適用されるデータプライバシー法に対するコンプライアンスを確保することが推奨されます。AWS Data Exchange の製品またはその他リソースが不正または非合法的な目的のために使用されている疑いがある場合は、[Amazon AWS の不正使用を報告するフォーム](#)を使用して報告してください。

AWS Data Exchangeへのアクセス

データレシーバー

データレシーバーは、現在のデータ許可、保留中のデータ許可、期限切れのデータ許可のすべてを AWS Data Exchange コンソールから確認できます。

また、AWS Data Exchange を通じて [AWS Marketplace カタログ](#) から新しいサードパーティのデータセットを見つけてサブスクライブすることもできます。

データ送信者とデータプロバイダー

データ送信者またはデータプロバイダーは、以下のオプションを使用して AWS Data Exchange にアクセスできます。

- [AWS Data Exchange コンソール](#)を使用して直接アクセス ([データを発行])
- AWS Marketplace で利用可能なデータ製品を提供するデータプロバイダーは、以下の API を使用してプログラムからアクセスできます。
 - AWS Data Exchange API – この API 操作を使用して、データセットとリビジョンを作成、表示、更新、および削除します。これらの API 操作は、リビジョンに対するアセットのインポートとエクスポートにも使用できます。詳細については、「[AWS Data Exchange API リファレンス](#)」を参照してください。
 - AWS Marketplace カタログ API – API オペレーションを使用して、AWS Marketplace に発行されたデータ製品を表示および更新します。詳細については、「[AWS Marketplace カタログ API リファレンス](#)」を参照してください。

サポートされるリージョン

AWS Data Exchange データ許可、サブスクリプション、データセット、リビジョン、およびアセットは、サポートされているリージョン内でプログラムまたは AWS Data Exchange コンソールを使用して管理できるリージョンリソースです。サポートされているリージョンの詳細については、「[グローバルインフラストラクチャのリージョン表](#)」を参照してください。AWS Marketplace に公開されたデータ製品は、グローバルに利用できる単一の製品カタログで提供されます。サブスクライバーは、使用している AWS リージョンにかかわらず、同一のカタログを表示できます。

関連サービス

以下は、AWS Data Exchange に関連するサービスです。

- Amazon S3 — AWS Data Exchange は、プロバイダーが Amazon S3 バケットからデータファイルをインポートして保存できるようにします。データ受取人は、これらのファイルをプログラムで Amazon S3 にエクスポートできます。また、AWS Data Exchange を使用することで、受取人はプロバイダーの Amazon S3 バケットに直接アクセスして利用できます。詳細については、「Amazon Simple Storage Service ユーザーガイド」の「[Amazon S3 とは?](#)」を参照してください。

- Amazon API Gateway — データセット用にサポートされるもう 1 つのアセットタイプは API です。データ受取人は、API をプログラムから呼び出すか、API を AWS Data Exchange コンソールから呼び出すか、OpenAPI 仕様ファイルをダウンロードすることができます。詳細については、「Amazon API Gateway デベロッパーガイド」の「[Amazon API Gateway とは何ですか?](#)」を参照してください。
- Amazon Redshift – AWS Data Exchange は Amazon Redshift データセットをサポートします。データ受取人は、データを抽出、変換、ロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするための読み取り専用アクセス権を取得できます。詳細については、「Amazon Redshift 入門ガイド」の「[Amazon Redshift の開始方法](#)」、および「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[Amazon Redshift システムの概要](#)」を参照してください。
- AWS Marketplace – AWS Data Exchange を使用すると、データセットを AWS Marketplace の製品として公開できます。AWS Data Exchange データプロバイダーは、AWS Marketplace 販売者として登録する必要があり、AWS Marketplace 管理ポータル または AWS Marketplace Catalog API を使用できます。AWS Marketplace サブスクリイバーになる方法については、「AWS Marketplace 購入者ガイド」の「[AWS Marketplace とは](#)」を参照してください。AWS Marketplace 販売者になる方法については、「[AWS Marketplace 販売者ガイド](#)」の「AWS Marketplace とは」を参照してください。
- AWS Lake Formation— AWS Data Exchange は、AWS Lake Formation データ許可データセット (プレビュー) をサポートします。データ受取人は、データプロバイダーの AWS Lake Formation データレイクに保存されているデータにアクセスし、このデータに対して独自の AWS Lake Formation データセットからクエリ、変換、およびアクセス共有を行うことができます。詳細については、「[AWS Lake Formation](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange を設定する

AWS Data Exchange を含めた AWS のサービスを使用する前に、以下のタスクを完了する必要があります。

タスク

- [AWS アカウントへのサインアップ](#)
- [ユーザーの作成](#)

AWS アカウントへのサインアップ

AWS アカウントへのサインアップ

AWS アカウントがない場合は、以下のステップを実行して作成します。

AWS アカウントにサインアップするには

1. <https://portal.aws.amazon.com/billing/signup> を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

サインアップ手順の一環として、通話呼び出しを受け取り、電話のキーパッドを使用して検証コードを入力するように求められます。

AWS アカウントにサインアップすると、AWS アカウントのルートユーザーが作成されます。ルートユーザーには、アカウントのすべての AWS のサービスとリソースへのアクセス権があります。セキュリティのベストプラクティスとして、[管理ユーザーに管理アクセスを割り当て、ルートユーザーアクセスが必要なタスク](#)を実行する場合にのみ、ルートユーザーを使用してください。

サインアップ処理が完了すると、AWS からユーザーに確認メールが送信されます。<https://aws.amazon.com/> の [アカウント] をクリックして、いつでもアカウントの現在のアクティビティを表示し、アカウントを管理することができます。

管理ユーザーの作成

AWS アカウント にサインアップしたら、AWS アカウントのルートユーザーをセキュリティで保護し、AWS IAM Identity Centerを有効にして、管理ユーザーを作成します。これにより、日常的なタスクにルートユーザーを使用しないようにします。

AWS アカウントのルートユーザーをセキュリティで保護する

1. [ルートユーザー] を選択し、AWS アカウント のメールアドレスを入力して、アカウント所有者として [AWS Management Console](#) にサインインします。次のページでパスワードを入力します。

ルートユーザーを使用してサインインする方法については、「AWS サインイン User Guide」の「[Signing in as the root user](#)」を参照してください。

2. ルートユーザーの多要素認証 (MFA) を有効にします。

手順については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS アカウントのルートユーザーの仮想 MFA デバイスを有効にする \(コンソール\)](#)」を参照してください。

管理ユーザーを作成する

1. IAM Identity Center を有効にする

手順については、「AWS IAM Identity Centerユーザーガイド」の「[AWS IAM Identity Centerの有効化](#)」を参照してください。

2. IAM アイデンティティセンターで、管理ユーザーに管理アクセス権を付与します。

IAM アイデンティティセンターディレクトリをアイデンティティソースとして使用するチュートリアルについては、「AWS IAM Identity Centerユーザーガイド」の「[デフォルト IAM アイデンティティセンターディレクトリでのユーザーアクセスの設定](#)」を参照してください。

管理ユーザーとしてサインインする

- IAM アイデンティティセンターのユーザーとしてサインインするには、IAM アイデンティティセンターのユーザーの作成時に E メールアドレスに送信されたサインイン URL を使用します。

IAM アイデンティティセンターのユーザーを使用してサインインする方法については、「AWS サインイン User Guide」の「[Signing in to the AWS access portal](#)」を参照してください。

ユーザーの作成

管理者ユーザーを作成するには、以下のいずれかのオプションを選択します。

管理者を管理する方法を1つ選択します	To	方法	以下の操作も可能
IAM Identity Center 内 (推奨)	<p>短期の認証情報を使用して AWS にアクセスします。</p> <p>これはセキュリティのベストプラクティスと一致しています。ベストプラクティスの詳細については、IAM ユーザーガイドの「IAM でのセキュリティのベストプラクティス」を参照してください。</p>	AWS IAM Identity Center ユーザーガイドの「 開始方法 」の手順に従います。	AWS Command Line Interface ユーザーガイドの「 AWS IAM Identity Center を使用するための AWS CLI の設定 」に従って、プログラムによるアクセスを設定します。
IAM 内 (非推奨)	<p>長期認証情報を使用して AWS にアクセスする。</p>	IAM ユーザーガイドの「 最初の IAM 管理者のユーザーおよびグループの作成 」の手順に従います。	IAM ユーザーガイドの「 IAM ユーザーのアクセスキーの管理 」に従って、プログラムによるアクセスを設定します。

Note

製品を作成できるのは、AWS Marketplace および AWS Data Exchange でデータ製品を提供するために登録された AWS アカウントのみです。

AWS データセットでの Open Data の使用

AWS の [Open Data](#) プログラムには、無料で公開されている 300 を超えるデータセットが集められています。AWS Marketplace を使用すると、AWS データセットの Open Data やその他の無料製品や有料製品を 1 か所で見つけることができます。

カタログで利用できる AWS データセットの Open Data は、以下の関連プログラムの一部です。

- [Open Data Sponsorship Program](#) — この AWS プログラムは、一般公開されているクラウド向けに最適化された高価値データセットのストレージコストをカバーします。
- [Amazon Sustainability Data Initiative \(ASDI\)](#) — この AWS プログラムは、大規模な持続可能性データセットの取得と分析に必要なコストと時間を最小限に抑えます。

AWS アカウントの有無にかかわらず、AWS データセットに関するこれらの無料のオープン データを誰でも検索して見つけることができ、サブスクリプションは必要ありません。

Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2)、Amazon Athena、AWS Lambda、Amazon EMR などのコンピューティングおよびデータ分析サービスを使用することで、誰でも Open Data データセットに基づいてサービスを分析および構築できます。

Note

該当するデータセットのドキュメントに特に明記されていない限り、AWS の Registry of Open Data から入手できるデータセットは、AWS によって提供および管理されません。データセットは、さまざまなライセンスに基づいてさまざまな第三者によって提供および管理されています。データセットをアプリケーションに使用できるかどうかを判断するには、データセットのライセンスと関連ドキュメントを確認してください。

次のトピックでは、AWS データセットの Open Data の使用を開始する方法について説明します。

トピック

- [AWS Data Exchange コンソールを使って AWS データセットの Open Data の使用を開始する](#)
- [AWS アカウント を使わずに AWS データセットの Open Data で開始する](#)

AWS Data Exchange コンソールを使って AWS データセットの Open Data の使用を開始する

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して、AWS Data Exchange の AWS データセット上の Open Data を検索して使用する方法について説明します。このプロセスを完了するには AWS アカウントが必要です。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS データセットで Open Data を検索する](#)
- [ステップ 2: AWS データセットで Open Data を使用する](#)

ステップ 1: AWS データセットで Open Data を検索する

AWS 上のデータセットから Open Data を検索するには AWS Data Exchange

1. AWS Management Console にサインインして、[AWS Data Exchange コンソール](#) を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、[AWS Marketplace でサブスクライブ済み] の [カタログを参照] を選択します。
3. [復元タイプ] で、以下のいずれかを実行します。
 - a. 「提携プログラム」フィルターでは、以下のオプションのいずれかまたは両方を選択します。
 - AWS Open Data Sponsorship Program
 - Amazon Sustainability Data Initiative
 - b. (オプション) 契約タイプフィルタで、[Open Data Licenses] を選択すると、公開されているアフィリエイトデータセットと非アフィリエイトデータセットがすべて表示されます。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

4. (オプション) 検索バーに用語または語句を入力し、[検索] を選択します。

検索語に一致する AWS データセットの Open Data のリストが表示されます。

5. データセットの Open Data を選択して、その詳細ページを表示します。AWS

詳細ページの情報には、説明、AWS のリソース、使用例、リンクが含まれます。

- a. (オプション) 「提供者情報」で、プロバイダーの情報へのリンクを選択すると、そのプロバイダーに関する詳細情報が表示されます。
- b. (オプション) ラベルでラベルを選択すると、類似商品のリストが表示されます。

ステップ 2: AWSデータセットで Open Data を使用する

AWS データセットで Open Data を使用するには

1. [製品の詳細] ページで、[AWSのリソース] タブを選択します。
2. Amazon リソースネーム (ARN)の下に表示される Amazon リソースネーム (ARN) をコピーします。
3. [AWS CLI アクセス (AWS アカウントは不要)] で、AWS CLI リnkを選択します。

AWS Command Line Interface(AWS CLI) ドキュメントが開きます。

4. AWS CLI AWS のサービス を使用してコマンドラインから呼び出す方法については、マニュアルを参照してください。

詳細については、「[AWS Command Line Interface ユーザーガイド](#)」を参照してください。

AWS アカウント を使わずに AWSデータセットの Open Data で開始する

以下のトピックでは、AWS アカウント を使わずに AWSデータセットの Open Data を検索して使用する方法について説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWSデータセットから Open Data を検索する](#)
- [ステップ 2: AWSデータセットで Open Data を使用する](#)

ステップ 1: AWSデータセットから Open Data を検索する

AWS データセットの Open Data を検索するには

1. [AWS Data Exchange](#)に進み、「3,000 以上のサードパーティのデータセットを参照」を選択します。

AWSData Exchange の配信方法、AWS Open Data Sponsorships Program、Amazon Sustainability Data Initiative の関連プログラムが選択された状態で AWS Marketplaceカタログが表示されます。

2. (オプション) 契約タイプ フィルタで [Open Data Licenses] を選択すると、公開されているアフィリエイトデータセットと非アフィリエイトデータセットがすべて表示されます。
3. (オプション) 検索バーに用語または語句を入力します。

検索語に一致する AWSデータセットの Open Data のリストが表示されます。

4. Open Data データセットを選択して、その詳細ページを表示します。

詳細ページの情報には、説明、AWS のリソース、使用例、リンクが含まれます。

- a. (オプション) 「提供者情報」で、プロバイダーの情報へのリンクを選択すると、そのプロバイダーに関する詳細情報が表示されます。
- b. (オプション) ラベルでラベルを選択すると、類似商品のリストが表示されます。

ステップ 2: AWSデータセットで Open Data を使用する

AWS データセットで Open Data を使用するには

1. [製品の詳細] ページで、[AWSのリソース] タブを選択します。
2. Amazon リソースネーム (ARN)の下に表示される Amazon リソースネーム (ARN) をコピーします。
3. [AWS CLI アクセス (AWS アカウントは不要)] で、AWS CLI リnkを選択します。

AWS Command Line Interface(AWS CLI) ドキュメントが開きます。

4. AWS CLIAWS のサービス を使用してコマンドラインからを呼び出す方法については、マニュアルを参照してください。

詳細については、「[AWS Command Line Interface ユーザーガイド](#)」を参照してください。

内のデータ AWS Data Exchange

データは、次の 3 つの構成要素 AWS Data Exchange を使用して に整理されます。

- [アセット](#) – 1 つのデータ
- [リビジョン](#) – 1 つ、または複数のアセットのコンテナ
- [データセット](#) – 1 つ、または複数のリビジョンの一連

これらの 3 つの構成要素は、AWS Data Exchange コンソールまたは AWS Data Exchange API を使用して管理する製品の基盤を形成します。

データセットを作成、表示、更新、または削除するには、AWS Data Exchange コンソール、(AWS CLI)、AWS Command Line Interface 独自の REST クライアント、またはいずれかの AWS SDKs を使用できます。AWS Data Exchange データセットのプログラムによる管理の詳細については、[AWS Data Exchange API リファレンス](#)を参照してください。

アセット

アセットは のデータです AWS Data Exchange。

アセットのタイプは、データセット、データ許可、およびデータ格納元の製品を通じてレシーバーやサブスクライバーにどのようにデータを配信するかを定義します。

アセットは、以下のいずれかになり得ます。

- ローカルコンピュータに保存されたファイル
- Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) にオブジェクトとして保存されているファイル
- Amazon API Gateway で作成された REST API
- Amazon Redshift のデータセット
- AWS Lake Formation データのアクセス許可 (プレビュー)
- Amazon S3 データアクセスデータセット

アセットの構造

アセットには、以下のパラメータがあります。

- DataSetId – このアセットが含まれるデータセットの ID。
- RevisionId – このアセットが含まれるリビジョンの ID。
- Id – アセットの作成時に生成された一意の ID。
- Arn – AWS リソース名の一意的識別子。
- CreatedAt および UpdatedAt – アセットの作成と最終更新の日付とタイムスタンプ。
- AssetDetails – アセットに関する情報。
- AssetType – Amazon S3 オブジェクト、Amazon API Gateway API、Amazon Redshift データセット、または Amazon S3 データセットのスナップショット。

Example アセットリソース

```
{
  "Name": "automation/cloudformation.yaml",
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/29EXAMPLE24b82c6858af3cEXAMPLEcf/
revisions/bbEXAMPLE74c02f4745c660EXAMPLE20/assets/baEXAMPLE660c9fe7267966EXAMPLEf5",
  "Id": "baEXAMPLE660c9fe7267966EXAMPLEf5",
  "CreatedAt": "2019-10-17T21:31:29.833Z",
  "UpdatedAt": "2019-10-17T21:31:29.833Z",
  "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
  "RevisionId": "bbEXAMPLE74c02f4745c660EXAMPLE20",
  "DataSetId": "29EXAMPLE24b82c6858af3cEXAMPLEcf",
  "AssetDetails": {
    "S3SnapshotAsset": {
      "Size": 9423
    }
  }
}
```

アセットタイプ

型

- [ファイルデータセット](#)
- [API アセット](#)
- [Amazon Redshift データ共有アセット](#)
- [AWS Lake Formation データ許可 \(プレビュー\)](#)
- [Amazon S3 データアクセス](#)

ファイルデータセット

ファイルを使用すると、加入者は資格のあるデータセットとしてデータセットのコピーにアクセスし、資産をエクスポートできます。

データセット所有者は、AWS Data Exchange コンソールを使用して、独自の REST アプリケーション AWS CLI、または AWS SDKs。Amazon S3 アセットのインポートに関する詳細については、「[S3 バケットからのアセットのインポート](#)」を参照してください。アセットのエクスポートに関する詳細については、「[S3 バケットへのアセットのエクスポート](#)」を参照してください。

API アセット

API アセットの場合、データ受取人またはサブスクライバーは API を表示し、権限を持つデータセットとしての API 仕様をダウンロードできます。マネージドエンドポイントへの API コールを行うこともできます AWS Data Exchange。このコールは、API 所有者エンドポイントにプロキシされます。

既存の Amazon API Gateway API を持つデータセット所有者は、AWS Data Exchange コンソールを使用して、またはプログラムで、または AWS SDKs の 1 つを使用して AWS CLI API アセットを追加できます。API アセットのインポートに関する詳細については、「[Amazon API Gateway API からのアセットのインポート](#)」を参照してください。

Note

現在、以下の SDK では SendApiAsset 操作がサポートされていません。

- AWS SDK for .NET
- AWS SDK for C++
- SDK for Java 2.x

既存の Amazon API Gateway API を持たないデータセット所有者は、API を作成してから API アセットを追加する必要があります。詳細については、「Amazon API Gateway デベロッパーガイド」の「[API Gateway での REST API の開発](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データ共有アセット

Amazon Redshift データ共有アセットの場合、受取人はデータを抽出、変換、ロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするための読み取り専用アクセス権を取得できます。

Amazon Redshift データ共有アセットのインポートに関する詳細については、「[Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有からのアセットのインポート](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データ許可 (プレビュー)

AWS Lake Formation データアクセス許可アセットを使用すると、受信者またはサブスクライバーは、指定されたタグに関連付けられているすべてのデータベース、テーブル、または列にアクセスしてクエリを実行できます。

データセット所有者は、AWS Data Exchange アセットの一部としてタグインポートする前に、データを作成してタグ付けする必要があります。Lake Formation データ権限アセットのインポートの詳細については、「[AWS Lake Formation からのアセットのインポート\(プレビュー\)](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセス

Amazon S3 データアクセスアセットを使用すると、受取人またはサブスクライバーは、データのコピーを作成または管理しなくても、プロバイダーのデータに直接アクセスして使用できます。データセット所有者は、既存の Amazon S3 バケットの上に AWS Data Exchange for Amazon S3 をセットアップして、S3 バケット全体または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。

リビジョン

リビジョンは、1 つ、または複数のアセットのコンテナです。

リビジョンは、Amazon S3 内のデータを更新するために使用します。例えば、.csv ファイルの一連、または単一の.csv ファイルとディクショナリをグループ化して、リビジョンを作成できます。新しいデータが利用可能になるとともに、リビジョンを作成して、アセットを追加します。AWS Data Exchange コンソールを使用してリビジョンを作成し、確定したら、そのリビジョンはサブスクライバーに対して直ちに利用可能になります。詳細については、「[新しい製品の公開](#)」を参照してください。

以下に留意してください。

- リビジョンを確定するには、リビジョンに少なくとも 1 つのアセットが含まれている必要があります。
- リビジョンを確定する前にアセットが正しいことを確認するのは、ユーザーの責任になります。

- 少なくとも 1 つのデータ許可または製品に発行された確定済みリビジョンは、その方法を問わず、未確定状態にしたり、変更したりすることはできません (リビジョンの取り消しプロセスを除く)。
- リビジョンが確定されると、自動的にデータ許可または製品に発行されます。

リビジョンの構造

リビジョンには、以下のパラメータがあります。

- `DataSetId` – このリビジョンが含まれるデータセットの ID。
- `Comment` – リビジョンに関するコメント。このフィールドは 128 文字にすることができます。
- `Finalized` – `true` または `false` です。リビジョンが確定されているかどうかを示すために使用されます。
- `Id` – リビジョンの作成時に生成されたリビジョン用の一意の識別子。
- `Arn` – AWS リソース名の一意の識別子。
- `CreatedAt` – リビジョンの作成の日付とタイムスタンプ。権限のあるリビジョンは、リビジョンの発行時に作成されます。
- `UpdatedAt` – リビジョンの最終更新の日付とタイムスタンプ。
- `Revoked` – リビジョンへのサブスクライバーのアクセスが取り消されたことを示すステータス。
- `RevokedAt` – リビジョンへのサブスクライバーのアクセスが取り消された日時を示す日付とタイムスタンプ。
- `RevocationComment` – リビジョンへのアクセスが取り消された理由を購読者に知らせるための必須コメント。必要最小長は 1 文字です。このフィールドは 10 ~ 512 文字にすることができます。
- `SourceID` – 表示中のタイトル付きリビジョンに対応する所有リビジョンのリビジョン ID。このパラメータは、リビジョン所有者が所有リビジョンのエンタイトルドコピーを閲覧しているときに返されます。

Example リビジョンリソース

```
{
  "UpdatedAt": "2019-10-11T14:13:31.749Z",
  "DataSetId": "1EXAMPLE404460dc9b005a0d9EXAMPLE2f",
  "Comment": "initial data revision",
```

```
"Finalized": true,  
"Id": "e5EXAMPLE224f879066f9999EXAMPLE42",  
"Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-  
sets/1EXAMPLE404460dc9b005a0d9EXAMPLE2f/revisions/e5EXAMPLE224f879066f9999EXAMPLE42",  
"CreatedAt": "2019-10-11T14:11:58.064Z"  
}
```

データセット

のデータセット AWS Data Exchange は、時間の経過とともに変化する可能性のあるデータのコレクションです。

受取人またはサブスクライバーがファイルデータセットにアクセスする場合は、データセット内の特定のリビジョンにアクセスすることになります。この構造は、プロバイダーが、履歴データに対する変更について心配することなく、データセットで利用可能なデータを徐々に変更していくことを可能にします。

受信者またはサブスクライバーが API データセットにアクセスすると、API アセットを含むデータセットにアクセスしています。これにより、サブスクライバーは AWS Data Exchange マネージドエンドポイントに対して API コールを行い、プロバイダーエンドポイントにプロキシされます。

受取人またはサブスクライバーが Amazon Redshift データセットにアクセスする場合は、Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有にアクセスすることになります。このデータ共有は、データ所有者がデータ共有に追加したスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権をサブスクライバーに付与します。

受信者またはサブスクライバーが データ AWS Lake Formation 許可データセットにアクセスすると、データセット所有者によって指定された LF タグでタグ付けされたデータベース、テーブル、列にアクセスしていることになります。

受取人またはサブスクライバーが Amazon S3 データアクセスデータセットにアクセスする場合は、プロバイダーの Amazon S3 バケットでホストされている Amazon S3 共有オブジェクトへの読み取り専用アクセスが許可されます。受取人またはサブスクライバーは、このデータを他の AWS のサービスで直接使用できます。

プロバイダーは、データセットを作成、表示、更新、または削除するために、AWS Data Exchange コンソール、AWS CLI、独自の REST クライアント、または AWS SDKsのいずれかを使用できます。AWS Data Exchange データセットのプログラムによる管理の詳細については、[AWS Data Exchange API リファレンス](#)を参照してください。

トピック

- [所有データセット](#)
- [権限を持つデータセット](#)
- [データセットタイプ](#)
- [Amazon S3 データアクセスデータセット](#)
- [AWS Lake Formation データセット \(プレビュー\)](#)
- [AWS リージョン および データセット](#)
- [データセットの構造](#)
- [データセットのベストプラクティス](#)

所有データセット

データセットは、それを作成したアカウントが所有します。所有データセットは、OWNED に設定されている origin パラメータを使用して識別できます。

権限を持つデータセット

権限を持つデータセットは、送信者が所有するデータセットの読み取り専用ビューです。権限を持つデータセットは、データ許可の作成時または製品の発行時に作成され、製品に対するアクティブなデータ許可またはサブスクリプションを持つ受取人またはサブスクライバーが利用できます。権限を持つデータセットは、ENTITLED に設定されている origin パラメータで識別できます。

受信者は、API または AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange、権限を持つデータセットを表示および操作できます。

データセット所有者も、受取人またはサブスクライバーに表示される権限を持つデータセットビューにアクセスできます。これを行うには、AWS Data Exchange API を使用するか、AWS Data Exchange コンソールのデータ付与または製品ページでデータセット名を選択します。

データセットタイプ

では、次のデータセットタイプがサポートされています AWS Data Exchange。

- [the section called “ファイルデータセット”](#)
- [API データセット](#)

- [Amazon Redshift のデータセット](#)
- [the section called “Amazon S3 データアクセスデータセット”](#)
- [AWS Lake Formation データセット \(プレビュー\)](#)

ファイルデータセット

ファイルデータセットは、Amazon S3 によって許可されたフラットファイルが含まれるデータセットです。

受取人またはサブスクライバーは、データをローカルにエクスポート (コンピュータにダウンロード) するか、Amazon S3 バケットにエクスポートできます。

データセット所有者は、Amazon S3 バケットから任意のタイプのフラットファイルをインポートして、データセットに追加できます。

API データセット

API データセットは、API アセットが含まれるデータセットです。API アセットを使用すると、受信者またはサブスクライバーは AWS Data Exchange マネージドエンドポイントに API コールを行い、それをデータセット所有者のエンドポイントにプロキシできます。

データセット所有者は、Amazon API Gateway で API を作成してデータセットに追加し、データ許可の作成時やサブスクリプション時に API にアクセスするライセンスを供与します。

Amazon Redshift のデータセット

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれています。データ共有が含まれたデータセットをサブスクライブすると、データ共有のコンシューマーとして追加されます。これにより、データセット所有者がデータ共有に追加したスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データセット所有者は、Amazon Redshift でデータ共有からデータベースを作成し、ファイルを抽出、変換、ロードすることなく、ライブデータにクエリを実行できます。データ許可またはサブスクリプションがアクティブ化されると、データ共有へのアクセス権が自動的に付与され、いずれかの有効期限が切れると、アクセス権が失われます。

データセット所有者は、Amazon Redshift でデータ共有を作成してデータセットに追加し、データ許可の作成時やサブスクリプション時にデータ共有にアクセスするライセンスを付与します。

Amazon S3 データアクセスデータセット

AWS Data Exchange for Amazon S3 データアクセスを使用すると、データ受信者またはサブスクライバーは、データセット所有者の Amazon S3 バケットからサードパーティーのデータファイルに直接アクセスできます。

AWS Data Exchange for Amazon S3 データアクセス製品をサブスクライブすると、は以下 AWS Data Exchange を自動的に実行します。

- Amazon S3 アクセスポイントをプロビジョニングします。Amazon S3 アクセスポイントは Amazon S3 バケットへのデータ共有を簡素化する Amazon S3 の機能です。
- S3 アクセスポイントのリソースポリシーを更新して、読み取り専用アクセスを許可します。

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、データセット所有者は Amazon S3 バケット全体、または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。さらに、を使用して、データ付与、サブスクリプション、使用権限、請求、支払いを自動的に管理 AWS Data Exchange できます。

AWS Lake Formation データセット (プレビュー)

AWS Lake Formation データセットは、AWS Lake Formation データ権限アセットを含むデータセットです。

データ受取人またはサブスクライバーは、AWS Lake Formation で利用できるデータを管理できます。でリソースリンクを作成したら AWS Lake Formation、Amazon Athena などの分析サービスを使用してデータをクエリできます。

データセット所有者は、の LF タグを使用してデータにタグ AWS Lake Formation を付け、データセットの作成時にそれらのタグをアセットとしてインポートします。

AWS リージョン および データセット

データセットはサポートされている任意のに配置できますが AWS リージョン、単一のデータ権限または製品内のすべてのデータセットは同じにある必要があります AWS リージョン。

データセットの構造

データセットには、以下のパラメータがあります。

- Name – データセットの名前。この値は最大 256 文字にすることができます。
- Description – データセットの説明。この値は最大 16,348 文字にすることができます。
- AssetType – データセットに含まれるアセットのタイプを定義します。
- Origin – データセットを、プロバイダーのアカウントによって Owned (所有) されている、またはサブスクライバーのアカウントに Entitled (権利が付与) されているとして定義するプロパティ。
- Id – データセットを一意に識別する ID。データセット ID は、データセットの作成時に生成されます。権限を持つデータセットには、元の所有データセットとは異なる ID があります。
- Arn – AWS リソース名の一意の識別子。
- CreatedAt および UpdatedAt – データセットの作成と最終更新の日付とタイムスタンプ。

Note

データセット所有者は、名前や説明など、所有データセットの一部のプロパティを変更できません。所有データセットのプロパティを更新しても、対応する権限を持つデータセットのプロパティは更新されません。

Example データセットリソース

```
{
  "Origin": "OWNED",
  "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
  "Name": "MyDataSetName",
  "CreatedAt": "2019-09-09T19:31:49.704Z",
  "UpdatedAt": "2019-09-09T19:31:49.704Z",
  "Id": "fEXAMPLE1fd9a5c8b0d2e6fEXAMPLEe1",
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-2:123456789109:data-sets/fEXAMPLE1fd9a5c8b0d2e6fEXAMPLEe1",
  "Description": "This is my data set's description that describes the contents of the data set."
}
```

データセットのベストプラクティス

データセット所有者は、データセットを作成および更新するときに、以下のベストプラクティスに留意してください。

- データセットの名前は、カタログのデータ許可または製品の詳細に表示されます。顧客がデータセットの内容を簡単に理解できるように、内容を説明する簡潔な名前を選択することをお勧めします。
- 説明は、製品に対するアクティブなデータ許可またはサブスクリプションを持つ受取人またはサブスクライバーに表示されます。これには、データセットのカバレッジ情報、機能、および利点を含めることをお勧めします。

タグ

所有データセットとそのリビジョンにはタグを追加できます。タグ付けを使用する場合、AWS Identity and Access Management (IAM) ポリシーでタグベースのアクセスコントロールを使用して、これらのデータセットとリビジョンへのアクセスを制御することもできます。

権限を持つデータセットにタグを付けることはできません。所有データセットとそのリビジョンのタグは、対応する権限のあるバージョンには反映されません。つまり、権限を持つデータセットやリビジョンに対する読み取り専用アクセス権を持つ受取人やサブスクライバーには、元の所有データセットのタグは表示されません。

Note

現在、アセットとジョブはタグ付けをサポートしていません。

AWS Data Exchange でのデータ許可の作成

AWS Data Exchange でのデータ許可の作成方法について、以下に概要を示します。

1. AWS アカウントを作成する — データ許可を作成する前に、AWS にサインアップしてユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[セットアップ](#)」を参照してください。
2. データセットとリビジョンを作成し、アセットをインポートする — データセットは、AWS Data Exchange コンソールまたは API で作成できます。データセットの作成後、データセットでリビジョンを作成し、そのリビジョンにアセットを追加できます。
3. データ許可を作成する — データ許可を作成するには、データ許可の名前と説明を入力し、データ許可に含めるデータセットを選択して、データ許可を共有する受取人の AWS アカウント ID を指定する必要があります。さらに、オプションとして、データ許可の有効期限が切れる終了日を設定します。詳細については、「[the section called “新しいデータ許可の作成”](#)」を参照してください。
4. 新しいリビジョンを発行する — AWS Data Exchange API またはコンソールを使用して新しいリビジョンを作成することで、動的データセットを経時的に更新できます。次に、これらのリビジョンをアクティブなデータ許可に発行できます。

プログラムのアクセス

AWS Data Exchange は、次の API を使用してプログラムからリソースにアクセスすることもできます。

- AWS Data Exchange API – これらの API 操作を使用して、データセットとリビジョンを作成、表示、更新、および削除します。これらの API 操作は、これらのリビジョンに対するアセットのインポートとエクスポートにも使用できます。詳細については、「[AWS Data Exchange API リファレンス](#)」を参照してください。

Note

AWS Data Exchange でデータ許可を作成する前に、[セットアップ](#) の情報を参照してください。

新しいデータ許可の作成

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange で新しいデータ許可を作成するプロセスについて説明します。

以下のトピックでは、AWS Data Exchange で新しいデータ製品を発行する方法について詳しく説明します。

トピック

- [ファイルベースのデータを含むデータ許可の作成](#)
- [API を含むデータ許可の作成](#)
- [Amazon Redshift データセットを含むデータ許可を作成する](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含むデータ許可の作成](#)
- [AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可の作成 \(プレビュー\)](#)

ファイルベースのデータを含むデータ許可の作成

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して、AWS Data Exchange でファイルベースのデータを含むデータセットと新しいデータ許可を作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする](#)
- [ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する](#)

ステップ 1: アセットを作成する

アセットは AWS Data Exchange 内のデータです。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

新しいファイルベースのデータ許可を作成する前に、以下を実行する必要があります。

1. ファイルを作成します。

AWS Data Exchange はすべてのファイルタイプをサポートします。

2. ファイルをオブジェクトとして Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) またはローカルコンピュータに保存します。

Amazon S3 でのファイルの保存に関する詳細については、「[Amazon S3 ユーザーガイド](#)」を参照してください。

ステップ 2: データセットを作成する

AWS Data Exchange のデータセットは動的で、リビジョンを使用してバージョン管理されます。各リビジョンには少なくとも 1 つのアセットが含まれています。詳細については、「[内のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) に移動します。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で [ファイル] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 - オプション] でタグを追加します。
7. [データセットを作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後でリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。

2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータアセットをインポートしてからリビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットをインポートする

1. データセットの詳細ページの [インポートされたアセット] で、データセットのデータアセットが現在保存されている場所に基づいて [Amazon S3 からインポート] または [アップロード] (コンピュータからアップロードするため) を選択します。
2. 選択内容に応じて、プロンプトに従います。アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。
3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [リビジョンの最終処理] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、製品に追加する前に編集または削除できます。

トピック

- [リビジョンを編集する](#)
- [リビジョンを削除する](#)

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[更新] を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。このアクションを元に戻すことはできません。


ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定したら、そのデータセットをデータ許可の一部として使用する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。

3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

 Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは、データ許可に追加できません。

AWS Marketplace で共有されているデータ製品に含まれるデータセットとは異なり、データ許可に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールがありません。つまり、データ許可が承認されると、データ許可の受取人は特定のデータセットのすべての確定済みリビジョン (データ許可の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできるようになります。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. [Next] (次へ) をクリックします。

詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。
6. [受取人アクセス情報] セクションの [AWS アカウント ID] に、データ許可を受け取る必要がある受取人アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. [アクセスの終了日] で、データ許可の有効期限が切れる特定の終了日を選択するか、許可を永続的にする場合は [終了日なし] を選択します。
8. [Next] (次へ) をクリックします。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。これで、データ許可の作成ジョブで、[送信されたデータ許可] ページの [アクティビティ履歴] タブに「処理中」状態が表示されます。ジョブの状態が [成功] になると、データ許可は [送信されたデータ許可] ページの [送信されたデータ許可] タブに表示され、受取人アカウントが承諾するまで [承諾を保留中] 状態になります。

API を含むデータ許可の作成

概要

以下のトピックでは、AWS Data Exchange で REST API データセットを作成して、API を含む新しいデータ許可に追加するプロセスについて説明します。このプロセスは、AWS Data Exchange コンソール、または AWS Command Line Interface を使用して完了することができます。

Amazon API Gateway REST API をセットアップしたら、AWS Data Exchange で新しい API データセットを作成できます。その後、リビジョンを作成して、API アセットを追加できます。

API アセットを含むデータ許可を作成すると、AWS Data Exchange エンドポイントへの受取人リクエストを API Gateway API にプロキシできます。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [前提条件](#)
- [ステップ 1: API リソースポリシーを更新する](#)
- [ステップ 2: API データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンに API アセットを追加する](#)
- [ステップ 5: API を含む新しいデータ許可を作成する](#)

前提条件

API が含まれる製品を発行するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- AWS Data Exchange を含めた AWS のサービスのサービスを使用する前に、AWS にサインアップして (IAM) ユーザーアカウントを作成する必要があります。詳細については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[使用開始](#)」を参照してください。
- REST API は、Amazon DynamoDB や AWS Lambda など、データにアクセスするために適切なリクエストとレスポンスモデルを使用する統合が設定された Amazon API Gateway 上にある必要があります。詳細については、「Amazon API Gateway デベロッパーガイド」の「[API Gateway での REST API の開発](#)」と「[REST API の操作](#)」を参照してください。

Note

サポートされるのはパブリック API Gateway API のみです。

- API Gateway REST API は、AWS Data Exchange サービスプリンシパルからの呼び出しを認証および認可できる必要があります。AWS Data Exchange から API へのすべてのリクエストは、AWS Data Exchange 認証情報で署名された署名バージョン 4 (SigV4) プロトコルを使用します。AWS Data Exchange は、カスタムドメインとドメインキーのマッピングで動作します。

Note

AWS Data Exchange は、Amazon Cognito、No-Auth、および AWS Lambda オーソライザーをサポートしません。

- API Gateway REST API が認証と認可にカスタムアイデンティティシステムを使用する場合は、IAM 認証を使用し、API を記述する OpenAPI スキーマをインポートするように設定します。AWS Data Exchange は、独自のサービス認証情報を使用して API Gateway REST API を呼び出し、アカウント ID などのサブスクライバー情報を含めます。
- バックエンドとの統合に対する責任は、API Gateway REST API が担います。これを行うには、以下のいずれかを実行します。
 - API Gateway REST API を通じて行われるすべてのリクエストに、バックエンドが検証できる継続期間の長い認証トークンをアタッチする。
 - API Gateway を使用して、認証情報の生成と API の呼び出しを実行できる Lambda 関数を呼び出す。

API は、[API 統合リクエスト仕様](#)に従って呼び出されます。

詳細については、次のトピックを参照してください。

トピック

- [API データセットのセキュリティ](#)
- [API 統合リクエスト仕様](#)
- [ヘッダー転送](#)

API データセットのセキュリティ

AWS Data Exchange は、Transport Layer Security (TLS) 1.2 を使用して、トラフィックのエンドツーエンドの暗号化を行います。すべてのメタデータは保管時に暗号化されます。AWS Data Exchange は、サブスクライバーのリクエストやバックエンドからのレスポンスを保存しません。

API 統合リクエスト仕様

AWS Data Exchange の API は、カスタマーリクエストからのすべてのヘッダー ([ヘッダー転送](#) にリストされているヘッダーを除く)、本文、http メソッド、パス、およびクエリ文字列をそのまま渡し、以下のヘッダーを追加します。

```
// These headers help prevent Confused Deputy attacks. They enable the SourceAccount
// and SourceArn variables in IAM policies.
'x-amz-source-account': ACCOUNT_ID,
'x-amz-source-arn': `arn:aws:dataexchange:${REGION}:${OWNER_ACCOUNT_ID}:data-sets/
${DATA_SET_ID}/revisions/${REVISION_ID}/assets/${ASSET_ID}`,

// These headers identify the API Asset in Data Exchange.
'x-amzn-dataexchange-asset-id': ASSET_ID,
'x-amzn-dataexchange-data-set-id': DATA_SET_ID,
'x-amzn-dataexchange-revision-id': REVISION_ID,

// This header identifies the Data Exchange Product.
'x-amzn-dataexchange-product-id': PRODUCT_ID,

// This header identifies the caller of Data Exchange. It will contain subscriber
// information.
'x-amzn-dataexchange-requester-account-id': REQUESTER_ACCOUNT_ID,

// Providers can attach custom metadata in the form of key/value pairs
// to a particular subscription. We will send these key/value pairs as stringified
// JSON.
'x-amz-dataexchange-subscription-metadata': STRINGIFIED_METADATA,
```

ヘッダー転送

AWS Data Exchange は、データ所有者バックエンドへの転送前に、Amazon に対する認証や名前空間に関連するヘッダーを削除します。具体的に、AWS Data Exchange は以下のヘッダーを削除します。

- Authentication ヘッダー

- x-amz で始まるヘッダー

host ヘッダーは、プロキシの結果として上書きされます。

ステップ 1: API リソースポリシーを更新する

[前提条件](#)を満たす Amazon API Gateway REST API がある場合は、その API リソースポリシーを更新して、サブスクライバーが API のスキーマを取得するリクエストを実行するときに AWS Data Exchange が API を呼び出せるようにする必要があります。

API リソースポリシーを更新する

1. API のリソースポリシーに、以下のポリシーを追加します。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {"Service": "dataexchange.amazonaws.com"},
  "Action": "execute-api:Invoke",
  "Resource": "*",
  "Condition": {"StringEquals": {"aws:SourceAccount": "<account-id>"}}
}
```

2. account-id は、API データセットを作成することになるアカウントに置き換えます。

API Gateway リソースを持つアカウントが、データセットを作成しているアカウントと同じアカウントである必要はありません。

このポリシーは、これらの許可を AWS Data Exchange サービスプリンシパルによって実行された呼び出しに制限し、お使いのアカウント以外は AWS Data Exchange の API との統合を認可できないようにします。

Note

AWS Data Exchange がこの呼び出しを実行することを明示的に拒否するリソースポリシーがある場合は、この拒否を削除または制限する必要があります。

これで、[API データセットを作成する](#)準備が整いました。

ステップ 2: API データセットを作成する

AWS Data Exchange のデータセットは動的で、リビジョンを使用してバージョン管理されます。各リビジョンには少なくとも 1 つのアセットが含まれています。詳細については、「[内のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

API データセットを作成するには、AWS Data Exchange コンソール、または AWS Command Line Interface を使用できます。

- [API データセットの作成 \(コンソール\)](#)
- [API データセットの作成 \(AWS CLI\)](#)

API データセットの作成 (コンソール)

API データセットを作成する (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で、[Amazon API Gateway API] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

API データセットの作成 (AWS CLI)

API データセットを作成する (CLI)

1. create-data-set コマンドを使用して、API データセットを作成します。

```
$ aws dataexchange create-data-set \  
-\\-asset-type API_GATEWAY_API \  
-\\-description 'Data Set Description' \  
-\\-name 'Data Set Name'
```

```
{
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID",
  "AssetType": "API_GATEWAY_API",
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00",
  "Description": "Data Set Description",
  "Id": "$DATA_SET_ID",
  "Name": "Data Set Name",
  "Origin": "OWNED",
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00"
}
```

2. 新しいアセットタイプの API_GATEWAY_API に注目してください。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、データセットの作成後にリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

リビジョンを作成するには、AWS Data Exchange コンソール、または AWS Command Line Interface を使用できます。

- [リビジョンの作成 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンの作成 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンの作成 (コンソール)

リビジョンを作成する (コンソール)

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。

6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

これで、[リビジョンに API アセットを追加する](#)準備が整いました。

リビジョンの作成 (AWS CLI)

リビジョンを作成する (AWS CLI)

1. create-revision コマンドを使用して、リビジョンを作成します。

```
$ aws dataexchange create-revision \  
-\\-data-set-id $DATA_SET_ID \  
-\\-comment 'First Atlas Revision' \  
{ \  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/  
revisions/$REVISION_ID", \  
  "Comment": "First Atlas Revision", \  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00", \  
  "DataSetId": "$DATA_SET_ID", \  
  "Finalized": false, \  
  "Id": "$REVISION_ID", \  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00" \  
}
```

2. [リビジョンに API アセットを追加します](#)。

Note

ステージだけでなく、インポートする API Gateway REST API の ID も把握しておく必要があります。

ステップ 4: リビジョンに API アセットを追加する

API アセットには、サブスクライバーが API を呼び出すために必要な情報が含まれています。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

以下の手順では、データアセットをインポートし、その後リビジョンを確定します。

リビジョンにアセットを追加するには、AWS Data Exchange コンソール、または AWS CLI を使用します。

- [リビジョンへの API アセットの追加 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンへの API アセットの追加 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンへの API アセットの追加 (コンソール)

リビジョンにアセットを追加する (コンソール)

1. データセットの詳細ページの [API アセット] セクションで、[追加] を選択します。
 2. [API ステージを選択] にある [Amazon API Gateway API] で、入力ボックスに API を入力するか、ドロップダウンリストから以下のいずれかを選択します。
 - [別の AWS アカウント のAPI] – これは、アクセスする許可が付与されたクロスアカウント API です。
 - [この AWS アカウント の中で] – これは、お使いの AWS アカウント 内の API です。
 - a. [別の AWS アカウント のAPI] を選択した場合は、入力ボックスに API ID と [API ステージ名] を入力します。
 - b. [この AWS アカウント の中で] を選択した場合は、ドロップダウンリストから API [ステージ名] を選択します
- #### Note
- 新しい API ステージを作成するには、[新規作成] を選択し、[Amazon API Gateway で新しい API を作成] モーダルの手順に従います。新しいステージが作成されたら、ステップ 2 を繰り返します。
3. [Advanced configuration – optional] (高度な設定 – オプション) では、[Connect existing Amazon API Gateway usage plan] (既存の Amazon API Gateway の使用量プランを接続) することを選択して既存の使用プランに定義されているスロットリングとクォータ制限を使用し、[API key] (API キー) を入力することができます。
 4. [サブスクライバーのドキュメント API] で、受取人がデータ許可を承諾した後に表示する API の詳細を指定します。
 - a. [API 名] に、受取人が API アセットを識別するために使用できる名前を入力します。

Note

[この AWS アカウント の中で] が選択されている場合、[API 名] が自動入力されていますが、これは必要に応じて変更できます。
[別の AWS アカウントの API] を選択した場合、[API 名] にはデフォルトの名前が入力されます。これを、受取人が API を簡単に理解できるような名前に変更してください。

- b. [OpenAPI 3.0 specification] (OpenAPI 3.0 仕様) には、以下のいずれかを実行します。
- OpenAPI 3.0 仕様ファイルを入力するか、コピーして貼り付ける。
 - [.JSON ファイルからインポート] を選択して、ローカルコンピュータからインポートする.json ファイルを選択する。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。
 - [Import from Amazon API Gateway] (Amazon API Gateway からインポート) を選択して、インポートする仕様を選択する。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。
- c. [その他のドキュメント – オプション] には、サブスクライバーが API について知っておくと役に立つ追加情報を入力します。Markdown がサポートされています。

Note

このアセットをリビジョンに追加した後で、OpenAPI 仕様とその他のドキュメントを編集することはできません。
リビジョンが確定されていないときにこの情報を更新する場合は、アセットを置き換えることができます。
リビジョンが確定されているときにこの情報を更新する場合は、更新されたアセットで新しいリビジョンを作成できます。

5. [API ステージを追加] を選択します。

アセット (この場合は API) をデータセットにインポートするジョブが開始されます。

Note

Amazon API Gateway に API がない場合は、API を作成するように求められます。

6. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
7. 追加する API がある場合は、ステップ 2 を繰り返します。
8. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
9. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンをデータ許可に追加する前に、リビジョンを[編集](#)または[削除](#)できます。

これで、[API を含む新しいデータ許可を作成](#)する準備ができました。

リビジョンへの API アセットの追加 (AWS CLI)

API アセットは、IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API ジョブを実行することによって追加できます。

リビジョンに API アセットを追加する (AWS CLI)

1. create-job コマンドを使用して、リビジョンに API アセットを追加します。

```
$ aws dataexchange create-job \  
  -\\-type IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API \  
  -\\-details '{"ImportAssetFromApiGatewayApi":  
{"DataSetId":"$DATA_SET_ID","RevisionId":"$REVISION_ID","ApiId":"$API_ID","Stage":"$API_STA  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:jobs/$JOB_ID",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",  
  "Details": {  
    "ImportAssetFromApiGatewayApi": {  
      "ApiId": "$API_ID",  
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
      "ProtocolType": "REST",  
      "RevisionId": "$REVISION_ID",  
      "Stage": "$API_STAGE"  
    }  
  }  
},
```



```
"Id": "$JOB_ID",
"State": "WAITING",
"Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",
"UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00"
}

$ aws dataexchange start-job -\\-job-id $JOB_ID
$ aws dataexchange get-job -\\-job-id $JOB_ID
{
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:0123456789012:jobs/$JOB_ID",
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",
  "Details": {
    "ImportAssetFromApiGatewayApi": {
      "ApiId": "$API_ID",
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",
      "ProtocolType": "REST",
      "RevisionId": "$REVISION_ID",
      "Stage": "$API_STAGE"
      "ApiEndpoint": "string",
      "ApiKey": "string",
      "ApiName": "string",
      "ApiDescription": "string",
      "ApiSpecificationDownloadUrl": "string",
      "ApiSpecificationDownloadUrlExpiresAt": "string"
    }
  },
  "Id": "$JOB_ID",
  "State": "COMPLETED",
  "Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.538000+00:00"
}
```

2. `list-revision-assets` コマンドを使用して、新しいアセットが適切に作成されたことを確認します。

```
$ aws dataexchange list-revision-assets \
-\\-data-set-id $DATA_SET_ID \
-\\-revision-id $REVISION_ID
{
  "Assets": [
    {
      "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/
revisions/$REVISION_ID/assets/$ASSET_ID",
```

```
    "AssetDetails": {
      "ApiGatewayApiAsset": {
        "ApiEndpoint": "https://$API_ID.execute-api.us-
east-1.amazonaws.com/$API_STAGE",
        "ApiId": "$API_ID",
        "ProtocolType": "REST",
        "Stage": "$API_STAGE"
      }
    },
    "AssetType": "API_GATEWAY_API",
    "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00",
    "DataSetId": "$DATA_SET_ID",
    "Id": "$ASSET_ID",
    "Name": "$ASSET_ID/$API_STAGE",
    "RevisionId": "$REVISION_ID",
    "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00"
  }
]
}
```

これで、API を含む新しいデータ許可を作成する準備ができました。

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[Update] (アップデート) を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

⚠ Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。この操作は元に戻すことができません。

ステップ 5: API を含む新しいデータ許可を作成する

少なくとも 1 つのデータセットを作成して、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として発行する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. AWS Data Exchange コンソールの左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

i Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは、データ許可に追加できません。

AWS Marketplace で共有されているデータ製品に含まれるデータセットとは異なり、データ許可に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールがありません。つまり、データ許可が承認されると、データ許可の受取人は特定のデータセットのすべての確定済みリビジョン (データ許可の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできるようになります。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示される情報を入力します。
5. [次へ] を選択します。
6. [受取人アクセス情報] セクションの [AWS アカウント ID] に、データ許可を受け取る必要がある受取人アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. また、[受信者アクセス情報] セクションの [アクセスの終了日] で、[終了日なし] を選択してデータ許可を永続的に実行するか、[特定の終了日] を選択して希望の終了日を選択します。

8. [Next] (次へ) をクリックします。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。これで、データ許可の作成ジョブで、[送信されたデータ許可] ページの [アクティビティ履歴] タブに [処理中] 状態が表示されます。ジョブの状態が [成功] になると、データ許可は [送信されたデータ許可] ページの [送信されたデータ許可] タブに表示され、受取人アカウントが承諾するまで [承諾を保留中] 状態になります。

Amazon Redshift データセットを含むデータ許可を作成する

概要

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有が含まれています。データ共有を含む製品をサブスクライブすると、データ所有者がデータ共有に追加したテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データ所有者は、AWS Data Exchange for Amazon Redshift データ共有をクラスターに作成します。次に、受取人にアクセスを許可するスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数をデータ共有に追加します。次に、データ共有を AWS Data Exchange にインポートし、データセットを作成してデータ許可に追加します。受取人は、データ許可リクエストを承諾すると、データ共有へのアクセス権が付与されます。

Amazon Redshift で Amazon Redshift のデータ共有を設定したら、AWS Data Exchange で新しい Amazon Redshift データセットを作成できます。その後、リビジョンを作成し、Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加できます。これは、AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストが Amazon Redshift のデータ共有にプロキシされることを可能にします。次に、このデータセットをデータ許可に追加できます。

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon Redshift データセットと、このデータセットを含むデータ許可を作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#)

- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する](#)
- [ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する](#)

ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

アセットとは、AWS Data Exchange 内のデータです。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

1. Amazon Redshift クラスター内にデータ共有を作成します。

データ共有の作成方法に関する詳細については、「[Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド](#)」の「プロデューサーとしての AWS Data Exchange データ共有の使用」を参照してください。

Note

データ共有はパブリックアクセス可能に設定することをお勧めします。そうしなければ、パブリックアクセス可能なクラスターを持つ顧客がデータを消費できなくなります。

2. [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#).

ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有が含まれています。詳細については、「[Amazon Redshift のデータセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) に移動します。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で、[Amazon Redshift のデータ共有] を選択します。

5. [データセットの定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後でリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでリビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加し、リビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットを追加する

1. データセットの詳細ページの AWS Data Exchange [Amazon Redshift のデータ共有] セクションで [データ共有を追加] を選択します。
2. [AWS Data Exchange Amazon Redshift のデータ共有] でデータ共有を選択し、[データ共有を追加] を選択します。

Note

リビジョンには、最大 20 個のデータ共有を追加できます。

アセットをリビジョンにインポートするジョブが開始されます。

3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、データ許可に追加する前に[編集](#)または[削除](#)できます。

ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として使用する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットはデータ許可に追加されません。

AWS Marketplace で共有されているデータ製品に含まれるデータセットとは異なり、データ許可に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールがありません。つまり、データ許可が承認されると、データ許可の受取人は特定のデータセットのすべて

の確定済みリビジョン (データ許可の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできるようになります。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. [Next] (次へ) をクリックします。

詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。

6. [受取人アクセス情報] セクションの [AWS アカウント ID] に、データ許可のレシーバーアカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. [受取人アクセス情報] セクションの [アクセスの終了日] で、[終了日なし] を選択してデータ許可を永続的に実行するか、[特定の終了日] を選択して希望の終了日を指定するかを選択します。
8. [Next] (次へ) をクリックします。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。これで、データ許可の作成ジョブで、[送信されたデータ許可] ページの [アクティビティ履歴] タブに [処理中] 状態が表示されます。ジョブの状態が [成功] になると、データ許可は [送信されたデータ許可] ページの [送信されたデータ許可] タブに表示され、受取人アカウントが承諾するまで [承諾を保留中] 状態になります。

Amazon S3 データアクセスを含むデータ許可の作成

概要

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、データ所有者は Amazon S3 バケットまたは特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。また、データ所有者は AWS Data Exchange を使用することで、データ許可を通じて使用権限を自動的に管理することもできます。

データ所有者は、コピーを作成または管理しなくても、Amazon S3 バケット全体、または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。これらの共有 Amazon S3 オブジェクトは、AWS Key Management Service (AWS KMS) の中に、または AWS マネージドキー (SSE-S3) で保存されているお客様が管理するキーを使用してサーバー側で暗号化できます。KMS キーのモニタリングおよび暗号化コンテキストの理解の詳細については、[the section](#)

called [“Amazon S3 データアクセスのキー管理”](#) を参照してください。レシーバーがデータ製品へのアクセス権を取得すると、AWS Data Exchange は、代わりに Amazon S3 アクセスポイントを自動的にプロビジョニングしてリソースポリシーを更新し、受取人に読み取り専用アクセス権を付与します。受取人は、Amazon S3 バケット名を使用して Amazon S3 のデータにアクセスする場所で、Amazon S3 アクセスポイントのエイリアスを使用できます。

サブスクリプションが終了すると、レシーバーの許可は取り消されます。

Amazon S3 データアクセスを含むデータ許可を作成する前に、以下の前提条件を満たす必要があります。

前提条件

- データをホストする Amazon S3 バケットが、Amazon S3 バケット所有者による強制設定で [ACL 無効] をオンにして設定されていることを確認します。詳細については、Simple Storage Service ユーザーガイドの [オブジェクトの所有権のコントロールとバケットに対する ACL の無効化](#) を参照してください。
- 共有オブジェクトに受信者が正常にアクセスするには、共有オブジェクトが Amazon S3 Standard ストレージクラス内に存在するか、Amazon S3 Intelligent Tiering を使用して管理されている必要があります。共有オブジェクトが他のストレージクラス内に存在しているか、Intelligent Tiering を Deep Archive で有効にしている場合、レシーバーは RestoreObject への許可がないため、エラーが発生します。
- データをホストする Amazon S3 バケットで、暗号化が無効になっているか、Amazon S3 管理キー (SSE-S3) または AWS Key Management Service (AWS KMS) で暗号化されていることを確認します。
- カスタマー管理キーを使用している場合は、次のものがが必要です。
 1. KMS キーに対する kms:CreateGrant への IAM 権限。これらの権限には、キーポリシー、IAM 認証情報、または KMS キーへの AWS KMS 許可を通じてアクセスできます。キー管理の詳細と AWS Data Exchange による AWS KMS 許可の使用方法については、[AWS KMS 許可の作成](#) を参照してください。

アクセス権限を付与するには、ユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- AWS IAM Identity Center のユーザーとグループ:

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[アクセス許可一式を作成](#)」の手順を実行します。

- IAM 内で、ID プロバイダーによって管理されているユーザー:

ID フェデレーションのロールを作成します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティー ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールの作成](#)」を参照してください。

- IAM ユーザー:
 - ユーザーに設定できるロールを作成します。手順については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザー用ロールの作成](#)」を参照してください。
 - (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加する。「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス許可の追加](#)」の指示に従います。

AWS Management Console の外部で AWS を操作するには、プログラマチックアクセス権が必要です。プログラマチックアクセス権を付与する方法は、AWS にアクセスしているユーザーのタイプによって異なります。

ユーザーにプログラマチックアクセス権を付与するには、以下のいずれかのオプションを選択します。

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	To	方法
ワークフォースアイデンティティ (IAM Identity Center で管理されているユーザー)	一時的な認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDK、または AWS API へのプログラマチックリクエストに署名します。	使用するインターフェイス用の手引きに従ってください。 <ul style="list-style-type: none">• AWS CLI については、AWS Command Line Interface ユーザーガイドの「AWS IAM Identity Center を使用するための AWS CLI の設定」を参照してください。• AWS SDK、ツール、および AWS API については、「AWS SDK とツールリファレンスガイド」の「IAM Identity Center 認証」を参照してください。
IAM	一時的な認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDK、または AWS API へのプログラムによるリクエストに署名します。	「IAM ユーザーガイド」の「 AWS リソースでの一時的な認証情報の使用 」の指示に従ってください。

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	To	方法
IAM	(非推奨) 長期的な認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDK、AWS API へのプログラムによるリクエストに署名します。	使用するインターフェイス用の手順に従ってください。 <ul style="list-style-type: none">• AWS CLI については、AWS Command Line Interface ユーザーガイドの「IAM ユーザー認証情報を使用した認証」を参照してください。• AWS SDK とツールについては、AWS SDK とツールリファレンスガイドの「長期認証情報を使用して認証する」を参照してください。• AWS API については、IAM ユーザーガイドの「IAM ユーザーのアクセスキーの管理」を参照してください。

KMS キーのキーポリシーに追加する方法を示す JSON ポリシーの例を次に示します。

```
{
  "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "<IAM identity who will call Dataexchange API>"
  },
  "Action": "kms:CreateGrant",
  "Resource": "*"
}
```

次のポリシーは、使用される IAM ID のポリシー追加例を示しています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
      "Action": [
        "kms:CreateGrant"
      ],
      "Resource": [
        <Enter KMS Key ARNs in your account>
      ]
    }
  ]
}
```

Note

前のステップで KMS キーに対する `kms:CreateGrant` 権限を取得していれば、クロスアカウント KMS キーも許可されます。別のアカウントがキーを所有している場合は、上記の例で説明されているように、キーポリシーと IAM 認証情報に対する権限が必要です。

2. Amazon S3 バケットキー機能を使用して、必ず KMS キーを使用して Amazon S3 バケット内の既存のオブジェクトと新しいオブジェクトを暗号化してください。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[S3 バケットキーの設定](#)」を参照してください。
 - Amazon S3 バケットに追加された新しいオブジェクトについては、デフォルトで Amazon S3 バケットキー暗号化を設定できます。Amazon S3Bucket キー機能を使用せずに既存のオブジェクトを暗号化した場合、これらのオブジェクトは Amazon S3 バケットキーを使用して暗号化するように移行する必要があります。

既存のオブジェクトの Amazon S3 バケットキーを有効にするには、`copy` オペレーションを使用します。詳細については、「[バッチオペレーションを使用してオブジェクトレベルで Amazon S3 バケットキーを設定する](#)」を参照してください。

- AWSマネージド KMS AWS 所有のキー キーまたはサポートされていない。サポートされていない暗号化スキームから現在サポートされている暗号化スキームに移行できます。詳細については、AWSストレージブログの「[Amazon S3 暗号化の変更](#)」を参照してください。
3. データをホストする Amazon S3 バケットを、AWS Data Exchange が所有するアクセスポイントを信頼するように設定します。これらの Amazon S3 バケットポリシーを更新して、Amazon S3 アクセスポイントを作成するAWS Data Exchange 権限を付与し、ユーザーに代わってサブスクライバーのアクセスを許可または削除する必要があります。ポリシーステートメントがない場合は、バケットポリシーを編集して Amazon S3 ロケーションをデータセットに追加する必要があります。

次にポリシーの例を示します。<Bucket ARN> を適切な値に置き換えてください。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "*"
      },
      "Action": [
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "<Bucket ARN>",
        "<Bucket ARN>/*"
      ],
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "s3:DataAccessPointAccount": [
            "337040091392",
            "504002150500",
            "366362662752",
            "330489627928",
            "291973504423",
            "461002523379",
            "036905324694",
            "540564263739",
            "675969394711",
            "108584782536",
```

```
        "844053218156"  
      ]  
    }  
  }  
]  
}
```

AWS Data Exchange を通じて、Amazon S3 バケット全体にデータ共有を委任できます。ただし、データセット内で共有したいバケットの特定のプレフィックスとオブジェクトに委任の範囲を委任することができます。以下に、スコープ付きポリシーの例を示します。<Bucket ARN> と "mybucket/folder1/*" を自分の情報で置き換えます。

```
{  
  "Version": "2012-10-17",  
  "Statement": [  
    {  
      "Sid": "DelegateToAdxGetObjectsInFolder1",  
      "Effect": "Allow",  
      "Principal": {  
        "AWS": "*"  
      },  
      "Action": [  
        "s3:GetObject"  
      ],  
      "Resource": [  
        "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/*"  
      ],  
      "Condition": {  
        "StringEquals": {  
          "s3:DataAccessPointAccount": [  
            "337040091392",  
            "504002150500",  
            "366362662752",  
            "330489627928",  
            "291973504423",  
            "461002523379",  
            "036905324694",  
            "540564263739",  
            "675969394711",  
            "108584782536",  
            "844053218156"  
          ]  
        }  
      }  
    }  
  ]  
}
```

```
    ]
  }
}
},
{
  "Sid": "DelegateToAdxListObjectsInFolder1",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "*"
  },
  "Action": "s3:ListBucket",
  "Resource": "arn:aws:s3:::mybucket",
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "s3:prefix": [
        "folder1/*"
      ]
    }
  },
  "StringEquals": {
    "s3:DataAccessPointAccount": [
      "337040091392",
      "504002150500",
      "366362662752",
      "330489627928",
      "291973504423",
      "461002523379",
      "036905324694",
      "540564263739",
      "675969394711",
      "108584782536",
      "844053218156"
    ]
  }
}
}
]
```

同様に、アクセス範囲を1つのファイルのみに限定する場合、データ所有者は次のポリシーを使用できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```



```
"Statement": [  
  {  
    "Sid": "DelegateToAdxGetMyFile",  
    "Effect": "Allow",  
    "Principal": {  
      "AWS": "*"  
    },  
    "Action": [  
      "s3:GetObject"  
    ],  
    "Resource": [  
      "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/myfile"  
    ],  
    "Condition": {  
      "StringEquals": {  
        "s3:DataAccessPointAccount": [  
          "337040091392",  
          "504002150500",  
          "366362662752",  
          "330489627928",  
          "291973504423",  
          "461002523379",  
          "036905324694",  
          "540564263739",  
          "675969394711",  
          "108584782536",  
          "844053218156"  
        ]  
      }  
    }  
  }  
]
```

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して、Amazon S3 データセットと、Amazon S3 データセットを含むデータ許可を作成するためのプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する](#)
- [ステップ 3: データセットを確認して完成する](#)

• [ステップ 4: 新しいデータ許可を作成する](#)

ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する

Amazon S3 データセットを作成するには

1. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
2. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
3. [データセットタイプを選択] で [Amazon S3 オブジェクト] を選択します。
4. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
5. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
6. [データセットを作成] を選択して、続行します。

ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する

受取人に提供する Amazon S3 バケットまたは Amazon S3 バケットロケーションを選択します。Amazon S3 バケット全体を選択することも、Amazon S3 バケット内で最大 5 つのプレフィックスまたはオブジェクトを指定することもできます。Amazon S3 バケットをさらに追加するには、別の Amazon S3 データ共有を作成する必要があります。

Amazon S3 データ共有アクセスを設定する

1. 「Amazon S3 データアクセスの設定」ページで、「Amazon S3 ロケーションの選択」を選択します。
2. [Amazon S3 ロケーションの選択] で、検索バーに Amazon S3 バケット名を入力するか、Amazon S3 バケット、プレフィックス、または Amazon S3 ファイルを選択して [選択項目を追加] を選択します。次に、[アプリケーションを追加] を選択します。

Note

データ所有者がどのプレフィックスやオブジェクトを共有するかを再設定する必要がないように、大半のオブジェクトやプレフィックスが保存されている最上位のフォルダを選択することをお勧めします。

3. 「設定の詳細」で、リクエスト支払い設定を選択します。2 つのオプションがあります。

- リクエスト支払いを有効にする (推奨) — リクエストは Amazon S3 バケット内のすべてのリクエストと転送に対して支払いを行います。このオプションをお勧めするのは、レシーバーのリクエストや転送に伴う意図しないコストを防ぐのに役立つためです。
- リクエスト支払いを無効にする — Amazon S3 バケット内のレシーバーのリクエストと転送に対して支払います。

リクエスト支払いの詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパガイド」の「[リクエスト支払いバケットのオブジェクト](#)」を参照してください。

4. ニーズに最適なバケットポリシーを選択してください。Amazon S3 バケット全体に 1 つのバケットポリシーを使用するには、[一般] を選択します。これは 1 回限りの設定で、future プレフィックスやオブジェクトを共有するために追加の設定を行う必要はありません。選択した Amazon S3 ロケーションに固有のバケットポリシーを使用するには、[特定] を選択します。共有 Amazon S3 バケットには、Amazon S3 データアクセスデータセットを正常に作成するためのバケットポリシーが必要で、ACL を有効にすることはできません。
 - a. ACL を無効にするには、バケット権限に移動し、[オブジェクト所有権] を [バケット所有者強制] に設定します。
 - b. バケットポリシーを追加するには、バケットステートメントをクリップボードにコピーします。Amazon S3 コンソールの Amazon S3 権限タブのバケットポリシーセクションで、[編集] を選択し、バケットポリシーをステートメントに貼り付けて、変更を保存します。
5. Amazon S3 AWS KMS バケットにカスタマーマネージドキーを使用して暗号化されたオブジェクトが含まれている場合は、そのような KMS キーをすべて AWS Data Exchange と共有する必要があります。KMS キーを使用して Amazon S3 バケット内のオブジェクトを暗号化する際に必要な前提条件については、[the section called “Amazon S3 データアクセスを含む製品の公開”](#) を参照してください。これらの KMS キーを AWS Data Exchange と共有するには、次の操作を行います。
 - [Amazon S3 データアクセスを設定] ページの [カスタマーマネージド KMS キー] で、[AWS KMS keysから選択] または [AWS KMS key ARN を入力] を選択し、Amazon S3 共有ロケーションの暗号化に現在使用されているすべての AWS KMS keysを選択します。AWS Data Exchange は、これらの KMS キーを使用して受取人が共有ロケーションにアクセスするための許可を作成します。詳細については、「[AWS KMSの許可](#)」を参照してください。

Note

AWS KMSは、既存の権限を含め、1つのKMSキーにつき50,000件の権限という制限があります。

6. Amazon S3 の場所、選択した KMS キー、設定の詳細を確認し、[保存して続行] を選択します。

ステップ 3: データセットを確認して完成する

新しく作成したデータセットを確認して完成させます。別の Amazon S3 データアクセスを作成して追加し、追加の Amazon S3 バケット、プレフィックス、オブジェクトへのアクセスを共有する場合は、[別の Amazon S3 データアクセスを追加] を選択します。

Note

これは、最初の Amazon S3 データアクセスで選択した Amazon S3 バケットとは別の Amazon S3 バケットでホストされているデータへのアクセスを共有する必要がある場合にお勧めします。

公開前に変更を加える場合は、[下書きを保存] を選択してデータセットをドラフトとして保存できます。次に、[データセットを確定] を選択してデータ許可に追加します。

ステップ 4: 新しいデータ許可を作成する

少なくとも1つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として使用する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは、データ許可に追加できません。

AWS Marketplace で共有されているデータ製品に含まれるデータセットとは異なり、データ許可に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールがありません。つまり、データ許可が承認されると、データ許可の受取人は特定のデータセットのすべての確定済みリビジョン (データ許可の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできるようになります。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. [Next] (次へ) をクリックします。

詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。

6. [受取人アクセス情報] セクションの [AWS アカウント ID] に、データ許可を受け取る必要がある受取人アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. [アクセスの終了日] で、データ許可の有効期限が切れる特定の終了日を選択するか、許可を永続的にする場合は [終了日なし] を選択します。
8. [Next] (次へ) をクリックします。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。これで、データ許可の作成ジョブで、[送信されたデータ許可] ページの [アクティビティ履歴] タブに「処理中」状態が表示されます。ジョブの状態が [成功] になると、データ許可は [送信されたデータ許可] ページの [送信されたデータ許可] タブに表示され、受取人アカウントが承諾するまで [承諾を保留中] 状態になります。

AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可の作成 (プレビュー)

概要

このプレビュー期間中に AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可を作成することに関心がある場合は、[AWS Support](#)にお問い合わせください。

AWS Lake Formation データ権限データセットには、AWS Lake Formation によって管理されるデータの LF タグと権限のセットが含まれています。Lake Formation データ許可を含むデータ許可を承諾すると、データセットに追加された LF タグに関連するデータベース、テーブル、および列に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データ所有者は、まず AWS Lake Formation で LF タグを作成し、これらのタグを受取人に提供するデータと関連付けます。Lake Formation でのリソースのタグ付けについては、「AWS Lake Formation デベロッパーガイド」の「[Lake Formation タグベースのアクセス制御](#)」を参照してください。次に、これらの LF タグと一連のデータ権限をアセットとして AWS Data Exchange にインポートします。受取人は、データ許可を承諾すると、これらの LF タグに関連付けられたデータへのアクセス権を付与されます。

以下のトピックでは、AWS Lake Formation データ許可を含むデータ許可を作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 2: AWS Lake Formation データ権限を作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 3: 確認して確定する](#)
- [ステップ 4: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 5: AWS Lake Formation データセットを含む新しいデータ許可を作成する \(プレビュー\)](#)
- [AWS Lake Formation データ許可データセット \(プレビュー\) を含むデータ許可を作成する際の考慮事項](#)

ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する (プレビュー)

AWS Lake Formation のデータセットを作成するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。

2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [製品] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. 「データセットタイプを選択」 で、AWS Lake Formationデータ権限を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を定義します。詳細については、「[the section called “データセットのベストプラクティス”](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 — オプション] で [新しいタグを追加] を選択します。
7. [データセットを作成]を選択して続行します。

ステップ 2: AWS Lake Formation データ権限を作成する (プレビュー)

AWS Data Exchange LF タグを使用してデータ権限を付与します。共有するデータに関連付けられている LF タグを選択して、データに対する許可を受取人に付与します。

AWS Lake Formation データ権限を作成するには

1. 「Lake Formation のデータ許可を作成」 ページで、「LF タグを追加」を選択します。
2. キーを入力し、LF タグ値を選択します。
3. 「リソースをプレビュー」を選択すると、LF タグがどのように解釈されるかを確認できます。
 - 「リソースのプレビュー」から、関連するデータカタログリソースを選択します。

Note

以下のリソースの IAMAllowedPrincipals グループを必ず取り消してください。詳細については、IAM ユーザーガイドの「[IAM ロールの一時的なセキュリティ認証情報の取り消し](#)」を参照してください。

4. 下のダイアログボックスの LF タグ表現の解釈と、データセットに関連する権限を確認してください。
5. [サービス アクセス] では、AWS Data Exchange がそのロールを引き受け、ユーザーに代わって Lake Formation データ権限へのアクセス、付与、資格の取り消しを許可する既存のサービスロールを選択します。次に、「Lake Formation のデータ許可を作成」を選択します。AWS のサービスのロールの作成の詳細については、「[AWS のサービスにアクセス許可を委任するロールの作成](#)」を参照してください。

ステップ 3: 確認して確定する

AWS Lake Formation データ権限 (プレビュー) を作成したら、データセットを確認して確定できます。

確認して確定するには

1. ステップ 1 のデータセットの詳細とタグが正しいかどうかを確認してください。
2. LF タグ表現を確認し、別の Lake Formation データ権限 (オプション)、関連するデータカタログリソース、ジョブの詳細を追加します。

Note

ジョブは、作成されてから 90 日後に削除されます。

3. [確定] を選択します。

ステップ 4: リビジョンを作成する

リビジョンを作成する

1. 「所有データセット」セクションから、リビジョンを追加したいデータセットを選択します。
2. [リビジョン] タブを選択します。
3. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
4. 「Lake Formation データ権限を変更」ページで、「LF タグを追加」を選択します。
5. 「データベース」と「テーブル」の権限を確認してください。
6. 「サービスアクセス」から、既存のサービスロールを選択し、「Lake Formation データ権限を作成」を選択します。


ステップ 5: AWS Lake Formation データセットを含む新しいデータ許可を作成する (プレビュー)

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定すると、AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可を作成する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。

2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

 Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは、データ許可に追加できません。

AWS Marketplace で共有されているデータ製品に含まれるデータセットとは異なり、データ許可に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールがありません。つまり、データ許可が承認されると、データ許可の受取人は特定のデータセットのすべての確定済みリビジョン (データ許可の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできるようになります。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. [Next] (次へ) をクリックします。

詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。

6. [受取人アクセス情報] セクションの [AWS アカウント ID] に、データ許可を受け取る必要がある受取人アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. [アクセスの終了日] で、データ許可の有効期限が切れる特定の終了日を選択するか、許可を永続的にする場合は [終了日なし] を選択します。
8. [Next] (次へ) をクリックします。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。これで、データ許可の作成ジョブで、[送信されたデータ許可] ページの [アクティビティ履歴] タブに「処理中」状態が表示されます。ジョブの状態が [成功] になると、データ許可は [送信されたデータ許可] ページの [送信されたデータ許可] タブに表示され、受取人アカウントが承諾するまで [承諾を保留中] 状態になります。

AWS Lake Formation データ許可データセット (プレビュー) を含むデータ許可を作成する際の考慮事項

最適なレシーバーエクスペリエンスを確保するため、製品に AWS Data Exchange for Lake Formation データセット (プレビュー) が含まれている場合、いずれの許可に対しても以下の変更を行わないことを強くお勧めします。

- AWS Lake Formation データセットを含むアクティブなデータ許可で AWS Data Exchange に渡された IAM ロールを削除または変更しないようお勧めします。このような IAM ロールを削除または変更すると、以下の問題が発生します。
 - Lake Formation のデータ権限にアクセスできる AWS アカウント は、アクセスを無期限に保持する可能性があります。
 - データ許可のレシーバーであるが、Lake Formation データ許可へのアクセス権をまだ受け取っていない AWS アカウントは、アクセス権の受け取りに失敗します。

削除または変更した IAM ロールについては AWS Data Exchange は一切責任を負いません。

- AWS Lake Formation データセットを含むデータ許可で AWS Data Exchange に渡された IAM ロールから、付与された AWS Lake Formation データ許可を取り消さないようお勧めします。そのような IAM ロールから付与されたデータ権限を取り消すと、以下の問題が発生します。
 - Lake Formation のデータ権限にアクセスできる AWS アカウント は、アクセスを無期限に保持する可能性があります。
 - 製品にサブスクライブしているが、Lake Formation のデータ権限へのアクセスをまだ受け取っていない AWS アカウント は、アクセスを受けられません。
- AWS Lake Formation データセットを含むアクティブなデータ許可を持つ AWS アカウントから、付与された AWS Lake Formation データ許可を取り消さないようお勧めします。データ許可のレシーバーである AWS アカウントから、付与されたデータ許可を取り消すと、これらのアカウントはアクセス権を失い、カスタマーエクスペリエンスが低下します。
- AWS Lake Formation データセットを含むデータ許可を作成する場合は、AWS Glue Data Catalog のクロスアカウントバージョンをバージョン 3 に設定することをお勧めします。AWS Lake Formation データセットを含むアクティブなデータ許可があるときに、データレイクカタログのクロスアカウントバージョンをダウングレードすると、データ許可のレシーバーであるが Lake Formation データ許可へのアクセス権をまだ受け取っていない AWS アカウントは、データにアクセスできなくなる可能性があります。

AWS Data Exchange でのデータ許可の承諾とデータへのアクセス

次の手順では、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange でデータ許可を承諾するプロセスを示します。

データ許可の承諾

1. データ許可を承諾する前に、AWS アカウントにサインアップしてユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[the section called “AWS アカウントへのサインアップ”](#)」を参照してください。
2. AWS Data Exchange コンソールの左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [受け取ったデータ許可] を選択します。
3. AWS アカウント がレシーバーであるすべてのデータ許可は、[データ許可を保留中] タブの下の表に表示され、保留中のデータ許可の詳細と [承諾を保留中] ステータスが示されます。
4. データ許可を承諾するには、承諾するデータ許可の横にあるチェックボックスをオンにして、[データ許可を承諾] を選択します。
5. データ許可の承諾処理が完了すると、データ許可が [承諾済みおよび期限切れのデータ許可] タブに表示され、データ許可の詳細と [承諾済み] ステータスが示されます。
6. データ許可を承諾したら、[権限を持つデータセット] テーブルからデータ許可名を選択してデータにアクセスします。[マイデータ] から [権限を持つデータ] ページに移動して、データ許可を確認し、アカウントで共有するすべてのデータセットを表示することもできます。
7. 次に、含まれているデータセットを使用します。アクセスできるデータセットの種類に応じて、以下のアクションのいずれかを実行できます。
 - a. 関連するファイルを Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) にエクスポートする、または署名付き URL を通じてローカルにエクスポートする。
 - b. Amazon API Gateway API Gateway API を呼び出す。
 - c. Amazon Redshift データ共有をクエリする。
 - d. Amazon S3 データにアクセスする。
 - e. AWS Lake Formation データレイク (プレビュー) をクエリする。

Note

データ許可を承諾すると、基礎となるデータセットの使用には、AWS カスタマーアグリーメントや該当サービスの使用を規定する AWS との他の契約が引き続き適用されることに同意したものとみなされます。

関連トピック

- [データ許可の承諾後にデータセットにアクセスする](#)
- [ファイルベースのデータを含むデータセットにアクセスする](#)
- [API を含むデータセットにアクセスします。](#)
- [Amazon Redshift データセットを含むデータセットにアクセスする](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含むデータセットにアクセスする](#)
- [AWS Lake Formation データセットを含むデータセットにアクセスする \(プレビュー\)](#)

データ許可の承諾後にデータセットにアクセスする

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange のデータセットにアクセスするプロセスについて説明します。

トピック

- [ファイルベースのデータを含むデータセットにアクセスする](#)
- [API を含むデータセットにアクセスします。](#)
- [Amazon Redshift データセットを含むデータセットにアクセスする](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含むデータセットにアクセスする](#)
- [AWS Lake Formation データセットを含むデータセットにアクセスする \(プレビュー\)](#)

ファイルベースのデータを含むデータセットにアクセスする

以下のトピックでは、AWS Data Exchange にファイルとして保存されているファイルベースのデータを含むデータセットにアクセスするプロセスについて説明します。このプロセスを完了するには、AWS Data Exchange コンソールを使用してください。

データ許可を正常に承諾すると、データ許可に含まれているデータセットにアクセスできるようになります。

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. データセットの [データセットの概要]、[自動エクスポートの宛先] (Amazon S3 データセットのみ)、[リビジョン]、および [説明] を表示します。

(オプション) データのエクスポート

データ許可をアクティブにしたら、エクスポートしたアセットを受け取るように Amazon S3 バケットを設定できます。関連するアセットを Amazon S3 にエクスポートする、または署名付き URL を用いたジョブを使用できます。

新しいリビジョンを取得するなど、後でデータをエクスポートまたはダウンロードする場合は、[the section called “アセットのエクスポート”](#) を参照してください。

Important

データを Amazon S3 にエクスポートするときは、Amazon S3 のセキュリティ機能を検討することをお勧めします。一般的なガイドラインとベストプラクティスの詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 のセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

データのエクスポート方法に関する詳細については、「[the section called “アセットのエクスポート”](#)」と「[the section called “リビジョンのエクスポート”](#)」を参照してください。

API を含むデータセットにアクセスします。

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して、AWS Data Exchange での API を含むデータセットにアクセスするプロセスについて説明します。

API の表示

API を表示する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. アセットの概要を表示します。
7. [統合に関する注意事項] にあるガイドラインに従って API を呼び出します。

API 仕様のダウンロード

API 仕様をダウンロードする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. [OpenAPI 3.0] 仕様で、[API 仕様をダウンロード] を選択します。

仕様がローカルコンピュータにダウンロードされます。次に、SDK 生成のために、アセットをサードパーティツールにエクスポートできます。

API コールの実行 (コンソール)

AWS Data Exchange コンソールで単一のエンドポイントを呼び出すことができます。

コンソールから API コールを実行する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. [統合に関する注意事項] で以下を実行します。

- a. [コピー] を選択して [ベース URL] を使用します。
- b. [コピー] を選択して [コード構造] を使用します。
- c. 仕様ドキュメントに記載されている情報に従って API を呼び出します。

API コールを実行する (AWS CLI)

API コールを実行するには (AWS CLI)

- `send-api-asset` コマンドを使用して API を呼び出します。

```
$ aws dataexchange send-api-asset \  
--asset-id $ASSET_ID \  
--data-set-id $DATA_SET_ID \  
--revision-id $REVISION_ID \  
--body "...\" \  
{  
  "headers": {  
    ...  
  },  
  "body": "..."  
}
```

Amazon Redshift データセットを含むデータセットにアクセスする

受取人向けの概要

Amazon Redshift データセットは、Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有に含まれるデータセットです。データ共有は、データ所有者がデータ共有に追加するテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権を付与します。

受取人は、データ許可の承諾後に、データを抽出、変換、ロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするためのアクセス権を取得します。データ許可が期限切れになると、データ共有にアクセスできなくなります。

Note

データ許可の承諾後にデータ共有にアクセスできるようになるまで数分かかる場合があります。

データ許可を承諾すると、以下の操作を実行できます。

- データを抽出、変換、ロードすることなく、データにクエリを実行する。

データ所有者が更新すると同時に、最新のデータにアクセスする。

詳細については、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[AWS Data Exchange データ共有の管理](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスを含むデータセットにアクセスする

受取人向けの概要

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、受取人はデータ所有者の Amazon S3 バケットから直接サードパーティのデータファイルにアクセスできます。

受取人は、AWS Data Exchange for Amazon S3 データセットの使用権限を取得すると、Amazon S3 バケット内のデータ所有者のデータを直接使用して、Amazon Athena、SageMaker Feature Store、Amazon EMR などの AWS のサービスでデータ分析を開始できます。

以下の点を考慮します。

- データ所有者は、提供されたデータをホストする Amazon S3 バケットで、Amazon S3 の機能であるリクエスト支払いを有効にすることができます。有効にすると、受取人は Amazon S3 バケットへのデータの読み取り、使用、転送、エクスポート、またはコピーに対して料金を支払います。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[ストレージ転送と使用量にリクエスト支払いバケットを使用する](#)」を参照してください。
- AWS Data Exchange for Amazon S3 データ製品に対するデータ許可を承諾すると、AWS Data Exchange は自動的に Amazon S3 アクセスポイントをプロビジョニングし、そのリソースポリシーを更新して読み取り専用アクセスを許可します。Amazon S3 Access Points は、Amazon S3 バケットへのデータ共有を簡素化する Amazon S3 の機能です。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 アクセスポイントを使用したデータアクセスの管理](#)」を参照してください。

- Amazon S3 アクセスポイントの Amazon リソースネーム (ARN) またはエイリアスを使用して共有データにアクセスするには、事前に IAM 権限を更新する必要があります。現在のロールおよび関連ポリシーで、プロバイダーの Amazon S3 バケットと AWS Data Exchange が提供する Amazon S3 アクセスポイントへの GetObject および ListBucket 呼び出しが許可されていることを確認できます。

以下のセクションでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して、データ許可の承諾後に AWS Data Exchange for Amazon S3 データセットにアクセスする完全なプロセスについて説明します。

独自の Amazon S3 バケットを設定したり、データファイルを Amazon S3 バケットにコピーしたり、関連するストレージ料金を支払ったりすることなく、クエリを実行してデータをインプレースで分析できます。データ所有者が管理しているのと同じ Amazon S3 オブジェクトにアクセスして、最新の利用可能なデータを使用できます。

データ許可では、次のことを実行できます。

- Amazon S3 バケットを個別に設定したり、ファイルをコピーしたり、ストレージ料金を支払ったりすることなく、データを分析する。
- データ所有者が更新すると同時に最新のプロバイダーデータにアクセスする。

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. [権限を持つデータセット] ページで、データセットを選択します。
4. データセットの概要を表示します。

Note

提供されたデータは、データ所有者の Amazon S3 バケットに保存されます。このデータにアクセスする場合、所有者が別途指定しない限り、リクエストの費用と所有者の Amazon S3 バケットからダウンロードしたデータの費用を負担する必要があります。

5. 開始する前に、権限が付与された Amazon S3 データアクセスを使用するには、ロールに IAM アクセス権限が必要です。[データセットの概要] ページの [Amazon S3 データアクセス] タブで、[IAM 権限の検証] を選択して、ロールにデータにアクセスするための正しい権限があるかどうかを確認します。

6. 必要な IAM 権限がある場合は、表示される IAM ポリシープロンプトで [次へ] を選択します。必要な権限がない場合は、プロンプトに従って JSON ポリシーをユーザーまたはロールに埋め込みます。
7. 共有されている場所を参照し、Amazon S3 バケット、またはデータ所有者が共有しているプレフィックスとオブジェクトを確認します。Amazon S3 アクセスポイント情報のデータアクセス情報を参照し、データ所有者がリクエスト支払いを有効にしているかどうかを確認します。
8. [共有されている Amazon S3 の場所を参照] を選択し、データ所有者の Amazon S3 バケット、プレフィックス、共有されているオブジェクトを表示および確認します。
9. Amazon S3 バケット名を使用する場所ならどこでも アクセスポイント エイリアスを使用して、資格のあるデータにプログラムでアクセスできます。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[互換性のある Amazon S3 オペレーションでのアクセスポイントの使用](#)」を参照してください。
10. (オプション) データ所有者の AWS KMS key で暗号化されたデータを含む Amazon S3 データアクセスデータセットの使用権限を取得すると、コンソールで KMS キー ARN を表示できます。AWS Data Exchange は、キーへの AWS KMS 許可をユーザーに代わって作成するため、暗号化されたデータにアクセスできます。使用権限を取得した Amazon S3 Access Points から、暗号化されたデータを読み取るには、AWS KMS key に対する kms:Decrypt IAM 許可を取得する必要があります。次の IAM ポリシーステートメントを選択できます。
 - a. ユーザーが任意の KMS キーを使用してデータを復号化または暗号化できるようにする IAM ポリシー。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
    "Effect": "Allow",
    "Action": ["kms:Decrypt"],
    "Resource": ["*"]
  }]
}
```

- b. 受取人のコンソールに表示される正確な KMS キー ARN を指定できるようにする IAM ポリシー。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```

```
"Statement": [{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kms:Decrypt"
  ],
  "Resource": [
    "<KMS key Arn from recipient's console>"
  ]
}]
}
```

Note

AWS KMS 許可では、最終的な整合性を達成するための操作に最大 5 分かかることがあります。これが完了するまでは、Amazon S3 データアクセスデータセットにアクセスできない場合があります。詳細については、「AWS KMS key Key Management Service デベロッパーガイド」の「[AWS KMS でのグラント](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データセットを含むデータセットにアクセスする (プレビュー)

受取人向けの概要

AWS Lake Formation データセットは、AWS Lake Formation データ権限アセットが含まれるデータセットです。

受取人は、AWS Lake Formation データセットを含むデータ許可を承諾できます。AWS Lake Formation データセットの AWS Data Exchange の権利を取得すると、AWS Lake Formation を使用して AWS アカウント内で、または AWS License Manager を使用して AWS 組織全体で、データへのクエリ、変換、およびアクセスの共有を行うことができます。

AWS Lake Formation データセットを含むデータ許可を承諾すると、Amazon Athena などの Lake Formation 互換のクエリエンジンを使用してデータをクエリできます。

データ許可の承諾が完了したら、以下の操作を行う必要があります。

1. データ許可の承諾後 12 時間以内に AWS Resource Access Manager (AWS RAM) 共有を受け入れます。AWS RAM 共有は、AWS Data Exchange コンソールの AWS Lake Formation データ

タ許可データセットの [権限を持つデータセット] ページから受け入れることができます。AWS RAM共有を受け入れる必要があるのは、プロバイダーごとに 1 回だけです。AWS RAM からのリソース共有への招待を受け入れる方法の詳細については、「[AWS RAM からのリソース共有への招待を受け入れる](#)」を参照してください。

2. AWS Lake Formation に移動し、新しい共有リソースからリソースリンクを作成します。
3. Amazon Athena または別の AWS Lake Formation 互換クエリエンジンに移動して、データをクエリします。

組織内でのデータ許可ライセンスの共有

AWS Data Exchange データセットへのデータ許可を承諾すると、それらの製品を使用するためのライセンスを付与する契約が作成されます。AWS アカウントが組織のメンバーである場合は、AWS Data Exchange データセットのライセンスを組織内の他のアカウントと共有できます。

Note

AWS Organizations の詳細については、「[AWS Organizations ユーザーガイド](#)」を参照してください。

以下のトピックで、アカウント間でライセンスを共有するプロセスの概要を説明します。

トピック

- [ライセンス共有の前提条件](#)
- [ライセンスの表示](#)
- [ライセンスの共有](#)

ライセンス共有の前提条件

ライセンスを共有する前に、まず組織のライセンス共有をセットアップする必要があります。以下のタスクを完了して、組織のライセンス共有をセットアップしてください。

- ユーザーに代わってライセンスを管理する許可を AWS Marketplace に付与して、ユーザーがライセンスを購入または共有するときに関連するライセンス供与を作成できるようにします。詳細については、「AWS Marketplace 購入者ガイド」の「[AWS Marketplace のサービスリンクロール](#)」を参照してください。

- 初回使用のために AWS License Manager をセットアップします。詳細については、「AWS License Manager ユーザーガイド」の「[AWS License Manager の使用開始](#)」を参照してください。

ライセンスの表示

以下のトピックで、ライセンスを表示するプロセスの概要を説明します。

トピック

- [すべてのライセンスの表示](#)
- [単一のライセンスの表示](#)

すべてのライセンスの表示

AWS License Manager コンソールを使用して、アクセスできる AWS Data Exchange データセットのすべてのライセンスを表示できます。

サブスクリプションした製品のすべてのライセンスを表示する

1. [AWS Management Console](#) にサインインします。
2. AWS License Manager コンソールを開きます。
3. 左側のナビゲーションペインで [付与されたライセンス] を選択します。
4. 承認したデータ許可のすべてのライセンスを表示します。

単一のライセンスの表示

AWS License Manager コンソールを使用して、AWS Data Exchange データセットの単一のライセンスを表示できます。

単一のサブスクリプションの単一のライセンスを表示するには

1. AWS Data Exchange コンソールにサインインします。
2. [マイデータ] で [受け取ったデータ許可] を選択します。
3. データ許可を選択します。
4. [License] (ライセンス) の下にあるリンクを選択します。
5. [License detail] (ライセンスの詳細) ページで詳細を確認します。

ライセンスの共有

受取人向けの概要

AWS License Manager を使用することで、ライセンスを管理し、組織内の他のアカウントとライセンスを共有することができます。

AWS マネージドライセンスでの AWS License Manager の使用に関する詳細については、「AWS License Manager ユーザーガイド」の「[付与されたライセンスと販売者が発行したライセンス](#)」を参照してください。

でのデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange

AWS Marketplaceでデータ製品をサブスクライブする方法の概要は次のとおりです。

1. の作成 AWS アカウント – データ製品をサブスクライブする前に、にサインアップ AWS してユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[セットアップ](#)」を参照してください。
2. パブリックカタログを参照する – 製品は AWS Marketplace カタログに公開されます。製品を検索し、関連するパブリックまたはカスタムオファーと製品の詳細を確認することができます。プロバイダーが見込みサブスクライバーのアカウントにプライベートオファーを発行した場合、その製品は AWS Data Exchange コンソールの [My product offers] (製品オファー) ページから利用できます。
3. (オプション) サブスクリプションのリクエストを送信 – プロバイダーは、サブスクリプション検証を有効にすることを選択できます。有効になっている場合は、製品のサブスクリプションをリクエストする必要があります。詳細については、「[サブスクライバーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。
4. サブスクライバーが製品をサブスクライブする – 有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求書に請求されます。権限を持つデータセットにアクセスできます。
5. 含まれているデータセットを使用 – 製品のデータセットには、データサブスクリプション契約の条件に従ってアクセスできます。アクセスできるデータセットの種類に応じて、以下のアクションのいずれかを実行できます。
 - 関連するファイルを Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) にエクスポートする、または署名付き URL を用いてローカルにエクスポートする。
 - Amazon API Gateway API Gateway API を呼び出す
 - Amazon Redshift データ共有をクエリする。
 - プロバイダーの Amazon S3 データにアクセスする。
 - プロバイダー AWS Lake Formation のデータレイクをクエリする (プレビュー)。

詳細については、「[AWS Data Exchange のジョブ](#)」を参照してください。

6. データ製品のレコメンデーションをリクエストする – カタログで製品を見つけられない場合は、AWS Data Exchange コンソールのデータ製品のリクエストページを使用して、AWS Data Exchange Data Discovery Team にパーソナライズされたレコメンデーションをリクエストできます。詳細については、「[データ製品のレコメンデーションをリクエストする](#)」を参照してください。

Note

米国外の販売者からのデータ製品をサブスクライブするときは、その販売者から税金請求書
が送信される場合もあります。詳細については、「[税務ヘルプ – AWS Marketplace セラー](#)」
を参照してください。

関連トピック

- [製品のサブスクリプション](#)
- [サブスクライバーとしての使用の開始](#)
- [製品のサブスクリプションとアクセス](#)
- [サブスクライバーのサブスクリプション検証](#)
- [組織内でのライセンスサブスクリプションの共有](#)
- [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)
- [プライベート製品とオファー](#)
- [チュートリアル: AWS Data Exchange で AWS Data Exchange ハートビートをサブスクライブする](#)
- [チュートリアル: AWS Data Exchange で API 用 AWS Data Exchange \(テスト製品\) をサブスクライブする](#)
- [チュートリアル: AWS Data Exchange で Worldwide Event Attendance \(テスト製品\) をサブスクライブする](#)
- [チュートリアル:\(プレビュー\) AWS Data Exchange で AWS Lake Formation の AWS Data Exchange \(テスト製品\) をサブスクライブする](#)
- [チュートリアル: Amazon S3 の AWS Data Exchange をサブスクライブする \(テスト製品\)](#)
- [チュートリアル: AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 \(テスト製品\) をサブスクライブする](#)
- [内のデータ AWS Data Exchange](#)

製品のサブスクリプション

すべての製品はサブスクリプションベースです。製品をサブスクライブするときは、料金、期間、
支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、および返金ポリシーなどの製品のオファー規
約に同意します。製品を購読するときは、サブスクライブした期間中、プロバイダーが選択した支払
いスケジュールに従って料金を支払います。

⚠ Important

データサブスクリプション契約 (DSA) は、データ製品に対するプロバイダーの利用規約を規定します。AWS Data Exchange でサブスクライブされるデータ製品の使用は、AWS カスタマーアグリーメント、または AWS のサービスの使用を規定するその他契約に準拠する必要があります。

ℹ Note

AWS の [Open Data](#) プログラムの一部であるデータ製品は、誰でも無料で使用でき、サブスクリプションも必要ありません。詳細については、「[AWS データセットでの Open Data の使用](#)」を参照してください。

各製品のパブリックオファー規約には、1 つ、または複数の料金と期間の組み合わせを含めることができます。製品をサブスクライブするときは、サブスクリプションの期間を選択できます。プロバイダーが製品に対してサブスクリプションの自動更新を有効にしている場合は、それを有効にするかどうかを選択することもできます。

⚠ Important

製品に機密データまたは個人データ (モバイル ID など) のカテゴリが含まれていることをデータプロバイダーが表明している場合は、その旨が製品の詳細に表示されます。機密データのカテゴリに関する詳細については、「[機密カテゴリの情報](#)」を参照してください。製品に 1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法令 (HIPAA) の対象である保護医療情報 (PHI) が含まれていることをデータプロバイダーが表明している場合は、[AWS Artifact](#) の AWS Business Associate Addendum に規定されているとおり、AWS アカウントが HIPAA アカウントとして指定されている場合を除き、製品のデータセットを AWS アカウントにエクスポートすることはできません。

サブスクリプションが処理されてアクティブになると、サブスクリプションが、その支払いスケジュールに従って AWS Marketplace 料金の一部として AWS 請求書に表示されます。詳細については、「[AWS Marketplace 製品への支払い](#)」を参照してください。

サブスクリプションの期間中は、すべての製品のデータセットを表示し、アクセスすることができます。また、ジョブでデータセットのアセットをエクスポートすることもできます。詳細について

は、「[AWS Data Exchange のジョブ](#)」を参照してください。サブスクリプションの有効期限が切れると、データセットを表示したりエクスポートしたりすることができなくなります。

Note

サブスクリプションを使用して何にアクセスできるかに関する詳細を含めたデータセットとリビジョンに関する情報については、「[データセットとリビジョン](#)」を参照してください。

プロバイダーが製品の非公開化を決定した場合でも、サブスクリプションがアクティブである限り、データセットには引き続きアクセスできます。ただし、有効期限が切れたときにサブスクリプションを自動更新することはできません。

アクティブな製品サブスクリプションと自動更新ステータスは、すべて AWS Data Exchange コンソールの [サブスクリプション] ページで確認できます。詳細については、「[サブスクリプションの管理](#)」を参照してください。

Important

自動更新を有効にしており、更新時に製品のオファー規約が変更されている場合は、製品の新しいオファー規約 (新しい料金と新しい DSA を含む) が適用されます。これは、オファー規約が変更されている可能性にかかわらず、データに対するアクセス権を保持できることを確実にします。

アクティブなサブスクリプションに基づいて、特定の AWS リージョン内にあるすべての権限を持つデータセットを検索してアクセスするには、[権限を持つデータセット] ページにアクセスします。

データ製品を購読すると、お客様の連絡先情報をプロバイダーと共有する場合があります。詳細については、AWS Marketplace 購入者ガイドの「[AWS Marketplace でのセキュリティ](#)」を参照してください。

前払いの義務が伴う AWS Data Exchange のデータ製品を購入するときは、Amazon Web Services (AWS) からの請求書が直ちに送信されます。各データ製品の料金は、請求書の詳細セクションに製品名別に記載されています。Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) または Amazon Athena などの AWS のインフラストラクチャおよび分析サービスの使用については、個別の請求書を受け取ります。AWS Billing and Cost Management の詳細については、AWS Marketplace 購入者ガイドの「[製品の支払い](#)」をご参照ください。

AWS Data Exchange ファイルデータセットのサブスクリプションが終了しても、すでにエクスポートしたファイルには引き続きアクセスできます。データサブスクリプション契約を確認して、サブスクリプションの終了時にエクスポートされたデータを削除することが契約で義務付けられているかどうかを確認してください。

データセットとリビジョン

AWS Data Exchange 内のすべての製品は、1 つ、または複数のデータセットで構成されており、データセットのそれぞれに 1 つ、または複数のリビジョンがあります。AWS Data Exchange 内のデータセットは異なるデータであることが一般的で、リビジョンは同じデータの新しいバージョンまたは変更されたバージョンです。データセットとリビジョンに関する詳細については、「[内のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

各リビジョンには、データセットのすべてのデータ (リビジョン用に更新されたもの) が含まれる場合と、前回のリビジョン以降の新しいデータのみが含まれる場合があります。各リビジョンにまったく異なるデータが含まれる可能性もあります。各リビジョンで提供するデータは、データプロバイダーが決定します。

製品をサブスクライブすると、その製品内のすべてのデータセットにアクセスできます。データプロバイダーがオファーを作成するときは、履歴リビジョン (0 個 ~ 全リビジョン) に対するアクセス権を提供します。プロバイダーは、サブスクリプション期間中に利用可能になる将来のリビジョンに対するアクセス権も提供できます。サブスクリプションの条件は、AWS Data Exchange コンソールの製品詳細ページに記載されています。

ファイルが含まれる製品をサブスクライブすると、各リビジョンまたはアセットを手動で個別にエクスポートすることができます。または、プロバイダーが新しいリビジョンを発行するときに、それらを Amazon S3 バケット (最大 5 バケット) に自動的にエクスポートすることも選択できます。詳細については、「[ファイルベースのデータが含まれる製品をサブスクライブおよびアクセスするには](#)」を参照してください。リビジョンのエクスポート方法に関する詳細については、「[リビジョンのエクスポート](#)」を参照してください。

Amazon API Gateway API が含まれる製品をサブスクライブすると、データプロバイダーの API を表示して呼び出すことができます。詳細については、「[API が含まれる製品をサブスクライブおよびアクセスする](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブすると、Amazon Redshift 内のデータをクエリするためのアクセス権を取得します。詳細については、「[Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスデータセットを購読すると、プロバイダの Amazon S3 オブジェクトを表示して直接使用することができます。詳細については、「[the section called “Amazon S3 データアクセスを含む製品をサブスクライブおよびアクセスする”](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データ権限データセットを含む製品 (プレビュー) を購読すると、Amazon Athena AWS Lake Formation などのダウンストリームサービスでデータを管理したりクエリしたりできます。

データディクショナリ、サンプル

一部の製品には、データディクショナリとサンプルを含むデータセットがあります。製品を購読するかどうかを判断しやすくするため、購読する前にデータディクショナリとサンプルを表示してダウンロードできます。

データディクショナリはデータセットの内容を視覚的に表現したものです。含まれている列とその意味に関する詳細が含まれています。

サンプルは、製品を購読した後に受け取るデータを反映したデータです。サンプルは Amazon S3 でサポートされるどのファイル型でもかまいません。

データディクショナリとサンプルを含む製品を見つける方法の詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

データディクショナリとサンプルを使用して製品を評価する方法の詳細については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品の評価](#)」を参照してください。

サブスクライバーとしての使用の開始

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライバーになるための完全なプロセスを説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS Data Exchange をセットアップする](#)
- [ステップ 2: カタログを参照する](#)
- [ステップ 3 : \(オプション \) データ製品に関するレコメンデーションをリクエストする](#)
- [ステップ 4: \(オプション\) データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する](#)

• [ステップ 2: 製品をサブスクリプションおよびアクセスする](#)

ステップ 1: AWS Data Exchange をセットアップする

AWS Data Exchange を使用する前に、AWS にサインアップして、ユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[AWS Data Exchange を設定する](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange をセットアップする

1. AWS アカウント にサインアップします。詳細については、「[AWS アカウントへのサインアップ](#)」を参照してください。
2. ユーザーを作成します。詳細については、「[ユーザーの作成](#)」を参照してください。

ステップ 2: カタログを参照する

AWS Marketplace と AWS Data Exchange の両方で製品を検索し、関連するパブリックまたはカスタムオファーと製品の詳細を確認することができます。

プロバイダーがユーザーのアカウントにプライベートオファーを発行した場合、その製品は AWS Data Exchange コンソールの [My product offers page] (製品オファーページ) から利用できます。詳細については、「[でのデータ製品のサブスクリプション AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

カタログを参照するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索バーに用語または語句を入力し、[検索] を選択します。
4. (オプション) [カタログを参照] で、単語またはフレーズを入力してから [検索] を選択して、クエリに一致する結果を表示します。
5. (オプション) [結果を絞り込む] で、特定のカテゴリから 1 つを選択して、特定のデータ製品を参照します。
6. (オプション) [結果を絞り込む] で [データセットタイプ] フィルターを使用し、以下のオプションから選択して製品を検索します。
 - ファイル (Amazon S3 オブジェクト) — ファイルベースのデータを含む製品
 - Amazon Redshift — Amazon Redshift データ共有を含む製品

- API — API を含む製品
- Amazon S3 へのアクセス — Amazon S3 データアクセスを含む製品
- AWS Lake Formation— AWS Lake Formation データ権限を含む製品 (プレビュー)

7. 返された結果のリストから製品を選択し、その製品詳細ページを確認します。

ステップ 3 : (オプション) データ製品に関するレコメンデーションをリクエストする

カタログで製品を見つけられない場合は、[AWS Data Exchange Data Discovery Team](#) からのパーソナライズされたレコメンデーションをリクエストできます。

データ製品レコメンデーションをリクエストする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [データ製品をリクエスト] を選択します。
3. 「データのリクエスト」製品ページの「詳細」に、データの説明を入力します。
4. (オプション) [その他の詳細 (任意)] を展開し、指示に従ってフィールドに入力します。
 - a. 1 つ以上の製品カテゴリを選択します。
 - b. サンプルデータ製品 URL を入力します。
 - c. データセットタイプについては、ファイル (Amazon S3 オブジェクト)、Amazon API ゲートウェイ API、Amazon Redshift データ共有、AWS Lake Formation データ権限(プレビュー)、または Amazon S3 データアクセスから選択します。
 - d. 配信間隔、サンプルデータ製品 URL、サブスクリプション開始日、サブスクリプション期間、サブスクリプション予算など、必要な製品に関する具体的な詳細情報を入力します。
 - e. 選択したデータセットタイプが Amazon API Gateway API の場合は、[サブスクリプション予算] で [従量制コストを含む] を選択します。
5. データプロバイダーの場合は、既存のプロバイダーのリストから選択するか、その他のプロバイダーの名前を入力します。次に、プロバイダーと既存の関係があるかどうかを示してください。
6. [送信] を選択します。

2 営業日以内に AWS Data Exchange Data Discovery Team からの返信を受け取ります。

ステップ 4: (オプション) データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する

プロバイダーは、データディクショナリとデータセットのサンプルを製品に組み込む場合があります。製品のデータセットがニーズに合っているかどうかを判断しやすくするため、登録する前にデータディクショナリとサンプルを表示してダウンロードできます。詳細については、「[データディクショナリ、サンプル](#)」を参照してください。

次のアクションを実行して、製品のデータセットの評価に役立てることができます。

- [データディクショナリを表示する。](#)
- [データディクショナリをダウンロードする](#)
- [すべてのデータディクショナリを表示とダウンロード](#) (複数のデータセットを含む製品用)
- [サンプルをプレビューする](#)
- [サンプルをダウンロード](#)

データディクショナリを表示する

プロバイダーは、表示可能なデータセットごとに 1 つのデータディクショナリを追加できます。

データディクショナリを表示するには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 次のいずれかの方法でデータディクショナリを参照します。
 - 製品概要セクションまでスクロールすると、「データディクショナリを表示」にデータディクショナリが表示されます。
 - 「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、データセットの行を展開し、データディクショナリの横にあるオプションボタンを選択して、「すべてのデータディクショナリを表示」を選択します。
3. (オプション) 検索バーにキーワードまたは語句を入力して、すべてのデータセットとすべてのテーブルを検索します。
4. (オプション) 必要に応じて検索とフィルターを変更します。

データディクショナリをダウンロードする。

プロバイダーは、ダウンロードできるデータセットごとに1つのデータディクショナリを追加できます。

データディクショナリをダウンロードするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 展開アイコン (データセット名の左にあるプラスアイコン) を選択して、データセットの行を拡張します。
3. データディクショナリ名の隣にあるオプションボタンを選択します。
4. [ダウンロード] を選択します。

データディクショナリファイルがコンピュータにダウンロードされます。

すべてのデータディクショナリを表示とダウンロード

製品に複数のデータセットがある場合、プロバイダーは各データセットにデータディクショナリを追加することがあります。すべてのデータセットを評価するには、すべてのデータディクショナリを表示してダウンロードすることをお勧めします。

すべてのデータディクショナリを表示してダウンロードするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. [すべてのデータディクショナリを表示] を選択します。
3. 「データディクショナリを表示」ダイアログボックスで、「ダウンロード (CSV)」を選択して.csv ファイルをダウンロードします。

.csv ファイルがコンピュータにダウンロードされます。

4. [閉じる] を選択してダイアログボックスを閉じます。

サンプルをプレビューする

サンプルをプレビューするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 展開アイコン (データセット名の左にあるプラスアイコン) を選択してデータセットを拡張します。

3. サンプル名の横にあるオプションボタンを選択します。
4. [サンプルをプレビュー (CSV のみ)] を選択してサンプルをプレビューします。
 - a. (オプション) プレビューダイアログボックスで、「ダウンロード」を選択して.csv ファイルをダウンロードします。

.csv ファイルがコンピュータにダウンロードされます。
 - b. [閉じる] を選択してダイアログボックスを閉じます。

サンプルをダウンロードする。

サンプルをダウンロードするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 展開アイコン (データセット名の左にあるプラスアイコン) を選択してデータセットを拡張します。
3. サンプル名の横にあるオプションボタンを選択します。
4. [ダウンロード] を選択します。

サンプルがコンピュータにダウンロードされます。

ステップ 2: 製品をサブスクライブおよびアクセスする

AWS Data Exchange カタログで製品を見つけ、ニーズに合っていることを確認したら、その製品を購読して製品にアクセスできます。

有料製品をサブスクライブする場合は、AWS 請求書で料金が請求されます。権限を持つデータセットにアクセスできます。詳細については、「[でのデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

さまざまなタイプのデータセットを含む製品をサブスクライブする方法の詳細については、以下を参照してください。

- [ファイルベースのデータが含まれる製品をサブスクライブおよびアクセスするには](#)
- [API が含まれる製品をサブスクライブおよびアクセスする](#)
- [Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む製品をサブスクライブおよびアクセスする](#)

- [AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブしてアクセスする \(プレビュー\)](#)

製品のサブスクリプションとアクセス

以下のトピックで、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange のデータ製品をサブスクライブおよびアクセスするプロセスを説明します。

トピック

- [ファイルベースのデータが含まれる製品をサブスクライブおよびアクセスするには](#)
- [API が含まれる製品をサブスクライブおよびアクセスする](#)
- [Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む製品をサブスクライブおよびアクセスする](#)
- [AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブしてアクセスする \(プレビュー\)](#)
- [データディクショナリの表示とダウンロード](#)

Note

製品をサブスクライブすることにより、製品の使用には、価格情報やデータサブスクリプション契約 (DSA) などのプロバイダーのオファー条件が適用されることに同意したものとみなされます。

また、[AWS プライバシー通知](#) に従って、AWS が該当する場合、各販売者、再販者、または基盤となるプロバイダーと取引に関する情報 (支払い条件および製品使用状況の測定基準を含む) を共有する場合がありますことにも同意および承認します。AWS は、プロバイダーに代わって AWS アカウントを通じて請求書を発行し、支払いを回収します。お客様による AWS のサービスの使用には、AWS 顧客契約またはそのようなサービスの使用を管理する AWS とのその他の契約が引き続き適用されます。

ファイルベースのデータが含まれる製品をサブスクライブおよびアクセスするには

以下のトピックでは、AWS Data Exchange にファイルとして保存されているファイルベースのデータを含む製品をサブスクライブし、アクセスする完全なプロセスについて説明します。このプロセスを完了するには、AWS Data Exchange コンソールを使用してください。

サブスクリプション前に製品を評価する方法については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品の評価](#)」を参照してください。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [フステップ 1: ファイルベースのデータが含まれる製品のサブスクリプション](#)
- [ステップ 2: ファイルベースのデータが含まれる製品にアクセスする](#)

ファイルベースのデータが含まれる製品のサブスクリプションやアクセスを行う方法については、「[チュートリアル:AWS Data Exchange で AWS Data Exchange ハートビートをサブスクリプションする](#)」を参照してください。

フステップ 1: ファイルベースのデータが含まれる製品のサブスクリプション

有料製品をサブスクリプションする場合は、AWS 請求書で料金が請求されます。権限を持つすべてのデータセットにアクセスできます。詳細については、「[でのデータ製品のサブスクリプション AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

ファイルベースのデータが含まれる製品をサブスクリプションするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。
3. [結果の絞り込み] で、データセットタイプフィルタを使用して [ファイル (Amazon S3 オブジェクト)] を選択し、ファイルベースのデータを含む製品を検索します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

4. ファイル (Amazon S3 オブジェクト) を含むデータ製品を選択し、その製品の詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。パブリックオファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーが含まれます。製品に含まれているデータセットの名前と、それらを利用できる AWS リージョンを確認することができます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがユーザーのアカウントにカスタムオファー ([プライベートオファー](#)、または [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オffer](#)など) を発行した場合は、それらの詳細も表示されます。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. 希望する料金と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択してから、DSA を含むオファーの詳細を確認します。

Note

製品には、サブスクリプション検証が必要になるものもあります。詳細については、[「サブスクライバーのサブスクリプション検証」](#)を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

8. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されません。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

9. (オプション) エクスポートの設定-オプションでは、エクスポートするリビジョンを含むデータセットのチェックボックスを選択します。データセットを選択すると、最近発行されたリビジョンがエクスポート用に準備されます。
 - a. [ストレージ] オプションを選択して Amazon S3 バケットの場所を選択する、または [詳細] を選択して Amazon S3 キーの命名パターンを設定します。この選択で、リビジョンがエクスポートされる場所が決まります。キーパターンの使用に関する詳細については、[「リビジョンをエクスポートするときのキーパターン」](#)を参照してください。
 - b. 今後のリビジョンの自動エクスポートについては、自動リビジョンエクスポートをオンにするかオフにするかを選択します。
 - オン — すべての今後のリビジョンは常にエクスポートされます。
 - オフ — 最新リビジョンのエクスポートが 1 回だけエクスポートされます。

- c. [暗号化オプション] を選択して、[Amazon S3 の料金] を確認します。

Note

AWS Key Management Service (AWS KMS) 暗号化を使用してエクスポートすることを選択した場合は、選択した AWS KMS key で付与を作成および取り消すための正しい AWS Identity and Access Management (IAM) 権限がアカウントにあることを確認してください。これらの許可がない場合、自動エクスポートは失敗します。

- d. [エクスポート] を選択してデータを Amazon S3 にエクスポートします。後ほどエクスポートまたはダウンロードする場合は [スキップ] を選択します。サブスクライブ後にデータをエクスポートする方法の詳細については、「[\(オプション\) データのエクスポート](#)」を参照してください。

Note

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。サブスクリプションがアクティブになる前に [エクスポート] を選択すると、完了するまで待つように求められます。サブスクリプションがアクティブになると、エクスポートが開始されます。サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、データのエクスポートが行われなくなります。

ステップ 2: ファイルベースのデータが含まれる製品にアクセスする

製品を正常にサブスクライブすると、データ サブスクリプション契約 (DSA) の条件に従って製品データセットにアクセスできるようになります。

次のトピックでは、ファイルベースのデータが含まれる製品にアクセスする方法について説明します。

データセット、リビジョン、アセットの表示

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーション ウィンドウで、[サブスクリプション] を選択し、製品を選択します。

3. [権限を持つデータセット]の下に、製品の一部であるデータセットが表示されます。
4. データセットを選択します。
5. データセットの概要、自動エクスポートジョブの宛先 (Amazon S3 製品のみ)、リビジョン、およびデータセットの説明を表示します。

詳細については、「[内のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. リビジョンを選んでください。

リビジョンは、最新のものから古いものの順に一覧表示されます。

7. リビジョンの概要、アセット、実行されたジョブが表示されます。

ファイルベースのアセットのエクスポートに関する詳細については、「[サブスクリイバーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)」を参照してください。

(オプション) データのエクスポート

サブスクリプションがアクティブになった後は、エクスポートしたアセットを受け取るように Amazon S3 バケットを設定できます。

関連するアセットを Amazon S3 にエクスポートする、または署名付き URL を用いたジョブを使用できます。

新しいリビジョンを取得するなど、後でデータをエクスポートまたはダウンロードする場合は、[サブスクリイバーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#) を参照してください。

Important

データを Amazon S3 にエクスポートするときは、Amazon S3 のセキュリティ機能を検討することをお勧めします。一般的なガイドラインとベストプラクティスの詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 のセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

データのエクスポート方法に関する詳細については、「[アセットのエクスポート](#)」と「[リビジョンのエクスポート](#)」を参照してください。

API が含まれる製品をサブスクライブおよびアクセスする

以下のトピックで、AWS Data Exchange コンソールを使用して、API が含まれる AWS Data Exchange のデータ製品をサブスクライブおよびアクセスするための完全なプロセスを説明します。

サブスクリプション前に製品を評価する方法については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品の評価](#)」を参照してください。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: API が含まれる製品をサブスクライブする](#)
- [ステップ 2: API プロダクトにアクセスする](#)

API を含む製品のサブスクリプションとアクセスの練習については、[チュートリアル: AWS Data Exchange で API 用 AWS Data Exchange \(テスト製品\) をサブスクライブする](#) を参照してください。

ステップ 1: API が含まれる製品をサブスクライブする

有料製品をサブスクライブする場合は、AWS 請求書で料金が請求されます。すべての権限を持つデータセットにアクセスできます。詳細については、「[でのデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

プロバイダーは、API を含む製品に従量制費用を含める場合があります。プロバイダーが従量制コストを引き下げると、その値下げは直ちに有効になります。プロバイダーが従量制料金を引き上げた場合、お客様が既存の加入者である場合は、値上げが提出されてから 90 日後、または更新時 (どちらか早い方) に値上げが有効になります。価格変更が送信されると、既存のサブスクライバーにメールメッセージが送信されます。

Example

たとえば、プロバイダーが 5 月 10 日に従量制コストの値上げを提出したとします。既存のサブスクライバーには、価格変更に関する電子メールメッセージが届きます。値上げは 9 月 1 日に発効します。

API が含まれる製品をサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。

2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

3. 「結果の絞り込み」で、データセットタイプフィルターを使用して API を選択し、API を含む製品を検索します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

4. API が含まれる製品を選択して、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。パブリックオファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約、および返金ポリシーが含まれます。製品に含まれているデータセットの名前と、それらを利用できる AWS リージョンを確認することができます。「類似商品」で商品を選択すると、引き続き他の商品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがユーザーのアカウントにカスタムオファー ([プライベートオファー](#)、または [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)など) を発行した場合は、それらの詳細も表示されます。

- a. 「パブリックオファー」には、API の従量制料金 (含まれている場合) が表示されます。
 - b. (オプション) 従量制コスト計算ツールで、「従量制コストを選択」を選択し、ユニット数を入力すると費用の例が表示されます。
5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
 6. 希望の価格と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、DSA を含むオファーの詳細を確認します。

Note

製品には、サブスクリプション検証が必要になるものもあります。詳細については、「[サブスクライバーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

8. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、一覧表示されたデータセットが表示されません。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: API プロダクトにアクセスする

以下のトピックで、API データセットが含まれる製品のアクセス方法を詳しく説明します。

トピック

- [API の表示](#)
- [API 仕様のダウンロード](#)
- [API コールの実行 \(コンソール\)](#)
- [API コールを実行する \(AWS CLI\)](#)

API の表示

API を表示する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. アセットの概要を表示します。
7. [統合に関する注意事項] にあるガイドラインに従って API を呼び出します。

API 仕様のダウンロード

API 仕様をダウンロードする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. [OpenAPI 3.0 仕様] で、[API 仕様をダウンロード] を選択します。

お使いのローカルコンピュータに仕様がダウンロードされます。その後、SDK 生成のためにアセットをサードパーティーツールにエクスポートできます。

API コールの実行 (コンソール)

AWS Data Exchange コンソールで単一のエンドポイントを呼び出すことができます。

コンソールから API コールを実行する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. [統合に関する注意事項] で以下を実行します。
 - a. [コピー] を選択して [ベース URL] を使用します。
 - b. [コピー] を選択して [コード構造] を使用します。
 - c. 仕様ドキュメントに記載されている情報に従って API を呼び出します。

API コールを実行する (AWS CLI)

API コールを実行する (AWS CLI)

- `send-api-asset` コマンドを使用して API を呼び出します。

```
$ aws dataexchange send-api-asset \  
  --asset-id $ASSET_ID \  
  --data-set-id $DATA_SET_ID \  
  --revision-id $REVISION_ID \  
  --body "...\" \  
{  
  "headers": {  
    ...  
  },  
  "body": "..."  
}
```

Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする

サブスクライバーのための概要

Amazon Redshift データセットは、Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有に含まれるデータセットです。データ共有は、プロバイダーがデータ共有に追加するテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権を付与します。

データサブスクライバーは、Amazon Redshift データセットが含まれる製品を検索してサブスクライブできます。サブスクリプションが開始されると、データを抽出、変換、およびロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするための読み取り専用アクセス権を取得します。サブスクリプションの有効期限が切れると、製品のデータ共有へのアクセス権を失います。

以下の点を考慮します。

- サブスクリプションを開始してからデータ共有にアクセスできるようになるまで数分かかる場合があります。

以下のセクションでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange の Amazon Redshift データ共有データ製品のサブスクライバーになるための完全なプロセスを説明します。

サブスクライブ前に製品を評価する方法については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品の評価](#)」を参照してください。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする](#)
- [ステップ 2: Amazon Redshift のデータ共有にアクセスする](#)

Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクライブとアクセスの練習については、[チュートリアル: AWS Data Exchange で Worldwide Event Attendance \(テスト製品\) をサブスクライブする](#) を参照してください。

ステップ 1: Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする

有料製品をサブスクライブする場合は、AWS 請求書で料金が請求されます。製品に含まれるすべてのデータセットにアクセスできます。詳細については、「[でのデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

3. [結果の絞り込み] で [データセットタイプ] フィルターを使用して [Amazon Redshift] を選択すると、Amazon Redshift データシェアを含む製品を検索します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

4. 製品を選択し、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。パブリックオファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーが含まれます。製品に含まれているデータセットの名前と、それらを利用できる AWS リージョンを確認することができます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがユーザーのアカウントにカスタムオファー ([プライベートオファー](#)、または [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)など) を発行した場合は、それらの詳細も表示されます。

⚠ Important

クラスターのメンテナンスウィンドウの日付、時刻、および継続時間を確認するようにしてください。メンテナンスウィンドウ中は、データ共有にアクセスできません。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. [製品オファー]、[サブスクリプション条件]、オファーに含まれる [データセット]、および [サポート情報] を確認します。
7. サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

i Note

製品には、サブスクリプション検証が必要になるものもあります。詳細については、[「サブスクライバーのサブスクリプション検証」](#)を参照してください。

8. [サブスクライブ] を選択します。

i Note

有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

9. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されません。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: Amazon Redshift のデータ共有にアクセスする

製品のデータセットには、データサブスクリプション契約 (DSA) の条件に従った方法でアクセスできます。サブスクライバーとして、Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有が含まれ

る製品のサブスクリプションは、データ共有内のテーブル、ビュー、スキーマ、および関数に対する読み取り専用アクセス権を提供します。

サブスクリプションを使用すると、以下が可能になります。

- データを抽出、変換、またはロードすることなくクエリする。
- プロバイダーが更新すると同時に最新のプロバイダーデータにアクセスする。

詳細については、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[AWS Data Exchange データ共有の使用](#)」を参照してください。

Note

サブスクリプションの有効期限が切れると、製品のデータ共有へのアクセス権を失います。

Amazon Redshift データセットをサブスクライブする方法の詳細については、「[チュートリアル: AWS Data Exchange で Worldwide Event Attendance \(テスト製品\) をサブスクライブする](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスを含む製品をサブスクライブおよびアクセスする

サブスクライバーのための概要

Amazon S3 のAWS Data Exchange では、データサブスクライバーがデータプロバイダーの Amazon S3 バケットから直接サードパーティのデータファイルにアクセスできます。

データサブスクライバーは、Amazon S3 データセットの AWS Data Exchange を取得した後、Amazon S3 バケット内のプロバイダーのデータを直接使用して、Amazon Athena、SageMaker Feature Store、Amazon EMR などの AWS のサービスでデータ分析を開始できます。

以下の点を考慮します。

- プロバイダーは、提供されたデータをホストする Amazon S3 バケットで Amazon S3 の機能であるリクエスト支払いを有効にするオプションがあります。有効にすると、利用者は Amazon S3 バケットへのデータの読み取り、使用、転送、エクスポート、またはコピーに対して料金を支払います。詳細については、「Amazon S3 ユーザーガイド」の「[ストレージ転送と使用量のリクエスト支払いバケットの使用](#)」を参照してください。

- Amazon S3 データ製品の AWS Data Exchange をサブスクライブすると、AWS Data Exchange は自動的に Amazon S3 アクセスポイントをプロビジョニングし、そのリソースポリシーを更新して読み取り専用アクセスを許可します。Amazon S3 アクセスポイントは、Amazon S3 バケットへのデータ共有を簡素化する Amazon S3 の機能です。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 アクセスポイントを使用したデータアクセスの管理](#)」を参照してください。
- Amazon S3 アクセスポイントの Amazon リソースネーム (ARN) またはエイリアスを使用して共有データにアクセスするには、事前に IAM 権限を更新する必要があります。現在のロールとその関連ポリシーで、プロバイダーの Amazon S3 バケットと AWS Data Exchange が提供する Amazon S3 アクセスポイントへの GetObject および ListBucket 呼び出しが許可されていることを確認できます。

次のセクションでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon S3 サブスクライバーの AWS Data Exchange になる完全なプロセスについて説明します。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon S3 データアクセスを含む製品のサブスクライブ](#)
- [ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを含む製品にアクセスする](#)

ステップ 1: Amazon S3 データアクセスを含む製品のサブスクライブ

有料製品をサブスクライブする場合は、AWS 請求書で料金が請求されます。製品に含まれるすべてのデータセットにアクセスできます。詳細については、「[でのデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon S3 へのアクセスが含まれる製品をサブスクライブする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

3. [結果の絞り込み] で、データセットタイプフィルタを使用して [Amazon S3 へのアクセス] を選択し、Amazon S3 データへのアクセスを含む製品を検索します。


詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

4. 製品を選択し、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。パブリックオファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーが含まれます。製品に含まれているデータセットの名前と、それらを利用できる AWS リージョンを確認することができます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。


プロバイダーがユーザーのアカウントにカスタムオファー ([プライベートオファー](#)、または [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)など) を発行した場合は、それらの詳細も表示されます。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. [製品オファー]、[サブスクリプション条件]、オファーに含まれる [データセット]、および [サポート情報] を確認します。
7. サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

 Note

製品には、サブスクリプション検証が必要になるものもあります。詳細については、「[サブスクライバーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

8. [サブスクライブ] を選択します。

 Note

有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

9. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されません。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプション]を表示を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを含む製品にアクセスする

独自の Amazon S3 バケットを設定したり、データファイルを Amazon S3 バケットにコピーしたり、関連するストレージ料金を支払ったりすることなく、クエリを実行してデータをインプレースで分析できます。データプロバイダーが管理しているのと同じ Amazon S3 オブジェクトにアクセスして、利用可能な最新のデータを使用できます。

サブスクリプションを使用すると、以下が可能になります。

- Amazon S3 バケットを個別に設定したり、ファイルをコピーしたり、ストレージ料金を支払ったりすることなく、データを分析できます。
- プロバイダーが更新すると同時に最新のプロバイダーデータにアクセスする。

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「権利付与データ」ページで、製品を展開してデータセットを選択します。
4. データセットの概要を表示します。

Note

提供されたデータは、プロバイダーの Amazon S3 バケットに保存されます。このデータにアクセスする場合、プロバイダーが別途指定しない限り、リクエストの費用とプロバイダーの Amazon S3 バケットからダウンロードされたデータの費用を負担する必要があります。

5. 開始する前に、権限が付与された Amazon S3 データアクセスを使用するには、ロールに IAM アクセス権限が必要です。[データセットの概要] ページの [Amazon S3 データアクセス] タブで、[IAM 権限の検証] を選択して、ロールにデータにアクセスするための正しい権限があるかどうかを確認します。
6. 必要な IAM 権限がある場合は、表示される IAM ポリシープロンプトで [次へ] を選択します。必要な権限がない場合は、プロンプトに従って JSON ポリシーをユーザーまたはロールに埋め込みます。
7. 共有クエリを確認して、Amazon S3 バケット、またはプロバイダーが共有するプレフィックスとオブジェクトを確認してください。Amazon S3 アクセスポイント情報のデータア

- アクセス情報を確認して、プロバイダーがリクエスト支払いを有効にしているかどうかを判断します。
8. [共有 Amazon S3 ロケーションを参照] を選択すると、プロバイダーの Amazon S3 バケット、プレフィックス、共有オブジェクトを表示および確認できます。
 9. Amazon S3 バケット名を使用する場所ならどこでも アクセスポイント エイリアスを使用して、資格のあるデータにプログラムでアクセスできます。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[互換性のある Amazon S3 オペレーションでのアクセスポイントの使用](#)」を参照してください。
 10. (オプション) プロバイダーの AWS KMS key で暗号化されたデータを含む Amazon S3 データ アクセス データ セットへの権利を取得すると、サブスクライバー コンソールで KMS キー ARN を表示できます。AWS Data Exchange はキーに対する AWS KMS 許可を作成するので、暗号化されたデータにアクセスできるようになります。権限を取得した Amazon S3 アクセスポイントから暗号化されたデータを読み取るには、KMS キーの `kms:DecryptIAM` 権限を取得する必要があります。次の IAM ポリシーステートメントを選択できます。
 - a. ユーザーが任意の KMS キーを使用してデータを復号化または暗号化できるようにする IAM ポリシー。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "*"
      ]
    }
  ]
}
```

- b. サブスクライバーコンソールに表示される正確な KMS キー ARN をユーザーが指定できるようにする IAM ポリシー。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```

```
"Statement": [  
  {  
    "Effect": "Allow",  
    "Action": [  
      "kms:Decrypt"  
    ],  
    "Resource": [  
      "<KMS key Arn from subscriber's console>"  
    ]  
  }  
]
```

Note

AWS KMS 許可では、最終的な整合性を達成するための操作に最大 5 分かかることがあります。これが完了するまでは、Amazon S3 データアクセスデータセットにアクセスできない場合があります。詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[AWS KMSの許可](#)」を参照してください。

Amazon S3 データセットをサブスクライブする方法の詳細については、「[the section called “Amazon S3 データアクセスを含む製品をサブスクライブおよびアクセスする”](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブしてアクセスする (プレビュー)

サブスクライバーのための概要

AWS Lake Formation データセットは、AWS Lake Formation データ権限アセットが含まれるデータセットです。

データサブスクライバーは、AWS Lake Formation データセットが含まれる製品を検索してサブスクライブできます。AWS Lake Formation データセットの AWS Data Exchange の権利を取得する

と、AWS Lake Formation を使用して AWS アカウント内で、または AWS License Manager を使用して AWS 組織全体で、データへのクエリ、変換、およびアクセスの共有を行うことができます。

ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを含む製品のサブスクリプション

有料製品をサブスクライブする場合は、AWS 請求書で料金が請求されます。製品に含まれるすべてのデータセットにアクセスできます。詳細については、「[でのデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データセットが含まれる製品をサブスクライブする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

3. [結果の絞り込み] で、[データ セットタイプ] フィルターを使用し、[AWS Lake Formation] を選択して、AWS Lake Formation データ セットを含む製品を検索します。
4. 製品を選択し、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。パブリックオファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーが含まれます。製品に含まれているデータセットの名前と、それらを利用できる AWS リージョンを確認することができます。[類似商品] で商品を選択することで、他の商品詳細ページを引き続き閲覧することもできます。

プロバイダーがユーザーのアカウントにカスタムオファー ([プライベートオファー](#)、または [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)など) を発行した場合は、それらの詳細も表示されます。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. [製品オファー]、[サブスクリプション条件]、オファーに含まれる [データセット]、および [サポート情報] を確認します。
7. サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

Note

製品には、サブスクリプション検証が必要になるものもあります。詳細については、「[サブスクライバーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

8. [サブスクライブ] を選択します。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。
9. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されず。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: AWS Lake Formation の AWS Data Exchange データ共有へのアクセス

AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブすると、Amazon Athena などの Lake Formation 互換のクエリエンジンを使用してデータをクエリできます。

サブスクライブが完了したら、以下を実行する必要があります。

1. 製品をサブスクライブしてから 12 時間以内に AWS Resource Access Manager(AWS RAM) の共有を承認してください。AWS RAM 共有は、サブスクリプションページまたは AWS Data Exchange コンソールの AWS Lake Formation データ権限データセットの資格のあるデータページから受け入れることができます。AWS RAM 共有を受け入れる必要があるのは、プロバイダーごとに 1 回だけです。AWS RAM からのリソース共有への招待を受け入れる方法の詳細については、「[AWS RAM からのリソース共有への招待を受け入れる](#)」を参照してください。
2. AWS Lake Formation に移動し、新しい共有リソースからリソースリンクを作成します。
3. Athena または別の AWS Lake Formation 互換クエリ エンジンに移動して、データをクエリします。

データディクショナリの表示とダウンロード

プロバイダーはすべての製品にデータディクショナリを添付できます。次の手順では、データディクショナリを表示しダウンロードする方法について説明します。

データディクショナリおよびサンプルの詳細については、「[データディクショナリ、サンプル](#)」を参照してください。

データディクショナリを表示してダウンロードするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。

3. 「権限を持つデータ」ページで、製品を展開してデータセットを選択します。
4. データセットの詳細ページで、[データディクショナリ] タブを選択します。
 - データディクショナリは [データディクショナリ] タブに表示されます。
 - [ダウンロード]を選択してデータディクショナリをダウンロードし、ファイルをコンピューターに保存します。

サブスクライバーのサブスクリプション検証

コンプライアンス、または規制上の理由などのさまざまな理由のために、一部のデータプロバイダーは、サブスクリプション検証を使用してその製品へのアクセスを制限することを選択する場合があります。これらのデータ製品をサブスクライブするときは、身元に関する追加情報と、想定されているユースケースに関する追加情報を提供する必要があります。プロバイダーは、この情報を確認してからサブスクリプションを承認します。一般提供されている製品で個人を特定できるデータが含まれているものには、サブスクリプション検証が必要になります。

トピック

- [サブスクリプションリクエストの完了](#)
- [保留中のサブスクリプションリクエストを確認する](#)
- [E メール通知](#)

サブスクリプションリクエストの完了

サブスクリプション検証が必要となる製品の場合、製品ページで [サブスクライブを続行] を選択すると、サブスクリプションリクエストページが表示されます。この製品をサブスクリプションする前に、リクエストを完了する必要があります。

サブスクリプションリクエストを完了する

1. 「サブスクリプションリクエストの完了」ページで、製品オファーを確認して選択します (複数のオファーがある場合)。
2. サブスクリプション条件、含まれているデータセット、サポート情報、返金ポリシーを確認してください。
3. オファーの有効期限が切れたときに自動的に更新するかどうかを選択します。
4. サブスクリプションリクエストフォームに次の情報を入力します。

- AWS アカウント ID (自動的に入力されます)
 - 会社名
 - 氏名
 - E メールアドレス
 - データ製品に対して想定されているユースケースと、プロバイダーがサブスクリプションリクエストを審査する時に役立つと思われるその他コメント。
5. [サブスクリプションリクエストをプロバイダーに送信] を選択します。

リクエストを送信すると、プロバイダーが最長で 45 日以内にリクエストを承認または拒否します。

保留中のサブスクリプションリクエストを確認する

保留中のサブスクリプションリクエストを確認するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. [サブスクリプション] を選択します。
3. [サブスクリプションリクエスト] を選択します。
4. 保留中のサブスクリプションリクエストのステータスを確認する

各サブスクリプションリクエストは、その ID で一意に識別されます。ID は、プロバイダーとサブスクライバーの両方に表示されます。サブスクリプションリクエスト ID は、プロバイダーとの通信でリクエストを特定するために使用できます。

プロバイダーがリクエストを承認すると、そのサブスクリプションが [サブスクリプション] ページに表示されます。

Note

保留中のサブスクリプションリクエストは、有効期限が切れている、または既に処理済みである場合を除き、いつでもキャンセルできます。

E メール通知

リクエストが承認もしくは拒否された、または有効期限が切れたときは、AWS アカウントの E メールアドレスに E メール通知が送信されます。サブスクリプションリクエストのステータス変更のほとんどは E メールで通知されますが、これらの Eメールの送信はベストエフォートベースで行われます。

Note

リクエスト者自身が開始したサブスクリプションリクエストのステータス変更 (サブスクリプションのキャンセルなど) に関する E メール通知は送信されません。

組織内でのライセンスサブスクリプションの共有

AWS Data Exchange 製品をサブスクライブするときは、それらの製品を使用するためのライセンスを付与する契約が作成されます。AWS アカウントが組織のメンバーである場合は、AWS Data Exchange 製品のライセンスをその組織内の他のアカウントと共有できます。

Note

AWS Organizations の詳細については、「[AWS Organizations ユーザーガイド](#)」を参照してください。

以下のトピックで、アカウント間でライセンスを共有するプロセスの概要を説明します。

トピック

- [ライセンス共有の前提条件](#)
- [ライセンスの表示](#)
- [ライセンスの共有](#)

ライセンス共有の前提条件

データ製品のライセンスを共有する前に、まず組織のライセンス共有をセットアップする必要があります。以下のタスクを完了して、組織のライセンス共有をセットアップしてください。

- ユーザーに代わってライセンスを管理する許可を AWS Marketplace に付与して、ユーザーがライセンスを購入または共有するときに関連するライセンス供与を作成できるようにします。詳細については、「AWS Marketplace 購入者ガイド」の「[AWS Marketplace 向けのサービスリンクロール](#)」を参照してください。
- 初回使用のために AWS License Manager をセットアップします。詳細については、「AWS License Manager ユーザーガイド」の「[AWS License Manager の使用開始](#)」を参照してください。

ライセンスの表示

以下のトピックで、ライセンスを表示するプロセスの概要を説明します。

トピック

- [すべてのライセンスの表示](#)
- [単一のライセンスの表示](#)

すべてのライセンスの表示

購入した AWS Data Exchange 製品のすべてのライセンスを表示するには、AWS License Manager コンソールを使用できます。

サブスクリブした製品のすべてのライセンスを表示する

1. [AWS マネジメントコンソール](#)にサインインします。
2. [AWS License Manager コンソール](#)を開きます。
3. 左側のナビゲーションペインで [Granted licenses] (付与されたライセンス) を選択します。
4. サブスクリブした製品のすべてのライセンスを表示します。

単一のライセンスの表示

購入した AWS Data Exchange 製品の単一のライセンスを表示するには、AWS Data Exchange コンソールを使用できます。

単一のサブスクリプションのライセンスを表示する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)にサインインします。

2. [My subscriptions] (マイサブスクリプション) で [Subscription] (サブスクリプション) を選択します。
3. サブスクリプションを選択します。
4. [License] (ライセンス) の下にあるリンクを選択します。
5. [License detail] (ライセンスの詳細) ページで詳細を確認します。

ライセンスの共有

AWS License Manager を使用することで、ライセンスを管理し、組織内の他のアカウントとライセンスを共有することができます。

AWS マネージドライセンスとの License Manager の使用に関する詳細については、「AWS License Manager ユーザーガイド」の「[付与されたライセンス](#)」と「[販売者発行のライセンス](#)」を参照してください。

Bring Your Own Subscription (BYOS) オフナー

サブスクライバーには、既存のデータサブスクリプションを AWS Data Exchange に移行することが推奨されます。Bring Your Own Subscription (BYOS、サブスクリプションの持ち込み使用) 機能は、追加のコストなしで参加データプロバイダーとの既存のサブスクリプションを移行して満了することを可能にします。

BYOS オフナーでは、プロバイダーとサブスクライバー間の請求関係が継続されます。BYOS オフナーはフルフィルメント料金の対象にはなりません。サブスクライバーは、フルフィルメント手数料なしでサブスクリプションの AWS Marketplace 請求書を受け取ります。

サブスクリプションのライフサイクルは AWS Data Exchange 外で開始されるため、BYOS を使用した既存のサブスクリプションの AWS Data Exchange への移行ワークフローには、プロバイダーとサブスクライバ間のコラボレーションが必要です。

Important

BYOS オフナーでは、AWS でこの製品が利用可能になる前のサブスクリプションを移行します。AWS は、既存のサブスクリプション契約で BYOS オフナーを確認する場合があります。AWS が BYOS オフナーを確認できない場合は、オフナーとエンタイトルメントが予告なく取り消されることがあります。

AWS Data Exchange で BYOS オファーを作成または承諾する前に、プロバイダーとサブスクリイバが共同で以下の手順を実行する必要があります。

前提条件

1. プロバイダーとサブスクリイバが、BYOS AWS Data Exchange ソリューションの実装について連絡を取り合う。
2. サブスクリイバが、AWS Data Exchange のデータ製品をサブスクライブするために使用する AWS アカウント ID を提供する。

サブスクリイバは、BYOS オファーを以下のように承諾します。

BYOS オファーを承諾する

1. AWS Data Exchange コンソールにサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインの [データ製品の検出] で [製品オファー] を選択します。
3. サブスクライブするオファーを選択します。ページの上部にあるフィルターを使用して、[すべての製品]、[プライベート製品]、および [パブリック製品] のいずれかを選択できます。
4. [サブスクリプションを続行する] を選択します。
5. オファーの条件、データサブスクリプション契約、および含まれているデータセットを確認します。
6. オファーの条件に同意する場合は、確認内容を見直して同意し、[サブスクライブ] を選択します。

プライベート製品とオファー

データプロバイダーは、一般向けに提供されていない製品をユーザーに提供したり、一般公開されているオファー規約とは異なる条件で製品を提供したりすることができます。プライベートオファーは、料金、期間、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、または払い戻しポリシーなどの面でパブリックオファーとは異なるものにすることができます。

Note


Bring Your Own Subscription (BYOS) オファーとは異なり、プライベートオファーは、AWS Data Exchange で製品が利用可能になる前からある既存のサブスクリプションに基づいている必要はありません。

プロバイダーは、ユーザーの AWS アカウント ID 向けにカスタムオファーを作成して、オファーをそのユーザー専用にする必要があります。プライベートオファーが提供されていない場合は、パブリックオファーの詳細ページにある連絡先情報を使用してプロバイダーに連絡することで、プライベートオファーをリクエストできます。

サブスクライバーは、以下のようにプライベートオファーを受諾できます。

プライベートオファーを受諾する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインの [データ製品の検出] で [製品オファー] を選択します。
3. リスト内で、探している製品オファーを検索します。ページの上で [All products] (すべての製品)、[Private products] (プライベート製品)、および [Public products] (パブリック製品) のいずれかを選択して、フィルタリングできます。
4. サブスクライブするオファーを選択します。
 - a. 「カスタムオファー」で、API の従量制料金 (含まれている場合) を表示します。
 - b. (オプション) 従量制コスト計算ツールで [従量制コストを選択] を選択し、コストの例を表示するユニット数を入力します。
5. [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. オファーの条件、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、および含まれているデータセットを確認します。

 Note

複数支払いスケジュールが設定されたプライベートオファーを受諾するには、請求書払いを使用する必要があります。請求書払いに切り替えたい場合は、[サポートチケットを作成](#)できます。

複数支払いスケジュールが設定されたプライベートオファーは、自動更新の対象にはなりません。

7. オファーの条件に同意する場合は、確認内容を見直して同意し、[Subscribe] (サブスクライブ) を選択します。

Note

アカウントには、支払いスケジュールで指定された日付に従って自動的に請求が行われます。

サブスクリプションの管理

以下のトピックでは、AWS Data Exchange でサブスクリプションを管理する方法について説明します。

トピック

- [サブスクリプションの表示](#)
- [サブスクリプションの自動更新を有効にする、無効にする](#)
- [製品のサブスクリプションを解除する](#)

サブスクリプションの表示

スクリプションを表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左のナビゲーションペインで、[サブスクリプション] を選択します。
3. サブスクリプションのリストを表示します。

サブスクリプションの自動更新を有効にする、無効にする

サブスクリプションの自動更新をオンまたはオフにするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーション ウィンドウで、[サブスクリプション] を選択し、製品を選択します。
3. 商品詳細ページの [更新条件] で、[自動更新] をオンにするか、[自動更新] をオフにします。

更新設定を更新したことを確認する成功メッセージが表示されます。

製品のサブスクリプションを解除する

Note

サブスクリプションを直ちに削除する必要がある場合は、[AWS Support Center Console](#) を使用して AWS Data Exchange カスタマー サポートにお問い合わせください。

製品のサブスクリプションを解除する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [サブスクリプション] を選択します。
3. 解除するサブスクリプションを選択します。
4. [更新条件] で、[自動更新有効] オプションをオフにします。
5. その後はデータをエクスポートせず、サブスクリプションの有効期限が切れるまでそのままにしておきます。

Note

有料製品については、プロバイダーの返金ポリシーを参照してください。例外については、プロバイダーにお問い合わせください。

チュートリアル:AWS Data Exchange で AWS Data Exchange ハートビートをサブスクライブする

AWS Data Exchange ハートビート (テスト製品) は、サブスクライバーが AWS Data Exchange 製品サブスクリプションの操作方法を理解するために使用できる無料の製品です。これは、テスト目的で使用したり、AWS Data Exchange API と概念に慣れるために使用したりすることができます。

AWS Data Exchange ハートビート には、ハートビート という名前の単一のデータ セットが含まれています。このデータセットには、約 15 分ごとに新しいリビジョンが発行されます。

リビジョンのコンテンツ例

新しいリビジョンにはそれぞれ 2 つのアセットが含まれています。

- エポックアセット
- マニフェストアセット

エポックアセット

各ハートビートリビジョンには、単一の配列が含まれる JSON ファイル Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) オブジェクトが含まれています。配列の名前は `TimestampsSinceLastRevision` で、その値は最後のリビジョンから経過した各 UNIX エポック秒のリストです。

アセットの名前の形態は `Epoch{start}-{end}.json` で、`{start}` と `{end}` はリビジョンが適用される期間に対応するエポック秒を表します。

マニフェストアセット

各ハートビート リビジョンには、リビジョンに関するメタデータと、エポックアセット JSON ファイルのスキーマが含まれる JSON ファイル S3 オブジェクトが含まれています。アセットの名前の形態は `Manifest{start}-{end}.json` で、`{start}` と `{end}` はリビジョンが適用される期間に対応するエポック秒を表します。以下は、マニフェストファイルの内容の例です。

```
{
  "manifestSchemaVersion": "1.0",
  "schema": "{
    \"type\": \"object\",
    \"properties\": {
      \"TimestampsSinceLastRevision\": {
        \"type\": \"array\",
        \"description\": \"List of epoch timestamps in seconds.\",
        \"items\": {
          \"type\": \"number\",
          \"description\": \"Epoch timestamp in seconds.\"
        }
      }
    }
  }",
  "startTimestamp": 1554898111,
  "endTimestamp": 1554905311,
  "numberOfTimestamps": 7201
}
```

AWS Data Exchange の AWS Data Exchange ハートビートにサブスクライブする

以下は、AWS Data Exchange カタログを参照してハートビートを見つけ、AWS Data Exchange サブスクライブする方法を説明する手順です。

AWS Data Exchangeハートビートを見つけてサブスクライブする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange Heartbeat** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. AWS Data Exchangeハートビート 製品を選択して、その詳細ページを表示します。
 - a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品概要セクションまでスクロールして、データディクショナリの下にあるデータディクショナリを確認してください。
 - b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、「データディクショナリ」の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。
 - c. (オプション) サンプルをダウンロードするには、サンプル名 (Heartbeat manifest sample.json) の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。
5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. 希望する料金と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択してから、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

AWS Data Exchange ハートビート にサブスクリプション検証は必要ありませんが、必要となる製品もあります。詳細については、「[サブスクライバーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

AWS Data Exchangeハートビート は無料製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

8. [最初のエクスポートを設定] ページで、エクスポートするリビジョンが含まれるデータセットのチェックボックスをオンにします。データセットを選択すると、最近発行されたリビジョンがエクスポート用に準備されます。
9. Amazon S3 バケットの場所を選択する、または Amazon S3 キーの命名パターンを設定します。これにより、リビジョンがエクスポートされる場所が決まります。キーパターンの使用に関する詳細については、「[リビジョンをエクスポートするときのキーパターン](#)」を参照してください。
10. [Export] (エクスポート) を選択してデータを Amazon S3 にエクスポートします。後ほどエクスポートまたはダウンロードする場合は [Skip] (スキップ) を選択します。

Note

[Subscribe] (サブスクライブ) を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。サブスクリプションがアクティブになる前に [Export] (エクスポート) を選択すると、完了するまで待つように求められます。サブスクリプションがアクティブになると、エクスポートが開始されます。サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、データのエクスポートが行われなくなります。

チュートリアル: AWS Data Exchange で API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) をサブスクライブする

API用 AWS Data Exchange (テスト製品) は、サブスクライバーが API データ セットを含む AWS Data Exchange 製品と対話する方法を理解するために利用できる無料の製品です。この製品をテスト目的で使用したり、API ベースのデータを取得するためにプロバイダーに API 呼び出しを行う方法を学習したりできます。


API用 AWS Data Exchange (テスト製品) には、米国東部 (バージニア北部) リージョンにある API用 AWS Data Exchange (テスト製品) という名前の API データ セットが含まれています。

AWS Data Exchange で API用 AWS Data Exchange (テスト製品) をサブスクライブする

以下は、AWS Data Exchange カタログを参照して API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) を検出し、サブスクライブする方法を説明する手順です。


API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) を検索して購読するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange for APIs** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) を選択し、その詳細ページを表示します。
 - (オプション) サンプルをダウンロードするには、「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、サンプル名 (ADX for API sample.json) の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。
5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. 製品オファーを選択します。

 Note

API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) は無料製品です。

7. サブスクリプション条件、データセット、サポート情報を確認してください。
8. サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

 Note

API 用 AWS Data Exchange(テスト製品) にサブスクリプション検証は必要ありませんが、必要となる製品もあります。詳細については、「[サブスクライバーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

9. [サブスクライブ] を選択します。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) に使用

API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) は以下の方法で操作できます。

トピック

- [API の表示](#)
- [API 仕様のダウンロード](#)
- [API コールを実行する](#)

API の表示

API を表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「API 用 AWS Data Exchange (テスト製品)」というタイトルの製品を選択し、次に「API 用 AWS Data Exchange」データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. アセットの概要を表示します。
7. [統合に関する注意事項] にあるガイドラインに従って API を呼び出します。

API 仕様のダウンロード

API 仕様をダウンロードする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) というタイトルの製品を選択し、次に API 用 AWS Data Exchange データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. [OpenAPI 3.0 仕様] で、[API 仕様をダウンロード] を選択します。

お使いのローカルコンピュータに仕様がダウンロードされます。その後、SDK 生成のためにアセットをサードパーティーツールにエクスポートできます。

API コールを実行する

AWS Data Exchange コンソールで単一のエンドポイントを呼び出すことができます。

コンソールから API コールを実行する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「API 用 AWS Data Exchange (テスト製品)」というタイトルの製品を選択し、次に「API 用 AWS Data Exchange」データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。

API リクエストを構成するためのサンプルコード構造と OpenAPI 3.0 仕様が表示され、これを AWS Command Line Interface で使用して API を呼び出すことができます。

6. 「統合メモ」で、「コピー」を選択してコード構造をコピーし、AWS CLI に貼り付けます。
7. 仕様書に記載されている情報を使用して、サンプル値を必要なパラメータのキーと値のペアに置き換えます。

API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) の API リクエストの例を以下に示します。

```
aws dataexchange send-api-asset \  
  --data-set-id 8d494cba5e4720e5f6072e280daf70a8 \  
  --revision-id b655d5be3da04fcbdca21a5a2932d789 \  
  --asset-id 8550cfab16b444a794402f2c3f11eae1 \  
  --method POST \  
  --path "someresource" \  
  --query-string-parameters 'param1=value1,param2=value2' \  
  --request-headers 'header=header_value' \  
  --body "{\"body_param\":\"body_param_value\"}"
```

チュートリアル: AWS Data Exchange で Worldwide Event Attendance (テスト製品) をサブスクライブする

Worldwide Event Attendance (テスト製品) は、Amazon Redshift データセットを含む AWS Data Exchange 製品をサブスクライブして操作する方法をサブスクライバーが理解するのに役立つ無料の

製品です。この製品はテスト目的で使用でき、アプリケーションのクエリ、分析、構築の方法を数分で習得できます。

Worldwide Event Attendance (テスト製品) には、米国東部 (バージニア北部) AWS リージョン にある Worldwide Event Data (テストデータ) という名前の Amazon Redshift データセットが含まれています。

AWS Data Exchange コンソールを使用して、Worldwide Event Attendance (テスト製品) を検索して登録します。その後、Amazon Redshift コンソールまたは SQL コマンドのいずれかを使用してデータ共有をクエリできます。

AWS Data Exchange での Worldwide Event Attendance (テスト製品) へのサブスクリプション


以下は、AWS Data Exchange カタログを参照して、ワールドワイドイベントアテンダンス (テスト製品) を見つけ、サブスクライブする方法を説明する手順です。

Worldwide Event Attendance (テスト製品) を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **Worldwide Event Attendance (Test Product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. Worldwide Event Attendance (テスト製品) を選択すると、詳細ページが表示されます。
 - a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品概要セクションまでスクロールして、「データディクショナリ」の下にあるデータディクショナリを確認してください。
 - b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、「データディクショナリ」の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。
 - c. (オプション) サンプルをプレビューするには、サンプル名の横にあるオプションボタン (Worldwide Event Attendance Sample.csv) を選択し、「サンプルをプレビュー (CSV のみ)」を選択します。
 - d. (オプション) サンプルをダウンロードするには、サンプル名の横にあるオプションボタン (Worldwide Event Attendance Sample.csv) を選択し、「ダウンロード」を選択します。


サンプルをプレビューする場合は、サンプルプレビューダイアログボックスの「ダウンロード」を選択することもできます。

5. 右上隅にある [サブスクライブを続行] を選択します。
6. 希望する料金と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択してから、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

 Note

Worldwide Event Attendance (テスト製品) にサブスクリプション検証は必要ありませんが、必要となる製品もあります。詳細については、「[サブスクライバーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

 Note

Worldwide Event Attendance (テスト製品) は無料製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

Amazon Redshift クラスター (コンソール) による Worldwide Event Attendance (テスト製品) データのクエリ

以下の手順では、Amazon Redshift コンソールを使用してデータ共有をセットアップし、クエリを実行する方法が説明されています。

Amazon Redshift (コンソール) で Worldwide Event Attendance (テスト製品) データをクエリするには

1. Amazon Redshift コンソールを開いてサインインします。
2. [クラスター] を選択し、既存の RA3 クラスターを選択します。
3. データ共有タブを選択します。
4. データベースの作成元となるデータ共有を選択します。
5. [AWS Data Exchange データシェアのサブスクリプション] で、[データシェアからデータベースを作成] を選択します。

6. [データ共有からデータベースを作成] に新しいデータベースの [データベース名] を入力し、[作成] を選択します。
7. ナビゲーションペインの Marketplace アイコンを選択し、クエリエディターを開きます。
8. 「リソース」で、データベースとスキーマを選択します。
9. 次の SQL クエリを実行します。

```
select * from database.schema.table
```

Amazon Redshift (SQL) でのWorldwide Event Attendance (テスト製品) データのクエリ

次の手順は、SQL コマンドを使用してデータ共有をセットアップし、クエリする方法を示しています。

Amazon Redshift (SQL) でWorldwide Event Attendance (テスト製品) データをクエリするには

1. データ共有を見つけるには、以下のコマンドを実行します。

```
SHOW DATASHARES [ LIKE 'namepattern' ]
```

このコマンドは、プロバイダーのaccount_idおよびnamespaceに加えて、Worldwide Event Attendance (テスト製品) のデータ共有を含むすべてのデータ共有を一覧表示します。詳細については、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[データベースを表示する](#)」を参照してください。

2. 次のコマンドを実行して、データ共有からデータベースを作成します。

```
CREATE DATABASE database_name  
  
FROM DATASHARE datashare_name OF ACCOUNT account_id NAMESPACE  
namespace_guid
```

詳細については、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[データベースを作成する](#)」を参照してください。

3. 次の SQL クエリを実行します。

```
select * from database.schema.table
```


チュートリアル:(プレビュー) AWS Data Exchange で AWS Lake Formation の AWS Data Exchange (テスト製品) をサブスクライブする

AWS Lake Formation の AWS Data Exchange (テスト製品) は、サブスクライバーが AWS Lake Formation データ セットを含む AWS Data Exchange 製品をサブスクライブして操作する方法を理解するのに役立つ無料の製品です。この製品をテスト目的で使用して、データを社内で数分でクエリ、分析、共有する方法を学ぶことができます。

(プレビュー) AWS Data Exchange で AWS Lake Formation (テスト製品) AWS Data Exchange をサブスクライブする

以下は、AWS Data Exchange カタログを参照して Lake Formation (テスト製品) を見つけ、AWS Data Exchange をサブスクライブする方法を説明する手順です。(プレビュー)

Lake Formation の AWS Data Exchange (プレビュー) をサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange for Lake Formation (Test product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. 「Lake Formation の AWS Data Exchange (テスト製品)」を選択すると、詳細ページが表示されます。
 - a. (オプション) データ ディクショナリを表示するには、製品の 概要 セクションまで下にスクロールして、データディクショナリ の下にあるデータディクショナリを表示します。
 - b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、「データディクショナリ」の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。
 - c. (オプション) サンプルをプレビューするには、サンプル名の横にあるオプションボタン (Lake Formation の AWS Data Exchange(テスト製品)) を選択し、次に [サンプルをプレビュー (CSV のみ)] を選択します。
 - d. (オプション) サンプルをダウンロードするには、サンプル名の横にあるオプションボタン (Lake Formation の AWS Data Exchange (テスト製品)) を選択し、[ダウンロード] を選択します。

5. サンプルをプレビューする場合は、サンプルプレビューダイアログボックスの「ダウンロード」を選択することもできます。
6. 右上隅にある [サブスクリプションを続行] を選択します。
7. 希望の価格と期間の組み合わせを選択し、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

Lake Formation のAWS Data Exchange (テスト製品) の場合、サブスクリプション検証は必要ありませんが、必要となる製品もあります。詳細については、「[サブスクライバーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

8. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

Lake Formation の AWS Data Exchange (テスト製品) は無料の製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

Lake Formation の AWS Data Exchange (テスト製品) のセットアップとクエリ(プレビュー)

以下は、AWS Management Console を使用して Lake Formation データ権限セット (プレビュー) を設定してクエリする方法を説明する手順です。

Lake Formation の AWS Data Exchange (テスト製品) データセットでのクエリを有効にするには(プレビュー)

1. AWS Data Exchange コンソール を開いてサインインします。

2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 製品一覧から、「Lake Formation の AWS Data Exchange (テスト製品) (プレビュー)」を選択します。
4. [承認] AWS RAM を選択して共有を承認します。

Note

データ製品に登録してから 12 時間以内に AWS RAM 共有を承認する必要があります。AWS RAM 共有の招待の有効期限が切れた場合は、[招待をリクエスト] を選択し、新しい共有が送信されるまで数営業日かかります。AWS RAM 共有を受け入れる必要があるのは、Lake Formation データ セットのライセンスを取得するプロバイダーごとに 1 回だけです。

5. [Lake Formation コンソール](#) を開く
6. Lake Formation CREATE_TABLE または CREATE_DATABASE 権限と、glue:CreateTable または glue:CreateDatabase AWS Identity and Access Management (IAM) 権限を持つプリンシパルとしてサインインします。
7. ナビゲーションペインで [テーブル] を選択してから、[テーブルを作成] を選択します。
8. [テーブルを作成] ページで [リソースリンク] を選択し、以下の情報を入力します。
 - リソースリンク名 - テーブル名と同じルールに従う名前を入力します。名前は、ターゲット共有テーブルの名前と同じにすることができます。
 - データベース - ローカル データ カタログ内のデータベースにはリソース リンクが含まれている必要があります。
 - 共有テーブル — Lake Formation (テスト製品) の AWS Data Exchange を通じて共有されるテーブルの 1 つを選択します。その製品を通じて共有されるテーブル名はすべて adxlf_test で始まるか、ローカル (所有) テーブル名または共有テーブル名を入力します。

このリストには、アカウントと共有されているすべてのテーブルが含まれています。データベースと所有者のアカウント ID が各テーブルにリストされます。アカウントと共有されていることが分かっているテーブルが表示されない場合は、以下を確認してください。

- データレイク管理者ではない場合は、テーブルに対する Lake Formation 権限が付与されていることを管理者に確認してください。
- あなたがデータレイク管理者で、アカウントが付与アカウントと同じ AWS 組織ではない場合は、テーブルの AWS Resource Access Manager (AWS RAM) リソース共有の招待を承

諾したことを確認してください。詳細については、「[AWS RAM からのリソース共有招待の承諾](#)」を参照してください。

- 共有テーブルのデータベース - リストから共有テーブルを選択した場合、このフィールドには外部アカウントにある共有テーブルのデータベースが入力されます。共有テーブルを選択しなかった場合は、ローカルテーブルへのリソースリンクのローカルデータベースを入力するか、外部アカウントの共有テーブルのデータベースを入力します。
- 共有テーブル所有者 - リストから共有テーブルを選択した場合、このフィールドには共有テーブルの所有者アカウント ID が入力されます。共有テーブルを選択しなかった場合、AWS アカウントローカルテーブルへのリソースリンクの ID、またはテーブルを共有した AWS アカウントの ID を入力します。

Amazon Athena (コンソール) を使用して Lake Formation の AWS Data Exchange (テスト製品) データセット (プレビュー) をクエリするには

1. Amazon Athena のアクセス権限を持つロールを使用して [Amazon Athena コンソール](#) にサインインします。
2. Amazon Athena クエリエディタで、以前に作成したリソースリンクを選択します。
3. source_data の横にある追加のメニューオプションアイコンを選択し、テーブルをプレビュー) を選択します。
4. [クエリを実行] を選択します。

AWS Data Exchange Lake Formation の (テスト製品) データセットのクエリを可能にするには (プレビュー) (AWS CLI)

1. AWS アカウント で使用可能なすべての招待状の一覧を表示するには、次のコマンドを入力します。AWS CLI query パラメータを使用すると、出力を AWS Data Exchange から共有された招待状のみに制限できます。

```
$ aws ram get-resource-share-invitations  
  
--region us-east-1  
  
--query 'resourceShareInvitations[?  
  
senderAccountId==147854383891]'
```

2. Lake Formation の AWS Data Exchange データセットへの招待状を検索してください。次に、次のコマンドで承諾できるように出力内の resourceShareInvitationArn を書き留めます。

```
$ aws ram accept-resource-share-invitation --region us-east-1 --  
resource-share-invitation-arn [resourceShareInvitationArn]
```

成功すると、ステータスが 保留中 から 承諾済み に変更されたことが応答に示されます。

3. 次のコマンドを使用して、Lake Formation のAWS Data Exchange データセットを通じて共有されているテーブルの1つへのリソースリンクを作成します。

```
aws glue create-table --database-name  
[local_database_to_store_resource_link] --table-  
input '{"Name":"resource_link_name","TargetTable":  
{"CatalogId":"[account_owning_original_table]","DatabaseName":"[shared_db_in_
```

Note

リソースリンクを作成するには、Lake Formation CREATE_TABLE または CREATE_DATABASE 権限と、glue:CreateTable または glue>CreateDatabase IAM 権限を使用します。

チュートリアル:Amazon S3 の AWS Data Exchange をサブスクライブする (テスト製品)

Amazon S3 の AWS Data Exchange (テスト製品) は、サブスクライバーが AWS Data Exchange 製品をサブスクライブして操作する方法を理解するのに役立つ製品です。このチュートリアルでは、製品に Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) のデータアクセスデータセットが含まれています。この製品をテスト目的で使用したり、データプロバイダーの Amazon S3 バケットから直接データをクエリして分析する方法を学習したりできます。

独自の Amazon S3 バケットを設定したり、データファイルを Amazon S3 バケットにコピーしたり、関連するストレージ料金を支払ったりすることなく、クエリを実行してデータをインプレースで分析できます。

Amazon S3 (テスト製品) の AWS Data Exchange のサブスクリプション

以下は、AWS Data Exchange カタログを参照して Amazon S3 の AWS Data Exchange (テスト製品) を見つけ、サブスクライブする方法を説明する手順です。

Amazon S3 の AWS Data Exchange (テスト製品) を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange for Amazon S3 (Test Product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. Amazon S3 の AWS Data Exchange (テスト製品) を選択すると、詳細ページが表示されます。
 - a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品の「概要」セクションまでスクロールして、「データディクショナリ」の下にあるデータディクショナリを確認してください。
 - b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、「データディクショナリ」の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。
 - c. (オプション) サンプルをプレビューするには、「ブロックチェーンランザクション (テストデータ)」のサンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「サンプルをプレビュー (CSV のみ)」を選択します。
 - d. (オプション) サンプルをダウンロードするには、「ブロックチェーンランザクション (テストデータ)」のサンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。

サンプルをプレビューする場合は、サンプルプレビューダイアログボックスの「ダウンロード」を選択することもできます。

5. 右上隅にある [サブスクライブを続行] を選択します。
6. 希望する価格と期間の組み合わせを選択してください。サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、データ サブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

Amazon S3 の AWS Data Exchange (テスト製品) にサブスクリプション検証は必要ありませんが、必要となる製品もあります。詳細については、[「サブスクライバーのサブスクリプション検証」](#) を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

Amazon S3 のAWS Data Exchange (テスト製品) は無料の製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は妨げられません。

Amazon S3 の AWS Data Exchange (テスト製品) のセットアップとクエリ

以下の手順は、AWS Command Line Interface (AWS CLI) を使用して Amazon S3 データアクセスデータセットをセットアップし、クエリを実行する方法を示しています。クエリを実行する前に、ユーザーにポリシーをアタッチするための適切な AWS Identity and Access Management (IAM) 権限を取得する必要があります。Amazon S3 配信方法を使用してプロバイダーのバケット内のデータに直接アクセスするには、次の JSON ポリシーをユーザーまたはロールに埋め込みます。

Amazon S3 の AWS Data Exchange (テスト製品) をセットアップするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインの [マイ サブスクリプション] で、データセットをホストする AWS リージョン内の [権限を持つデータ] を選択します。このチュートリアルでは、リージョンは us-east-1 です。
3. 製品のリストから Amazon S3 のAWS Data Exchange(テスト製品) を選択し、次にブロックチェーントランザクション (テストデータ) データセットを選択します。
4. [IAM 権限を検証] を選択します。

Note

適切な権限がない場合は、IAM ポリシーを作成してユーザーまたはロールにアタッチする方法を詳述した通知が届きます。次の例では、各 ##### を独自の情報に置き換えます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "s3:ListBucket",
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:us-east-1:111122223333:accesspoint/my-access-point",
        "arn:aws:s3::aws-data-exchange-s3-data-access-btc-demo-us-east-1"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "s3:GetObject",
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:us-east-1:111122223333:accesspoint/my-access-point/object/*",
        "arn:aws:s3::aws-data-exchange-s3-data-access-btc-demo-us-east-1/*"
      ]
    }
  ]
}
```

AWS CLI を使用して Amazon S3 の AWS Data Exchange (テスト製品) のデータアクセスデータセットに対してクエリを実行できるようにするには

1. us-east-1 でAWS CloudShell を開きます。
2. アクセスポイントのエイリアスの横にあるコピーボタンを選択し、コードをコピーして内部に貼り付けます。正しいアクセスポイントエイリアスを使用して、AWS CloudShell にコマンドを追加すると、この製品に含まれている Amazon S3 オブジェクトのリストが表示されます。

⚠ Important

プロバイダーがリクエスト支払いを有効にすると、サブスクライバーはデータ転送とリクエストの代金を支払います。プロバイダーはデータストレージの費用を支払います。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[ストレージ転送と使用量にリクエスト支払いバケットを使用する](#)」を参照してください。

3. (オプション) 次のコマンドを実行して、オブジェクトをローカルシステムにコピーすることもできます。

```
aws s3api get-object --bucket <Access point alias> --key 'v1.0/btc/transactions/date=2022-11-27/part-00000-03a88dba-27dd-4f59-a890-70a3d2c7ad26-c000.snappy.parquet' aws_btc.snappy.parquet --request-payer requester
```

チュートリアル: AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 (テスト製品) をサブスクライブする

AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 (テスト製品) は、プロバイダー生成通知を使用して製品をサブスクライブして操作する方法をサブスクライバーが理解できるようにする無料の AWS Data Exchange 製品です。

プロバイダーはこの機能を使用して、自社のデータセットに関連する重要なイベントを通知します。これらのイベントは、Amazon を使用して一貫した構造化形式で受信され EventBridge、自動化されたワークフローを構築するために使用できます。プロバイダーが生成する通知では、[AWS ユーザー通知](#)を使用して、人間が読める形式の通知をメールやチャットプログラムに配信することもできます。

プロバイダー生成通知 (テスト製品) AWS Data Exchange の へのサブスクライブ

以下の手順は、AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 (テスト製品) をサブスクライブする方法を示しています。

プロバイダー生成通知 (テスト製品) AWS Data Exchange の を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange Provider-Generated Notifications (Test Product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. 「プロバイダー生成通知のAWS Data Exchange (テスト製品)」を選択すると、詳細ページが表示されます。
5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行] を選択します。

- 希望する価格と期間の組み合わせを選択してください。サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、データ サブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 (テスト製品) にはサブスクリプション検証は必要ありませんが、一部の製品には必要です。詳細については、「[サブスクライバーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

- 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

AWS Data Exchange for Provider-Generated Notifications (テスト製品) は無料製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

Amazon を使用したプロバイダー生成通知の設定 EventBridge

AWS Data Exchange は、Amazon を使用してプロバイダーが生成した通知を配信します EventBridge。ルールは Amazon EventBridge ルールとターゲットを作成でき、データ製品をサブスクライブできる必要があります。

AWS Data Exchange イベントは、データセットが配置されているの AWS リージョン と同じのデフォルトの Amazon EventBridge イベントバスに発行されます。プロバイダーが生成する通知の Amazon EventBridge ルールを作成するには、次の手順に従います。

プロバイダーが生成する通知用の Amazon EventBridge ルールを作成するには

- Amazon EventBridge ルールのターゲットを作成します。Python でシンプルな Lambda 関数を作成するには、次のようにします。
 - AWS Lambda コンソールに移動します。

- b. [関数を作成]、[一から作成] の順に選択します。
- c. この関数に名前を付け、ランタイムとして Python 3.10 を選択します。[関数を作成]を選択します。
- d. lambda_function.py に次のコードを入力します。

```
import json

def lambda_handler(event, context):
    print(" ".join(["Event of type", event["detail-type"], "received!"]))
    print(" ".join(["Details", json.dumps(event["detail"])]))

    return {"statusCode": 200, "body": json.dumps("Hello from Lambda!")}
}
```

2. EventBridge コンソールに移動します。
3. ルールに移動し、デフォルトのイベントバスを選択します。
4. [ルールを作成] を選択し、名前とオプションの説明を入力します。ルール タイプが [イベントパターン付きのルール] であることを確認します。
5. [次へ] を選択します。
 - イベントソースが AWS イベントまたは EventBridge パートナーイベントであることを確認します。[作成方法] で [カスタムパターン (JSON エディター)] を選択します。[イベントパターン] では、次のように入力します。

```
{
  "source": ["aws.dataexchange"],
  "detail-type": ["Data Set Update Delayed", "Data Updated in Data Set",
    "Deprecation Planned for Data Set", "Schema Change Planned for Data Set"]
}
```

6. [次] をクリックします。
 - a. [ターゲット 1]では、AWS のサービス と[Lambda 関数] を選択します。
 - b. [関数]で、ステップ 1 で作成した 関数を選択します。[ルールを作成]を完了します。

この Lambda 関数は、プロバイダーが生成した通知が配信されるたびにトリガーされます。Lambda コンソールの [モニター] タブから、関数の最近の呼び出しを確認できます。

AWS Marketplace へのデータ製品の出品

データ製品を AWS Marketplace に出品する方法の概要を以下に示します。

1. プロバイダー候補者がプロバイダーになるために登録する – 登録することにより、AWS Data Exchange で製品を出品し、それらを AWS Marketplace で提供することが可能になります。詳細については、「[ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う](#)」を参照してください。
2. データが AWS Data Exchange での公開条件を満たす – データセットの配信は、AWS Marketplace 販売者向けの利用規約に規定された法的な適格要件を満たすデータセットに制限されます。許可されるデータのタイプに関する詳細については、「[公開ガイドライン](#)」を参照してください。
3. プロバイダーがデータセットとリビジョンを作成して、アセットをインポートする – データセットは、AWS Data Exchange コンソールまたは API を使用して作成できます。データセットの作成後、データセットでリビジョンを作成し、そのリビジョンにアセットを追加できます。詳細については、「[内のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
4. プロバイダーが製品とそのオファーを作成する – 製品を作成するには、製品の詳細を提供し、1 つ、または複数のデータセットを含め、オプションでパブリックオファーの詳細を提供する必要があります。詳細については、「[新しい製品の公開](#)」を参照してください。
 - ファイル (Amazon S3 オブジェクト) が含まれる製品 – 製品内で Amazon S3 オブジェクトが含まれる所有データセットが発行されると、AWS Data Exchange がそのデータセットのコピーを作成します。サブスクライバーは、権限を持つデータセットとしてデータセットのコピーにアクセスすることができます。
 - Amazon API Gateway API が含まれる製品 – 製品内で Amazon API Gateway API が含まれる所有データセットが発行されると、AWS Data Exchange は AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストが Amazon API Gateway API にプロキシされることを許可します。サブスクライバーは、API を表示し、権限を持つデータセットとして API 仕様をダウンロードすることができます。サブスクライバーは、AWS Data Exchange コンソール経由で API を呼び出すこともできます。
 - Amazon Redshift データセットが含まれる製品 – 製品内で Amazon Redshift データセットが含まれる所有データセットが発行されると、AWS Data Exchange は AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストが Amazon API Gateway API にプロキシされることを許可します。サブスクライバーは、プロバイダーがデータ共有に追加したテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権を持つことができます。
 - Amazon S3 データアクセスを含む製品 – 製品内で Amazon S3 データアクセスを含む所有データセットが発行されると、データプロバイダーが管理しているのと同じ Amazon S3 AWS Data

Exchange オブジェクトをサブスクライバーに許可します。この方法では、入手可能な最新のデータが得られます。プロバイダーは Amazon S3 バケットまたは特定のプレフィックスと Amazon S3 AWS Data Exchange オブジェクトへの直接アクセスを共有し、これを使用してサブスクリプション、エンタイトルメント、請求、支払いを管理します。

- AWS Lake Formation データセットを含む製品 (プレビュー) — Lake Formation データ許可データセットを含む所有データセットが製品で公開されると、AWS Data Exchange データセットに含めた LF タグに関連するデータへの読み取り専用アクセスが許可されます。サブスクライバーは、Amazon Athena や Redshift Spectrum などの Lake Formation と統合されたダウンストリームクエリサービスを使用して、共有しているデータベース、テーブル、または列をサブスクライブできます。
5. (オプション) プロバイダーがサブスクリプション検証を有効にする – サブスクリプション検証を有効にする場合、サブスクライバーは製品のサブスクリプションをリクエストする必要があります。これは、データセットへのアクセス前にサブスクライブ希望者を審査する機会を提供します。詳細については、「[プロバイダーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。
 6. (オプション) プロバイダーが製品のカスタムオファーを作成する – パブリックオファーに加えて、一部の顧客向けのカスタムオファーを作成できます。これには、プライベートオファーと Bring Your Own Subscription (BYOS) オファーが含まれます。詳細については、「[カスタムオファーの作成](#)」を参照してください。
 7. (オプション) プロバイダーが新しいリビジョンを発行する – AWS Data Exchange API またはコンソールを使用して新しいリビジョンを作成することによって、動的データセットを経時的に更新することができます。その後、これらのリビジョンを発行できます。詳細については、「[リビジョン](#)」または「[製品の更新](#)」を参照してください。
 8. プロバイダーが AWS Marketplace 管理ポータル を使用してレポートを確認する – レポートはすべての登録済み AWS Marketplace 販売者が利用でき、定期的 (毎日、毎週、または毎月) にリリースされます。詳細については、「[AWS Marketplace でのプロバイダー財務](#)」を参照してください。
 9. プロバイダーが AWS Marketplace によって配分される資金を受け取る – 詳細については、「[AWS Marketplace でのプロバイダー財務](#)」を参照してください。

拡張プロバイダープログラム (EPP)

Extended Provider Program (EPP) は、資格のあるデータプロバイダーが、他の方法では公開されていない機密カテゴリーの個人情報や個人情報を含むデータ製品を公開するためのプログラムです。

EPP への参加を希望するプロバイダーは、チームによる追加の審査プロセスを完了する必要があります。AWS Data Exchange Extended Provider Program への登録資格に関する詳細については、[AWS Support](#) にお問い合わせください。

EPP に登録しているデータプロバイダー向けの公開ガイドラインの詳細については、[公開ガイドライン](#) を参照してください。

プログラムのアクセス

AWS Data Exchange をプログラムの使用している場合は、2 つの異なる API を持つ 2 つの異なるリソースセットがあります。

- AWS Data Exchange API – これらの API 操作を使用して、データセットとリビジョンを作成、表示、更新、および削除します。これらの API 操作は、これらのリビジョンに対するアセットのインポートとエクスポートにも使用できます。詳細については、「[AWS Data Exchange API リファレンス](#)」を参照してください。
- AWS Marketplace Catalog API – プロバイダーが AWS Data Exchange と AWS Marketplace の製品を表示および更新するために使用します。詳細については、「[AWS Marketplace Catalog API リファレンス](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange のデータ製品プロバイダーになる前に、以下のトピックを確認してください。

- [AWS Data Exchange を設定する](#)

このトピックの確認後、手順を開始する準備が整います。

関連トピック

- [公開ガイドライン](#)
- [製品の詳細](#)
- [プロバイダーとしての使用開始](#)
- [新しい製品の公開](#)
- [製品の説明テンプレート](#)
- [製品の更新](#)
- [AWS Data Exchange 製品のオファターの作成](#)
- [プロバイダーが生成した通知](#)

- [内のデータ AWS Data Exchange](#)

公開ガイドライン

以下のガイドラインは、AWS Data Exchange での製品の出品に関する制限事項の概要です。プロバイダーには、これらのガイドライン、[AWS Marketplace 販売者向けの利用規約](#)、および [AWS カスタマーアグリーメント](#) を順守する責任があります。AWS は、これらのガイドラインを適宜更新することができます。は、これらのガイドラインに違反する一切の製品を削除し、プロバイダーによる本サービスの将来的な使用を停止することができます。

プロバイダーは、AWS Marketplace 販売者向けの利用規約に基づくガイドラインを承諾し、それらに従うことに加えて、データ製品に関する以下の公開ガイドラインに従う必要もあります。

データ製品に関する AWS Data Exchange 公開ガイドライン

1. データ製品に、違法なコンテンツ、ウイルス、マルウェア、または他者にとって有害なその他素材を含めることはできません。
2. データ製品に、デバイスまたは特定可能な個人を特定するために使用できる情報を含めることはできません。また、センシティブロケーションと特定するために使用できる情報を含めることはできません。センシティブロケーションには以下が含まれます：がん治療、HIV/AIDS治療、不妊治療/中絶クリニック、メンタルヘルス治療施設、緊急治療室外傷センター、宗教的礼拝所、矯正施設、依存症治療センター、依存症治療センター、家庭内暴力またはレイプ危機管理センター、LGBTQ+の身元やその他の性的指向を推測するために使用される可能性のある場所、軍事基地、政治などの一時的な集会所集会、行進、または抗議、そのような時期集会、行進、抗議活動、主に 16 歳未満の子どもを対象とする場所、露骨な性的コンテンツ、コンテンツ、行為への関与を推測するために使用される可能性のある場所、難民または移民の地位を推測するために使用される可能性のある場所（難民センターや入国管理局など）、福祉施設またはホームレスシェルター、ハーフウェイハウス、信用修理、債務返済サービス、破産サービス、給料日貸付などが行われる教育機関。

さらに、AWS Data Exchange の [the section called “拡張プロバイダープログラム \(EPP\)”](#) 認定データプロバイダーでない限り、データ製品に、個人を特定するために使用できる情報を含めることはできません。ただし、その情報が一般公開情報である場合を除きます。一般公開情報とは、(1) 連邦、州、地方自治体の記録、公開法廷記録、または公開企業への提出書類を通じて合法的に公開された情報、または (2) データ主体が合法的に一般に公開している情報を指します。

3. 生体情報データもしくは遺伝子データ、医療、人種もしくは民族的出身、政治的見解、宗教的もしくは哲学的信念、性別もしくは性的指向、労働組合への加入、個人支払もしくは財務情報 (信用

履歴など)、センシティブロケーションの各カテゴリ、またはその他類似する機密情報のカテゴリに当てはまる情報は、データ製品内の個人を特定できないように集約または匿名化される必要があります。

- AWS Data Exchange に含めることができるデータセットの例には、公開会社の履歴的な株価、裁判官の名前とその法廷意見、および医薬品研究からの集約または匿名化された研究結果などがあります。
 - HCLS のユースケースでは、HIPAA 匿名化ガイドラインに準拠して、専門家による決定またはセーフハーバーの方法により匿名化されたデータを指します。
 - AWS Data Exchange で禁止されているデータセットの例としては、人種ごとに整理された名前のリスト、個人を特定するために使用できる地理的位置データ、1996 年の医療保険の相互運用性と責任に関する法律 (HIPAA) に基づいて保護されている医療情報などがあります。
4. サブスクライバーがデータ製品をどのように使用、または使用しない可能性があるかを慎重に検討し、データサブスクリプション契約 (DSA) にこの情報を明記する必要があります。
 5. 製品の出品説明は、正確で、有効な連絡先情報が含まれており、集約または匿名化されたデータがある場合はその旨が記載されている必要があります。
 6. AWS Marketplace との互換性がない製品またはソリューションを除き、AWS Marketplace に出品されていないその他製品またはソリューションを宣伝するために AWS Data Exchange を使用することはできません。
 7. データセットの配信は、AWS Marketplace 販売者向けの利用規約に規定された法的な適格要件を満たすデータセットに制限されています。プロバイダーが何らかの形でこれらの規約に違反した場合は、禁止されている製品が AWS Data Exchange から削除され、プロバイダーによるサービスの使用が停止される場合があります。
 8. 製品で API データセットを出品する場合:
 - 最初にその API を Amazon API Gateway に統合する必要があります。REST API を API Gateway に統合する方法の詳細については、「API Gateway デベロッパーガイド」の「[REST API の操作](#)」を参照してください。
 - データ製品に関するサブスクライバーからのサポート関連の質問には、1 営業日で回答する必要があります。このガイドラインに従わない場合、製品が AWS Data Exchange から削除される可能性があります。
 9. 製品に追加されたロゴ、DSA、およびその他の添付ファイルは、実際のデータ製品が置かれている場所とは別に保存される場合があります。

Note

拡張プロバイダー プログラムに登録しているプロバイダーは、上記のガイドライン 2 および 3 を補足する、AWS Marketplace プロバイダーの利用規約の拡張プロバイダー プログラム付録に規定されている制限の対象となります。詳細については、「[拡張プロバイダープログラム \(EPP\)](#)」を参照してください。

データセットの適格性に関する質問がある場合は、以下を実行してください。

- [AWS Support](#) に連絡する。
- [AWS Support ダッシュボード](#) にアクセスし、AWS Management Console でケースを作成する。

AWS Data Exchange のデータ製品の公開ガイドラインを読み、データセットが出品可能であることを確認したら、製品を作成できます。

製品の詳細

AWS Data Exchange コンソールで製品を公開するときは、製品の詳細を提供する必要があります。このセクションでは、製品の詳細を準備するときに考慮するベストプラクティスについて説明します。

トピック

- [製品の可視性](#)
- [機密カテゴリの情報](#)
- [製品名](#)
- [製品ロゴ](#)
- [サポート連絡先](#)
- [製品カテゴリ](#)
- [簡単な説明](#)
- [詳しい説明](#)
- [リビジョンアクセスルール](#)
- [データディクショナリ](#)
- [サンプル](#)

製品の可視性

製品を作成するときは、その可視性を選択します。[製品の可視性] は、[パブリック] または [プライベート] のどちらかにすることができます。

- [パブリック] – この製品は、AWS Data Exchange コンソールと AWS Marketplace のパブリックカタログに表示されます。パブリック製品にはパブリックオファーが関連付けられている必要があります。カスタムオファーを設定することも可能です。
- [プライベート] – この製品は、AWS Data Exchange と AWS Marketplace のどちらのパブリックカタログにも公開されません。これには、カスタムオファーのみを作成できます。カスタムオファーを作成した特定のアカウントのみがこの製品を表示してサブスクリブできます。サブスクライバーは、AWS Data Exchange の [製品オファー] タブで、サブスクライバー向けに作成されたカスタムオファーを確認できます。

Note

製品の作成後にその可視性を変更することはできません。

製品 (可視性がパブリックまたはプライベートに設定されたもの) の作成に関する詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

機密カテゴリの情報

製品を作成するときは、製品に個人データ、または機密カテゴリの情報が含まれているかどうかを指定する必要があります。

機密カテゴリの情報には、生体情報データもしくは遺伝子データ、医療データ、人種もしくは民族的出身、政治的見解、宗教的もしくは哲学的信念、性別もしくは性的指向、労働組合への加入、個人支払もしくは財務情報 (信用履歴など) などのカテゴリの情報、またはその他類似するカテゴリの情報が含まれます。

個人データとは、個人を特定するために使用できるデータです。

非公開のオファーを受け入れる前に、見込み購読者には、商品詳細ページに、他の方法では公開されていない機密性の高い個人情報や個人情報が含まれているという警告が商品詳細ページに表示されます。

で説明するプロセスの一環として[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)、製品の機密情報設定のオプションを選択します。以下のオプションのいずれかを選択します。

- オプション 1 - 他の方法で一般公開されていない個人データが含まれず、機密カテゴリの情報も含まれない

このオプションは、他の方法で一般公開されていない個人データと、機密カテゴリの情報のどちらも製品に含まれない場合に選択します。

例としては、金融市場データ、気象パターン、上場企業への提出書類などがあります。

- オプション 2 - 個人データは含まれないが、機密カテゴリの情報が含まれる

このオプションは、個人情報ではない機密情報が製品に含まれる場合に選択します。

例としては、集約された多様性データや匿名化された財務データなどがあります。

- オプション 3 — (i) 機密カテゴリの情報を含む個人データ、および/または (ii) その他の方法で公的に入手可能ではなく、1996 年医療保険の相互運用性および責任に関する法律 (HIPAA) に基づく保護医療情報 (PHI) は含まれない

このオプションは、他の方法で一般公開されていない個人データが製品に含まれる場合に選択します。製品には、HIPAA の対象である保護医療情報 (PHI) が含まれていない必要があります。

例としては、E メールアドレス、社会保障番号、生体情報、またはモバイル ID などの PII があります。

Note

このオプションは、AWS Marketplace プロバイダー向けの利用規約の Extended Provider Program Addendum に同意した、Extended Provider Program に登録済みの対象プロバイダーのみが使用できます。詳細については、「[拡張プロバイダープログラム \(EPP\)](#)」を参照してください。

- オプション 4 - 1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法令 (HIPAA) の対象である保護医療情報 (PHI)

このオプションは、HIPAA の対象である保護医療情報 (PHI) が製品に含まれる場合に選択します。

例としては、対象エンティティによって開示された患者情報などの PHI が含まれます。

⚠ Important

4 番目のオプションは、プライベート製品のみで使用できます。パブリック製品にこのようなデータを含めることはできません。

ℹ Note

オプション4は、以下の適格プロバイダーのみが利用できます。

- 3 番目と 4 番目のオプションは、AWS Marketplace プロバイダー向けの利用規約の拡張プロバイダープログラム付則に同意した、拡張プロバイダープログラムに登録済みの対象プロバイダーのみが使用できます。詳細については、「[拡張プロバイダープログラム \(EPP\)](#)」を参照してください。
- AWSビジネスアソシエイト付則およびAWSビジネスアソシエイト付則のAWS Data Exchange補遺に同意した資格のあるプロバイダー。

⚠ Warning

拡張プロバイダープログラムに登録していない場合、3 番目および 4 番目のオプションで説明されているデータまたは情報が含まれる製品の出品は、[公開ガイドライン](#) に違反する行為です。AWS は、これらのガイドラインに違反する一切の製品を削除し、プロバイダーによる本サービスの将来的な使用を停止することができます。

製品の作成とデータの機密性ステータスの設定に関する詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

製品名

サブスクライバーは製品の名前を検索することから、製品名を意味のある名前にしてください。

製品ロゴ

製品ロゴは、コンソールの AWS Data Exchange 製品カタログと AWS Marketplace に表示されます。サポートされているロゴの形式は、.png、.jpg、および .jpeg です。

サポート連絡先

プロバイダーは、有効な連絡先情報を含める必要があります。これは、製品に関する質問がある顧客がサポートを受けるために使用する、マネージド E メールエイリアス、またはケース管理システムのリンクにすることができます。アドレスは公表されるため、個人用の E メールアドレスは使用しないことを強くお勧めします。

製品カテゴリ

すべての製品は、1 つ、または複数のカテゴリに当てはまります。製品に最大 2 つのカテゴリを指定することによって、サブスクライバーが AWS Data Exchange と AWS Marketplace で製品をフィルタリングし、検索できるようにします。

簡単な説明

製品の簡単な説明のテキストは、AWS Data Exchange コンソールの製品カタログ部分にあるタイルに表示されます。このフィールドには、製品の簡潔な説明を入力することをお勧めします。

詳しい説明

製品が公開されると、サブスクライバーが製品の詳細ページで詳しい説明を確認します。これには、製品の機能、利点、使用方法、および製品に固有のその他情報をリストすることをお勧めします。

説明内の製品情報は、サブスクライバーに提供されるデータを正確に表現している必要があります。これには、データの対象範囲 (30,000 個の金融商品、または 10,000 個の位置座標など) と、データセットの更新頻度 (毎日更新または毎週更新など) が含まれます。

Note

数多くの一般的な製品タイプの詳しい説明を作成する開始点として、Markdown テンプレートを使用することができます。詳細については、「[製品の説明テンプレート](#)」を参照してください。

製品の説明への追加情報

製品の説明を見込みサブスクライバーにとって魅力的なものにするため、製品の説明に以下の情報を追加することをお勧めします。

- データのデューデリジェンスアンケート (DDQ) – 通常、これにはデータセットを販売している会社に関する質問への回答が含まれます。DDQ の情報の例には、データを収集するためにプロバイダーが実行するプロセス、または品質管理手順と規制コンプライアンスに関する質問が含まれます。
- データセットスキーマ – 見込みユーザーに、データセットの構造と形式に関する詳しい説明を提供します。データセットスキーマの情報の例には、プライマリキーの識別情報、フィールド名、フィールドの定義、各フィールドに期待される出力タイプ (文字列、整数など)、および各フィールドに許容される列挙体 (例えば 0 ~ 100%) などがありません。
- トライアル製品の出品 – 多くの見込みサブスクライバーは、サブスクリプションを購入する前に、データセットのトライアルをリクエストします。トライアル製品は AWS Data Exchange で公開して、サブスクライバーが通常の有料製品と同じようにトライアル製品をサブスクライブするようになります。
- サンプルファイル – サンプルファイルは通常、完全な実稼働データセットより小さいバージョン、またはそれより古い旧式のバージョンです。これらのサンプルファイルは、見込みユーザーがサブスクリプションを購入する前に、期待できる出力に関する洞察を提供します。
- 製品ファクトシート – これらは、ドキュメント、ウェブリンク、またはそれら両方にすることができ、データセットの対象範囲、データセットの典型的なユースケース、およびデータセットを差別化するその他要素に関する詳細な統計情報をサブスクライバーに提供します。

説明にリンクを追加する方法については、「[製品の説明にリンクを含める](#)」を参照してください。

製品の説明にリンクを含める

AWS Data Exchange 製品の詳しい説明は、製品の詳細ページにリンクを含めることを可能にする Markdown をサポートします。以下は、AWS Data Exchange 製品の説明にウェブサイトへのリンクを追加する方法を説明する手順です。

製品の出品ページに埋め込みリンクを含める

1. AWS コンソールにログインして、AWS Data Exchange ユーザーがアクセス権を持つ [Amazon S3 バケット](#) に移動します。このバケットの内容はパブリック読み取り可能です。
2. 製品の出品ページに含めるファイル (例: PDF ファイルや Microsoft Excel ファイルなどのドキュメント) を Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにアップロードします。アップロードが完了したら、ファイル (1 つ、または複数) にパブリック読み取りアクセス許可を設定するようにしてください。

- アップロードしたファイルのいずれかを選択します。[概要] タブにファイルの URL が表示されます。URL をクリップボードにコピーします。
- [AWS Data Exchange コンソール](#)を開きます。
- 更新する製品を選択してから、[編集] を選択します。
- [製品の説明] から、以下の Markdown 形式を使用して関連ファイル (先ほどコピーした URL リンクを使用) にリンク、またはウェブサイトなどの別の URL にリンクします。

- S3 バケットに保存されているファイルにリンクする:

```
**_[#####](Amazon S3 ##### URL)_**
```

```
#####。
```

- AWS Data Exchange のトライアル製品の出品ページにリンクする:

```
**_[#####](URL)_**
```

```
#####。
```

- [Save Changes] (変更を保存) を選択します。数分後、AWS Data Exchange 製品の出品ページが新しいリンクで更新されます。

リビジョンアクセスルール

リビジョンアクセスルールは、サブスクライバーが製品をサブスクライブするときにアクセスできるリビジョンを指定します。サブスクライバーが履歴リビジョンと将来のリビジョンを取得するためのオプションを選択します。

- 履歴リビジョンのオプション – 履歴リビジョンとは、サブスクリプションの開始日より前に発行されたリビジョンです。履歴リビジョンには 3 つのオプションがあります。
 - [All pre-existing revisions published prior to subscription] (サブスクリプションより前に発行されたすべての既存リビジョン) – サブスクライバーは、すべての履歴リビジョンにアクセスできます。
 - [A fixed number of trailing revisions published prior to subscription] (サブスクリプションより前に発行された、固定数の 2 番目以降のリビジョン) – サブスクライバーがアクセスできる履歴リビジョンの数 (1 ~ 100 個) を選択します。
 - [No historical revisions] (履歴リビジョンなし) – サブスクライバーは、履歴リビジョンにアクセスできません。このオプションを選択すると、サブスクリプション開始当初から次のリビジョンが発行されるまでの間、サブスクライバーには利用できるリビジョンがありません。

- 将来のリビジョンのオプション – 将来のリビジョンとは、サブスクリプションの開始後に発行されるリビジョンです。将来のリビジョンには 2 つのオプションがあります。
- [All future revisions published during subscription duration] (サブスクリプション期間中に発行されるすべての将来のリビジョン) – サブスクライバーは、サブスクリプションの有効期限が切れるまで、発行されるすべてのリビジョンにアクセスできます。
- [No future revisions] (将来のリビジョンなし) – サブスクライバーは、将来のリビジョンにアクセスできません。

Note

[No historical revisions] (履歴リビジョンなし) と [No future revisions] (将来のリビジョンなし) の両方を選択することはできません。両方を選択すると、リビジョンもデータもない製品が作成されます。

データディクショナリ

データディクショナリはデータセットの内容を視覚的に表現したものです。

サブスクライバーは、製品をサブスクライブする前にデータディクショナリを表示およびダウンロードして、製品がニーズを満たしているかどうかを評価できます。

各データセットには、最大サイズ 1 MB のサイズで 1 つのデータディクショナリを追加できます。データディクショナリで使用できるファイルタイプは.csv です。

データディクショナリを作成するときは、データセットに含まれる列とその意味に関する詳細を含めます。AWS Data Exchange データディクショナリはデータディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。空白のデータディクショナリテンプレートは AWS Data Exchange コンソールからダウンロードできます。また、AWS Data Exchangeにはサンプルデータディクショナリも用意されており、例として表示できます。

Note

データディクショナリは製品に添付され、データセットに関連付けられます。潜在的な利用者が評価できるように複数のデータディクショナリを用意したい場合は、同じデータセットを使用して同じ製品の 2 つ以上のバージョンを作成できます。次に、製品ごとに異なるデータディクショナリを追加します。

データディクショナリを製品に追加する方法の詳細については、[新しい製品の公開](#)を参照してください。

サンプル

サンプルは製品に含まれるデータのごく一部で、データセット全体がどのようなものかを示すことを目的としています。

サブスクライバーは、製品を購読する前にサンプルを閲覧およびダウンロードして、製品がニーズを満たしているかどうかを評価できます。

各データセットには、最大 50 MB のサンプルを 10 個までアップロードできます。サンプルに使用できるファイル形式は、Amazon S3 で受け入れられているすべてのファイルタイプです。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

Note

サンプルは製品に添付され、データセットに関連付けられます。潜在的な購読者が評価できるように 10 個以上のサンプルを用意したい場合は、同じデータセットを使用して同じ製品の 2 つ以上のバージョンを作成できます。次に、各製品に最大 10 個のサンプルを追加します。

ストリームにデータを追加する方法の詳細については、[新しい製品の公開](#)を参照してください。

プロバイダーとしての使用開始

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange のデータ製品のプロバイダーになるための完全なプロセスを説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: 登録資格を確認する](#)
- [ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う](#)
- [ステップ 3: データの適格性を確認する](#)

ステップ 1: 登録資格を確認する

登録する前に、以下の要件を満たして登録資格を確認する必要があります。

データ製品を公開するための要件

AWS Data Exchange データ製品を有料にするかどうかにかかわらず、その製品は AWS Marketplace で販売することになります。データ製品を作成して提供するには、以下の要件を満たす必要があります。

- 明確なカスタマーサポートプロセスおよびサポート組織があること。
- 定期的に更新され、脆弱性がない状態にデータを維持する手段を提供すること。
- 製品のマーケティングにおけるベストプラクティスとガイドラインに従うこと。
- AWS の優良顧客であり、AWS Marketplace 販売者および AWS Data Exchange プロバイダー向けの利用規約の要件を満たすこと。
- [対象管轄区域](#)内の永住者もしくは市民である、またはこれらの区域のいずれかで組織化もしくは法人化された事業体であること。
- データ製品を提供するには、AWS Support の[ケース作成](#)ウィザードでオンボーディングをリクエストする必要があります。AWS Data Exchange チームから、資格認定プロセスと登録プロセスを完了するための連絡を受けます。

さらに、製品を提供してそれらの料金を請求する場合は、以下の情報を提供する必要があります。

- 税金および銀行口座の情報を提供する必要があります。米国を拠点とする企業の場合は、W-9 フォームと、米国を拠点とする銀行からの銀行口座が必要です。
- 米国以外の販売者は、W-8 フォーム、付加価値税 (VAT) または商品サービス税 (GST) 登録番号、および米国の銀行情報を提供する必要があります。米国銀行口座がない場合は、[Hyperwallet](#) から仮想米国銀行口座を登録できます。

AWS Data Exchange 製品の対象管轄区域

AWS Data Exchange でデータ製品を提供するには、以下のいずれかの国もしくは特別行政区の永住者もしくは市民である、またはそれらの区域内で組織化もしくは法人化された事業体である必要があります。

- オーストラリア¹

- バーレーン¹²
- 欧州連合 (EU) 加盟国¹
- 香港特別行政区
- イスラエル¹²
- 日本²³
- ニュージーランド¹
- ノルウェー¹²
- カタール
- スイス¹²
- アラブ首長国連邦 (UAE)¹²
- 英国 (UK)¹
- 米国 (US)

¹ これらの国の有料製品のプロバイダーは、設立国の VAT 登録情報を提供する必要があります。

² プロバイダーであるお客様が加入者と同じ国に居住している場合、税金の請求、徴収、送金の責任を負う場合があります。税務顧問にお問い合わせください。

³ 日本を拠点とするプロバイダーには、出品料金に対する日本消費税 (JCT) を申告する義務があります。

プロバイダーとしての VAT、請求、および納税義務に関する詳細については、「[Amazon Web Service 税務ヘルプ](#)」の「[AWS Marketplace 販売者](#)」を参照してください。

ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う

プロバイダーとして AWS Data Exchange を使用するには、AWS Marketplace の登録済みの販売者であり、かつ AWS Data Exchange チームの認定を受ける必要があります。AWS Marketplace 販売者としてアカウントを登録すると、そのアカウントが製品の登録販売者となり、レポートと支払いに使用されます。すべての製品とそのパブリックオファーは、AWS Data Exchange と AWS Marketplace で検索可能です。

[AWS Data Exchange 資格と登録の手続きが完了し、無料商品の公開から有料商品へのアップグレードを希望する場合は、AWS Marketplace 販売者オペレーション](#) チームにお問い合わせください。

⚠ Important

AWS Marketplace での製品の出品に使用する AWS アカウント を変更することはできません。そのアカウントによって公開された製品に含めることができるのは、そのアカウントが所有するデータセットのみです。製品を公開できるのは、AWS Marketplace および AWS Data Exchange でデータ製品を提供するために登録された AWS アカウント のみです。

AWS Data Exchange と AWS Marketplace のプロバイダーとして登録する

1. ウェブブラウザから [AWS Marketplace 管理ポータル](#) を開きます。
2. [今すぐ登録] を選択して登録ウィザードを開きます。
3. 会社名または氏名を確認し、利用規約を読みます。利用規約に同意する場合は、[I have read and agree to these terms] (利用規約を読み、これらに同意します) をオンにします。
4. [Account Settings] (アカウント設定) ページで、[Add (追加)] を選択してパブリックプロファイルを追加します。
5. (オプション) AWS Marketplace または AWS Data Exchange に有料製品を出品する場合は、税金および銀行情報を提供する必要があります。[Account Settings] (アカウント設定) ページの [Provide tax and banking information] (税金と銀行情報の提供) タブで [Start] (開始) を選択して、税金と銀行ウィザードを完了します。そうすると、AWS Marketplace 管理ポータル で税金と銀行情報が送信されます。

i Note

税務申告書は、電子的に署名して送信することを強くお勧めします。それ以外の方法を使用する場合、フォームを印刷し、署名セクションに署名して、税務情報インタビューで提供された住所に税務申告書のハードコピーを郵送する必要があります。これは、登録プロセスの遅れにつながります。

6. 登録済みの AWS Marketplace 販売者であることに加えて、AWS Data Exchange 資格リクエストを送信する必要があります。AWS Management Console で [AWS Support ダッシュボード](#) にアクセスし、ケースを作成します。AWS Data Exchange チームから、資格認定プロセスと登録プロセスを完了するための連絡を受けます。

ステップ 3: データの適格性を確認する

データの適格性を確認するには、「[公開ガイドライン](#)」をお読みください。

データセットの適格性に関する質問がある場合は、[AWS Support](#) にご連絡ください。

AWS Data Exchange のデータ製品の公開ガイドラインを読み、データセットが出品可能であることを確認したら、製品を作成できます。

新しい製品の公開

以下のトピックで、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange で新しい製品を公開するプロセスを説明します。

トピック

- [ファイルベースのデータが含まれる製品の公開](#)
- [API が含まれる製品の公開](#)
- [Amazon Redshift のデータ共有が含まれる製品の公開 \(プレビュー\)](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む製品の公開](#)
- [AWS Lake Formation データ権限データセットを含む製品の公開 \(プレビュー\)](#)

次のビデオでは、AWS Data Exchange で新しいデータプロダクトをに公開する方法について詳しく説明しています。

ファイルベースのデータが含まれる製品の公開

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用してデータセットを作成し、AWS Data Exchange でファイルベースのデータが含まれる新しい製品を公開するプロセスを説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする](#)

- [ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

ステップ 1: アセットを作成する

アセットは AWS Data Exchange 内のデータです。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

新しいファイルベースのデータ製品を作成して公開する前に、以下を実行する必要があります。

1. ファイルを作成します。

AWS Data Exchange はすべてのファイルタイプをサポートします。

2. ファイルをオブジェクトとして Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) またはローカルコンピュータに保存します。

Amazon S3 でのファイルの保存に関する詳細については、「[Amazon S3 ユーザーガイド](#)」を参照してください。

ステップ 2: データセットを作成する

AWS Data Exchange のデータセットは動的で、リビジョンを使用してバージョン管理されます。各リビジョンには少なくとも 1 つのアセットが含まれています。詳細については、「[内のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) に移動します。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で [ファイル] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [データセットを作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後でリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータアセットをインポートしてからリビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットをインポートする

1. データセットの詳細ページの [インポートされたアセット] で、データセットのデータアセットが現在保存されている場所に基づいて [Amazon S3 からインポート] または [アップロード] (コンピュータからアップロードするため) を選択します。
2. 選択内容に応じて、プロンプトに従います。アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。
3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [リビジョンの最終処理] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、製品に追加する前に編集または削除できます。

トピック

- [リビジョンを編集する](#)
- [リビジョンを削除する](#)

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[更新] を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。このアクションを元に戻すことはできません。

ステップ 5: 新しい製品を公開する

少なくとも1つのデータセットを作成し、アセットが含まれるリビジョンを確定したら、そのデータセットを製品の一部として公開する準備が整います。詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

新しい製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
3. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、[製品の可視性](#) および [機密カテゴリの情報](#) を参照してください。
4. [データの追加] セクションの [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. 「選択したデータセット」に移動して、選択内容を確認します。


データセットの名前、データセットのタイプ、およびデータセットの最終更新日のタイムスタンプを確認できます。
 - b. [リビジョンアクセスルールを選択] に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。詳細については、「[リビジョンアクセスルール](#)」を参照してください。
5. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。

6. (オプション) [製品を定義] セクションの [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。
 - a. 編集ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。
 - b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。


データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

 Note

AWS Data Exchange データディクショナリはデータディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードするデータディクショナリが保存されていない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレートリンクまたはサンプルデータディクショナリリンクを選択できます。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

 Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
7. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択してから、テンプレートに特定の商品情報を入力します。

8. [次へ] をクリックします。
9. オファーを設定します。
 - パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリックに設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。
 1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 2. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。

3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定します。これは、誰がこの製品をサブスクライプできるかを制御できるようにします。詳細については、「[プロバイダーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。
 4. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 5. [次へ] を選択します。
- プライベートオファーを作成している場合は、[カスタムオファーを追加] セクションでオファーの詳細を設定します。
 1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 3. [Offer expiration date] (オファーの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 4. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 5. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
10. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。
 11. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、パブリックオファーが設定されたデータ製品を公開するために手動で実行する部分が完了しました。AWS Data Exchange が製品を準備して公開します。[製品の概要] ページの製品のステータスが[承認待ち]になり、公開されると [公開済み] に変更されます。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオファーをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオファーはコピーされませんが、パブリックオファーがコピーされます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるボタンをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンから [コピーを作成] を選択します。
5. [新しい製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

API が含まれる製品の公開

概要

以下のトピックでは、AWS Data Exchange で REST API データセットを作成して、API が含まれる新しい製品を公開するプロセスを説明します。このプロセスは、AWS Data Exchange コンソール、または AWS Command Line Interface を使用して完了することができます。

Amazon API Gateway REST API をセットアップしたら、AWS Data Exchange で新しい API データセットを作成できます。その後、リビジョンを作成して、API アセットを追加できます。

API アセットを作成して発行することにより、AWS Data Exchange エンドポイントへのサブスクライバークエストを API Gateway API にプロキシできるようになります。次に、このデータセットを製品に追加し、料金を追加できます。それらの完了後、AWS Marketplace カタログと AWS Data Exchange カタログでサブスクライバーがその製品を表示し、サブスクライブできます。

リビジョンアクセスルール、プライベート製品、プライベートオファー、サブスクリプション検証などの AWS Data Exchange 機能を利用できます。

契約ベースの価格設定、従量制の原価価格（契約価格は 0 ドル）、または従量制価格と契約価格の組み合わせのみを選択できます。

標準の従量制コストを選択することも、カスタムの従量制コストを指定することもできます。標準の従量制料金には、次の3つのタイプがあります。

- API リクエスト単位
- API リクエストが成功するたびに
- 転送されたデータ単位 (バイト)

Note

従量制コストは製品内のすべての API データセットに適用されます。そのため、異なる API データセットに対して同じディメンションに対して異なる価格を請求する場合は、これらのデータセットを異なる製品で作成することをお勧めします。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [前提条件](#)
- [ステップ 1: API リソースポリシーを更新する](#)
- [ステップ 2: API データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンに API アセットを追加する](#)
- [ステップ 5: API が含まれる新しい製品を公開する](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

前提条件

API が含まれる製品を発行するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- AWS Data Exchange を含めた AWS のサービスのサービスを使用する前に、AWS にサインアップして (IAM) ユーザーアカウントを作成する必要があります。詳細については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[使用開始](#)」を参照してください。
- AWS Data Exchange で製品を作成するには、お使いの AWS アカウントを AWS Marketplace 販売者として登録する必要があります。データセットの作成にはこのアカウントを使用します。API

Gateway リソースを持つアカウントが、データセットを作成しているアカウントと同じアカウントである必要はありません。

- REST API は、Amazon DynamoDB や AWS Lambda など、データにアクセスするために適切なリクエストとレスポンスモデルを使用する統合が設定された Amazon API Gateway 上にある必要があります。詳細については、「Amazon API Gateway デベロッパーガイド」の「[API Gateway での REST API の開発](#)」と「[REST API の操作](#)」を参照してください。

Note

サポートされるのはパブリック API Gateway API のみです。

- API Gateway REST API は、AWS Data Exchange サービスプリンシパルからの呼び出しを認証および認可できる必要があります。AWS Data Exchange から API へのすべてのリクエストは、AWS Data Exchange 認証情報で署名された署名バージョン 4 (SigV4) プロトコルを使用します。AWS Data Exchange は、カスタムドメインとドメインキーのマッピングで動作します。

Note

AWS Data Exchange は、Amazon Cognito、No-Auth、および AWS Lambda オーソライザーをサポートしません。

- API Gateway REST API が認証と認可にカスタムアイデンティティシステムを使用する場合は、IAM 認証を使用し、API を記述する OpenAPI スキーマをインポートするように設定します。AWS Data Exchange は、独自のサービス認証情報を使用して API Gateway REST API を呼び出し、アカウント ID などのサブスクライバー情報を含めます。
- バックエンドとの統合に対する責任は、API Gateway REST API が担います。これを行うには、以下のいずれかを実行します。
 - API Gateway REST API を通じて行われるすべてのリクエストに、バックエンドが検証できる継続期間の長い認証トークンをアタッチする。
 - API Gateway を使用して、認証情報の生成と API の呼び出しを実行できる Lambda 関数を呼び出す。

API は、[API 統合リクエスト仕様](#)に従って呼び出されます。

詳細については、次のトピックを参照してください。

トピック

- [API データセットのセキュリティ](#)
- [API 統合リクエスト仕様](#)
- [ヘッダー転送](#)

API データセットのセキュリティ

AWS Data Exchange は、Transport Layer Security (TLS) 1.2 を使用して、トラフィックのエンドツーエンドの暗号化を行います。すべてのメタデータは保管時に暗号化されます。AWS Data Exchange は、サブスクライバーのリクエストやバックエンドからのレスポンスを保存しません。抽出されるのは、料金の請求に必要な計測メタデータのみです。

API 統合リクエスト仕様

AWS Data Exchange の API は、カスタマーリクエストからのすべてのヘッダー ([ヘッダー転送](#) にリストされているヘッダーを除く)、本文、http メソッド、パス、およびクエリ文字列をそのまま渡し、以下のヘッダーを追加します。

```
// These headers help prevent Confused Deputy attacks. They enable the SourceAccount
// and SourceArn variables in IAM policies.
'x-amz-source-account': ACCOUNT_ID,
'x-amz-source-arn': `arn:aws:dataexchange:${REGION}:${OWNER_ACCOUNT_ID}:data-sets/
${DATA_SET_ID}/revisions/${REVISION_ID}/assets/${ASSET_ID}`,

// These headers identify the API Asset in Data Exchange.
'x-amzn-dataexchange-asset-id': ASSET_ID,
'x-amzn-dataexchange-data-set-id': DATA_SET_ID,
'x-amzn-dataexchange-revision-id': REVISION_ID,

// This header identifies the Data Exchange Product.
'x-amzn-dataexchange-product-id': PRODUCT_ID,

// This header identifies the caller of Data Exchange. It will contain subscriber
// information.
'x-amzn-dataexchange-requester-account-id': REQUESTER_ACCOUNT_ID,

// Providers can attach custom metadata in the form of key/value pairs
// to a particular subscription. We will send these key/value pairs as stringified
// JSON.
'x-amz-dataexchange-subscription-metadata': STRINGIFIED_METADATA,
```

ヘッダー転送

AWS Data Exchange はプロバイダーバックエンドへの転送前に、認証に関連するヘッダーや Amazon の名前空間が設定されているヘッダーを削除します。具体的に、AWS Data Exchange は以下のヘッダーを削除します。

- Authentication ヘッダー
- x-amz で始まるヘッダー

host ヘッダーは、プロキシの結果として上書きされます。

ステップ 1: API リソースポリシーを更新する

[前提条件](#)を満たす Amazon API Gateway REST API がある場合は、その API リソースポリシーを更新して、サブスクライバーが API のスキーマを取得するリクエストを実行するときに AWS Data Exchange が API を呼び出せるようにする必要があります。

API リソースポリシーを更新する

1. API のリソースポリシーに、以下のポリシーを追加します。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {"Service": "dataexchange.amazonaws.com"},
  "Action": "execute-api:Invoke",
  "Resource": "*",
  "Condition": {"StringEquals": {"aws:SourceAccount": "<account-id>"}}
}
```

2. account-id は、API データセットを作成することになるアカウントに置き換えます。

API Gateway リソースを持つアカウントが、データセットを作成しているアカウントと同じアカウントである必要はありません。

このポリシーは、これらの許可を AWS Data Exchange サービスプリンシパルによって実行された呼び出しに制限し、お使いのアカウント以外は AWS Data Exchange の API との統合を認可できないようにします。

Note

AWS Data Exchange がこの呼び出しを実行することを明示的に拒否するリソースポリシーがある場合は、この拒否を削除または制限する必要があります。

これで、[API データセットを作成する](#)準備が整いました。

ステップ 2: API データセットを作成する

AWS Data Exchange のデータセットは動的で、リビジョンを使用してバージョン管理されます。各リビジョンには少なくとも 1 つのアセットが含まれています。詳細については、「[内のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

API データセットを作成するには、AWS Data Exchange コンソール、または AWS Command Line Interface を使用できます。

- [API データセットの作成 \(コンソール\)](#)
- [API データセットの作成 \(AWS CLI\)](#)

API データセットの作成 (コンソール)

API データセットを作成する (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で、[Amazon API Gateway API] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

API データセットの作成 (AWS CLI)

API データセットを作成する (CLI)

1. `create-data-set` コマンドを使用して、API データセットを作成します。

```
$ aws dataexchange create-data-set \  
--asset-type API_GATEWAY_API \  
--description 'Data Set Description' \  
--name 'Data Set Name' \  
  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID",  
  "AssetType": "API_GATEWAY_API",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00",  
  "Description": "Data Set Description",  
  "Id": "$DATA_SET_ID",  
  "Name": "Data Set Name",  
  "Origin": "OWNED",  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00"  
}
```

2. 新しいアセットタイプの `API_GATEWAY_API` に注目してください。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、データセットの作成後にリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

リビジョンを作成するには、AWS Data Exchange コンソール、または AWS Command Line Interface を使用できます。

- [リビジョンの作成 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンの作成 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンの作成 (コンソール)

リビジョンを作成する (コンソール)

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

これで、[リビジョンに API アセットを追加する](#)準備が整いました。

リビジョンの作成 (AWS CLI)

リビジョンを作成する (AWS CLI)

1. create-revision コマンドを使用して、リビジョンを作成します。

```
$ aws dataexchange create-revision \  
--data-set-id $DATA_SET_ID \  
--comment 'First Atlas Revision' \  
{ \  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/  
revisions/$REVISION_ID", \  
  "Comment": "First Atlas Revision", \  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00", \  
  "DataSetId": "$DATA_SET_ID", \  
  "Finalized": false, \  
  "Id": "$REVISION_ID", \  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00" \  
}
```

2. [リビジョンに API アセットを追加します](#)。

Note

ステージだけでなく、インポートする API Gateway REST API の ID も把握しておく必要があります。

ステップ 4: リビジョンに API アセットを追加する

API アセットには、サブスクライバーが API を呼び出すために必要な情報が含まれています。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

以下の手順では、データアセットをインポートし、その後リビジョンを確定します。

リビジョンにアセットを追加するには、AWS Data Exchange コンソール、または AWS CLI を使用します。

- [リビジョンへの API アセットの追加 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンへの API アセットの追加 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンへの API アセットの追加 (コンソール)

リビジョンにアセットを追加する (コンソール)

1. データセットの詳細ページの [API アセット] セクションで、[追加] を選択します。
2. [API ステージを選択] にある [Amazon API Gateway API] で、入力ボックスに API を入力するか、ドロップダウンリストから以下のいずれかを選択します。
 - [別の AWS アカウント のAPI] – これは、アクセスする許可が付与されたクロスアカウント API です。
 - [この AWS アカウント の中で] – これは、お使いの AWS アカウント 内の API です。
 - a. [別の AWS アカウント のAPI] を選択した場合は、入力ボックスに API ID と [API ステージ名] を入力します。
 - b. [この AWS アカウント の中で] を選択した場合は、ドロップダウンリストから API [ステージ名] を選択します

Note

新しい API ステージを作成するには、[新規作成] を選択し、[Amazon API Gateway で新しい API を作成] モーダルの手順に従います。新しいステージが作成されたら、ステップ 2 を繰り返します。

3. [Advanced configuration – optional] (高度な設定 – オプション) では、[Connect existing Amazon API Gateway usage plan] (既存の Amazon API Gateway の使用量プランを接続) することを選択して既存の使用プランに定義されているスロットリングとクォータ制限を使用し、[API key] (API キー) を入力することができます。
4. [Document API for subscribers] (サブスクライバーのドキュメント API) で、サブスクライバーが製品をサブスクライブした後で表示される API に関する詳細を入力します。
 - a. [API 名] には、サブスクライバーが API アセットを識別するために使用できる名前を入力します。

Note

[この AWS アカウント の中で] が選択されている場合、[API 名] が自動入力されていますが、これは必要に応じて変更できます。
[別の AWS アカウント のAPI] が選択されている場合、[API 名] にデフォルトの名前が入力されます。これは、この API が何かをサブスクライバーが簡単に理解できるように変更してください。

- b. [OpenAPI 3.0 specification] (OpenAPI 3.0 仕様) には、以下のいずれかを実行します。
 - i. OpenAPI 3.0 仕様ファイルを入力するか、コピーして貼り付ける。
 - ii. [.JSON ファイルからインポート] を選択して、ローカルコンピュータからインポートする.json ファイルを選択する。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。
 - iii. [Import from Amazon API Gateway] (Amazon API Gateway からインポート) を選択して、インポートする仕様を選択する。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。

- c. [その他のドキュメント – オプション] には、サブスクライバーが API について知っておくと役に立つ追加情報を入力します。Markdown がサポートされています。

Note

このアセットをリビジョンに追加した後で、OpenAPI 仕様とその他のドキュメントを編集することはできません。

リビジョンが確定されていないときにこの情報を更新する場合は、アセットを置き換えることができます。

リビジョンが確定されているときにこの情報を更新する場合は、更新されたアセットで新しいリビジョンを作成できます。

5. [API ステージを追加] を選択します。

アセット (この場合は API) をデータセットにインポートするジョブが開始されます。

Note

Amazon API Gateway に API がない場合は、API を作成するように求められます。

6. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
7. 追加する API がある場合は、ステップ 2 を繰り返します。
8. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
9. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンを製品に追加する前に、[リビジョンを編集する](#)、または[リビジョンを削除する](#)ことができます。

これで、[新しい API データ製品を公開する](#)準備が整いました。

リビジョンへの API アセットの追加 (AWS CLI)

API アセットは、IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API ジョブを実行することによって追加できます。

リビジョンに API アセットを追加する (AWS CLI)

1. create-job コマンドを使用して、リビジョンに API アセットを追加します。

```
$ aws dataexchange create-job \  
  --type IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API \  
  --details '{"ImportAssetFromApiGatewayApi":  
{  
  "DataSetId": "$DATA_SET_ID", "RevisionId": "$REVISION_ID", "ApiId": "$API_ID", "Stage": "$API_STAGE"  
  {  
    "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:jobs/$JOB_ID",  
    "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",  
    "Details": {  
      "ImportAssetFromApiGatewayApi": {  
        "ApiId": "$API_ID",  
        "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
        "ProtocolType": "REST",  
        "RevisionId": "$REVISION_ID",  
        "Stage": "$API_STAGE"  
      }  
    },  
    "Id": "$JOB_ID",  
    "State": "WAITING",  
    "Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",  
    "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00"  
  }  
}  
  
$ aws dataexchange start-job --job-id $JOB_ID  
$ aws dataexchange get-job --job-id $JOB_ID  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:0123456789012:jobs/$JOB_ID",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",  
  "Details": {  
    "ImportAssetFromApiGatewayApi": {  
      "ApiId": "$API_ID",  
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
      "ProtocolType": "REST",  
      "RevisionId": "$REVISION_ID",  
      "Stage": "$API_STAGE"  
      "ApiEndpoint": "string",  
      "ApiKey": "string",  
      "ApiName": "string",  
      "ApiDescription": "string",  
      "ApiSpecificationDownloadUrl": "string",
```

```
        "ApiSpecificationDownloadUrlExpiresAt": "string"
    }
},
"Id": "$JOB_ID",
"State": "COMPLETED",
"Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",
"UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.538000+00:00"
}
```

2. `list-revision-assets` コマンドを使用して、新しいアセットが適切に作成されたことを確認します。

```
$ aws dataexchange list-revision-assets \
  --data-set-id $DATA_SET_ID \
  --revision-id $REVISION_ID
{
  "Assets": [
    {
      "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/
revisions/$REVISION_ID/assets/$ASSET_ID",
      "AssetDetails": {
        "ApiGatewayApiAsset": {
          "ApiEndpoint": "https://$API_ID.execute-api.us-
east-1.amazonaws.com/$API_STAGE",
          "ApiId": "$API_ID",
          "ProtocolType": "REST",
          "Stage": "$API_STAGE"
        }
      },
      "AssetType": "API_GATEWAY_API",
      "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00",
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",
      "Id": "$ASSET_ID",
      "Name": "$ASSET_ID/$API_STAGE",
      "RevisionId": "$REVISION_ID",
      "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00"
    }
  ]
}
```

これで、[API データ製品を公開する](#)準備が整いました。

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[Update] (アップデート) を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。このアクションを元に戻すことはできません。

ステップ 5: API が含まれる新しい製品を公開する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットが含まれるリビジョンを確定したら、そのデータセットを製品の一部として公開する準備が整います。詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

API が含まれる新しい製品を公開するには、AWS Data Exchange コンソール、または AWS Marketplace Catalog API を使用できます。AWS Marketplace Catalog API を使用して新しい製品を公開する方法に関する詳細については、「[AWS Data Exchange での AWS Marketplace Catalog API の使用](#)」を参照してください。

- [API が含まれる新しい製品の公開 \(コンソール\)](#)

API が含まれる新しい製品の公開 (コンソール)

API が含まれる新しい製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
3. 製品の可視性で
 - a. 商品の商品表示オプションを [公開] または [非公開] から選択します。

パブリックオファーは、可視性が **パブリック** に設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。

詳細については、「[製品の可視性](#)」を参照してください。

- b. 製品の機密情報設定を選択します。

詳細については、「[機密カテゴリの情報](#)」を参照してください。
 - c. [次へ] を選択します。
4. [データを追加] で:
 - a. [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- b. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新日のタイムスタンプを確認できます。
- c. [リビジョンアクセスルールを選択] にスクロールして、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。

詳細については、「[リビジョンアクセスルール](#)」を参照してください。
- d. [次へ] を選択します。

5. 「製品の定義」では:

- a. [製品概要] に、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。

- b. (オプション) [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。
 - i. [編集] ダイアログボックスで [アップロード] を選択し、新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- ii. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

AWS Data Exchange データディクショナリはデータディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードするデータディクショナリが保存されていない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレート リンクまたは サンプルデータディクショナリ リンクを選択できます。

- iii. [データディクショナリのプレビュー] を選択してデータディクショナリをプレビューします。
 - iv. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- v. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。

- vi. [保存] を選択します。
6. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択してから、テンプレートに特定の商品情報を入力します。

7. [次へ] をクリックします。
8. 「公開オファーを追加」(公開オファー用) または 「カスタムオファーを追加」(非公開オファー用) でオファーを設定します。

パブリックオファーは、可視性がパブリックに設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。

a. プライベートオファーのみ:

- i. リストされているオファータイプから、プライベートオファー、更新済みのプライベートオファー、または Bring Your Own Subscription (BYOS) の中から 1 つを選択します。
- ii. [サブスクリバークアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクリバークアカウントを少なくとも 1 つ追加します。

b. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。

c. 従量制料金 (オプション) の場合は、「追加」を選択します。

- i. 「従量制コストを追加」で、「タイプ」リストから API 呼び出しのコストの種類を選択します。
 - API リクエスト単位
 - API リクエストが成功するたびに
 - 転送されたデータ単位 (バイト)
 - 新しいカスタム従量制コスト
- ii. 購読者の請求書に記載されているコスト表示名を入力または更新します。
- iii. 事前に定義された従量制料金を使用している場合、キーは自動的に生成され、編集できないため、レスポンスヘッダーに送り返す必要もありません。
- iv. 新しいカスタム従量制コストを作成する場合は、API レスポンスヘッダーの従量制コストの識別子であるキーを入力します (最大 15 文字)。

x-amz-dataexchange-metering このキーはレスポンスヘッダーの一部として送り返す必要があります。

Example カスタムキー

VertexCount というカスタムキーと別の **EdgeCount** というカスタムキーというがある場合、「x-amz-dataexchange-metering」レスポンスヘッダーの値はになることもあれば、2つの別々のヘッダー行を返すこともあります。

```
x-amz-dataexchange-metering: VertexCount=3
```

```
x-amz-dataexchange-metering: EdgeCount=10
```

- v. サブスクライバーがユニットごとに請求する価格を [価格/ユニット] に入力します。
- vi. (オプション) 単位数を入力すると、従量制料金計算ツール に費用の例が表示されます。
- vii. (オプション) 商品詳細ページに表示される従量制コストの簡単な説明を入力します。
- viii. [追加] を選択します。
- ix. (オプション) 同じ手順を繰り返して、その他の従量制料金を追加します。

従量制費用の順序は商品詳細ページに表示されます。並べ替えることはできません。

Note

オファーの作成後、従量制料金の価格と説明を編集できます。詳細については、「[製品とオファーの詳細の更新](#)」を参照してください。

- d. [オファーの有効期限] を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 - e. 税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーを選択します。
 - f. (オプション) パブリック オファーの場合のみ、サブスクリプション検証 を設定します。これにより、この製品をサブスクライブできるユーザーを制御できるようになります。詳細については、「[プロバイダーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。
 - g. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 - h. [次へ] を選択します。
9. 「レビューと公開」セクションで、商品情報を確認します。
- a. 商品ページのプレビューを展開して、公開後に商品ページがどのように表示されるかを確認してください。

- b. (オプション) 任意のセクションの「編集」ボタンを選択して、そのセクションを編集します。
10. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、パブリックオファーが設定されたデータ製品を公開するために手動で実行する部分が完了しました。AWS Data Exchange が製品を準備して公開します。

[製品の概要] ページの製品のステータスが[承認待ち]になり、公開されると [公開済み] に変更されます。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオファーをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオファーはコピーされませんが、パブリックオファーがコピーされます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるボタンをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンから [コピーを作成] を選択します。
5. [新しい製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

Amazon Redshift のデータ共有が含まれる製品の公開 (プレビュー)

概要

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有が含まれています。データ共有が含まれる製品を顧客がサブスクライブすると、データプロバイダーがデータ共有に追加するテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データプロバイダーは、クラスターで Amazon Redshift のデータ共有の AWS Data Exchange を作成します。次に、サブスクライバーがアクセスするスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数をデータ共有に追加します。追加したら、データ共有を AWS Data Exchange にインポートし、データセットを作成して製品に追加してから、製品を公開します。サブスクライバーには、サブスクリプション時にデータ共有へのアクセス権が付与されます。

Amazon Redshift で Amazon Redshift のデータ共有を設定したら、AWS Data Exchange で新しい Amazon Redshift データセットを作成できます。その後、リビジョンを作成し、Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加できます。これは、AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストが Amazon Redshift のデータ共有にプロキシされることを可能にします。次に、このデータセットを製品に追加し、料金を追加できます。それらの完了後、AWS Data Exchange カタログでサブスクライバーがその製品を表示し、サブスクライブできます。

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon Redshift データセットを作成し、Amazon Redshift データセットが含まれた新しい製品を公開するためのプロセスを説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する](#)
- [ステップ 5: Amazon Redshift のデータセットが含まれる新しい製品を公開する](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

アセットとは、AWS Data Exchange 内のデータです。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

1. Amazon Redshift クラスター内にデータ共有を作成します。

データ共有の作成方法に関する詳細については、「[Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド](#)」の「プロデューサーとしての AWS Data Exchange データ共有の使用」を参照してください。

Note

データ共有はパブリックアクセス可能に設定することをお勧めします。そうしなければ、パブリックアクセス可能なクラスターを持つ顧客がデータを消費できなくなります。

2. [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#)。

ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有が含まれています。詳細については、「[Amazon Redshift のデータセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) に移動します。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で、[Amazon Redshift のデータ共有] を選択します。
5. [データセットの定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 - オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後でリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでリビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加し、リビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットを追加する

1. データセットの詳細ページの AWS Data Exchange [Amazon Redshift のデータ共有] セクションで [データ共有を追加] を選択します。
2. [AWS Data Exchange Amazon Redshift のデータ共有] でデータ共有を選択し、[データ共有を追加] を選択します。

Note

リビジョンには、最大 20 個のデータ共有を追加できます。

アセットをリビジョンにインポートするジョブが開始されます。

3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、製品に追加する前に [編集](#) または [削除](#) できます。

ステップ 5: Amazon Redshift のデータセットが含まれる新しい製品を公開する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットが含まれるリビジョンを確定したら、Amazon Redshift のデータセットが含まれる製品を公開する準備が整います。詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

Amazon Redshift のデータセットが含まれる製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
3. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、[製品の可視性](#) および [機密カテゴリの情報](#) を参照してください。
4. 「データを追加」セクションの「所有データセット」で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、「選択項目を追加」を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、およびデータセットの最終更新日のタイムスタンプを確認できます。

- b. [リビジョンアクセスルールを選択] に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。

詳細については、「[リビジョンアクセスルール](#)」を参照してください。

5. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。

6. (オプション) [製品を定義] セクションの [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。


詳細については、[データディクショナリ](#) および [サンプル](#) を参照してください。

- a. 編集ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。


データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

 Note

AWS Data Exchange データディクショナリはデータディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードするデータディクショナリが保存されていない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレートリンクまたはサンプルデータディクショナリリンクを選択できます。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

 Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
7. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択してから、テンプレートに特定の商品情報を入力します。

8. [次へ] をクリックします。
9. オファーを設定します。
 - パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリックに設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。
 1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 2. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定します。これは、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[プロバイダーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。
 4. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 5. [次へ] を選択します。
 - プライベートオファーを作成している場合は、[カスタムオファーを追加] セクションでオファーの詳細を設定します。
 1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 3. [Offer expiration date] (オファーの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 4. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 5. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
10. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。

11. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、パブリックオファーが設定されたデータ製品を公開するために手動で実行する部分が完了しました。AWS Data Exchange が製品を準備して公開します。[製品の概要] ページの製品のステータスが[承認待ち] になり、公開されると [公開済み] に変更されます。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオファーをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオファーはコピーされませんが、パブリックオファーがコピーされます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるボタンをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンから [コピーを作成] を選択します。
5. [製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスを含む製品の公開

概要

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、プロバイダーは Amazon S3 バケットまたは特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。プロバイダーは、サブスクリプション、エンタイトルメント、請求、支払いを自動的に管理するためにも AWS Data Exchange を使用します。

データプロバイダーは、コピーを作成または管理しなくても、Amazon S3 バケット全体、または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。これらの共有 Amazon S3 オブジェクトは、AWS Key Management Service (AWS KMS) の中に、または AWS マネージドキー(SSE-S3)で保存されているお客様が管理するキーを使用してサーバー側で暗号化できます。KMS キーのモニタリングおよび暗号化コンテキストの理解の詳細については、[the section called “Amazon S3 データアクセスのキー管理”](#) を参照してください。顧客がデータ製品に登録すると、AWS Data Exchange によって、Amazon S3 アクセスポイントが自動的にプロビジョニングされ、お客様に代わってリソースポリシーが更新され、サブスクライバーに読み取り専用アクセス権が付与されます。サブスクライバーは、Amazon S3 のデータにアクセスするために Amazon S3 バケット名を使用する任意の場所で、Amazon S3 アクセスポイントのエイリアスを使用できます。

サブスクリプションが終了すると、サブスクライバーの権限は取り消されます。サブスクライバーとの契約を早期に終了することを選択した場合は、[AWS Support](#) にお問い合わせください。データ購読契約 (DSA) に購読条件を追加できます。

Amazon S3 データアクセスが含まれる製品を発行するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

前提条件

- データをホストする Amazon S3 バケットが、Amazon S3 バケット所有者による強制設定で [ACL 無効] をオンにして設定されていることを確認します。詳細については、Simple Storage Service ユーザーガイドの[オブジェクトの所有権のコントロールとバケットに対する ACL の無効化](#)を参照してください。
- 共有オブジェクトにサブスクライバーが正常にアクセスするには、共有オブジェクトが Amazon S3 標準ストレージクラスに含まれるか、S3 インテリジェント階層化を使用して管理されている必要があります。他のストレージクラスに属している場合、またはディープアーカイブでインテリジェント階層化を有効にしている場合、サブスクライバーには RestoreObject の権限がないためエラーが表示されます。
- データをホストする Amazon S3 バケットで、暗号化が無効になっているか、Amazon S3 管理キー (SSE-S3) または AWS Key Management Service (AWS KMS) で暗号化されていることを確認します。
- カスタマー管理キーを使用している場合は、次のものがが必要です。
 1. KMS キーに対する kms:CreateGrant への IAM 権限。これらの権限には、キーポリシー、IAM 認証情報、または KMS キーへの AWS KMS 許可を通じてアクセスできます。キー管理の詳細と AWS Data Exchange による AWS KMS 許可の使用方法については、[AWS KMS 許可の作成](#)を参照してください。

アクセス権限を付与するには、ユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- AWS IAM Identity Center のユーザーとグループ:

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[アクセス許可一式を作成](#)」の手順を実行します。

- IAM 内で、ID プロバイダーによって管理されているユーザー:

ID フェデレーションのロールを作成します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティー ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールの作成](#)」を参照してください。

- IAM ユーザー:

- ユーザーに設定できるロールを作成します。手順については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザー用ロールの作成](#)」を参照してください。

- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加する。「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス許可の追加](#)」の指示に従います。

AWS Management Console の外部で AWS を操作するには、プログラマチックアクセス権が必要です。プログラマチックアクセス権を付与する方法は、AWS にアクセスしているユーザーのタイプによって異なります。

ユーザーにプログラマチックアクセス権を付与するには、以下のいずれかのオプションを選択します。

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	To	方法
<p>ワークフォースアイデンティティ</p> <p>(IAM Identity Center で管理されているユーザー)</p>	<p>一時的な認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDK、または AWS API へのプログラマチックリクエストに署名します。</p>	<p>使用するインターフェイス用の手引きに従ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • AWS CLI については、AWS Command Line Interface ユーザーガイドの「AWS IAM Identity Center を使用するための AWS CLI の設定」を参照してください。 • AWS SDK、ツール、および AWS API については、「AWS SDK とツールリファレンスガイド」の「IAM Identity Center 認証」を参照してください。
IAM	<p>一時的な認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDK、または AWS API へのプログラムによるリクエストに署名します。</p>	<p>「IAM ユーザーガイド」の「AWS リソースでの一時的な認証情報の使用」の指示に従ってください。</p>

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	To	方法
IAM	(非推奨) 長期的な認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDK、AWS API へのプログラムによるリクエストに署名します。	<p>使用するインターフェイス用の手順に従ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • AWS CLI については、AWS Command Line Interface ユーザーガイドの「IAM ユーザー認証情報を使用した認証」を参照してください。 • AWS SDK とツールについては、AWS SDK とツールリファレンスガイドの「長期認証情報を使用して認証する」を参照してください。 • AWS API については、IAM ユーザーガイドの「IAM ユーザーのアクセスキーの管理」を参照してください。

KMS キーのキーポリシーに追加する方法を示す JSON ポリシーの例を次に示します。

```
{
  "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "<IAM identity who will call Dataexchange API>"
  },
  "Action": "kms:CreateGrant",
  "Resource": "*"
}
```


次のポリシーは、使用される IAM ID のポリシー追加例を示しています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
      "Action": [
        "kms:CreateGrant"
      ],
      "Resource": [
        <Enter KMS Key ARNs in your account>
      ]
    }
  ]
}
```

Note

前のステップで KMS キーに対する `kms:CreateGrant` 権限を取得していれば、クロスアカウント KMS キーも許可されます。別のアカウントがキーを所有している場合は、上記の例で説明されているように、キーポリシーと IAM 認証情報に対する権限が必要です。

2. Amazon S3 バケットキー機能を使用して、必ず KMS キーを使用して Amazon S3 バケット内の既存のオブジェクトと新しいオブジェクトを暗号化してください。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[S3 バケットキーの設定](#)」を参照してください。
 - Amazon S3 バケットに追加された新しいオブジェクトについては、デフォルトで Amazon S3 バケットキー暗号化を設定できます。Amazon S3Bucket キー機能を使用せずに既存のオブジェクトを暗号化した場合、これらのオブジェクトは Amazon S3 バケットキーを使用して暗号化するように移行する必要があります。

既存のオブジェクトの Amazon S3 バケットキーを有効にするには、`copy` オペレーションを使用します。詳細については、「[バッチオペレーションを使用してオブジェクトレベルで Amazon S3 バケットキーを設定する](#)」を参照してください。

- AWSマネージド KMS AWS 所有のキー キーまたはサポートされていない。サポートされていない暗号化スキームから現在サポートされている暗号化スキームに移行できます。詳細については、AWSストレージブログの「[Amazon S3 暗号化の変更](#)」を参照してください。
3. データをホストする Amazon S3 バケットを、AWS Data Exchange が所有するアクセスポイントを信頼するように設定します。これらの Amazon S3 バケットポリシーを更新して、Amazon S3 アクセスポイントを作成するAWS Data Exchange 権限を付与し、ユーザーに代わってサブスクライバーのアクセスを許可または削除する必要があります。ポリシーステートメントがない場合は、バケットポリシーを編集して Amazon S3 ロケーションをデータセットに追加する必要があります。

次にポリシーの例を示します。<Bucket ARN> を適切な値に置き換えてください。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "*"
      },
      "Action": [
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "<Bucket ARN>",
        "<Bucket ARN>/*"
      ],
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "s3:DataAccessPointAccount": [
            "337040091392",
            "504002150500",
            "366362662752",
            "330489627928",
            "291973504423",
            "461002523379",
            "036905324694",
            "540564263739",
            "675969394711",
            "108584782536",
```

```
        "844053218156"  
      ]  
    }  
  }  
]  
}
```

AWS Data Exchange を通じて、Amazon S3 バケット全体にデータ共有を委任できます。ただし、データセット内で共有したいバケットの特定のプレフィックスとオブジェクトに委任の範囲を委任することができます。以下に、スコープ付きポリシーの例を示します。<Bucket ARN> と "mybucket/folder1/*" を自分の情報で置き換えます。

```
{  
  "Version": "2012-10-17",  
  "Statement": [  
    {  
      "Sid": "DelegateToAdxGetObjectsInFolder1",  
      "Effect": "Allow",  
      "Principal": {  
        "AWS": "*"  
      },  
      "Action": [  
        "s3:GetObject"  
      ],  
      "Resource": [  
        "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/*"  
      ],  
      "Condition": {  
        "StringEquals": {  
          "s3:DataAccessPointAccount": [  
            "337040091392",  
            "504002150500",  
            "366362662752",  
            "330489627928",  
            "291973504423",  
            "461002523379",  
            "036905324694",  
            "540564263739",  
            "675969394711",  
            "108584782536",  
            "844053218156"  
          ]  
        }  
      }  
    }  
  ]  
}
```

```
    ]
  }
}
},
{
  "Sid": "DelegateToAdxListObjectsInFolder1",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "*"
  },
  "Action": "s3:ListBucket",
  "Resource": "arn:aws:s3:::mybucket",
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "s3:prefix": [
        "folder1/*"
      ]
    }
  },
  "StringEquals": {
    "s3:DataAccessPointAccount": [
      "337040091392",
      "504002150500",
      "366362662752",
      "330489627928",
      "291973504423",
      "461002523379",
      "036905324694",
      "540564263739",
      "675969394711",
      "108584782536",
      "844053218156"
    ]
  }
}
]
}
```

同様に、アクセス範囲を1つのファイルのみに限定するには、プロバイダーは次のポリシーを使用できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```

```
"Statement": [
  {
    "Sid": "DelegateToAdxGetMyFile",
    "Effect": "Allow",
    "Principal": {
      "AWS": "*"
    },
    "Action": [
      "s3:GetObject"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/myfile"
    ],
    "Condition": {
      "StringEquals": {
        "s3:DataAccessPointAccount": [
          "337040091392",
          "504002150500",
          "366362662752",
          "330489627928",
          "291973504423",
          "461002523379",
          "036905324694",
          "540564263739",
          "675969394711",
          "108584782536",
          "844053218156"
        ]
      }
    }
  }
]
```

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon S3 データセットを作成し、Amazon S3 データセットが含まれた新しい製品を公開するためのプロセスを説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する](#)
- [ステップ 3: データセットを確認して完成する](#)

- [ステップ 4: Amazon S3 データセットを AWS Data Exchange 製品に追加する](#)
- [ステップ 5: Amazon S3 へのアクセスを含む新しい製品を公開する](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する

Amazon S3 データセットを作成するには

1. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で [Amazon S3 オブジェクト] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [データセットを作成] を選択して、続行します。

ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する

サブスクライバーに提供する Amazon S3 バケットまたは Amazon S3 バケットロケーションを選択します。Amazon S3 バケット全体を選択することも、Amazon S3 バケット内で最大 5 つのプレフィックスまたはオブジェクトを指定することもできます。Amazon S3 バケットをさらに追加するには、別の Amazon S3 データ共有を作成する必要があります。

Amazon S3 データ共有アクセスを設定する

1. 「Amazon S3 データアクセスの設定」ページで、「Amazon S3 ロケーションの選択」を選択します。
2. [Amazon S3 ロケーションの選択] で、検索バーに Amazon S3 バケット名を入力するか、Amazon S3 バケット、プレフィックス、または Amazon S3 ファイルを選択して [選択項目を追加] を選択します。次に、[アプリケーションを追加] を選択します。

Note

プロバイダーが共有するプレフィックスやオブジェクトを再設定する必要がないように、オブジェクトとプレフィックスの大半が保存されている最上位のフォルダを選択することをお勧めします。

3. 「設定の詳細」で、リクエスト支払い設定を選択します。2つのオプションがあります。
 - リクエスト支払いを有効にする (推奨) — リクエストは Amazon S3 バケット内のすべてのリクエストと転送に対して支払いを行います。このオプションをお勧めするのは、サブスクライバーのリクエストや送金による意図しないコストを防ぐのに役立つからです。
 - リクエスト支払いを無効にする — Amazon S3 バケット内のサブスクライバーのリクエストと転送に対して支払いを行います。

リクエスト支払いの詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパーガイド」の「[リクエスト支払いバケットのオブジェクト](#)」を参照してください。
4. ニーズに最適なバケットポリシーを選択してください。Amazon S3 バケット全体に1つのバケットポリシーを使用するには、[一般] を選択します。これは1回限りの設定で、future プレフィックスやオブジェクトを共有するために追加の設定を行う必要はありません。選択した Amazon S3 ロケーションに固有のバケットポリシーを使用するには、[特定] を選択します。共有 Amazon S3 バケットには、Amazon S3 データアクセスデータセットを正常に作成するためのバケットポリシーが必要で、ACL を有効にすることはできません。
 - a. ACL を無効にするには、バケット権限に移動し、[オブジェクト所有権] を [バケット所有者強制] に設定します。
 - b. バケットポリシーを追加するには、バケットステートメントをクリップボードにコピーします。Amazon S3 コンソールの Amazon S3 権限タブのバケットポリシーセクションで、[編集] を選択し、バケットポリシーをステートメントに貼り付けて、変更を保存します。
5. Amazon S3 AWS KMS バケットにカスタマーマネージドキーを使用して暗号化されたオブジェクトが含まれている場合は、そのような KMS キーをすべて AWS Data Exchange と共有する必要があります。KMS キーを使用して Amazon S3 バケット内のオブジェクトを暗号化する際に必要な前提条件については、[the section called “Amazon S3 データアクセスを含む製品の公開”](#) を参照してください。これらの KMS キーを AWS Data Exchange と共有するには、次の操作を行います。

- [Amazon S3 データアクセスの設定] ページの [お客様が管理する KMS キー] で、[自分の AWS KMS keysから選択] または [AWS KMS keyARN を入力] を選択し、Amazon S3 共有ロケーションの暗号化に現在使用されているAWS KMS keysをすべて選択します。AWS Data Exchange は、これらの KMS キーを使用して、利用者が共有ロケーションにアクセスするための許可を作成します。詳細については、「[AWS KMSの許可](#)」を参照してください。

Note

AWS KMSは、既存の権限を含め、1つの KMS キーにつき 50,000 件の権限という制限があります。

6. Amazon S3 の場所、選択した KMS キー、設定の詳細を確認し、[保存して続行] を選択します。

ステップ 3: データセットを確認して完成する

新しく作成したデータセットを確認して完成させます。別の Amazon S3 データアクセスを作成して追加し、追加の Amazon S3 バケット、プレフィックス、オブジェクトへのアクセスを共有する場合は、[別の Amazon S3 データアクセスを追加] を選択します。

Note

これは、最初の Amazon S3 データアクセスで選択した Amazon S3 バケットとは別の Amazon S3 バケットでホストされているデータへのアクセスを共有する必要がある場合にお勧めします。

公開前に変更を加える場合は、[下書きを保存] を選択してデータセットをドラフトとして保存できます。次に、[データセットを確定] を選択して製品に追加します。


ステップ 4: Amazon S3 データセットを AWS Data Exchange 製品に追加する

以下の手順では、データセットを新しい製品または既存の AWS Data Exchange 製品に追加します。

データセットを新規または既存の AWS Data Exchange 製品に追加するには

1. [所有データセット] ページの [データセットの概要] で、[データセットの名前を編集]、[削除]、または [データセットから製品を作成] を行うことができます。


2. 製品の説明、ユースケース、メタデータ、価格、契約条件を指定して、製品の作成を完了します。
3. 完成したら、製品を確認して公開します。

 Note

顧客があなたの製品を購読すると、顧客はあなたに代わって作成された Amazon S3 アクセスポイントを使用してデータを読み取り、使用するアクセス権を受け取ります。

ステップ 5: Amazon S3 へのアクセスを含む新しい製品を公開する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定させた後、Amazon S3 データ アクセスを使用して製品を公開できます。詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

 Note

Amazon S3 のロケーションが変更され、サブスクライバーがこれらのオブジェクトにアクセスできない場合を除いて、共有 Amazon S3 オブジェクトを更新するときに新しいリビジョンを作成する必要はありません。

Amazon S3 へのアクセス権が含まれる新しい製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
3. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、[製品の可視性](#) および [機密カテゴリの情報](#) を参照してください。
4. 「データを追加」セクションの「所有データセット」で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、「選択項目を追加」を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、およびデータセットの最終更新日のタイムスタンプを確認できます。

- b. [リビジョンアクセスルールを選択] に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。

詳細については、「[リビジョンアクセスルール](#)」を参照してください。

5. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。

6. (オプション) [製品を定義] セクションの [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。

詳細については、[データディクショナリ](#) および [サンプル](#) を参照してください。

- a. 編集ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。


Note

AWS Data Exchange データディクショナリはデータディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードするデータディクショナリが保存されていない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナ

リテンプレート リンクまたは サンプルデータディクショナリ リンクを選択できません。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してデータディクショナリをプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

 Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
7. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択して、テンプレートに特定の商品の詳細を入力します。

8. [次へ] をクリックします。
 9. オファーを設定します。
- パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリック に設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。
 1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 2. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定して、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[プロバイダーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。
 4. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。

5. [次へ] を選択します。

- プライベートオファーを作成している場合は、[カスタムオファーを追加] セクションでオファーの詳細を設定します。
 1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 3. [Offer expiration date] (オファーの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 4. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 5. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
- 10. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。
- 11. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、パブリックオファーが設定されたデータ製品を公開するために手動で実行する部分が完了しました。AWS Data Exchange が製品を準備して公開します。製品概要ページでは、製品のステータスが「承認待ち」になっています。製品が公開されると、ステータスは「公開済み」に変わります。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオファーをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオファーはコピーできませんが、パブリックオファーがコピーできます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるオプションをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンリストから [コピーを作成] を選択します。
5. [製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データ権限データセットを含む製品の公開 (プレビュー)

概要

このプレビュー期間中に AWS Lake Formation データ権限データセットを含む製品を公開することに関心がある場合は、[AWS Support](#) にお問い合わせください。

AWS Lake Formation データ権限データセットには、AWS Lake Formation によって管理されるデータの LF タグと権限のセットが含まれています。Lake Formation データ権限が含まれる製品を顧客がサブスクライブすると、データセットに追加された LF タグに関連するデータベース、テーブル、および列に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データプロバイダーは、まず AWS Lake Formation で LF タグを作成し、それらのタグをサブスクライバーに提供したいデータと関連付けることから始めます。Lake Formation でのリソースのタグ付けについて詳しくは、「AWS Lake Formation デベロッパーガイド」の「[Lake Formation タグベースのアクセス制御](#)」を参照してください。次に、これらの LF タグと一連のデータ権限をアセットとして AWS Data Exchange にインポートします。サブスクライバーには、サブスクライブ時にそれらの LF タグに関連するデータへのアクセス権が付与されます。

以下のトピックで、AWS Lake Formation データアクセス権が含まれる製品を公開するプロセスを説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 2: AWS Lake Formation データ権限を作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 3: 確認して確定する](#)

- [ステップ 5: \(オプション \) リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 6: AWS Lake Formation データセットが含まれる新しい製品を公開する \(プレビュー\)](#)
- [AWS Lake Formation データ権限データセット \(プレビュー\) を公開する際の考慮事項](#)

ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する (プレビュー)

AWS Lake Formation のデータセットを作成するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. 「データセットタイプを選択」 で、AWS Lake Formation データ権限を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を定義します。詳細については、「[the section called “データセットのベストプラクティス”](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 — オプション] で [新しいタグを追加] を選択します。
7. [データセットを作成] を選択して続行します。

ステップ 2: AWS Lake Formation データ権限を作成する (プレビュー)

AWS Data Exchange LF タグを使用してデータ権限を付与します。共有するデータに関連付けられている LF タグを選択して、データに対するサブスクライバー権限を付与します。

AWS Lake Formation データ権限を作成するには

1. 「Lake Formation のデータ許可を作成」 ページで、「LF タグを追加」を選択します。
2. キーを入力し、LF タグ値を選択します。
3. 「リソースをプレビュー」を選択すると、LF タグがどのように解釈されるかを確認できます。
 - 「リソースのプレビュー」から、関連するデータカタログリソースを選択します。

Note

以下のリソースの IAMAllowedPrincipals グループを必ず取り消してください。詳細については、IAM ユーザーガイドの「[IAM ロールの一時的なセキュリティ認証情報の取り消し](#)」を参照してください。

4. 下のダイアログボックスの LF タグ表現の解釈と、データセットに関連する権限を確認してください。
5. [サービス アクセス] では、AWS Data Exchange がそのロールを引き受け、ユーザーに代わって Lake Formation データ権限へのアクセス、付与、資格の取り消しを許可する既存のサービスロールを選択します。次に、「Lake Formation のデータ許可を作成を選択します。AWS のサービスのロールの作成の詳細については、[「AWS のサービスにアクセス許可を委任するロールの作成」](#)を参照してください。
6. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[製品の詳細](#)」を参照してください。

7. (オプション) [製品を定義] セクションの [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。

詳細については、[データディクショナリ](#) および [サンプル](#) を参照してください。

- a. 編集ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。


データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

AWS Data Exchange データディクショナリはデータディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードするデータディクショナリが保存されていない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレート リンクまたは サンプルデータディクショナリ リンクを選択できます。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してデータディクショナリをプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

 Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
8. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択して、テンプレートに特定の商品の詳細を入力します。

9. [次へ] をクリックします。
10. オファーを設定します。

• パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリックに設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。

1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
2. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定して、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[プロバイダーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。
4. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
5. [次へ] を選択します。

• プライベートオファーを作成している場合は、[カスタムオファーを追加] セクションでオファーの詳細を設定します。

1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。

3. [Offer expiration date] (オファ어의有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 4. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 5. [オファ어의自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファ어의作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
11. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。
 12. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、パブリックオファーが設定されたデータ製品を公開するために手動で実行する部分が完了しました。AWS Data Exchange が製品を準備して公開します。製品概要ページでは、製品のステータスが「承認待ち」になっています。製品が公開されると、ステータスは「公開済み」に変わります。

ステップ 3: 確認して確定する

AWS Lake Formation データ権限 (プレビュー) を作成したら、データセットを確認して確定できます。

確認して確定するには

1. ステップ 1 のデータセットの詳細とタグが正しいかどうかを確認してください。
2. LF タグ表現を確認し、別の Lake Formation データ権限 (オプション)、関連するデータカタログソース、ジョブの詳細を追加します。

Note

ジョブは、作成されてから 90 日後に削除されます。

3. [確定] を選択します。

ステップ 5: (オプション) リビジョンを作成する

リビジョンを作成する

1. 「所有データセット」セクションから、リビジョンを追加したいデータセットを選択します。
2. [リビジョン] タブを選択します。
3. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
4. 「Lake Formation データ権限を変更」ページで、「LF タグを追加」を選択します。
5. 「データベース」と「テーブル」の権限を確認してください。
6. 「サービスアクセス」から、既存のサービスロールを選択し、「Lake Formation データ権限を作成」を選択します。

ステップ 6: AWS Lake Formation データセットが含まれる新しい製品を公開する (プレビュー)

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットが含まれるリビジョンを確定したら、AWS Lake Formation データセットが含まれる製品を公開する準備が整います。詳細については、「[the section called “製品の詳細”](#)」を参照してください。製品に関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

AWS Lake Formation データセットが含まれる新しい製品を公開する (プレビュー)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
4. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、[the section called “製品の可視性”](#) および [the section called “機密カテゴリの情報”](#) を参照してください。
5. 「データを追加」セクションの「所有データセット」で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、「選択項目を追加」を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、およびデータセットの最終更新日のタイムスタンプを確認できます。

- b. [リビジョンアクセスルールを選択] に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。

詳細については、「[リビジョンアクセスルール](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データ権限データセット (プレビュー) を公開する際の考慮事項

最適なサブスクライバー エクスペリエンスを確保するため、製品にアクティブなサブスクライバーがいる Lake Formation データ セット (プレビュー) の AWS Data Exchange が含まれている場合、アクセス許可に対して次の変更を行わないことを強くお勧めします。

- AWS Lake Formation データセットを含む公開済み製品で AWS Data Exchange に渡された IAM ロールを削除または変更しないことをお勧めします。このような IAM ロールを削除または変更すると、以下の問題が発生します。
 - Lake Formation のデータ権限にアクセスできる AWS アカウント は、アクセスを無期限に保持する可能性があります。
 - 製品にサブスクライブしているが、Lake Formation のデータ権限へのアクセスをまだ受け取っていない AWS アカウント は、アクセスを受けられません。

削除または変更した IAM ロールについては AWS Data Exchange は一切責任を負いません。

- AWS Lake Formation データセットを含む公開製品で AWS Data Exchange に渡された IAM ロールから付与された AWS Lake Formation データ権限を取り消さないことをお勧めします。そのような IAM ロールから付与されたデータ権限を取り消すと、以下の問題が発生します。
 - Lake Formation のデータ権限にアクセスできる AWS アカウント は、アクセスを無期限に保持する可能性があります。
 - 製品にサブスクライブしているが、Lake Formation のデータ権限へのアクセスをまだ受け取っていない AWS アカウント は、アクセスを受けられません。
- AWS Lake Formation データ セットを含む公開製品へのアクティブなサブスクリプションを持つ AWS アカウント から付与された AWS Lake Formation データ アクセス許可を取り消さないことをお勧めします。製品に登録されている AWS アカウント から付与されたデータ権限を取り消すと、それらのアカウントはアクセスできなくなり、カスタマー エクスペリエンスが低下します。

- AWS Lake Formation データ セットを含む製品を公開する場合は、AWS Glue Data Catalog のクロスアカウント バージョンをバージョン 3 に設定することをお勧めします。AWS Lake Formation データ セットを含む製品を公開しているときに Data Lake カタログのクロスアカウント バージョンをダウングレードすると、製品をサブスクライブしているものの、Lake Formation データ権限へのアクセスをまだ受け取っていない AWS アカウント がデータにアクセスできない可能性があります。

製品の説明テンプレート

AWS Data Exchange で製品を出品するときは、製品が何を提供するのかをサブスクライバーが理解するために必要なすべての情報が含まれる詳しい説明を含める必要があります。製品の詳しい説明に関する詳細については、「[詳しい説明](#)」を参照してください。

このセクションには、数多くの一般的な製品タイプの詳しい説明を作成する開始点として使用できる Markdown テンプレートが記載されています。

詳しい説明に以下のコンテンツをコピーして貼り付け、データ製品に該当するセクションを使用することができます。

詳しい説明の汎用テンプレート

```
---
## PRODUCT TITLE Data Product Overview
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

---
## Use Cases
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

---
## Metadata
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value
----|-----
Update Frequency | ADD INFO HERE
Data Source(s) | ADD INFO HERE
Original Publisher of data | ADD INFO HERE
```

Data Creation Date | *ADD INFO HERE*
Data Modification Date | *ADD INFO HERE*
Geographic coverage | *ADD INFO HERE*
Time period coverage | *ADD INFO HERE*
Is historical data “point-in-time” | *YES OR NO*
Data Set(s) Format(s) | *ADD INFO HERE*
Raw or scraped data | *ADD INFO HERE*
Key Fields | *ADD INFO HERE*
Key Words | *ADD INFO HERE*
Number of companies/brands covered | *ADD INFO HERE*

Key Data Points

Key data points include:

** Key Data Point:*

** Key Data Point:*

Additional Information

** [Data Source] ([ADD LINK HERE](#))*

** [Data Due Diligence Questionnaire] ([ADD LINK HERE](#))*

** [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] ([ADD LINK HERE](#))*

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance

for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information

that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

** [Company Fact Sheet] (ADD LINK HERE)*

詳しい説明の金融サービス用テンプレート

PRODUCT TITLE Data Product Overview

Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

Use Cases

Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Metadata

Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value

----|-----

Update Frequency | *YOUR INFO HERE*

Data Source(s) | *YOUR INFO HERE*

Original Publisher of data | *YOUR INFO HERE*

Data Creation Date | *YOUR INFO HERE*

Data Modification Date | *YOUR INFO HERE*

Geographic coverage | *YOUR INFO HERE*

Time period coverage | *YOUR INFO HERE*

Is historical data “point-in-time” | *YES OR NO*

Data Set(s) Format(s) | *YOUR INFO HERE*

Raw or scraped data | *YOUR INFO HERE*

Key Fields | *YOUR INFO HERE*

Key Words | *YOUR INFO HERE*

Number of companies/brands covered | *YOUR INFO HERE*

Standard entity identifiers | *YOUR INFO HERE, EXAMPLE BELOW*

examples include(include your identifier above then delete this section)

** CUSIP Number: A unique identification number assigned to all stocks and registered bonds in the US & Canada*

** ISIN: An International Securities Identification Number that uniquely identifies a specific securities issue (a series of stocks/bonds offered to raise funds from investors)*

** RIC: The Reuters Instrument Code is used to identify financial instruments/indices used in Refinitiv financial information networks*

** Bloomberg ID: 12-digit alpha-numeric ID used to identify securities*

** D-U-N-S Number: 9-digit identifier assigned to businesses by Dun & Bradstreet*

Tables

If this section is applicable, you can make a table and include information such as:

Description | Identifier | Format | Frequency

----|-----

FX FWD | FIGI | .CSV | Intraday

USD Deposits | CUSIP | .txt | End of Day

Interest Rate Swaps | ISIN | .json | Daily

Basis Swaps | CUSIP | .xml | Intraday

Key Data Points

Examples of key data points include:

** Symbol: Ticker symbol for the security*

** Exchange: Exchange MIC identifier*

** Currency: Trading currency code*

** Open: Opening price for the day*

** High: High price for the day*

** Low: Low price for the day*

** Last: Last price for the day*

** Volume: Trading volume for the day*

** Split Ratio: Ratio of new number of shares to old on the effective date*

** Cash Dividend: Cash dividend amount on the ex-dividend date*

** Dividend amount:*

** Extra dividends:*

** Total dividends paid this year:*

** Effective dates:*

- * *Textual descriptions of special dividends:*
- * *Dividend Currency: Currency for the cash dividend*

Additional Information

- * [Data Source] (*ADD LINK HERE*)
- * [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)
- * [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

- * *If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

- * [Company Fact Sheet] (*ADD LINK HERE*)

詳しい説明のヘルスケアおよびライフサイエンス用テンプレート

```
---
## PRODUCT TITLE Data Product Overview
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

---
## Use Cases
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

---
## Metadata
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value
----|-----
Update Frequency | YOUR INFO HERE
Data Source(s) | YOUR INFO HERE
Original Publisher of data | YOUR INFO HERE
Data Creation Date | YOUR INFO HERE
Data Modification Date | YOUR INFO HERE
Geographic coverage | YOUR INFO HERE
Time period coverage | YOUR INFO HERE
Is historical data “point-in-time” | YES OR NO
Data Set(s) Format(s) | YOUR INFO HERE
Raw or scraped data | YOUR INFO HERE
Key Fields | YOUR INFO HERE
Key Words | YOUR INFO HERE
Number of companies/brands covered | YOUR INFO HERE

---
## Key Data Points
Key data points include:

* Key Data Point:
* Key Data Point:

---
## Use Cases for the Data Set
Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.
```

Target Therapeutic Area / Disease Focus

Provide an overview of which therapeutic areas, diagnoses, procedures, medications, and more can be analyzed in the data listing, and can other data for different therapeutic areas be sourced.

Data Engineering Overview

Provide an overview of how the raw data was engineered. Questions to answer:

- * What data models were applied?*
- * What standards / terminologies applied?*
- * Was NLP post-processing used in the curation of the data?*

Additional Information

- * [Data Source] (ADD LINK HERE)*
- * [Data Due Diligence Questionnaire] (ADD LINK HERE)*

- * [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (ADD LINK HERE)*

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

** [Company Fact Sheet] (ADD LINK HERE)*

詳しい説明のマーケティングおよび広告用テンプレート

PRODUCT TITLE Data Product Overview

Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

Use Cases

Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Metadata

Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value

----|-----

Update Frequency | *YOUR INFO HERE*

Data Source(s) | *YOUR INFO HERE*

Original Publisher of data | *YOUR INFO HERE*

Data Creation Date | *YOUR INFO HERE*

Data Modification Date | *YOUR INFO HERE*

Geographic coverage | *YOUR INFO HERE*

Time period coverage | *YOUR INFO HERE*

Is historical data "point-in-time" | *YES OR NO*

Data Set(s) Format(s) | *YOUR INFO HERE*

Raw or scraped data | *YOUR INFO HERE*

Key Fields | *YOUR INFO HERE*

Key Words | *YOUR INFO HERE*

Number of companies/brands covered | *YOUR INFO HERE*

Data Channels | *Examples include web devices, mobile devices, CTV devices, offline purchases, household data, B2B data*

Data Set Specification

The following are examples of data set specifications that you may include if applicable:

The data sets are updated at midnight EST daily.

Custom data cuts are available if desired.

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing

(ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product.

Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information

that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

* [Company Fact Sheet] (*ADD LINK HERE*)

詳しい説明のメディアおよびエンターテイメント用テンプレート

PRODUCT TITLE Data Product Overview

Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

Use Cases

Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Metadata

Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value

----|-----

Update Frequency | *ADD INFO HERE*

Data Source(s) | *ADD INFO HERE*

Original Publisher of data | *ADD INFO HERE*

Data Creation Date | *ADD INFO HERE*

Data Modification Date | *ADD INFO HERE*

Geographic coverage | *ADD INFO HERE*

Time period coverage | *ADD INFO HERE*

Is historical data “point-in-time” | *YES OR NO*

Data Set(s) Format(s) | *ADD INFO HERE*

Raw or scraped data | *ADD INFO HERE*

Key Fields | *ADD INFO HERE*

Key Words | *ADD INFO HERE*

Number of companies/brands covered | *ADD INFO HERE*

Table format examples

Data Set(s) Inventory

File Description | Format | Initial Size | Revision Frequency | Revision Type

----|-----

*New Text Archives | .CSV | 100 GB | Hourly | Incremental
Image Library | .JSON | 1.5 TB | Weekly | Incremental
Ratings | .JSON | 50 MB | Every 5 Min | Republish*

Key Data Points

Examples of key data points include:

- * Publisher or Studio*
- * Title*
- * Artist Name*
- * Producer Name*
- * Director Name*
- * Distributor*
- * Distribution Channel*
- * Release Date*
- * Publish Date*
- * Format*
- * Operating System*
- * Sale Price*
- * Number of Transactions*
- * Number of Streams*
- * Average rating*
- * Designated Market Area (DMA)*
- * Zip or Postal Code*

Additional Information

- * [Data Source] (ADD LINK HERE)*
- * [Data Due Diligence Questionnaire] (ADD LINK HERE)*

- * [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product]
(ADD LINK HERE)*

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (i.e., you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product.

Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information

that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

** [Company Fact Sheet] (ADD LINK HERE)*

詳しい説明の公共部門用テンプレート

PRODUCT TITLE Data Product Overview

Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

Applicable Industries for Data Product Usage

Provide a list of industries that this data product is applicable to.

Use Cases

Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Metadata

Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value

----|-----

Update Frequency | *YOUR INFO HERE*

Data Source(s) | *YOUR INFO HERE*

Original Publisher of data | *YOUR INFO HERE*

Data Creation Date | *YOUR INFO HERE*

Data Modification Date | *YOUR INFO HERE*

Geographic coverage | *YOUR INFO HERE*

Time period coverage | *YOUR INFO HERE*

Is historical data “point-in-time” | *YES OR NO*

Data Set(s) Format(s) | *YOUR INFO HERE*

Raw or scraped data | *YOUR INFO HERE*

Key Fields | *YOUR INFO HERE*

Key Words | *YOUR INFO HERE*

Number of companies/brands covered | *YOUR INFO HERE*

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product]
(*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

```
## Need Help?
* If you have questions about our products, contact us using the support information
  below.

---
## About Your Company
Provide a description and/or link about your company
* [Company Fact Sheet] ADD LINK HERE
```

詳しい説明の小売およびロケーション用テンプレート

```
---
## PRODUCT TITLE Data Product Overview
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this
  section.

---
## Use Cases
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the
  data product.

---
## Metadata
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not
  limited to:

Description | Value
----|-----
Update Frequency | YOUR INFO HERE
Data Source(s) | YOUR INFO HERE
Original Publisher of data | YOUR INFO HERE
Data Creation Date | YOUR INFO HERE
Data Modification Date | YOUR INFO HERE
Geographic coverage | YOUR INFO HERE
Time period coverage | YOUR INFO HERE
Is historical data "point-in-time" | YES OR NO
Data Set(s) Format(s) | YOUR INFO HERE
Raw or scraped data | YOUR INFO HERE
Key Fields | YOUR INFO HERE
Key Words | YOUR INFO HERE
Number of companies/brands covered | YOUR INFO HERE
```

Data Channels | *Examples include web devices, mobile devices, CTV devices, offline purchases, household data, B2B data*

Data Set Specification

The following are examples of data set specifications that you can include if applicable:

The data sets are updated at midnight EST daily.

The data sets are tied to a home address, and attributes correspond to the household level.

Provider processes opt-outs on a daily basis and remove records from future files. Custom data cuts are available if desired.

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing

(i.e., you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance

for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate

the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

```
---  
## Need Help?  
* If you have questions about our products, contact us using the support information  
below.  
  
---  
## About Your Company  
Provide a description and/or link about your company  
* [Company Fact Sheet] (ADD LINK HERE)
```

製品の更新

以下のセクションでは、AWS Data Exchange 製品を更新する方法を説明します。この手順は、ユーザーが [内のデータ AWS Data Exchange](#) に精通しているプロバイダであることを前提としています。製品の公開後は、製品の詳細とパブリックオファーを編集できます。新しいリビジョンをサブスクライバーに発行することで、基盤となるデータセットを更新することもできます。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

トピック

- [製品とオファーの詳細の更新](#)
- [データディクショナリの更新](#)
- [サンプルを更新する](#)
- [カスタムメタデータの更新](#)
- [データセットの新しいリビジョンを発行する](#)
- [製品を発行解除する](#)
- [リビジョンの削除](#)
- [リビジョンの取り消し](#)

製品とオファーの詳細の更新

製品の発行後は、AWS Data Exchange コンソールを使用して製品の詳細を編集できます。また、製品のパブリックまたはカスタムオファーを編集して、オファー規約を変更することも可能です。製品のオファー規約を更新する場合、アクティブなサブスクリプションを持つサブスクライバーは、サブスクリプションがアクティブである限り、既存のオファー規約を保持します。自動更新を選択したサブスクライバーは、新しいオファー規約を使用します。

製品を更新するときは、以下の点に留意してください。

- オファ어의サブスクリプション期間を削除または編集することはできません。これは、既存のサブスクライバーが引き続き更新機能を使用できることを確実にします。特定のサブスクリプション期間を提供する必要がなくなった場合は、既存の製品を発行解除してから、新しい製品を公開することができます。詳細については、「[製品を発行解除する](#)」を参照してください。
- 製品の公開後は、その製品をサブスクライブしているサブスクライバーの人数にかかわらず、製品からデータセットを削除することはできません。
- API を含む製品の従量制料金を更新する場合:
 - 従量制料金の値下げは、新規サブスクライバーの商品詳細ページにすぐに表示されます。

Warning

従量制費用の値下げを取り消すと、従量制費用の価格が上昇することになります。従量制費用の値上げについて詳しくは、次の点を参照してください。

- 従量制料金の値上げは、既存の利用者の場合は値上げが提出されてから 90 日後、または更新時(どちらか早い方)にその月の初日に有効になります。価格変更が送信されると、メールは既存のサブスクライバーに送信されます。新しいサブスクライバーの場合、値上げはすぐに商品詳細ページに表示されます。

Example 例

5 月 10 日に従量制コストの値上げを提出します。既存のサブスクライバーには、価格変更に関するメールが届きます。値上げは 9 月 1 日に発効します。

Warning

既存のサブスクライバーに値上げが有効になる前に値上げを取り消すことはできません(そのアクションにより価格が下がるため)。

製品、データセット、またはオファ어의詳細を更新する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、更新する製品を選択します。ステータスが [発行済み] であることを確認してください。

4. 製品の詳細から：

- パブリック オファーを編集している場合は、[パブリックオファー] タブを選択し、[編集] を選択して、指示に従って製品を編集します。
- プライベートオファーを編集する場合は、「カスタムオファー」タブを選択し、編集したいプライベートオファーの横にあるオプションボタンを選択し、「編集」を選択してから、指示に従って商品を編集します。
 - a. 従量課金制の API を含む製品の場合は、「従量課金 — オプション」で、編集する従量制費用のタイプの横にあるオプションボタンを選択し、「編集」を選択します。
 - b. 「従量制費用の編集」ダイアログボックスで、「価格/単位」または「説明」を更新します。
 - c. [更新] を選択します。

更新された従量制費用は [従量制費用 - オプション] に表示されます。

5. [データセット] の [機密情報] で [編集] を選択し、指示に従って情報を編集します。
6. 「データ評価」から、データディクショナリまたはサンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「アクション」を選択して、データディクショナリまたはサンプルを更新します。詳細については、[データディクショナリの更新](#) および [サンプルを更新する](#) を参照してください。
7. オファータイプに応じてオファーを設定します。
 - 製品がパブリックオファーである場合は、[パブリックオファー] で [編集] を選択し、指示に従ってパブリックオファーを編集します。
 - 製品がカスタムオファーである場合は、[カスタムオファー] で [編集] を選択し、指示に従ってカスタムオファーを編集します。
 - 製品がプライベートオファーである場合は、[プライベートオファー] で [編集] を選択し、指示に従ってプライベートオファーを編集します。
8. [更新] を選択します。

データディクショナリの更新

データディクショナリを更新するには、まず既存のデータディクショナリを削除してから新しいデータディクショナリをアップロードします。

データディクショナリを更新するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. 「製品」から、更新する製品を選択し、そのステータスが「発行済み」であることを確認します。
4. [データ評価] タブを選択します。
5. 「データディクショナリとサンプル」で、プラスアイコンを選択してデータセットを展開し、データディクショナリ名の横にあるオプションボタンを選択してデータディクショナリを選択します。
 - a. [アクション] を選択し、[データディクショナリを削除] を選択します。

データディクショナリが削除されます。
 - b. データセットの横にあるオプションボタンを選択し、[アクション] を選択してから [データディクショナリをアップロード] を選択します。
 - c. [ファイルを追加] を選択します。
 - d. 新しいデータディクショナリを選択し、「開く」をクリックします。
 - e. [アップロード] を選択します。
6. (オプション) データディクショナリ名の横にあるオプションボタンを選択してデータディクショナリを選択し、[アクション] を選択してから [データディクショナリをダウンロード (CSV)] を選択してデータディクショナリをコンピューターにダウンロードします。

サンプルを更新する

サンプルを更新するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. 「製品」から、更新する製品を選択し、そのステータスが「発行済み」であることを確認します。
4. [データ評価] タブを選択します。
5. [データディクショナリとサンプル] で、データセットの横にあるオプションボタンを選択します。
6. [アクション]、[メンバーを追加] の順に選択します。

- a. [サンプルをアップロード] を選択します。
 - b. コンピューターから新しいサンプルを選択し、[開く] を選択します。
 - c. オプションの説明を入力し、[追加] を選択します。
7. (オプション) サンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「アクション」を選択してから、次のアクションのいずれかを選択します。
- 選択したサンプルをダウンロードする
 - サンプルをプレビューする (CSV のみ)
 - 選択したサンプルを削除する

カスタムメタデータの更新

製品の公開後は、AWS Data Exchange コンソールを使用して製品のカスタムメタデータを編集することができます。

カスタムメタデータを更新するには

1. ウェブブラウザを開き、AWS Data Exchange コンソールにサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、更新する製品を選択します。ステータスが [発行済み] であることを確認してください。
4. (オプション) [サブスクリプション] で [カスタムメタデータを表示] を選択してメタデータを表示し、[閉じる] を選択します。
5. [サブスクリプション] で [カスタムメタデータを編集] を選択し、指示に従ってメタデータを編集します。
6. [保存] を選択します。

データセットの新しいリビジョンを発行する

AWS Data Exchange は、動的に更新された製品をサポートします。サブスクライバーは製品を特定の期間サブスクライブし、サブスクリプションがアクティブである限り、すべての発行済みデータセットにアクセスします。例えば、プロバイダーが米国株式の日次終値が含まれた製品を提供したいとすると、この製品はその日の終値で毎日更新されることになります。プロバイダーは、製品のデー

データセットで利用できる新しいリビジョンを作成して確定するか、新しいデータセットを製品に追加することができます。

製品には、サブスクリプションの一環として、すべて、または一部の履歴リビジョンと将来のリビジョンが含まれます。詳細については、「[リビジョンアクセスルール](#)」を参照してください。

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールを使用して、既に発行済みのデータセット用の新しいリビジョンを作成して確定します。その後、データセットのリビジョンはデータセットが属するすべての製品に自動発行されます。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

Important

プロバイダーは、コンソールまたは AWS Data Exchange API を使用してリビジョンへのサブスクライバーアクセスを取り消し、リビジョンのアセットを削除できます。詳細については、「[リビジョンの取り消し](#)」を参照してください。

データセットの新しいリビジョンを製品に発行する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するデータセットを選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが発行済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. (オプション) [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [リビジョンを作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

6. 含めるアセットが所有する Amazon S3 バケットがローカルコンピュータのどちらに保存されているかに応じて、[ジョブ] セクションで [Amazon S3 からインポート] または [アップロード] (コンピュータからアップロードするため) を選択します。

- a. 選択内容に応じて、プロンプトに従います。アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。
 - b. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
7. [リビジョンの概要] でリビジョンとそのアセットを確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンが製品に発行され、サブスクライバーによる利用が可能になります。

ファイル配信タイプで発行された履歴データに対する推奨アプローチ

動的製品には、サブスクライバーがアクセスできる履歴的なコンテンツが含まれているものがあります。例えば、毎日の米国株式終値の 30 年分の履歴が製品に含まれている場合、サブスクライバーは毎日の動的更新に加えて、このデータにアクセスできることになります。

データの履歴的なレコードが含まれるこれらの種類の製品では、データセットの単一のリビジョンですべての履歴データを発行することがベストプラクティスです。リビジョン用のオプションのコメントを使用して、このリビジョンが特定の日付からのすべてのデータ履歴の単一アップロードであることを説明できます。

単一の履歴リビジョンに複数のオブジェクトの時系列が含まれている場合は、オブジェクト名にラベルを付けて、基盤となるデータの周期性を説明することを検討してください。例えば、それぞれに 1 週間分の履歴データが含まれる 200 個のファイルが単一の履歴リビジョンに含まれている場合、データ履歴が始まる週の日付で各ファイルを命名することができます。

アップデートに対する推奨アプローチ

データセットは多数の方法で動的に更新できます。以下は 3 つのアプローチ例です。これらはすべて更新ごとに新しいリビジョンを作成しますが、新しいリビジョンの内容が異なります。

- 更新ごとに最後のリビジョン以降に変更された項目のみが含まれる新しいリビジョンを使用する – 変更された項目だけが更新されるため、リビジョンのサイズが小さくなります。このアプローチは、更新の影響を受けるのがデータの小さなサブセットのみで、サブスクライバーが変更された項目にのみ着目するというデータセットに適しています。
- 更新ごとに更新されたデータが含まれる新しいリビジョンを使用する – 新しいリビジョンには、完全な更新済みファイルが含まれます。新しいリビジョンにはすべての項目が含まれており、これには最後のリビジョン以降変更されていないものも含まれます。このアプローチは、データについて単一の最新ファイルを保持したいサブスクライバーにとって便利です。サブスクライバーは、最新リビジョンのアセット (1 つ、または複数) を同じ宛先にエクスポートし、以前のファイル (1 つ、または複数) を上書きします。

- 更新ごとに完全な履歴と更新されたデータが含まれる新しいリビジョンを使用する – 新しいリビジョンにはデータの完全な履歴が含まれており、これにはデータの最新状態と以前のリビジョンの履歴が含まれます。このアプローチは、ストレージ負荷が高くなります。これは、サブスクライバーが、存在する可能性がある過去の修正や調整を含めたデータの履歴の最新の全体像に関心を持っているというデータセットに適しています。このアプローチでは、各リビジョンが自立しており、以前のリビジョンとの依存関係がないデータセット履歴の全貌を提供します。

製品を発行解除する

製品の公開後は、その製品の可視性設定に基づいて、すべてのユーザーが製品を検索してサブスクライブすることができます。製品は、以下の結果を達成したい場合に発行解除することができます。

- [新しい製品の公開](#) 演習で作成した製品を削除する。
- リソースをクリーンアップする。
- AWS Data Exchange で公開されている製品から製品を削除する。
- サブスクライバーが製品を自動更新しないようにする。

製品を発行解除するときは、以下の点に留意してください。

- 製品はいつでも発行解除できます。
- 製品を発行解除すると、AWS Data Exchange カタログ、または AWS Marketplace に表示されなくなります。
- アクティブなサブスクリプションを持つサブスクライバーは、そのサブスクリプションの期限が切れるまでデータ製品へのアクセス権を保持します。
- 製品を未公開にした後で期限が切れたアクティブなサブスクリプションは、サブスクライバーが自動更新を有効にしても更新されません。
- 既存のサブスクライバーは、サブスクリプションの有効期限が切れるまで引き続き製品の詳細を表示できます。

製品を発行解除する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、削除する製品を選択します。ステータスが [発行済み] であることを確認してください。

4. [製品の概要] で [発行解除] を選択し、製品を発行解除する手順を実行します。

⚠ Important

この操作は元に戻すことができません。

これらのステップが完了すると、製品のステータスが [発行解除済み] になります。発行解除した製品を再度発行することはできませんが、同じデータセット、製品の詳細、およびオファーの詳細が設定された新しい製品 (新しい製品 ID を使用) を作成できます。

リビジョンの削除

プロバイダーは、コンソールまたは AWS Data Exchange API を使用してリビジョンへのサブスクライバーのアクセスを取り消し、そのリビジョンのアセットを削除できます。詳細については、「[リビジョンの取り消し](#)」を参照してください。

リビジョンは、確定後、製品に追加する前に編集または削除できます。詳細については、次のトピックを参照してください。

- [リビジョンを編集する](#)
- [リビジョンを削除する](#)

リビジョンの取り消し

プロバイダーは、特定のリビジョンへのサブスクライバーのアクセスをいつでも取り消すことができます。通常、このアクションはコンプライアンス上の理由からプロバイダーが行います。リビジョンを取り消しても、原資産は削除されません。リビジョンを取り消すと、すべてのサブスクライバーに、リビジョンが取り消されたという Amazon EventBridge (以前は CloudWatch Events と呼ばれていました) の通知が届きます。その後、利用者はリビジョンが取り消された理由を AWS Data Exchange のコンソールで確認できます。利用者は取り消されたリビジョン内のデータをエクスポートしたりクエリしたりすることはできません。

リビジョンを取り消すことができるようにするには、独自の IAM ポリシーを管理するプロバイダーが新しいアクションとして `dataexchange:RevokeRevision` を追加する必要があります。[AWS Data Exchange 管理ポリシー](#) を使用するプロバイダーは、変更を加える必要はありません。

リビジョンが取り消されたら、コンソールまたは AWS Data Exchange DeleteAsset API オペレーションを使用してリビジョンのアセットを削除できます。

トピック

- [リビジョンの取り消し \(AWS CLI\)](#)
- [プロバイダーとしての1つのリビジョンを取り消す \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての複数のリビジョンを取り消す \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての取り消しの理由の編集 \(コンソール\)](#)
- [サブスクライバーとして取り消し済みリビジョンを表示する \(コンソール\)](#)

リビジョンの取り消し (AWS CLI)

リビジョンを取り消すには (AWS CLI)

1. `revoke-revision` コマンドを使用して、リビジョンを取り消す。

```
$ aws dataexchange revoke-revision \  
--data-set-id $DATA_SET_ID \  
--revision-id $REVISION_ID \  
--comment 'Revoking Revision Example'  
  
{  
  "Id": "ab7859881EXAMPLEdd3e8a4b88fc6a8d",  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:427362365172:data-sets/$DATA_SET_ID/  
revisions/$REVISION_ID",  
  "Comment": "Revoking Revision Example",  
  "CreatedAt": "2022-03-08T18:54:20.746Z",  
  "UpdatedAt": "2022-03-09T20:28:53.105Z",  
  "DataSetId": "24d30f8446a878237c35d011e7b22d0b",  
  "Finalized": true,  
  "Revoked": true,  
  "RevokedAt": "2022-03-09T20:28:53.105Z",  
  "RevocationComment": "revoking revision example"  
}
```

2. リビジョンが取り消されたら、AWS Data Exchange DeleteAsset API オペレーションを使用してリビジョンのアセットを削除できます。

プロバイダーとしての 1 つのリビジョンを取り消す (コンソール)

プロバイダーとしてのリビジョンを取り消す (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、取り消すリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブの [リビジョン] でリビジョンを選択します。
5. リビジョンページの [リビジョン概要] の [アクション] で、[取り消す] を選択します。
6. 「リビジョンを取り消す」ダイアログボックスに、リビジョンを取り消す理由の簡単な説明を入力します。サブスクライバーにはこの説明が表示されます。
7. [取り消す] を選択します。

リビジョンのステータスは [取り消し済み] に設定されます。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが取り消されます。利用者は取り消しの理由を確認できますが、アセットにアクセスしたりエクスポートしたりすることはできません。この操作は元に戻すことができません。

8. リビジョンが取り消されたら、リビジョンページに移動し、「インポートされたアセット」テーブルで削除するアセットを選択し、「削除」を選択することで、リビジョンのアセットを削除できます。

リビジョンが取り消された理由を編集するには、[プロバイダーとしての取り消しの理由の編集 \(コンソール\)](#) を参照してください。

プロバイダーとしての複数のリビジョンを取り消す (コンソール)

プロバイダーとしての複数のリビジョンを取り消すには (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、取り消すリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、10 個までリビジョンを選択します。

5. [取り消す] を選択します。
6. 「{x} 件のリビジョンを取り消す」ダイアログボックスに、リビジョンを取り消す理由の簡単な説明を入力します。サブスクライバーにはこの説明が表示されます。次に、[取り消す] を選択します。

リビジョンのステータスは [取り消し済み] に設定されます。

Warning

これにより、リビジョンとすべてのアセットが取り消されます。利用者は取り消しの理由を確認できますが、アセットにアクセスしたりエクスポートしたりすることはできません。この操作は元に戻すことができません。

7. リビジョンが取り消されたら、リビジョンページに移動し、「インポートされたアセット」テーブルで削除するアセットを選択し、「削除」を選択することで、リビジョンのアセットを削除できます。

リビジョンが取り消された理由を編集するには、[プロバイダーとしての取り消しの理由の編集 \(コンソール\)](#) を参照してください。

プロバイダーとしての取り消しの理由の編集 (コンソール)

プロバイダーは、リビジョンが取り消された後に取り消しの理由を編集できます。

プロバイダーとして取り消しリビジョンを編集する (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、取り消したリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、取り消したリビジョンを選択します。
5. リビジョンページで [取り消しの理由を編集] を選択します。
6. 「取り消しリビジョンを編集」ダイアログボックスに、リビジョンを取り消す理由の簡単な説明を入力します。
7. [保存] を選択します。

リビジョンのステータスが [取り消し済み] に設定されます。

更新された取り消しの理由はリビジョンページに表示されます。

サブスクライバーとして取り消し済みリビジョンを表示する (コンソール)

サブスクライバーとして取り消し済みリビジョンを表示する (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「製品」で製品を選択し、その製品の下にあるデータセットを展開すると、リビジョンのリストが表示されます。
4. データセットページの「リビジョン」タブに、リビジョンのステータス (発行済みまたは取り消し済み) が表示されます。
5. リビジョンを選んでください。
6. リビジョンの詳細ページの上部にリビジョンの理由が表示されます。

AWS Data Exchange 製品のオファ어의作成

製品を利用可能にするには、AWS Data Exchange コンソールで オファー を作成する必要があります。オファーは、製品をサブスクライブするときにサブスクライバーが同意する条件を定義します。可視性が [パブリック] に設定されている製品には、すべてのサブスクライバーが利用できるパブリックオファーが必要です。特定のサブスクライバーに対するカスタムオファーを作成することも可能です。製品のオファーを作成するときは、以下を定義します。

- データサブスクリプション契約。これは、見込みサブスクライバーが製品のサブスクリプションを購入する前に同意する必要がある条件を定義します。
- 利用可能な料金と期間の組み合わせ。
- 米国売上税が徴収されるかどうか。
- 返金ポリシーの諸条件 (ポリシーを設定する場合)。
- サブスクライバーがサブスクリプション検証を使用して、サブスクリプションをリクエストするためのアンケートに記入する必要があるかどうか。
- オファーの自動更新を利用可能にするかどうか。

特定の AWS アカウントに提示するカスタムオファーを作成することもできます。カスタムオファーは、製品に特定の条件と料金を設定することを可能にします。詳細については、「[カスタムオファーの作成](#)」を参照してください。

オファ어의料金

料金情報を定義するときは、サブスクリプションの合計料金と期間を定義します。期間は 1~36 か月です。パブリックオファ어의場合、単一のオファ어で最大 5 つの異なる期間を指定できます。

長期的にサポートしようと考えている期間を選択することをお勧めします。期間を廃止する場合は、AWS が自動更新ポリシーをオプトインした対象サブスクライバーのサブスクリプション更新をキャンセルします。

料金設定にサポートされる通貨は米ドル (USD) のみです。料金は期間ごとに指定する必要があります。例えば、単一のオファ어内の 1 か月、6 か月、12 か月、24 か月、および 36 か月の期間には、異なる料金を指定できます。見込みサブスクライバーは、すべてのオプションを利用できます。見込みサブスクライバーがオファ어를サブスクライブするときには、単一の料金と期間を選択する必要があります。また、オファ어規約に同意して、購入料金を前払いする必要もあります。

米国の消費税と使用税

オファ어に対する米国売上税の徴収は、税金のネクサスの設定に基づいて有効にできます。詳細については、「[米国の消費税と使用税](#)」を参照してください。

データサブスクリプション契約

データサブスクリプション契約 (DSA) は、AWS Data Exchange デフォルトとして提供される標準契約テンプレートです。DSA には、データ製品の利用規約が規定されています。プロバイダーは、法的条件と使用権を管理します。これらの条件は、製品用に作成する各オファ어의一部です。

AWS Data Exchange コンソールでデフォルト DSA テンプレートをダウンロードし、それを編集して独自の利用規約を追加できます。または、任意の DSA をアップロードすることで、独自のカスタム条件を指定することもできます。AWS Data Exchange は、製品のオファ어に指定された DSA をそれ以上変更することなく関連付けます。

DSA は、契約者およびプロバイダーのコミュニティと協力して、両当事者のニーズに対応するために開発されました。DSA は、使用、保証、補償、準拠法などの主要な契約条項にわたる共通点を積極的に定義しています。AWS Data Exchange プロバイダーは、セルフサービス取引やプライベートオファ어의 EULA として DSA を提供することができます。サブスクライバーは、DSA を提供するプロバイダーのデータを検索、サブスクライブ、使用したり、プライベートオファ어用の標準 DSA をリクエストしたりできます。プライベートオファ어의場合、サブスクライバーはプロバイダーに DSA テンプレートをリクエストできます。DSA 条件は、当事者間で合意されたカスタム取引要件に対応するように修正できます。

返金ポリシー

プロバイダーは、製品のサブスクライバーに対する返金ポリシーを管理します。AWS Data Exchange は返金の提供を必須としていませんが、オファーの詳細に返金ポリシーを明記する必要があります。サブスクライバーが質問やリクエストがある場合に連絡できるように、これらの詳細は明確かつ簡潔な方法で提供することをお勧めします。AWS は、プロバイダーが認可する返金をプロバイダーに代わって処理できますが、プロバイダーとして返金を認可する必要があります。

認可された返金を AWS が処理するには、AWS Marketplace 管理ポータル を通じて AWS Support に [返金承認フォームを送信](#) してください。返金リクエストが処理され、サブスクライバーへの返金が行われます。AWS がプロバイダーに代わって処理したすべての返金は、毎月の請求済み収益レポートで確認できます。

サブスクリプション検証

プロバイダーには、AWS Data Exchange のデータ製品に対してサブスクリプション検証を有効にするオプションがあります。詳細については、「[プロバイダーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

オファーの自動更新

自動更新の利用可能性はプロバイダーが管理します。自動更新は、オファーの作成当初に有効化することを選択できます。これにより、自動更新が設定された製品をサブスクライブするオプションがサブスクライバーに提供されます。オファーが作成された後でこのパラメータを変更することはできません。

Note

カスタムプライベートオファーに柔軟な支払いスケジュールをセットアップする場合、オファーを自動更新に設定することはできません。

サブスクリプションの表示

[製品の概要] ページを使用して、任意の製品のすべてのサブスクリプションを表示することができます。各オファーのサブスクリプションを表示することもできます。

製品のサブスクリプションの表示

製品のサブスクリプションを表示する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで [データを発行] を展開し、[製品] を選択します。
3. [製品] で、オファーを表示する製品を選択します。
4. [サブスクリプション] タブを選択します。このタブで、製品のすべてのサブスクリプションを表示することができます。

[サブスクリプション] タブの左上にあるドロップダウンから、現在アクティブなサブスクリプション、またはアーカイブされた (期限が切れて終了した) サブスクリプションをフィルタリングするように選択できます。

オファーのサブスクリプションの表示

特定のオファーのサブスクリプションを表示する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで [データを発行] を展開し、[製品] を選択します。
3. [製品] で、オファーを表示する製品を選択します。
4. [パブリックオファー] タブ、または [カスタムオファー] タブを選択します。このタブから、オファーのすべてのサブスクリプションを表示することができます。

[サブスクリプション] セクションの左上にあるドロップダウンから、現在アクティブなサブスクリプション、またはアーカイブされた (期限が切れて終了した) サブスクリプションをフィルタリングするように選択できます。

カスタムオファーの作成

AWS Data Exchange は、カスタムオファーを作成するオプションをプロバイダーに提供します。現在サポートされているカスタムオファーには、プライベートオファーと Bring You Owns Subscription (BYOS) オファーの 2 種類があります。これらのタイプのオファーの作成に関する詳細については、以下のトピックを参照してください。

トピック

- [プライベートオファーを作成する](#)
- [Bring Your Own Subscription オファーを作成する](#)

プライベートオファーを作成する

データプロバイダーは、データ製品を、一般向けに提供されているオファー規約とは異なる条件でサブスクライバーに提供できます。一般公開されていない製品の場合、プライベートオファーは顧客が利用できる唯一の条件であり、その製品はプライベートオファーを作成する顧客のみに表示されます。プライベートオファーでは、1つ、または複数の AWS アカウント 向けにカスタムオファーを作成できます。プライベートオファーは、料金、期間、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、または払い戻しポリシーなどの面で他のオファーとは異なるものにすることができます。

プロバイダーは、製品を作成した後でプライベートオファーを作成し、選択したサブスクライバーのグループにそのオファーを提示することができます。一般公開されている製品の場合は、プライベートオファーを作成する前にパブリックオファーを作成する必要があります。

プライベートオファーを作成する

1. AWS Management Console にサインインして、[AWS Data Exchange コンソール](#) を開きます。
2. [コンソール](#) の左側にあるナビゲーションペインで [製品] を選択してから、プライベートオファーを作成する製品を選択します。
3. [プライベートオファー] タブで、[作成] を選択します。
4. [オファータイプの選択] ページで、[プライベートオファー]、または [更新されたプライベートオファー] を選択してから、[次へ] を選択します。

Note

これが有効期限切れのプライベートオファーの更新、または AWS Data Exchange でアップグレードされている既存のサブスクリプションである場合は、[更新されたプライベートオファー] を選択します。このオプションを選択する場合、オファーが更新またはアップグレードであることを AWS が監査し、検証することがあります。それらを実行できない場合、AWS はサブスクライバーに対するオファーとエンタイトルメントを取り消す可能性があります。

5. [サブスクライバー AWS アカウント ID] に、プライベートオファーを作成しているアカウントの 12 桁のアカウント番号を入力します。複数のアカウントに単一のプライベートオファーを提示できるため、複数のアカウントを追加できます。

6. [説明] で、アカウントの簡単な説明 (アカウントの会社名など) を入力します。
7. [料金と期間] で、期間と料金の情報などのオファーの詳細を入力します。
8. サブスクライバーに対する [合計料金] を複数の支払いに分配する場合は、[支払いスケジュールを指定する] チェックボックスをオンにします。サブスクリプション時に請求される [前払い] を追加できます。次に、サブスクライバーが追加の月次支払い、またはカスタム支払いを行うように選択できます。[月次] オプションを選択すると、日付が自動的に入力されます。[カスタム] オプションを選択する場合は、請求日 (最大 36 回払い) を入力する必要があります。

Note

[オファーの有効期限] は、サブスクライバーがオファーを受諾する必要がある期限日です。この日付までにプライベートオファーが受諾されない場合、サブスクライブにプライベートオファーを利用できなくなります。

有効期限は、2 回目の支払い日より前にする必要があります。

既に作成済みのオファーを有効期限より前に期限切れにする必要がある場合は、オファーページに戻って [期限切れにする] を選択します。そうすることで、すべての見込みサブスクライバーに対するオファーの有効期限が切れます。

9. 米国の売上税と使用税の設定、データサブスクリプション契約、自動更新設定、サポート情報を入力します。
- 10 [次へ] をクリックします。[更新されたプライベートオファー] を選択した場合は、更新されたプライベートオファーの条件に同意することを示すチェックボックスをオンにする必要があります。
- 11 情報が正しいことを確認してから、[発行] を選択します。

Note

プライベートオファーの作成後は、料金と請求日以外のすべてのフィールドを編集できません。

Bring Your Own Subscription オファーを作成する

データプロバイダーには、データ製品のサブスクライバーが既に存在する場合があります。Bring Your Own Subscription (BYOS) オファーは、追加料金なしで AWS のお客様との既存のサブスクリプションを移行して履行することを可能にします。

BYOS オファーでは、プロバイダーとサブスクリイバー間の請求関係が継続されます。BYOS オファーはフルフィルメント料金の対象にはなりません。サブスクリイバーは、サブスクリプションに対する AWS Marketplace 請求書を受け取りますが、料金は請求されません。BYOS オファーを作成すると、その内容を確認して、問題や質問がある場合はお客様に連絡します。

サブスクリプションのライフサイクルは AWS Data Exchange 外で開始されるため、BYOS を使用した既存のサブスクリプションの AWS Data Exchange への移行ワークフローには、プロバイダーとサブスクリイバ間のコラボレーションが必要です。

Important

BYOS オファーでは、AWS でこの製品が利用可能になる前のサブスクリプションを移行します。AWS は、既存のサブスクリプション契約で BYOS オファーを確認する場合があります。AWS が BYOS オファーを確認できない場合は、オファーとエンタイトルメントが予告なく取り消されることがあります。

AWS Data Exchange で BYOS オファーを作成または承諾する前に、プロバイダーとサブスクリイバが共同で以下の手順を実行する必要があります。

前提条件

1. プロバイダーとサブスクリイバーが、BYOS AWS Data Exchange ソリューションの実装について連絡を取り合う。
2. サブスクリイバーが、AWS アカウント のデータ製品をサブスクライブするために使用する AWS Data ExchangeID を提供する。

プロバイダーである場合は、以下の手順を実行して BYOS オファーを作成します。

BYOS オファーを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. 製品リストの製品名の横にあるオプションボタンを選択して、BYOS オファーを作成したい製品を選択します。
4. 「アクション」から「カスタムオファーを作成」を選択します。
5. 「オファータイプの選択」ページの「オファータイプ」で、「Bring Your Own Subscription (BYOS) 」オプションを選択し、「次へ」を選択します。

6. 「既存のサブスクリプションの詳細を入力」ページの「既存の契約」で、「ファイルを追加」を選択して既存のサブスクリプションをアップロードし、契約が AWS で製品を作成したときよりも前の日付であることを確認します。
7. 「既存のサブスクリプション開始日」では、カレンダーアイコンを選択し、開始日を選択します。
8. [期間] には、該当する月数を入力します。
9. 「自動更新条件」で、「はい」または「いいえ」を選択して、既存の契約に現在のサブスクリプションの有効期限が切れたときの自動更新が含まれるかどうかを指定します。
10. [返金ポリシー] に、既存のサブスクリプション契約に記載されている返金ポリシーに関する情報を入力し、[次へ] を選択します。
11. [サブスクライバーの詳細を入力] ページの [サブスクライバーの詳細] に、サブスクライバーの 12 桁の AWS アカウント ID と説明を入力し、[次へ] を選択します。
12. [確認と公開] ページで、すべての情報を確認します。セクションを変更するには、[編集] をクリックします。
13. [承認] セクションでチェック ボックスをオンにして、AWS でこの製品が利用可能になる以前の既存のサブスクリプションを移行することを承認します。
14. [発行] を選択します。

Note

BYOS オファアの作成後に自動更新設定を変更することはできません。BYOS に追加できる AWS アカウントは 1 つだけです。複数のアカウントが必要な場合は、BYOS オファアを追加作成してください。

プロバイダーが生成した通知

プロバイダーは、プロバイダーが生成した通知を送信して、データセットに関連する重要なイベントを購読者に知らせることができます。購読者に体系的に連絡を取り、利用資格のあるデータ関連のイベントをプロバイダー間で一貫した方法で処理できるように支援できます。

プロバイダーが生成する通知を使用して、購読者を支援するために次のことを行います。

- AWS Data Exchange コンソールまたは AWS SDK を使用して、データの更新、遅延、スキーマの変更、廃止に関する通知を送信します。

- 購読者がフォローすべきコメントや期待されるアクションを含めてください。

プロバイダーが生成した通知を購読者に送信するには、次の手順に従います。

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[通知] を選択します。
3. ドロップダウンメニューから [通知のタイプ] を選択します。通知のタイプには以下が含まれます。
 - データ更新 — データソースが更新されました。
 - データ遅延 — データソースが期待どおりに更新されていません。
 - スキーマの変更 — データソースに構造的な変更が含まれる。
 - 非推奨 — データソースは更新されません。
4. ドロップダウンメニューから影響を受けるデータセットを選択し、日付、時刻、サブスクライバーアクションのリストに関する通知の詳細を表示します。また、このイベントの影響を受ける対象を特定するためのロケーションメタデータも提供できます。
5. [通知をプレビュー] を選択し、通知を公開します。

プロバイダーのサブスクリプション検証

プロバイダーとして、新しい公開製品を作成するときに、「新しい製品を発行」ページの「パブリックオファーを追加」セクションでサブスクリプション検証を有効にするオプションがあります。

サブスクリプション認証では、潜在的なサブスクライバーの身元を確認し、そのサブスクライバーに製品の使用を承認することができます。製品に対するサブスクリプションリクエストの承認は、制限や規制の対象となる製品がある場合や、アクセスを制限したい製品がある場合に役立ちます。

確認オプションが有効になっていない場合、サブスクリプション者の ID にアクセスすることはできません。

検証オプションをオンにすると、見込みサブスクライバーは、サブスクライブする前に、自分が誰であるか、データをどのように扱うつもりかについてフォームに記入する必要があります。

フォームでは、以下の情報が必要になります。

- 見込みサブスクライバーの連絡先詳細 (連絡先名、会社名、E メールアドレスなど)

- 見込みサブスクライバーが想定しているユースケース
- 見込みサブスクライバーの AWS アカウント ID

Important

サブスクライバーは各フィールドに情報を入力する必要がありますが、AWS Data Exchange はその情報のレビューまたは検証を行いません。サブスクライバーが提供する情報のレビューと検証については、プロバイダーが単独で責任を負います。

製品のサブスクリプション検証を有効にする方法の詳細については、[新しい製品の公開](#) を参照してください。

製品のサブスクリプション検証を有効にすると、すべての製品のサブスクリプション検証リクエストをすべて表示、承認、または拒否できます。AWS Data Exchange コンソールの [データの公開] にある [サブスクリプション検証] ページを使用します。詳細については、「[リクエストを承認または拒否する](#)」を参照してください。

Note

拡張プロバイダープログラム(EPP)プロバイダーからの非公開の個人情報が含まれるすべてのパブリック製品には、サブスクリプション検証が自動的に有効化されます。各サブスクリプションリクエストは、その ID を使用して一意に識別されます。ID は、プロバイダーとサブスクライバーの両方に表示されます。サブスクリプションリクエスト ID は、サブスクライバーとの通信で使用できます。

サブスクライバーがリクエストを行った後で製品のオファー規約が変更された場合、そのサブスクライバーの条件には、更新された条件ではなく、リクエストを行った時点での条件が反映されます。条件に対する変更の例には、料金、返金ポリシー、またはデータサブスクリプション契約などがあります。リクエストが送信された後で製品のオファー規約が変更された場合は、AWS Data Exchange コンソールの承認ペインに、現在の条件とリクエストが行われたときの条件の間に相違があることを示すメッセージが表示されます。

AWS Data Exchange コンソールはリクエストの履歴を保持します。サブスクライバーの連絡先詳細と個人を特定できる情報 (PII) を削除するタイミングはプロバイダーが制御します。リクエスト履歴の表示方法の詳細については、[サブスクリプション検証リクエストの表示](#) を参照してください。

製品の公開後にサブスクリプション検証オプションを編集することもできます。詳細については、「[サブスクリプション検証リクエストを編集する](#)」を参照してください。

E メール通知

リクエストの受領時、またはそのステータスがキャンセルもしくは有効期限切れに変更されたときに、AWS アカウント の E メールアドレス宛に E メールメッセージが送信されます。サブスクリプションリクエストのステータス変更のほとんどは E メールで通知されますが、これらの E メールメッセージの送信はベストエフォートベースで行われます。

Note

プロバイダー自身が開始したサブスクリプションリクエストのステータス変更 (サブスクリプションの承認時など) に関する E メール通知は送信されません。

サブスクリプション検証リクエストの表示

サブスクリプション検証を含む公開オファーを公開すると、サブスクリプション確認リクエストを表示できます。

サブスクリプション検証リクエストを表示するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [サブスクリプション検証] を選択します。
3. サブスクリプション検証から：
 - a. 保留中のリクエストをすべて表示するには、[保留中のリクエストを表示] を選択します。
 - b. [履歴を表示] を選択すると、他のすべてのリクエストが表示されます。

サブスクリプション検証リクエストを編集する

製品の公開後に、その製品の公開時にサブスクリプション検証を要求するように選択できます。

サブスクリプション検証リクエストを編集するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。

2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. 「パブリックオファー」から「編集」を選択します。
4. 「サブスクリプション検証」まで下にスクロールし、「この製品のパブリックオファーでサブスクリプション検証を必須にしますか?」という質問が表示されます。[はい] または [いいえ] を選択します。
5. [更新] を選択します。

Important

リクエスト、特に個人用/無料のメールアドレスからのリクエストの信憑性と正当性を検証する責任はお客様にあります。各ユースケースが DSA の条件に準拠していることを検証し、確認する必要があります。

リクエストを承認または拒否する

サブスクリプションリクエストは、受領してから 45 日以内に承認または却下します。その期間内にリクエストを承認しないと、リクエストの有効期限が切れます。見込みサブスクライバーは、拒否されたリクエストをいつでも、何度でも再送信できます。

Important

サブスクリプション検証を通じて収集されたサブスクライバー情報は、AWS Marketplace 利用規約に従って使用される必要があります。

リクエストの承認

サブスクリプションリクエストを承認する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [サブスクリプション検証] を選択します。
3. [サブスクリプション検証] で [保留中のリクエストを表示する] を選択します。
4. [承認] を選択します。

API が含まれる製品に対するリクエストの承認

API が含まれる製品に対するサブスクリプションリクエストを承認できます。API が含まれる製品には、特定のサブスクリプションに対する各 AWS Data Exchange リクエストのヘッダーで送信されるカスタムメタデータを追加することもできます。カスタムメタデータはサブスクライバーには表示されません。

API が含まれる製品に対するサブスクリプションリクエストを承認する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [サブスクリプション検証] を選択します。
3. [サブスクリプション検証] で [保留中のリクエストを表示] を選択します。
4. [カスタム API メタデータを承認および追加] を選択します。
5. モーダルで、キーバリューペアを入力してから、[カスタム API メタデータを承認および追加] を選択します。

Note

必要に応じて、[追加] を選択してから追加のキーバリューペアを入力することで、キーバリューペアを追加できます。

6. [サブスクリプション検証] ページが再度表示されます。サブスクリプションリクエストを正常に承認したことを知らせるメッセージが表示されます。
7. カスタムメタデータを表示するには、[製品] に移動し、API を使用する製品を選択してから、[サブスクリプション] タブを選択します。
8. [Public and custom subscriptions] (パブリックサブスクリプションとカスタムサブスクリプション) では、以下を実行できます。
 - a. サブスクリプションを選択し、[View custom metadata] (カスタムメタデータを表示) を選択して、追加したキーバリューペアを確認する。
 - b. サブスクリプションを選択し、[(カスタムメタデータを編集)] を選択して、このサブスクリプションのキーバリューペアを編集、追加、または削除する。

Note

キーバリューペアを3つ以上追加する場合は、[パブリックサブスクリプションとカスタムサブスクリプション] 表の [API のカスタムメタデータ] 列に最初のキーバリューペアが表示され、最初のキーバリューペアの下にキーバリューペアの数が表示されます。例えば、**[keyExample-valueExample + 2 個]** などです。

リクエストの拒否

サブスクリプションリクエストを拒否する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [サブスクリプション検証] を選択します。
3. [サブスクリプション検証] で [保留中のリクエストを表示] を選択します。
4. [拒否] を選択します。

AWS Marketplace でのプロバイダー財務

以下のトピックでは、AWS Data Exchange 経由でのデータの提供に関する財務情報を取り上げます。

AWS Data Exchange は AWS Marketplace と統合されています。AWS Data Exchange プロバイダーとして登録する場合は、まず AWS Marketplace 販売者として登録する必要があります。詳細については、「[ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange プロバイダーとして、販売者レポートや AWS Marketplace Commerce Analytics サービスなどの AWS Marketplace 機能のメリットを活用できます。詳細については、「[セラーレポートとデータフィード](#)」を参照してください。

支払い

AWS は毎月、販売者として登録されている AWS アカウント に関連付けられた銀行口座に対し、AWS Marketplace サービス料金を差し引いた金額を直接払い込みます。支払いは、毎月の月初ではなく、アカウントが作成されたときに基づいて、毎月随時払い込まれます。資金が払い込まれるのは、サブスクライバーからの集金後のみです。詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[支払い](#)」を参照してください。

米国の消費税と使用税

AWS Marketplace Tax Calculation Service を使用することで、既存および新しい製品に対する米国の消費税と使用税の計算が可能になります。一部の州は、Tax Calculation Service の対象外になります。これらの州を拠点とするサブスクライバーに対する製品の課税対象売上高に適用される消費税については、AWS Marketplace が徴収して納付することが法で義務付けられているためです。サービスを使用するには、プロバイダープロファイルの税金ネクサスを設定して、製品税コードを製品に割り当ててください。

税金ネクサスを設定する

- [AWS Marketplace 管理ポータル](#) を開きます。[設定] タブで、該当する税金ネクサスを設定します。

詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[販売者登録プロセス](#)」を参照してください。

AWS Marketplace 販売者レポート

AWS Data Exchange プロバイダーとして、製品のサブスクリプションアクティビティを詳しく説明するレポートを受け取ります。毎日および毎月のデータを追跡するために、複数のレポートを利用できます。これらのレポートには、オファーに関するサブスクリプションアクティビティ、サブスクライバーから受け取った支払い、およびプロバイダーに払い込まれる金額に関する情報が含まれています。払い込みは、AWS のお客様から支払いを受け取るまで行われません。詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[販売者レポート](#)」を参照してください。

プライベートオファーに支払いスケジューラを使用する AWS Data Exchange プロバイダーは、このデータを月次レポートで確認できます。詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[月別請求済み収益レポート](#)」を参照してください。

サブスクライバーの返金リクエスト

製品の返金ポリシーはプロバイダーが管理し、製品の作成時に指定する必要があります。AWS Data Exchange は返金の提供を必須としていません。AWS がプロバイダーに代わって返金を処理する前に、プロバイダーがすべての返金リクエストを承認する必要があります。

AWS Support に[返金承認フォーム](#)を送信してください。彼らはあなたのリクエストを処理し、サブスクライバーに返金を行います。AWS がプロバイダーに代わって処理したすべての返金は、毎月の請求済み収益レポートで確認できます。

AWS Data Exchange のジョブ

AWS Data Exchange ジョブは、非同期のインポートまたはエクスポート操作です。

プロバイダーは、製品に発行するデータセットを作成して管理できます。アセットやリビジョンは、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) または署名付き URL にダウンロード またはコピーできます。さらに、プロバイダーは Amazon API Gateway API からアセットをインポートしたり、Amazon Redshift データセットからアセットをインポートすることもできます。

サブスクライバーは、サブスクリプションを通じて権限を持っているデータセットを表示し、それらにアクセスすることができます。AWS のさまざまな分析および機械学習サービスでの使用のために、API 操作を使用して権限を持つデータセットを Amazon S3 にダウンロード またはコピーすることができます。

ジョブを使用してアセットの作成やコピー、またはリビジョンのコピーを実行するには、AWS Management Console、AWS Command Line Interface (AWS CLI)、独自の REST アプリケーション、または AWS SDK を使用できます。

ジョブは、作成されてから 90 日後に削除されます。

トピック

- [ジョブプロパティ](#)
- [AWS リージョン とジョブ](#)
- [アセットのインポート](#)
- [アセットのエクスポート](#)
- [リビジョンのエクスポート](#)

ジョブプロパティ

ジョブには以下のプロパティがあります。

- ジョブ ID – ジョブの作成時に生成された ID で、ジョブを一意に識別します。
- ジョブタイプ – 以下のジョブタイプがサポートされています。
 - Amazon S3 からのインポート
 - AWS Lake Formation データ権限のインポート (プレビュー)

- 署名付き URL からのインポート
- Amazon API Gateway API からのインポート
- Amazon Redshift のAWS Data Exchange データ共有からインポートする
- Amazon S3 データアクセスのインポート
- Amazon S3 へのエクスポート
- 署名付き URL へのエクスポート
- Amazon リソースネーム (ARN) – AWS リソースの一意な識別子。
- ジョブの状態 – ジョブの状態は、WAITING、IN_PROGRESS、COMPLETED、CANCELLED、ERROR、または TIMED_OUT です。ジョブが作成されると、そのジョブは開始されるまで WAITING 状態になります。
- ジョブの詳細 – エクスポート先の詳細やインポートソースの詳細など、ジョブが実行する操作の詳細です。

Example ジョブリソース

```
{
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:jobs/6cEXAMPLE818f7c7a23b3d0EXAMPLE1c",
  "Id": "6cEXAMPLE818f7c7a23b3d0EXAMPLE1c",
  "State": "COMPLETED",
  "Type": "IMPORT_ASSETS_FROM_S3",
  "CreatedAt": "2019-10-11T14:12:24.640Z",
  "UpdatedAt": "2019-10-11T14:13:00.804Z",
  "Details": {
    "ImportAssetsFromS3": {
      "AssetSources": [
        {
          "Bucket": "DOC-EXAMPLE-BUCKET",
          "Key": "MyKey"
        }
      ],
      "DataSetId": "14EXAMPLE4460dc9b005a0dEXAMPLE2f",
      "RevisionId": "e5EXAMPLE224f879066f999EXAMPLE42"
    }
  }
}
```

AWS リージョン とジョブ

データセットのリージョンとは異なる AWS リージョン 内の Amazon S3 バケットに対してアセットのインポートまたはエクスポートを実行する場合は、データ転送コストが Amazon S3 のデータ転送料金ポリシーに従って AWS アカウント に請求されます。

アセットを署名付き URL にエクスポートする場合は、Amazon S3 からインターネットへのデータ転送コストが [Amazon S3 の料金ポリシー](#)に従って AWS アカウント に請求されます。

ファイルデータセットの AWS Data Exchange へのサブスクリプションが終了しても、すでにエクスポートしたファイルには引き続きアクセスできます。データサブスクリプション契約を確認して、サブスクリプションの終了時にエクスポートされたデータを削除することが契約で義務付けられているかどうかを確認してください。

アセットのインポート

アセットは、以下の方法でリージョンにインポートできます。

トピック

- [S3 バケットからのアセットのインポート](#)
- [署名付き URL からのアセットのインポート](#)
- [Amazon API Gateway API からのアセットのインポート](#)
- [Amazon Redshift のAWS Data Exchange データ共有からのアセットのインポート](#)
- [AWS Lake Formation からのアセットのインポート\(プレビュー\)](#)

S3 バケットからのアセットのインポート

Amazon S3 から AWS Data Exchange にアセットをインポートするときは、使用する AWS Identity and Access Management (IAM) 許可に、AWS Data Exchange サービス S3 バケットに書き込む許可と、アセットが保存されている S3 バケットから読み取る許可を含める必要があります。所有権にかかわらず、アクセス許可を持っている S3 バケットなら、どのバケットからでもインポートを実行できます。詳細については、「[Amazon S3 許可](#)」を参照してください。

単一のジョブで最大 100 個のアセットをインポートできます。

トピック

- [S3 バケットからのアセットのインポート \(AWS SDK\)](#)
- [S3 バケットからのアセットのインポート \(コンソール\)](#)

S3 バケットからのアセットのインポート (AWS SDK)

Amazon S3 バケットからアセットをインポートする (AWS SDK)

1. IMPORT_ASSETS_FROM_S3 タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetSources
 - Bucket
 - Key
 - DataSetID
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にアセットの name プロパティを更新します。

S3 バケットからのアセットのインポート (コンソール)

S3 バケットからアセットをインポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [ジョブ] セクションで [Amazon S3 からインポート] を選択します。

6. [Amazon S3 からインポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[アセットをインポート] を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

署名付き URL からのアセットのインポート

署名付き URL を使用して、Amazon S3 に保存されていないアセットをインポートできます。

トピック

- [署名付き URL からのアセットのインポート \(AWS SDK\)](#)
- [署名付き URL からのアセットのインポート \(コンソール\)](#)

署名付き URL からのアセットのインポート (AWS SDK)

署名付き URL からアセットをインポートする (AWS SDK)

1. `IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL` タイプの `CreateJob` リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - `AssetName`
 - `DataSetID`
 - `Md5Hash`
 - `RevisionID`
3. ステップ 1 で返された `JobId` を必要とする `StartJob` 操作で `CreateJob` リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にそれらの `name` プロパティを更新します。
5. レスポンスの詳細には、ファイルをインポートするために使用できる `SignedUrl` が含まれています。

Note

署名付き URL は、作成されてから 1 分後に期限が切れます。

署名付き URL からのアセットのインポート (コンソール)

署名付き URL からアセットをインポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するアセットがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [ジョブ] セクションで [アップロード] を選択します。
6. アップロードウィンドウのプロンプトに従ってから、[開く] を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

Amazon API Gateway API からのアセットのインポート

AWS Data Exchange サブスクライバーは IAM 認証情報と AWSSDK を使用してデータプロバイダーから API を呼び出すことができます。AWS Data Exchange 認証とサブスクリプションの資格を処理して API へのアクセスを管理します。

Amazon API Gateway API からの API アセットのインポート (AWS SDK)

Note

現在、以下の SDK は SendApiAsset 操作をサポートしません。

- AWS SDK for .NET
- AWS SDK for C++
- AWS SDK for Java 2.x

Amazon API Gateway API からアセットをインポートする (AWS SDK)

1. `IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API` タイプの `CreateJob` リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - `ApiID`
 - `DataSetID`
 - `ProtocolType`
 - `RevisionID`
 - `Stage`
3. ステップ 1 で返された `JobId` を必要とする `StartJob` 操作で `CreateJob` リクエストを開始します。
4. (オプション) `GetJob` 操作をポーリングして、ジョブが完了するのを待ちます。
5. (オプション) アセットの作成後にそれらの `name` プロパティを更新します。

Amazon API Gateway API からの API アセットのインポート (コンソール)

Amazon API Gateway API からアセットをインポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するアセットがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [API アセット] セクションで、[API ステージを追加] を選択します。
6. [API ステージを追加] ページで、お使いの AWS アカウント、または別のアカウントからの [Amazon API Gateway API] と [ステージ名] を選択します。
7. [Document API for subscribers] (サブスクライバーのドキュメント API) で以下を実行します。

- a. [API name] (API 名) を、サブスクライバーが理解できる明確で簡潔な名前に更新します。
 - b. フィールドに仕様を入力、[Import from .JSON file] (.JSON ファイルからインポート) を選択して仕様をインポート、または [Amazon API Gatewayからインポート] を選択して仕様をインポートすることによって、OpenAPI 3.0 仕様を文書化します。
8. [API ステージを追加] を選択します。

API アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

Amazon Redshift のAWS Data Exchange データ共有からのアセットのインポート

Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有を使用してアセットをインポートする場合、登録後にサードパーティの Amazon Redshift テーブルのクエリ、分析、運用を開始できます。

Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有からのアセットのインポート (AWS SDK)

Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有からアセットをインポートするには (AWS SDK)

1. `IMPORT_ASSETS_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES` タイプの `CreateJob` リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - `AssetSources`
 - `DataShareArn`
 - `DataSetID`
 - `RevisionID`
3. ステップ 1 で返された `JobId` を必要とする `StartJob` 操作で `CreateJob` リクエストを開始します。
4. (オプション) `GetJob` 操作をポーリングして、ジョブが完了するのを待ちます。
5. (オプション) アセットの作成後にそれらの `name` プロパティを更新します。

Amazon Redshift からのアセットのインポート (コンソール)

Amazon Redshift アセットをインポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するアセットがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [AWS Data Exchange datashares for Amazon Redshift] (Amazon Redshift の データ共有) で、[Add datashares] (データ共有を追加) を選択します。
6. [Add AWS Data Exchangedatashare to リビジョン] (データ共有をリビジョンに追加) ページで、追加するデータ共有 (1 つ、または複数) を選択します。
7. [Add datashare(s)] (データ共有を追加) を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

AWS Lake Formation からのアセットのインポート(プレビュー)

AWS Lake Formation から AWS Data Exchange にアセットをにインポートする場合、使用する IAM 権限には次の機能が含まれている必要があります。

- Lake Formation の権限への書き込み、付与、取り消し
- テーブル、データベース、およびカタログのリソース共有の作成
- Lake Formation 以降のリソース共有のリソース共有の更新、削除、関連付け、関連付けの解除

必要となる IAM アクセス許可の詳細については、「[the section called “アイデンティティとアクセス権の管理”](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation からのアセットのインポート(プレビュー) (AWS SDK)

AWS Lake Formation からアセットをインポートするには(プレビュー) (AWS SDK)

1. Import_Assets_From_Lake_Formation_Tag_Policy タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetSources
 - CatalogId
 - Database
 - Expression
 - TagKey
 - TagValues
 - Permissions
 - Table
 - Expression
 - TagKey
 - TagValues
 - Permissions
- RoleArn
- DataSetId
- RevisionId
3. JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション)GetJob 操作をポーリングして、ジョブが完了するのを待ちます。
5. (オプション) アセットの作成後にそれらの name プロパティを更新します。

AWS Lake Formation からアセットをインポートする(プレビュー) (コンソール)

AWS Lake Formation からアセットをインポートする(プレビュー)(コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. ~~左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。~~

3. [所有データセット] で、更新するリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. LLake Formation データ権限セクションでは、「LFタグを追加」を選択します。
6. 追加するキーと値を選択し、「LF タグを追加」を選択します。
 - (オプション) 「リソースをプレビュー」を選択すると、権限を付与している関連データカタログリソースが表示されます。
7. 「サービスアクセス」で、AWS Lake Formationリソースをインポートするロールを選択します。
8. 「Lake Formation データの作成」権限を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

アセットのエクスポート

プロバイダーとサブスクライバーの両方が、製品の発行済みリビジョンからアセットをエクスポートできます。アセットをエクスポートする方法は 2 つあります。

トピック

- [S3 バケットへのアセットのエクスポート](#)
- [署名付き URL へのアセットのエクスポート](#)

S3 バケットへのアセットのエクスポート

Amazon S3 にアセットをエクスポートするときは、使用する IAM 許可に、AWS Data Exchange サービス S3 バケットから読み取る許可と、アセットが保存されている S3 バケットに書き込む許可を含める必要があります。所有権にかかわらず、アクセス許可を持っている S3 バケットなら、どの

バケットでもエクスポートを実行できます。詳細については、「[Amazon S3 許可](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange は、データセットの Amazon S3 へのエクスポート時に設定可能な暗号化パラメータをサポートします。エクスポートされたオブジェクトに適用する Amazon S3 のサーバー側の暗号化設定は、エクスポートジョブの詳細で指定できます。Amazon S3 マネージドキー (SSE-S3) によるサーバー側の暗号化、AWS KMS keys または AWS Key Management Service (SSE-KMS) に保存されたキーによるサーバー側の暗号化の使用を選択できます。詳細については、「Amazon Simple Storage Service ユーザーガイド」の「[サーバー側の暗号化を使用したデータの保護](#)」を参照してください。

⚠ Important

データを Amazon S3 にエクスポートするときは、Amazon S3 のセキュリティ機能を検討することをお勧めします。一般的なガイドラインとベストプラクティスの詳細については、Amazon Storage Service ユーザーガイドの [Amazon S3 のセキュリティのベストプラクティス](#) を参照してください。

⚠ Important

プロバイダーが、1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法令 (HIPAA) の対象である保護医療情報 (PHI) が含まれているとして製品をマークしている場合は、[AWS Artifact](#) の AWS Business Associate Addendum に規定されているとおり、AWS アカウントが HIPAA アカウントとして指定されている場合を除き、製品のデータセットを AWS アカウントにエクスポートすることはできません。

単一のジョブで最大 100 個のアセットをエクスポートできます。

トピック

- [S3 バケットへのアセットのエクスポート \(AWS SDK\)](#)
- [サブスクリバードとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)

次の動画では、からアセットをエクスポートする方法について詳しく説明しています AWS Data Exchange。

S3 バケットへのアセットのエクスポート (AWS SDK)

S3 バケットにアセットをエクスポートする (AWS SDK)

1. EXPORT_ASSETS_T0_S3 タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetDestinations
 - AssetID
 - Bucket
 - Key
 - DataSetID
 - Encryption
 - KmsKeyArn
 - Type
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にそれらの name プロパティを更新します。

Note

リビジョン全体の単一のジョブとしてのエクスポートについては、「[リビジョンのエクスポート](#)」を参照してください。

サブスクライバーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート (コンソール)

サブスクライバーとして S3 バケットにアセットをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。

5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [アセット] タブで、エクスポートするアセットの横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットを Amazon S3 にエクスポート] を選択します。
8. [Amazon S3 にエクスポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[エクスポート] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

プロバイダーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート (コンソール)

プロバイダーとして S3 バケットにアセットをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、エクスポートするアセットがあるデータセットを選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが公開済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [インポートされたアセット] セクションで、アセット名の横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットを Amazon S3 にエクスポート] を選択します。
8. [Amazon S3 にエクスポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[エクスポート] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

署名付き URL へのアセットのエクスポート

署名付き URL を使用して、Amazon S3 に保存されていないアセットをエクスポートできます。

トピック

- [署名付き URL へのアセットのエクスポート \(AWS SDK\)](#)
- [サブスクライバーとしての署名付き URL へのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての署名付き URL へのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)

署名付き URL へのアセットのエクスポート (AWS SDK)

署名付き URL を使用して、S3 バケット以外の宛先にアセットをエクスポートできます。

署名付き URL にアセットをエクスポートする (AWS SDK)

1. EXPORT_ASSET_TO_SIGNED_URL タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetID
 - DataSetID
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にそれらの name プロパティを更新します。
5. レスポンスの詳細には、ファイルをインポートするために使用できる SignedUrl が含まれています。

Note

署名付き URL は、作成されてから 1 分後に期限が切れます。

サブスクライバーとしての署名付き URL へのアセットのエクスポート (コンソール)

サブスクライバーとして署名付き URL にアセットをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。

4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [アセット] タブで、エクスポートするアセットの横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットをダウンロード] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

プロバイダーとしての署名付き URL へのアセットのエクスポート (コンソール)

プロバイダーとして署名付き URL にアセットをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが公開済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [インポートされたアセット] セクションで、アセット名の横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットをダウンロード] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

リビジョンのエクスポート

プロバイダーとサブスクライバーの両方が、アクセス許可を持つ S3 バケットにデータセットのリビジョンをエクスポートできます。

AWS Data Exchange は、リビジョンの Amazon S3 へのエクスポート時に設定可能な暗号化パラメータをサポートします。エクスポートされたオブジェクトに適用する Amazon S3 のサーバー側の暗号化設定は、エクスポートジョブの詳細で指定できます。Amazon S3 マネージドキー (SSE-S3) によるサーバー側の暗号化、または AWS Key Management Service に保存された KMS キー

(SSE-KMS) によるサーバー側の暗号化の使用を選択できます。詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパーガイド」の「[サーバー側の暗号化を使用したデータの保護](#)」を参照してください。

Important

プロバイダーが、1996年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法令 (HIPAA) の対象である保護医療情報 (PHI) が含まれているとして製品をマークしている場合は、[AWS Artifact](#) のAWS Business Associate Addendum に規定されているとおり、AWS アカウントが HIPAA アカウントとして指定されている場合を除き、製品のデータセットをAWS アカウントにエクスポートすることはできません。

トピック

- [S3 バケットへのリビジョンのエクスポート \(AWS SDK\)](#)
- [プロバイダーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [サブスクリバードとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [サブスクリバードとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート](#)
- [リビジョンをエクスポートするときのキーパターン](#)

次の動画では、AWS Data Exchange (2:18 から) からアセットをエクスポートする方法について詳しく説明しています。

S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (AWS SDK)

S3 バケットにリビジョンをエクスポートする (AWS SDK)

1. EXPORT_REVISIONS_TO_S3 タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - DataSetId
 - Encryption
 - KmsKeyArn
 - Type
 - RevisionDestinations
 - Bucket

- KeyPattern
 - RevisionId
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
 4. 新しく作成されたアセットには、元の S3 オブジェクトのキーと同一の name プロパティがあります。Amazon S3 オブジェクトキーは、デフォルトでキーパターン `${Asset.Name}` に設定されます。

アセットの name プロパティは、それらの作成後に更新できます。

キーパターンの詳細については、「[リビジョンをエクスポートするときのキーパターン](#)」を参照してください。

Note

ダイナミックリファレンスとして DataSet.Name を使用する場合は、IAM 権限 `dataexchange:GetDataSet` が必要です。詳細については、「[AWS Data Exchange API アクセス許可: アクションとリソースのリファレンス](#)」を参照してください。

プロバイダーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (コンソール)

プロバイダーとして S3 バケットにリビジョンをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが公開済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [インポートされたアセット] セクションで、アセット名の横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットを Amazon S3 にエクスポート] を選択します。

8. [Amazon S3 にエクスポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[エクスポート] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (コンソール)

サブスクライバーとして S3 バケットにリビジョンをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。
5. [リビジョン] タブでリビジョンを選択してから、[Amazon S3 にエクスポート] を選択します。
6. [エクスポート リビジョン to Amazon S3] (リビジョンを Amazon S3 にエクスポート) で、宛先のオプションと Amazon S3 バケットフォルダの宛先を選択し、暗号化オプションを設定して、[エクスポート] を選択します。

リビジョンをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート

プロバイダーが新しいリビジョンを発行するときに、新しいリビジョンを Amazon S3 バケットに自動的にエクスポートすることを選択できます。新しいリビジョンは、最大 5 つの S3 バケットにエクスポートできます。選択した S3 バケットに、新しいリビジョンが自動的に表示されます。

トピック

- [S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)
- [サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート \(コンソール\)](#)
- [サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート \(AWS SDK\)](#)

Note

選択した S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートするには、その S3 バケットに、AWS Data Exchange によるデータのエクスポートを許可する許可セットを持つバケットポリシーが設定されている必要があります。詳細については、「[S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)」を参照してください。

S3 バケットポリシー許可の前提条件

リビジョンを S3 バケットに自動的にエクスポートするには、リクエストの支払いを無効にする必要があります。また、S3 バケットには、AWS Data Exchange によるデータのエクスポートを許可する権限が設定されたバケットポリシーが必要です。以下の手順では、これらの許可で既存の S3 バケットポリシーを編集する、またはこれらの許可を使用して S3 バケットポリシーを作成する方法に関する情報を提供します。

S3 バケットが SSE-KMS 暗号化用に構成されている場合、自動エクスポート ジョブを構成するユーザーは、AWS Data Exchange がオブジェクトを S3 バケットにコピーするための KMS キーに対する CreateGrant 権限を持っている必要があります。

Important

S3 バケットポリシーの権限の前提条件が満たされていることを確認するために、自動エクスポート プロセス中に命名形式 `_ADX-TEST-ACCOUNTID#` のオブジェクトが S3 バケットに追加されます。

トピック

- [既存の S3 バケットポリシーの編集](#)
- [S3 バケットポリシーの作成](#)

既存の S3 バケットポリシーの編集

S3 バケットにバケットポリシーがある場合は、次の手順を実行して、AWS Data Exchange がバケットにデータをエクスポートできるようにします。

既存の S3 バケットポリシーを編集する

1. リビジョンをエクスポートするバケットにサインインします。
2. [アクセス許可] タブを選択し、バケットポリシーセクションで [編集] を選択します。
3. 以下のステートメントをコピーし、それをステートメントリストの末尾に貼り付けます。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "Service": "dataexchange.amazonaws.com"
  },
  "Action": [
    "s3:PutObject",
    "s3:PutObjectAcl"
  ],
  "Resource": "arn:aws:s3:::<BUCKET-NAME>/*",
  "Condition": {
    "StringEquals": {
      "aws:SourceAccount": "<AWS ID>"
    }
  }
}
```

4. <BUCKET-NAME> はお使いの S3 バケットの名前、<AWS ID> はお使いの AWSID に置き換えます。
5. [変更を保存] を選択します。
6. 自動エクスポートジョブの宛先としてのバケットをさらに追加する場合は、この手順をステップ 1 から繰り返します。

S3 バケットポリシーの作成

S3 バケットにバケットポリシーがない場合は、以下の手順を実行して AWS Data Exchange によるデータのエクスポートを許可する S3 バケットポリシーを作成します。

S3 バケットポリシーを作成する

1. リビジョンをエクスポートするバケットにサインインします。
2. [アクセス許可] タブを選択し、バケットポリシーセクションで [編集] を選択します。
3. 以下のバケットポリシーのすべてをコピーし、バケットポリシーエディタに貼り付けます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "dataexchange.amazonaws.com"
      },
      "Action": [
        "s3:PutObject",
        "s3:PutObjectAcl"
      ],
      "Resource": "arn:aws:s3:::<BUCKET-NAME>/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:SourceAccount": "<AWS ID>"
        }
      }
    }
  ]
}
```

4. <BUCKET-NAME> はお使いの S3 バケットの名前、<AWS ID> はお使いの AWS ID に置き換えます。
5. [変更を保存] を選択します。
6. 自動エクスポートジョブの宛先としてのバケットをさらに追加する場合は、この手順をステップ 1 から繰り返します。

サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート (コンソール)

Note

選択した S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートするには、その S3 バケットに、AWS Data Exchange によるデータのエクスポートを許可する許可セットを持つバケットポリシーが設定されている必要があります。詳細については、「[S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)」を参照してください。

サブスクライバーとして S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。
5. [リビジョン] タブの [自動エクスポートジョブの宛先] で、[アクション] を選択してから [自動エクスポートジョブの宛先を追加] を選択します。
6. [自動エクスポートジョブの宛先を追加] で、[シンプル] または [アドバンスト] の宛先オプションを選択します。
 - a. [シンプル] オプションを選択する場合は、ドロップダウンリストから Amazon S3 バケットフォルダの宛先を選択し、暗号化オプションを選択して、[バケットの宛先を追加] を選択します。
 - b. [アドバンスト] オプションを選択する場合は、ドロップダウンリストから Amazon S3 バケットフォルダの宛先を選択し、[キー命名パターン](#) を選択して、それをパスに付加します。
7. [出力] を確認します。
8. [暗号化オプション] を設定し、[Amazon S3 の料金] を確認してから、[バケットの宛先を追加] を選択します。

Amazon S3 バケットの宛先が、[リビジョン] タブの [自動エクスポートジョブの宛先] に表示されます。

リビジョンを自動的にエクスポートするジョブが開始されます。

S3 バケットポリシーの権限の前提条件が満たされていることを確認するために、命名形式 `_ADX-TEST-ACCOUNTID#` のオブジェクトが S3 バケットに追加されます。

ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

別の宛先を追加するには、[アクション] を選択してから [自動エクスポートジョブの宛先を追加] を選択します。

編集するには、編集する宛先を選択し、[アクション] を選択してから [宛先設定の編集] を選択します。

削除するには、[アクション] を選択してから [自動エクスポートジョブの宛先の削除] を選択します。

サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート (AWS SDK)

Note

選択した S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートするには、その S3 バケットに、AWS Data Exchange によるデータのエクスポートを許可する許可セットを持つバケットポリシーが設定されている必要があります。詳細については、「[S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)」を参照してください。

S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートする (AWS SDK)

1. Create_Event_Action リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - Action
 - ExportRevisionToS3
 - Encryption
 - KmsKeyArn
 - Type
 - RevisionDestination
 - Bucket
 - KeyPattern
 - Event
 - RevisionPublished
 - DataSetId
3. 必要に応じてキーパターンを変更します。Amazon S3 オブジェクトキーは、デフォルトでキーパターン {Revision.CreatedAt}/{Asset.Name} に設定されます。

キーパターンの詳細については、「[リビジョンをエクスポートするときのキーパターン](#)」を参照してください。

S3 バケットポリシー権限の前提条件が満たされていることを確認するために、_ADX-TEST-ACCOUNTID#命名形式のオブジェクトが S3 バケットに追加されます。

リビジョンをエクスポートするときのキーパターン

リビジョンをエクスポートすると、各アセットが S3 バケット内のオブジェクトになります。オブジェクトの名前は、ユーザー指定のキーパターンに基づきます。アセット属性を表す動的な参照を使用して、エクスポート中に自動生成される名前のパターンを作成できます。以下の表に記載されている動的な参照を使用します。

動的な参照	説明
<code>\${Asset.Id}</code>	アセットの ID。
<code>\${Asset.Name}</code>	アセットの名前。
<code>\${DataSet.Id}</code>	エクスポートされているデータセットの ID。
<code>\${DataSet.Name}</code>	エクスポートされるセットの名前。
<code>\${Revision.CreatedAt}</code>	YYYY-MM-DDTHH:MM:SSZ 形式を使用する、リビジョンが作成された UTC 日付と時刻。例: 2021-10-08T16:33:19.787Z
<code>\${Revision.CreatedAt.Day}</code>	リビジョンが作成された日。
<code>\${Revision.CreatedAt.Month}</code>	リビジョンが作成された月。
<code>\${Revision.CreatedAt.Year}</code>	リビジョンが作成された年。
<code>\${Revision.Id}</code>	エクスポートされているリビジョンの ID。

これらの動的な参照を使用して、アセット名のキーパターンを作成できます。2つの Asset 動的参照 (`${Asset.Name}` と `${Asset.Id}`) の少なくとも一方を含める必要があります。

例えば、`${Revision.Id}/${Asset.Name}` をキーパターンとして使用すると、オブジェクト名としてスラッシュで区切られたリビジョン ID とアセット名を使用する Amazon S3 オブジェクトができます。

`asset1` と `asset2` という名前の 2 つのアセットを持つ ID が `testRevisionId` のリビジョンをエクスポートすると、アセットは以下の Amazon S3 ロケーションにエクスポートされます。

- `<bucket>/testRevisionId/asset1`
- `<bucket>/testRevisionId/asset2`

Note

結果として得られるオブジェクトには、一意の名前が必要です。それらに S3 バケット内の既存のオブジェクトと同じ名前が付けられている場合、エクスポートによって既存のオブジェクトが上書きされます。エクスポートしているリビジョンに一意でない名前がある場合 (同じ名前が付けられた 2 つのアセットなど)、エクスポートは失敗します。一意の動的参照は `${Asset.Id}` のみです。

AWS Data Exchange のクォータ

次のセクションでは、サービス クォータ、エンドポイント、AWS リージョン 全体のエクスポートおよびインポート ジョブのガイドライン、AWS アカウント の AWS Data Exchange のリソース フィールドに関連する制約に関する情報を提供します。

Service Quotas

サービスクォータについては、「AWS 全般のリファレンス」の「[AWS Data Exchange エンドポイントとクォータ](#)」を参照してください。

サービスエンドポイント

サービスエンドポイントについては、「[AWS 全般のリファレンス](#)」の「AWS Data Exchange エンドポイントとクォータ」を参照してください。

エクスポートとインポートジョブのガイドライン

以下の表には、エクスポートジョブとインポートジョブのガイドラインが提供されています。詳細については、「[AWS リージョン および データセット](#)」を参照してください。

リソース、記述子、または操作	最大値	説明
署名付き URL からインポートされたアセットのファイルサイズ	5 GB	IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL を使用してインポートできるアセットの最大サイズ (GB 単位)。
Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) へのリビジョンのクロスリージョンエクスポートのファイルサイズ	1,000 GB	ExportRevision ジョブを使用して、プロバイダデータセットから別のリージョンにエクスポートできるリビジョンの最大サイズ (GB 単位) です。

リソース、記述子、または操作	最大値	説明
単一のジョブで署名付き URL からインポートできるアセットの数	1	単一の IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL ジョブを使用してインポートできるアセットの数です。
単一のクロスリージョン ExportRevision ジョブで Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数	10,000	ExportRevision ジョブを使用して、1つのリージョンから別のリージョンにプロバイダーデータセットからエクスポートできるアセットの数です。
単一の ExportRevision ジョブで Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数	10,000	ExportRevision ジョブを使用して Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数です。
単一の ExportRevision ジョブで Amazon S3 にエクスポートできるリビジョンの数	1	ExportRevision ジョブを使用して Amazon S3 にエクスポートできるリビジョンの数です。
リソースあたりのイベントアクション	5	リソースあたりのイベントアクションの最大数です。
アカウントあたりのイベントアクション	50	アカウントあたりのイベントアクションの最大数です。
API Gateway からインポートされた API のペイロードサイズ	10 MB	Amazon API Gateway からインポートされた API の最大ペイロードサイズです。Amazon API Gateway API のクォータに関する詳細については、「Amazon API Gateway API デベロッパーガイド」の「 Amazon API Gateway のクォータと重要な注意点 」を参照してください。
インポートされた API Gateway API に対する 1 秒あたりのリクエスト数	10	インポートされた API Gateway API に送信できる 1 秒あたりのリクエストの最大数です。

リソースフィールドに対する制約

以下の表には、データセット、リビジョン、製品、および製品オファーを作成しているときにプロバイダーが AWS Data Exchange で受ける、リソースフィールドに関連する制約が記載されています。この表には、サブスクリプションリクエストを実行するときにサブスクライバーが受けるリソースフィールドに関連する制約も記載されています。

[リソース]	フィールド	最大長またはサイズ
データセット	名前	256 文字
データセット	説明	16,384 文字
リビジョン	コメント	128 文字
製品の詳細	名前	72 文字
製品の詳細	簡単な説明	500 文字
製品の詳細	詳しい説明	30,000 文字
製品の詳細	ロゴ	100 KB
製品オファー	DSA	10 MB
製品オファー	返金ポリシー	200 文字
サブスクリプションリクエスト	会社名	40 文字
サブスクリプションリクエスト	名前	40 文字
サブスクリプションリクエスト	E メールアドレス	100 文字
サブスクリプションリクエスト	想定されるユースケース	500 文字

セキュリティ

のクラウドセキュリティが最優先事項 AWS です。AWS のお客様は、セキュリティを最も重視する組織の要件を満たすように構築された複数のデータセンターとネットワークアーキテクチャから利点を得られます。

セキュリティは、AWS とユーザー間で共有される責任です。[責任共有モデル](#)では、これをクラウドのセキュリティおよびクラウド内のセキュリティとして説明しています。

- クラウドのセキュリティ – AWS は、で AWS サービスを実行するインフラストラクチャを保護する責任を担います AWS クラウド。また、は、ユーザーが安全に使用できるサービス AWS も提供します。AWS のセキュリティの有効性については、[AWS コンプライアンスプログラム](#)の一環として、サードパーティー監査機関によるテストと検証が定期的に行われています。に適用されるコンプライアンスプログラムの詳細については AWS Data Exchange、「[コンプライアンスプログラムによる AWS 対象範囲内のサービス](#)」を参照してください。
- クラウド内のセキュリティ – お客様の責任は、使用する AWS のサービスによって決まります。ユーザーは、ユーザーのデータの機密性、組織の要件、および適用法と規制などのその他要因に対する責任も担います。

このドキュメントは、AWS Data Exchangeの使用時における責任共有モデルの適用方法を理解するために役立ちます。以下のトピックでは、セキュリティおよびコンプライアンスの目的 AWS Data Exchange を達成するために を設定する方法を示します。また、AWS Data Exchange リソースのモニタリングや保護に役立つ他の AWS のサービスの使用方法についても説明します。

でのデータ保護 AWS Data Exchange

AWS [責任共有モデル](#)、でのデータ保護に適用されます AWS Data Exchange。このモデルで説明したように、AWS は、すべての を実行するグローバルインフラストラクチャを保護する責任を担います AWS クラウド。このインフラストラクチャでホストされているコンテンツに対する管理を維持する責任はユーザーにあります。また、使用する AWS のサービスのセキュリティ設定と管理タスクもユーザーの責任となります。データプライバシーの詳細については、「[データプライバシーのよくある質問](#)」を参照してください。欧州でのデータ保護の詳細については、「AWS セキュリティブログ」に投稿された「[AWS 責任共有モデルおよび GDPR](#)」のブログ記事を参照してください。

データ保護の目的で、認証情報を保護し AWS アカウント、AWS IAM Identity Center または AWS Identity and Access Management (IAM) を使用して個々のユーザーを設定することをお勧めします。

こうすると、それぞれのジョブを遂行するために必要なアクセス許可のみを各ユーザーに付与できません。また、以下の方法でデータを保護することをお勧めします。

- 各アカウントで多要素認証 (MFA) を使用します。
- SSL/TLS を使用して AWS リソースと通信します。TLS 1.2、できれば TLS 1.3 が必要です。
- API とユーザーアクティビティのログ記録を設定します AWS CloudTrail。
- AWS 暗号化ソリューションを、内のすべてのデフォルトのセキュリティコントロールとともに使用します AWS のサービス。
- Amazon Macie などの高度なマネージドセキュリティサービスを使用します。これらは、Amazon S3 に保存されている機密データの検出と保護を支援します。
- コマンドラインインターフェイスまたは API AWS を介してにアクセスするときに FIPS 140-2 検証済みの暗号化モジュールが必要な場合は、FIPS エンドポイントを使用します。利用可能な FIPS エンドポイントの詳細については、「[連邦情報処理規格 \(FIPS\) 140-2](#)」を参照してください。

お客様の E メールアドレスなどの機密情報やセンシティブ情報は、タグや名前フィールドなどの自由形式のフィールドに配置しないことを強くお勧めします。これは、コンソール AWS Data Exchange、API、または SDK で AWS CLI または他の AWS のサービスを使用する場合も同様です。AWS SDKs 名前に使用する自由記述のテキストフィールドやタグに入力したデータは、課金や診断ログに使用される場合があります。外部サーバーへの URL を提供する場合は、そのサーバーへのリクエストを検証するための認証情報を URL に含めないように強くお勧めします。

AWS Data Exchange には、データセットに存在するコンテンツを保護するために使用できる以下のオプションが用意されています。

トピック

- [保管中の暗号化](#)
- [転送中の暗号化](#)
- [コンテンツに対するアクセス制限](#)

保管中の暗号化

AWS Data Exchange は、追加の設定を必要とせずに、保管中のサービスに保存されているすべてのデータ製品を常に暗号化します。この暗号化は、を使用する場合に自動的に行われます AWS Data Exchange。

転送中の暗号化

AWS Data Exchange は、転送中の暗号化に Transport Layer Security (TLS) とクライアント側の暗号化を使用します。この通信 AWS Data Exchange は常に HTTPS 経由で行われるため、データは転送中に常に暗号化されます。この暗号化は、を使用するときデフォルトで設定されます AWS Data Exchange。

コンテンツに対するアクセス制限

ベストプラクティスとして、適切なユーザーのサブセットへのアクセスを制限する必要があります。では AWS Data Exchange、を使用するユーザー、グループ、ロールに適切なアクセス許可 AWS アカウント を付与することで、これを行うことができます。IAM エンティティのロールとポリシーの詳細については、「[IAM ユーザーガイド](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスのキー管理

このページは、プロバイダーが SSE-KMS を使用して暗号化されたオブジェクトを共有する Amazon S3 データアクセスタイプに固有のものです。サブスクライバーは、アクセスに使用するキーを付与されている必要があります。

Amazon S3 バケットに AWS KMS カスタマーマネージドキーを使用して暗号化されたデータが含まれている場合は、それらをと共有 AWS KMS keys AWS Data Exchange して Amazon S3 データアクセスデータセットを設定する必要があります。詳細については、「[the section called “ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する”](#)」を参照してください。

トピック

- [AWS KMS 許可の作成](#)
- [暗号化コンテキストと許可制約](#)
- [AWS KMS keys での のモニタリング AWS Data Exchange](#)

AWS KMS 許可の作成

Amazon S3 データアクセスデータセット AWS KMS keys の一部として を指定すると、AWS Data Exchange は AWS KMS key 共有されるたびに AWS KMS 許可を作成します。Amazon S3 この権限は、親権限と呼ばれ、サブスクライバーに追加 AWS KMS 権限を作成する AWS Data Exchange 権限を付与するために使用されます。これらの追加許可は子許可補助金と呼ばれます。各サブスクライバーには 1 つの AWS KMS 許可が付与されます。サブスクライバーは、を復号するアクセス許可

を取得します AWS KMS key。その後、共有されている暗号化された Amazon S3 オブジェクトを復号して使用できます。詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[AWS KMSでの許可](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange は、AWS KMS 親グラントを使用して、作成する AWS KMS グラントのライフサイクルも管理します。サブスクリプションが終了すると、は対応するサブスクライバー用に作成された AWS KMS 子グラントを AWS Data Exchange 廃止にします。リビジョンが取り消された場合、またはデータセットが削除された場合、は AWS KMS 親グラントを AWS Data Exchange 廃止にします。AWS KMS アクションの詳細については、[AWS KMS 「API リファレンス」](#)を参照してください。

暗号化コンテキストと許可制約

AWS Data Exchange は、リクエストに指定された暗号化コンテキストが含まれている場合にのみ、グラント制約を使用して復号オペレーションを許可します。Amazon S3 バケットキー機能を使用して、Amazon S3 オブジェクトを暗号化し、と共有できます AWS Data Exchange。バケットの Amazon リソースネーム (ARN) は Amazon S3 によって暗号化コンテキストとして暗黙的に使用されます。次の例は、AWS KMS が作成するすべての許可の許可制約としてバケット ARN AWS Data Exchange を使用することを示しています。

```
"Constraints": {
  "EncryptionContextSubset": "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Bucket ARN>"
}
```

AWS KMS keys での のモニタリング AWS Data Exchange

AWS KMS カスタマーマネージドキーを と共有する場合 AWS Data Exchange、[AWS CloudTrail](#)を使用して、AWS Data Exchange またはデータサブスクライバーが に送信するリクエストを追跡できます AWS KMS。以下は、CreateGrantおよび のDecrypt呼び出しの CloudTrail ログの例です AWS KMS。

CreateGrant for parent

CreateGrant は、 自体のために によって作成された親許可 AWS Data Exchange 用です。

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "AssumedRole",
```

```
"principalId": "AROAIQDTESTANDEXAMPLE:Provider01",
"arn": "arn:aws:sts::<your-account-id>:assumed-role/Admin/Provider01",
"accountId": "<your-account-id>",
"accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
"sessionContext": {
  "sessionIssuer": {
    "type": "Role",
    "principalId": "AROAIQDTESTANDEXAMPLE",
    "arn": "arn:aws:iam::<your-account-id>:role/Admin/Provider01",
    "accountId": "<your-account-id>",
    "userName": "Admin"
  },
  "webIdFederationData": {},
  "attributes": {
    "creationDate": "2023-02-16T17:29:23Z",
    "mfaAuthenticated": "false"
  }
},
"invokedBy": "datax.amazonaws.com"
},
"eventTime": "2023-02-16T17:32:47Z",
"eventSource": "kms.amazonaws.com",
"eventName": "CreateGrant",
"awsRegion": "us-east-2",
"sourceIPAddress": "datax.amazonaws.com",
"userAgent": "datax.amazonaws.com",
"requestParameters": {
  "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>",
  "operations": [
    "CreateGrant",
    "Decrypt",
    "RetireGrant"
  ],
  "granteePrincipal": "dataexchange.us-east-2.amazonaws.com",
  "retiringPrincipal": "dataexchange.us-east-2.amazonaws.com",
  "constraints": {
    "encryptionContextSubset": {
      "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Your Bucket ARN>"
    }
  }
},
"responseElements": {
  "grantId": "<KMS Grant ID of the created Grant>",
  "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
}
```

```
},
"requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
"eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
"readOnly": false,
"resources": [
  {
    "accountId": "<Your Account Id>",
    "type": "AWS::KMS::Key",
    "ARN": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
  }
],
"eventType": "AwsApiCall",
"managementEvent": true,
"recipientAccountId": "<Your Account Id>",
"eventCategory": "Management"
}
```

CreateGrant for child

CreateGrant は、サブスクライバー用に によって作成された子グラント AWS Data Exchange 用です。

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "AWSService",
    "invokedBy": "datax.amazonaws.com"
  },
  "eventTime": "2023-02-15T23:15:49Z",
  "eventSource": "kms.amazonaws.com",
  "eventName": "CreateGrant",
  "awsRegion": "us-east-2",
  "sourceIPAddress": "datax.amazonaws.com",
  "userAgent": "datax.amazonaws.com",
  "requestParameters": {
    "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>",
    "operations": [
      "Decrypt"
    ],
    "granteePrincipal": "<Subscriber's account Id>",
    "retiringPrincipal": "dataexchange.us-east-2.amazonaws.com",
    "constraints": {
```



```
        "encryptionContextSubset": {
            "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Your Bucket ARN>"
        }
    },
    "responseElements": {
        "grantId": "<KMS Grant ID of the created Grant>",
        "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
    },
    "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "readOnly": false,
    "resources": [
        {
            "accountId": "<Your Account Id>",
            "type": "AWS::KMS::Key",
            "ARN": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
        }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "<Your Account Id>",
    "sharedEventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE ",
    "eventCategory": "Management"
}
```

Decrypt

Decryptは、サブスクライバーがサブスクライブしている暗号化データを読み取ろうとしたときに呼び出されます。

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "AWSAccount",
    "principalId": "AROAIIGDTESTANDEXAMPLE:Subscriber01",
    "accountId": "<subscriber-account-id>",
    "invokedBy": "<subscriber's IAM identity>"
  },
  "eventTime": "2023-02-15T23:28:30Z",
  "eventSource": "kms.amazonaws.com",
  "eventName": "Decrypt",
  "awsRegion": "us-east-2",
```

```
"sourceIPAddress": "<subscriber's IP address>",
"userAgent": "<subscriber's user agent>",
"requestParameters": {
  "encryptionContext": {
    "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Your Bucket ARN>"
  },
  "encryptionAlgorithm": "SYMMETRIC_DEFAULT"
},
"responseElements": null,
"requestID": "\"ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE\"",
"eventID": "\"ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE\"",
"readOnly": true,
"resources": [
  {
    "accountId": "<Your Account Id>",
    "type": "AWS::KMS::Key",
    "ARN": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
  }
],
"eventType": "AwsApiCall",
"managementEvent": true,
"recipientAccountId": "602466227860",
"sharedEventID": "bcf4d02a-31ea-4497-9c98-4c3549f20a7b",
"eventCategory": "Management"
}
```

での Identity and Access Management AWS Data Exchange

AWS SDK を使用したインポートジョブの作成 AWS Data Exchange やコンソールでの製品のサブスクライブなど、でオペレーションを実行するには AWS Data Exchange、AWS Identity and Access Management (IAM) で承認された AWS ユーザーであることを認証する必要があります。例えば、コンソールを使用している場合は、AWS サインイン認証情報を指定してアイデンティティを AWS Data Exchange 認証します。

ID を認証すると、IAM は一連のオペレーションとリソースに対する一連の定義されたアクセス許可 AWS を使用して、へのアクセスを制御します。アカウント管理者である場合、IAM を使用して、アカウントに関連付けられたリソースへの他のユーザーのアクセスをコントロールできます。

トピック

- [認証](#)

- [アクセスコントロール](#)
- [AWS Data Exchange API アクセス許可: アクションとリソースのリファレンス](#)
- [AWS の マネージドポリシー AWS Data Exchange](#)

認証

には、次のいずれかのタイプの ID AWS でアクセスできます。

- AWS アカウント ルートユーザー – を作成するときは AWS アカウント、アカウント内のすべての AWS のサービス およびリソースへの完全なアクセス権を持つ 1 つのサインイン ID から始まります。このアイデンティティは AWS アカウント ルートユーザーと呼ばれ、アカウントの作成に使用した E メールアドレスとパスワードでサインインすることでアクセスできます。日常的なタスクには、ルートユーザーを使用しないことを強くお勧めします。ルートユーザーの認証情報を保護し、それらを使用してルートユーザーのみが実行できるタスクを実行してください。ルートユーザーとしてサインインする必要があるタスクの完全なリストについては、「IAM ユーザーガイド」の「[ルートユーザー認証情報が必要なタスク](#)」を参照してください。
- ユーザー – [ユーザー](#)は、特定のカスタム許可を持つ AWS アカウント 内のアイデンティティです。IAM 認証情報を使用して、AWS Management Console や AWS Support センターなどのセキュリティ保護された AWS ウェブページにサインインできます。
- IAM ロール - [IAM ロール](#)は、アカウントで作成して特定の許可を付与できる IAM ID です。IAM ロールは、AWS アイデンティティが で実行できることとできないことを決定するアクセス許可ポリシーを持つアイデンティティであるという点で IAM ユーザーと似ています AWS。ただし、ユーザーは 1 人の特定の人の一意に関連付けられますが、ロールはそれを必要とする任意の人が引き受けるようになっています。また、ロールには標準の長期認証情報 (パスワードやアクセスキーなど) も関連付けられません。代わりに、ロールを引き受けると、ロールセッション用の一時的なセキュリティ認証情報が提供されます。ロールと一時的な認証情報は、次の状況で役立ちます。
- フェデレーティッドユーザーアクセス – ユーザーを作成する代わりに、AWS Directory Service、エンタープライズユーザーディレクトリ、またはウェブ ID プロバイダーの既存の ID を使用できます。これらはフェデレーティッドユーザー と呼ばれます。ID プロバイダーを通じてアクセスがリクエストされると、 はフェデレーティッドユーザーにロールを AWS 割り当てます。フェデレーティッドユーザーの詳細については、「[フェデレーティッドユーザーとロール](#)」を参照してください。
- AWS のサービス アクセス – サービスロールは、サービスがユーザーに代わってアカウントでアクションを実行するために引き受ける IAM ロールです。AWS のサービス 環境には、セット

アップ時にサービスが引き受けるロールを定義する必要があるものもあります。このサービスロールには、サービスが必要な AWS リソースにアクセスするために必要なすべてのアクセス許可が含まれている必要があります。サービスロールはサービスによって異なりますが、多くのサービスロールでは、そのサービスの文書化された要件を満たしている限り、許可を選択することができます。サービスロールは、お客様のアカウント内のみでアクセスを提供します。他のアカウントのサービスへのアクセス権を付与するためにサービスロールを使用することはできません。IAM 内部からサービスロールを作成、修正、削除できます。例えば、Amazon Redshift がユーザーに代わって Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにアクセスし、そのバケットのデータを Amazon Redshift クラスターにロードすることを許可するロールを作成できます。詳細については、「[AWS のサービスにアクセス権限を委任するロールの作成](#)」を参照してください。

- Amazon EC2 で実行されているアプリケーション – IAM ロールを使用して、Amazon EC2 インスタンスで実行され、AWS CLI または AWS API リクエストを作成しているアプリケーションの一時的な認証情報を管理できます。これは、Amazon EC2 インスタンス内にアクセスキーを保存するよりも望ましい方法です。AWS ロールを Amazon EC2 インスタンスに割り当て、そのすべてのアプリケーションで使用できるようにするには、インスタンスにアタッチされたインスタンスプロファイルを作成します。インスタンスプロファイルにはロールが含まれ、Amazon EC2 インスタンスで実行されるプログラムは一時的な認証情報を取得することができます。詳細については、「[IAMロールを使用してAmazon EC2インスタンス上で動作するアプリケーションに権限を付与する](#)」を参照してください。

アクセスコントロール

AWS Data Exchange リソースを作成、更新、削除、または一覧表示するには、オペレーションを実行し、対応するリソースにアクセスするためのアクセス許可が必要です。操作をプログラマ的に実行するには、有効なアクセスキーも必要です。

AWS Data Exchange リソースへのアクセス許可の管理の概要

すべての AWS リソースは、によって所有され AWS アカウント、リソースを作成またはアクセスするアクセス許可はアクセス許可ポリシーによって管理されます。アカウント管理者は、ユーザー、グループ、およびロールにアクセス許可ポリシーをアタッチできます。一部のサービス (AWS Lambda など) は、リソースへの許可ポリシーのアタッチもサポートします。

Note

アカウント管理者 (または管理者) は、管理者権限を持つユーザーです。詳細については、「[IAM ベストプラクティス](#)」を参照してください。

アクセス権限を付与するには、ユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- のユーザーとグループ AWS IAM Identity Center :

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」の手順に従ってください。

- IAM 内で、ID プロバイダーによって管理されているユーザー:

ID フェデレーションのロールを作成します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティー ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールの作成](#)」を参照してください。

- IAM ユーザー:

- ユーザーが担当できるロールを作成します。手順については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザー用ロールの作成](#)」を参照してください。
- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加する。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス権限の追加](#)」を参照してください。

トピック

- [AWS Data Exchange リソースとオペレーション](#)
- [リソース所有権について](#)
- [リソースへのアクセスの管理](#)
- [ポリシー要素 \(アクション、効果、プリンシパル\) の指定](#)
- [ポリシーでの条件の指定](#)

AWS Data Exchange リソースとオペレーション

では AWS Data Exchange、コントロールプレーンが異なる 2 種類のプライマリリソースがあります。

- のプライマリリソース AWS Data Exchange はデータセットとジョブ です。 はリビジョンとアセット AWS Data Exchange もサポートしています。
- プロバイダーとサブスクライバー間のトランザクションを容易にするために、 AWS Data Exchange は製品、オファー、サブスクリプションなどの AWS Marketplace 概念とリソースも使用します。 AWS Marketplace Catalog API または AWS Data Exchange コンソールを使用して、製品、オファー、サブスクリプションリクエスト、サブスクリプションを管理できます。

リソース所有権について

は、誰がリソースを作成したかにかかわらず、アカウントで作成されたリソース AWS アカウントを所有します。具体的には、リソース所有者は、リソース作成リクエスト AWS アカウント を認証する [プリンシパルエンティティ](#) (AWS アカウント ルートユーザー、ユーザー、またはロール) のです。以下は、この仕組みを説明する例です。

リソース所有権

正しいアクセス許可 AWS アカウント を持つ 内の IAM エンティティは、 AWS Data Exchange データセットを作成できます。IAM エンティティがデータセットを作成すると、その AWS アカウントがデータセットを所有します。公開されたデータ製品には、それらを AWS アカウント 作成したのみが所有しているデータセットを含めることができます。

AWS Data Exchange 製品をサブスクライブするには、IAM エンティティには、 の AWS Data Exchange、 および `aws-marketplace:AcceptAgreementRequest` IAM アクセス許可に加えて `aws-marketplace:aws-marketplace>CreateAgreementRequest`、 `aws-marketplace:subscribe` を使用するアクセス許可が必要です AWS Marketplace (関連するサブスクリプション検証に合格すると仮定)。サブスクライバーのアカウントには権限を持つデータセットに対する読み取りアクセス権がありますが、アカウントは権限を持つデータセットを所有しません。Amazon S3 にエクスポートされる権限を持つデータセットは、サブスクライバーの AWS アカウントが所有します。

リソースへのアクセスの管理

このセクションでは、 のコンテキストでの IAM の使用について説明します AWS Data Exchange。これは、IAM サービスに関する詳細情報を取得できません。完全な IAM ドキュメンテーションについては、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM とは？](#)」を参照してください。IAM ポリシー構文の詳細と説明については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS IAM ポリシーリファレンス](#)」を参照してください。

アクセスポリシーは、誰が何に対するアクセス権を持っているのかを説明します。以下のセクションでは、アクセス権限のポリシーを作成するためのオプションについて説明します。

IAM アイデンティティにアタッチされているポリシーは、[アイデンティティベース] のポリシー (IAM ポリシー) と呼ばれます。リソースにアタッチされたポリシーは、リソースベースのポリシーと呼ばれます。は、アイデンティティベースのポリシー (IAM ポリシー) のみ AWS Data Exchange をサポートします。

トピック

- [ID ベースのポリシーと権限](#)
- [リソースベースのポリシー](#)

ID ベースのポリシーと権限

AWS Data Exchange には、次の 4 つのマネージドポリシーがあります。

- `AWSDataExchangeFullAccess`
- `AWSDataExchangeSubscriberFullAccess`
- `AWSDataExchangeProviderFullAccess`
- `AWSDataExchangeReadOnly`

これらのポリシーとその許可に関する詳細については、「[AWS の マネージドポリシー AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon S3 許可

Amazon S3 から アセットをインポートする場合 AWS Data Exchange、AWS Data Exchange サービス S3 バケットに書き込むためのアクセス許可が必要です。同様に、 から Amazon S3 AWS Data Exchange にアセットをエクスポートする場合、AWS Data Exchange サービス S3 バケットから読み取るためのアクセス許可が必要です。これらの許可は前述のポリシーに含まれていますが、独自のポリシーを作成して、ユーザーに実行してもらいたい操作だけを許可することもできます。これらのアクセス許可の範囲は、名前 `aws-data-exchange` に が含まれるバケットに限定し、アクセス [CalledVia](#) 許可を使用して、プリンシパル AWS Data Exchange に代わって によって行われたリクエストへのアクセス許可の使用を制限できます。

例えば、これらのアクセス許可 AWS Data Exchange を含む へのインポートとエクスポートを許可するポリシーを作成できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "s3:GetObject",
      "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
      "Condition": {
        "ForAnyValue:StringEquals": {
          "aws:CalledVia": [
            "dataexchange.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:PutObject",
        "s3:PutObjectAcl"
      ],
      "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
      "Condition": {
        "ForAnyValue:StringEquals": {
          "aws:CalledVia": [
            "dataexchange.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    }
  ],
}
```

これらのアクセス許可により、プロバイダーは を使用してインポートおよびエクスポートできます AWS Data Exchange。ポリシーには、以下の許可と制限が含まれています。

- s3:PutObject および s3:PutObjectAcl – これらのアクセス許可は、名前aws-data-exchangeに が含まれる S3 バケットのみに制限されます。これらのアクセス許可により、プロバイダーは Amazon S3 からインポートするときに AWS Data Exchange サービスバケットに書き込むことができます。

- s3:GetObject – このアクセス許可は、名前aws-data-exchangeに が含まれる S3 バケットに制限されます。このアクセス許可により、 から Amazon S3 AWS Data Exchange にエクスポートするとき、お客様は AWS Data Exchange サービスバケットから読み取ることができます。
- これらの許可は、IAM CalledVia 条件で AWS Data Exchange を使用して行われたリクエストに制限されています。これにより、S3 アクセスPutObject許可は AWS Data Exchange コンソールまたは API のコンテキストでのみ使用できます。
- AWS Lake Formation および AWS Resource Access Manager (AWS RAM) – AWS Lake Formation データセットを使用するには、サブスクリプションを所有する新しいプロバイダーごとに AWS RAM 共有招待を承諾する必要があります。AWS RAM 共有の招待を承諾するには、AWS RAM 共有の招待を承諾する権限を持つロールを引き受ける必要があります。の AWS マネージドポリシーの詳細については AWS RAM、 「 の [マネージドポリシー](#)」を参照してください [AWS RAM](#)。
- AWS Lake Formation データセットを作成するには、IAM が にロールを渡すことを許可するロールを引き受けたデータセットを作成する必要があります AWS Data Exchange。これにより AWS Data Exchange、 はユーザーに代わって Lake Formation リソースにアクセス許可を付与および取り消すことができます。以下のポリシーの例を参照してください。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": "iam:PassRole",
  "Resource": "*",
  "Condition": {
    "StringEquals": {
      "iam:PassedToService": "dataexchange.amazonaws.com"
    }
  }
}
```

Note

ユーザーには、この例で説明されていない独自の S3 バケットとオブジェクトに対して読み取りまたは書き込みを行うための追加の許可も必要になる場合があります。

ユーザー、グループ、ロール、および許可の詳細については、「[IAM ユーザーガイド](#)」の「ID (ユーザー、グループ、ロール)」を参照してください。

リソースベースのポリシー

AWS Data Exchange では、リソースベースのポリシーはサポートされていません。

Amazon S3 などの他のサービスは、リソースベースの許可ポリシーをサポートします。例えば、ポリシーを S3 バケットにアタッチして、そのバケットに対するアクセス許可を管理できます。

ポリシー要素 (アクション、効果、プリンシパル) の指定

を使用するには AWS Data Exchange、IAM ポリシーでユーザーアクセス許可を定義する必要があります。

最も基本的なポリシーの要素を次に示します。

- リソース - ポリシーで Amazon リソースネーム (ARN) を使用して、ポリシーを適用するリソースを識別します。すべての AWS Data Exchange API オペレーションはリソースレベルのアクセス許可 (RLP) をサポートしますが、AWS Marketplace アクションは RLP をサポートしていません。詳細については、「[AWS Data Exchange リソースとオペレーション](#)」を参照してください。
- アクション - アクションキーワードを使用して、許可または拒否するリソース操作を特定します。
- 効果 - ユーザーが特定のアクションをリクエストするときの効果 (許可または拒否) を指定します。リソースに対するアクセス権を明示的に付与 (許可) しない場合、アクセスは暗黙的に拒否されます。また、明示的にリソースへのアクセスを拒否すると、別のポリシーによってアクセスが許可されている場合でも、ユーザーはそのリソースにアクセスできなくなります。
- プリンシパル - ID ベースのポリシー (IAM ポリシー) で、ポリシーがアタッチされているユーザーが黙示的なプリンシパルとなります。リソースベースのポリシーでは、アクセス許可を受け取るユーザー、アカウント、サービス、またはその他のエンティティを指定します (リソースベースのポリシーにのみ適用)。AWS Data Exchange リソースベースのポリシーはサポートされていません。

IAM ポリシーの構文と説明に関する詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS IAM ポリシーリファレンス](#)」を参照してください。

ポリシーでの条件の指定

許可を付与するとき、IAM ポリシー言語を使用して、ポリシーが有効になる必要がある条件を指定できます。では AWS Data Exchange、CreateJob、GetJob、および CancelJob API StartJob オペレーションは条件付きアクセス許可をサポートします。許可は JobType レベルで提供できます。

AWS Data Exchange 条件キーリファレンス

条件キー	説明	[Type] (タイプ)
"dataexchange:JobType": "IMPORT_ASSETS_FROM_S3"	Amazon S3 からアセットをインポートするジョブに許可をスコープします。	文字列
"dataexchange:JobType": "IMPORT_ASSETS_FROM_LAKE_FORMATION_TAG_POLICY" (Preview)	AWS Lake Formation からアセットをインポートするジョブに対するアクセス許可の範囲を設定します (プレビュー)	文字列
"dataexchange:JobType": "IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL"	署名付き URL からアセットをインポートするジョブに許可をスコープします。	文字列
"dataexchange:JobType": "IMPORT_ASSET_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES"	Amazon Redshift からアセットをインポートするジョブに許可をスコープします。	文字列
"dataexchange:JobType": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API"	Amazon API Gateway からアセットをインポートするジョブに許可をスコープします。	文字列
"dataexchange:JobType": "EXPORT_ASSETS_TO_S3"	Amazon S3 にアセットをエクスポートするジョブに許可をスコープします。	文字列
"dataexchange:JobType": "EXPORT_ASSETS_TO_SIGNED_URL"	署名付き URL にアセットをエクスポートするジョブに許可をスコープします。	文字列
"dataexchange:JobType": "EXPORT_REVISIONS_TO_S3"	Amazon S3 にリビジョンをエクスポートするジョブに許可をスコープします。	文字列

ポリシー言語での条件の指定に関する詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[条件](#)」を参照してください。

条件を表現するには、定義済みの条件キーを使用します。API オペレーション JobType の条件 AWS Data Exchange があります。必要に応じて使用できる AWS 全体の条件キーもあります。AWS 全体キーの完全なリストについては、「[IAM ユーザーガイド](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange API アクセス許可: アクションとリソースのリファレンス

(IAM) アイデンティティ AWS Identity and Access Management (アイデンティティベースのポリシー) にアタッチできるアクセス許可ポリシーをセットアップ [アクセスコントロール](#) して記述する場合は、以下の表を参考にしてください。この表には、各 AWS Data Exchange API オペレーション、アクションを実行するためのアクセス許可を付与できるアクション、およびアクセス許可を付与できる AWS リソースが一覧表示されています。アクションは、ポリシーの Action フィールドで指定します。リソース値は、ポリシーの Resource フィールドで指定します。

Note

アクションを指定するには、API 操作名の前に `dataexchange:` プレフィックスを使用します (`dataexchange:CreateDataSet` のようになります)。

AWS Data Exchange API およびアクションに必要なアクセス許可

AWS Data Exchange API オペレーション	必要な許可 (API アクション)	リソース	条件
CreateDataSet	<code>dataexchange:CreateDataSet</code>	該当なし	<code>aws:TagKeys</code> <code>aws:RequestTag</code>
GetDataSet	<code>dataexchange:GetDataSet</code>	データセット	<code>aws:RequestTag</code>
UpdateDataSet	<code>dataexchange:UpdateDataSet</code>	データセット	<code>aws:RequestTag</code>
PublishDataSet	<code>dataexchange:PublishDataSet</code>	データセット	<code>aws:RequestTag</code>

AWS Data Exchange API オペレーション	必要な許可 (API アクション)	リソース	条件
DeleteDataSet	dataexchange:DeleteDataSet	データセット	aws:RequestTag
ListDataSets	dataexchange:ListDataSets	該当なし	該当なし
CreateRevision	dataexchange:CreateRevision	データセット	aws:TagKeys aws:RequestTag
GetRevision	dataexchange:GetRevision	リビジョン	aws:RequestTag
DeleteRevision	dataexchange>DeleteRevision	リビジョン	aws:RequestTag
ListDataSetRevisions	dataexchange:ListDataSetRevisions	データセット	aws:RequestTag
ListRevisionAssets	dataexchange:ListRevisionAssets	リビジョン	aws:RequestTag
CreateEventAction	dataexchange:CreateEventAction	該当なし	該当なし
UpdateEventAction	dataexchange:UpdateEventAction	EventAction	該当なし
GetEventAction	dataexchange:GetEventAction	EventAction	該当なし
ListEventActions	dataexchange:ListEventActions	該当なし	該当なし
DeleteEventAction	dataexchange>DeleteEventAction	EventAction	該当なし

AWS Data Exchange API オペレーション	必要な許可 (API アクション)	リソース	条件
CreateJob	dataexchange:CreateJob	該当なし	dataexchange:JobType
GetJob	dataexchange:GetJob	ジョブ	dataexchange:JobType
StartJob**	dataexchange:StartJob	ジョブ	dataexchange:JobType
CancelJob	dataexchange:CancelJob	ジョブ	dataexchange:JobType
ListJobs	dataexchange:ListJobs	該当なし	該当なし
ListTagsForResource	dataexchange:ListTagsForResource	リビジョン	aws:RequestTag
TagResource	dataexchange:TagResource	リビジョン	aws:TagKeys aws:RequestTag
UntagResource	dataexchange:UntagResource	リビジョン	aws:TagKeys aws:RequestTag
UpdateRevision	dataexchange:UpdateRevision	リビジョン	aws:RequestTag
DeleteAsset	dataexchange>DeleteAsset	アセット	該当なし
GetAsset	dataexchange:GetAsset	アセット	該当なし
UpdateAsset	dataexchange:UpdateAsset	アセット	該当なし

AWS Data Exchange API オペレーション	必要な許可 (API アクション)	リソース	条件
SendApiAsset	dataexchange:SendApiAsset	アセット	該当なし

** 開始しているジョブのタイプによっては、追加の IAM 許可が必要になる場合があります。AWS Data Exchange ジョブタイプと関連する追加の IAM 許可については、以下の表を参照してください。ジョブの詳細については、「[AWS Data Exchange のジョブ](#)」を参照してください。

Note

現在、以下の SDK では SendApiAsset 操作がサポートされていません。

- AWS SDK for .NET
- AWS SDK for C++
- SDK for Java 2.x

AWS Data Exchange の ジョブタイプのアクセス許可 **StartJob**

ジョブタイプ	必要となる追加の IAM 許可
IMPORT_ASSETS_FROM_S3	dataexchange:CreateAsset
IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL	dataexchange:CreateAsset
IMPORT_ASSETS_FROM_API_GATEWAY_API	dataexchange:CreateAsset
IMPORT_ASSETS_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES	dataexchange:CreateAsset , redshift:AuthorizeDataShare
EXPORT_ASSETS_TO_S3	dataexchange:GetAsset
EXPORT_ASSETS_TO_SIGNED_URL	dataexchange:GetAsset
EXPORT_REVISIONS_TO_S3	dataexchange:GetRevision dataexchange:GetDataSet

ジョブタイプ	必要となる追加の IAM 許可
	<div data-bbox="841 243 1474 531"> <p>Note</p> <p>IAM 権限 <code>dataexchange:GetDataSet</code> は、<code>EXPORT_REVISIONS_T0_S3</code> ジョブタイプの動的参照として <code>DataSet.Name</code> を使用している場合のみ必要です。</p> </div>

以下の例にあるように、ワイルドカードを使用することによって、データセットアクションをリビジョンまたはアセットレベルにスコープできます。

```
arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/99EXAMPLE23c7c272897cf1EXAMPLE7a/
revisions/*/assets/*
```

一部の AWS Data Exchange アクションは、AWS Data Exchange コンソールでのみ実行できます。これらのアクションは AWS Marketplace 機能と統合されています。アクションには、次の表に示す AWS Marketplace アクセス許可が必要です。

AWS Data Exchange サブスクライバー向けの コンソール専用アクション

コンソールアクション	IAM 許可
製品をサブスクライブする	<code>aws-marketplace:Subscribe</code> <code>aws-marketplace:CreateAgreementRequest</code> <code>aws-marketplace:AcceptAgreementRequest</code>
サブスクリプション検証リクエストを送信する	<code>aws-marketplace:Subscribe</code> <code>aws-marketplace:CreateAgreementRequest</code>

コンソールアクション	IAM 許可
	<code>aws-marketplace:AcceptAgreementRequest</code>
サブスクリプションの自動更新を有効にする	<code>aws-marketplace:Subscribe</code> <code>aws-marketplace:CreateAgreementRequest</code> <code>aws-marketplace:AcceptAgreementRequest</code>
サブスクリプションの自動更新ステータスを表示する	<code>aws-marketplace:ListEntitlementDetails</code> <code>aws-marketplace:ViewSubscriptions</code> <code>aws-marketplace:GetAgreementTerms</code>
サブスクリプションの自動更新を無効にする	<code>aws-marketplace:Subscribe</code> <code>aws-marketplace:CreateAgreementRequest</code> <code>aws-marketplace:AcceptAgreementRequest</code>
アクティブなサブスクリプションをリストする	<code>aws-marketplace:ViewSubscriptions</code> <code>aws-marketplace:SearchAgreements</code> <code>aws-marketplace:GetAgreementTerms</code>

コンソールアクション	IAM 許可
サブスクリプションを表示する	aws-marketplace:ViewSubscriptions aws-marketplace:SearchAgreements aws-marketplace:GetAgreementTerms aws-marketplace:DescribeAgreement
サブスクリプション検証リクエストをリストする	aws-marketplace:ListAgreementRequests
サブスクリプション検証リクエストを表示する	aws-marketplace:GetAgreementRequest
サブスクリプション検証リクエストをキャンセルする	aws-marketplace:CancelAgreementRequest
アカウントを対象とするすべてのオファーを表示する	aws-marketplace:ListPrivateListings
特定のオファーの詳細を表示する	aws-marketplace:GetPrivateListing

AWS Data Exchange プロバイダー向けの コンソール専用アクション

コンソールアクション	IAM 許可
製品にタグ付けする	aws-marketplace:TagResource aws-marketplace:UntagResource aws-marketplace:ListTagsForResource
オファーにタグ付けする	aws-marketplace:TagResource

コンソールアクション	IAM 許可
製品を公開する	aws-marketplace:UntagResource aws-marketplace:ListTagsForResource aws-marketplace:StartChangeSet aws-marketplace:DescribeChangeSet dataexchange:PublishDataSet
製品を非公開にする	aws-marketplace:StartChangeSet aws-marketplace:DescribeChangeSet
製品を編集する	aws-marketplace:StartChangeSet aws-marketplace:DescribeChangeSet
カスタムオファーを作成する	aws-marketplace:StartChangeSet aws-marketplace:DescribeChangeSet
カスタムオファーを編集する	aws-marketplace:StartChangeSet aws-marketplace:DescribeChangeSet
製品の詳細を表示する	aws-marketplace:DescribeEntity aws-marketplace:ListEntities
製品のカスタムオファーを表示する	aws-marketplace:DescribeEntity
製品ダッシュボードを表示する	aws-marketplace:ListEntities aws-marketplace:DescribeEntity
データセットまたはリビジョンが発行された製品をリストする	aws-marketplace:ListEntities aws-marketplace:DescribeEntity

コンソールアクション	IAM 許可
サブスクリプション検証 リクエストをリストする	aws-marketplace:ListAgreementApprovalRequests aws-marketplace:GetAgreementApprovalRequest
サブスクリプション検証 リクエストを承認する	aws-marketplace:AcceptAgreementApprovalRequest
サブスクリプション検証 リクエストを拒否する	aws-marketplace:RejectAgreementApprovalRequest
サブスクリプション検証 リクエストからの情報を 削除する	aws-marketplace:UpdateAgreementApprovalRequest
サブスクリプションの詳細 を表示する	aws-marketplace:SearchAgreements aws-marketplace:GetAgreementTerms

AWS の マネージドポリシー AWS Data Exchange

AWS 管理ポリシーは、によって作成および管理されるスタンドアロンポリシーです AWS。AWS 管理ポリシーは、多くの一般的なユースケースにアクセス許可を付与するように設計されているため、ユーザー、グループ、ロールにアクセス許可の割り当てを開始できます。

AWS 管理ポリシーは、すべての AWS お客様が使用できるため、特定のユースケースに対して最小特権のアクセス許可を付与するわけではないことに注意してください。ユースケース別に[カスタマー マネージドポリシー](#)を定義することで、アクセス許可を絞り込むことをお勧めします。

AWS マネージドポリシーで定義されているアクセス許可を変更することはできません。が AWS 管理ポリシーで定義されているアクセス許可 AWS を更新すると、その更新はポリシーがアタッチされているすべてのプリンシパル ID (ユーザー、グループ、ロール) に影響します。AWS は、新しい AWS のサービス が起動されたとき、または既存のサービスで新しい API オペレーションが使用可能になったときに、AWS 管理ポリシーを更新する可能性が最も高くなります。

詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

AWS マネージドポリシー: `AWSDataExchangeFullAccess`

`AWSDataExchangeFullAccess` ポリシーは IAM ID にアタッチできます。

このポリシーは、AWS Data Exchange および SDK を使用して および AWS Marketplace アクションへのフルアクセスを許可する管理アクセス許可を付与 AWS Management Console します。また、AWS Key Management Service 必要に応じて Amazon S3 と への選択アクセスを提供し、 を最大限に活用します AWS Data Exchange。

許可の詳細

このポリシーには、以下の許可が含まれています。

- AWS Data Exchange — へのフルアクセスをプリンシパルに許可します AWS Data Exchange。これには、データ製品の提供とデータ製品のサブスクライブの両方が含まれます。
- AWS Marketplace — 製品の提供、製品のサブスクライブ、製品契約の管理 AWS Marketplace のための へのアクセスをプリンシパルに許可します。これは、データ製品の提供、またはデータ製品のサブスクライブに必要です。
- Amazon S3 — プリンシパルが Amazon Simple Storage Service から AWS Data Exchange 関連オブジェクト (データ製品ファイルを含む) を取得し、AWS Data Exchange 関連ファイルを Amazon S3 にアップロードできるようにします。これは、データ製品の提供とサブスクライブに必要です。
- Amazon Redshift — インポートのために Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を表示し、許可することをプリンシパルに許可します。これは Amazon Redshift データ製品の提供に必要です。
- Amazon API Gateway – Amazon API Gateway から Amazon API Gateway API を取得して、API をアップロードすることをプリンシパルに許可します。これは Amazon API Gateway データセットを提供するために必要です。
- AWS KMS— AWS Key Management Service内のキーのリストと説明へのアクセスを許可します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "dataexchange:*"
      ],
    }
  ],
}
```

```
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": "s3:GetObject",
    "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
    "Condition": {
      "ForAnyValue:StringEquals": {
        "aws:CalledVia": [
          "dataexchange.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": "s3:GetObject",
    "Resource": "*",
    "Condition": {
      "StringEqualsIgnoreCase": {
        "s3:ExistingObjectTag/AWSDataExchange": "true"
      },
      "ForAnyValue:StringEquals": {
        "aws:CalledVia": [
          "dataexchange.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "s3:PutObject",
      "s3:PutObjectAcl"
    ],
    "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
    "Condition": {
      "ForAnyValue:StringEquals": {
        "aws:CalledVia": [
          "dataexchange.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  }
},
```

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "s3:GetBucketLocation",
    "s3:ListBucket",
    "s3:ListAllMyBuckets"
  ],
  "Resource": "*"
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "aws-marketplace:DescribeEntity",
    "aws-marketplace:ListEntities",
    "aws-marketplace:StartChangeSet",
    "aws-marketplace:ListChangeSets",
    "aws-marketplace:DescribeChangeSet",
    "aws-marketplace:CancelChangeSet",
    "aws-marketplace:GetAgreementApprovalRequest",
    "aws-marketplace:ListAgreementApprovalRequests",
    "aws-marketplace:AcceptAgreementApprovalRequest",
    "aws-marketplace:RejectAgreementApprovalRequest",
    "aws-marketplace:UpdateAgreementApprovalRequest",
    "aws-marketplace:SearchAgreements",
    "aws-marketpalce:GetAgreementTerms"
  ],
  "Resource": "*"
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "aws-marketplace:Subscribe",
    "aws-marketplace:Unsubscribe",
    "aws-marketplace:ViewSubscriptions",
    "aws-marketplace:GetAgreementRequest",
    "aws-marketplace:ListAgreementRequests",
    "aws-marketplace:CancelAgreementRequest",
    "aws-marketplace:CreateAgreementRequest",
    "aws-marketplace:AcceptAgreementRequest",
    "aws-marketplace:ListEntitlementDetails",
    "aws-marketplace:ListPrivateListings",
    "aws-marketplace:DescribeAgreement",
    "aws-marketplace:GetPrivateListing"
  ],
}
```

```
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "aws-marketplace:TagResource",
      "aws-marketplace:UntagResource",
      "aws-marketplace:ListTagsForResource"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kms:DescribeKey",
      "kms:ListAliases",
      "kms:ListKeys"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": ["redshift:AuthorizeDataShare"],
    "Resource": "*",
    "Condition": {
      "StringEqualsIgnoreCase": {
        "redshift:ConsumerIdentifier": "ADX"
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "redshift:DescribeDataSharesForProducer",
      "redshift:DescribeDataShares"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "apigateway:GET",
    ],
```



```
        "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

AWS マネージドポリシー: **AWSDataExchangeProviderFullAccess**

AWSDataExchangeProviderFullAccess ポリシーは IAM ID にアタッチできます。

このポリシーは、 および SDK を使用して、データプロバイダーに および AWS Marketplace アクションへのアクセス AWS Data Exchange を提供する寄稿者アクセス許可を付与 AWS Management Console します。また、 AWS Key Management Service 必要に応じて Amazon S3 と への選択アクセスを提供し、 を最大限に活用します AWS Data Exchange。

許可の詳細

このポリシーには、以下の許可が含まれています。

- AWS Data Exchange — プリンシパルに、 でデータ製品を提供するためのフルアクセスを許可します AWS Data Exchange。プリンシパルは、 AWS Data Exchangeで製品を作成、更新、および削除することができます。
- AWS Marketplace – データ製品の提供とサブスクライブ、 およびサブスクリプション検証リクエストの管理 AWS Marketplace のために、プリンシパルに へのアクセスを許可します。これは、データ製品を提供するために必要です。
- Amazon S3 — プリンシパルが Amazon Simple Storage Service から AWS Data Exchange 関連オブジェクト (データ製品ファイルを含む) を取得し、 AWS Data Exchange 関連ファイルを Amazon S3 にアップロードできるようにします。これは、データ製品の提供に必要です。
- Amazon API Gateway – Amazon API Gateway から Amazon API Gateway API を取得して、API をアップロードすることをプリンシパルに許可します。これは Amazon API Gateway API データセットの提供に必要です。
- Amazon Redshift — インポートのために Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を表示し、許可することをプリンシパルに許可します。これは Amazon Redshift データ製品の提供に必要です。
- AWS KMS — キーを使用して AWS Key Management Service データを暗号化してアクセスできるように、 へのアクセスを許可します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```

```
"Statement": [
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "dataexchange:CreateDataSet",
      "dataexchange:CreateRevision",
      "dataexchange:CreateAsset",
      "dataexchange:Get*",
      "dataexchange:Update*",
      "dataexchange:List*",
      "dataexchange>Delete*",
      "dataexchange:TagResource",
      "dataexchange:UntagResource",
      "dataexchange:PublishDataSet",
      "dataexchange:SendApiAsset",
      "dataexchange:RevokeRevision",
      "dataexchange:SendDataSetNotification",
      "tag:GetTagKeys",
      "tag:GetTagValues"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "dataexchange:CreateJob",
      "dataexchange:StartJob",
      "dataexchange:CancelJob"
    ],
    "Resource": "*",
    "Condition": {
      "StringEquals": {
        "dataexchange:JobType": [
          "IMPORT_ASSETS_FROM_S3",
          "IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL",
          "EXPORT_ASSETS_TO_S3",
          "EXPORT_ASSET_TO_SIGNED_URL",
          "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",
          "IMPORT_ASSETS_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES"
        ]
      }
    }
  }
],
{
```

```
    "Effect": "Allow",
    "Action": "s3:GetObject",
    "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
    "Condition": {
      "ForAnyValue:StringEquals": {
        "aws:CalledVia": [
          "dataexchange.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": "s3:GetObject",
    "Resource": "*",
    "Condition": {
      "StringEqualsIgnoreCase": {
        "s3:ExistingObjectTag/AWSDataExchange": "true"
      },
      "ForAnyValue:StringEquals": {
        "aws:CalledVia": [
          "dataexchange.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "s3:PutObject",
      "s3:PutObjectAcl"
    ],
    "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
    "Condition": {
      "ForAnyValue:StringEquals": {
        "aws:CalledVia": [
          "dataexchange.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
```

```
        "s3:GetBucketLocation",
        "s3:ListBucket",
        "s3:ListAllMyBuckets"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "aws-marketplace:DescribeEntity",
        "aws-marketplace:ListEntities",
        "aws-marketplace:DescribeChangeSet",
        "aws-marketplace:ListChangeSets",
        "aws-marketplace:StartChangeSet",
        "aws-marketplace:CancelChangeSet",
        "aws-marketplace:GetAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:ListAgreementApprovalRequests",
        "aws-marketplace:AcceptAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:RejectAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:UpdateAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:SearchAgreements",
        "aws-marketplace:GetAgreementTerms",
        "aws-marketpalce:DescribeAgreement",
        "aws-marketpalce:GetPrivateListing"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "aws-marketplace:TagResource",
        "aws-marketplace:UntagResource",
        "aws-marketplace:ListTagsForResource"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kms:DescribeKey",
        "kms:ListAliases",
        "kms:ListKeys"
    ],
    "Resource": "*"
}
```

```
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": ["redshift:AuthorizeDataShare"],
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEqualsIgnoreCase": {
          "redshift:ConsumerIdentifier": "ADX"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "redshift:DescribeDataSharesForProducer",
        "redshift:DescribeDataShares"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "apigateway:GET",
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

AWS マネージドポリシー: **AWSDataExchangeReadOnly**

AWSDataExchangeReadOnly ポリシーは IAM ID にアタッチできます。

このポリシーは、AWS Data Exchange および AWS Management Console SDK を使用した および AWS Marketplace アクションへの読み取り専用アクセスを許可する読み取り専用アクセス許可を付与します。

許可の詳細

このポリシーには、以下の許可が含まれています。

- AWS Data Exchange – AWS Data Exchange 製品への読み取り専用アクセスをプリンシパルに許可します。これには、提供されたデータ製品とサブスクライブされたデータ製品の両方が含まれます。
- AWS Marketplace – 提供された製品とサブスクライブされた製品に関する AWS Marketplace への読み取り専用アクセスをプリンシパルに許可します。これは、データ製品を表示するために必要です。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "dataexchange:Get*",
        "dataexchange:List*"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "aws-marketplace:ViewSubscriptions",
        "aws-marketplace:GetAgreementRequest",
        "aws-marketplace:ListAgreementRequests",
        "aws-marketplace:GetAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:ListAgreementApprovalRequests",
        "aws-marketplace:DescribeEntity",
        "aws-marketplace:ListEntities",
        "aws-marketplace:DescribeChangeSet",
        "aws-marketplace:ListChangeSets",
        "aws-marketplace:SearchAgreements",
        "aws-marketplace:GetAgreementTerms",
        "aws-marketplace:DescribeAgreement",
        "aws-marketplace:ListEntitlementDetails",
        "aws-marketplace:ListPrivateListings",
        "aws-marketplace:GetPrivateListing"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
```

```
        "Action": [
            "aws-marketplace:ListTagsForResource"
        ],
        "Resource": "*"
    },
]
}
```

AWS マネージドポリシー: **AWSDataExchangeSubscriberFullAccess**

AWSDataExchangeSubscriberFullAccess ポリシーは IAM アイデンティティにアタッチできません。

このポリシーは、データサブスクライバーが および SDK を使用して および AWS Marketplace アクションにアクセスできるようにする AWS Data Exchange 許可を寄稿者に付与 AWS Management Console します。また、AWS Key Management Service 必要に応じて Amazon S3 と への選択アクセスを提供し、を最大限に活用します AWS Data Exchange。

許可の詳細

このポリシーには、以下の許可が含まれています。

- AWS Data Exchange — のサブスクライバー機能へのフルアクセスをプリンシパルに許可します AWS Data Exchange。これには、データ製品へのサブスクライブとアクセスが含まれます。
- AWS Marketplace — プリンシパルが にアクセスして、製品 AWS Marketplace を表示およびサブスクライブできるようにします。これは、データ製品をサブスクライブするために必要です。
- Amazon S3 — プリンシパルが Amazon Simple Storage Service から AWS Data Exchange 関連オブジェクト (データ製品ファイルを含む) を表示および取得できるようにします。これは、サブスクライブされたデータ製品へのアクセスに必要です。
- AWS KMS — キーを使用して暗号化されたデータ AWS Key Management Service へのアクセスをに許可します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "dataexchange:Get*",
        "dataexchange:List*"
      ]
    }
  ]
}
```

```
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "dataexchange:CreateEventAction",
      "dataexchange:UpdateEventAction",
      "dataexchange>DeleteEventAction",
      "dataexchange:SendApiAsset"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "dataexchange:CreateJob",
      "dataexchange:StartJob",
      "dataexchange:CancelJob"
    ],
    "Resource": "*",
    "Condition": {
      "StringEquals": {
        "dataexchange:JobType": [
          "EXPORT_ASSETS_TO_S3",
          "EXPORT_ASSET_TO_SIGNED_URL",
          "EXPORT_REVISIONS_TO_S3"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": "s3:GetObject",

    "Resource": "arn:aws:s3:::*aws-data-exchange*",
    "Condition": {
      "ForAnyValue:StringEquals": {
        "aws:CalledVia": [
          "dataexchange.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  ],
```



```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "s3:GetBucketLocation",
    "s3:ListBucket",
    "s3:ListAllMyBuckets"
  ],
  "Resource": "*"
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "aws-marketplace:Subscribe",
    "aws-marketplace:Unsubscribe",
    "aws-marketplace:ViewSubscriptions",
    "aws-marketplace:GetAgreementRequest",
    "aws-marketplace:ListAgreementRequests",
    "aws-marketplace:CancelAgreementRequest",
    "aws-marketplace:CreateAgreementRequest",
    "aws-marketplace:AcceptAgreementRequest",
    "aws-marketplace:ListEntitlementDetails",
    "aws-marketplace:ListPrivateListings",
    "aws-marketplace:GetPrivateListing",
    "aws-marketplace:DescribeAgreement",
    "aws-marketplace:GetAgreementTerms"
  ],
  "Resource": "*"
},
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "kms:DescribeKey",
    "kms:ListAliases",
    "kms:ListKeys"
  ],
  "Resource": "*"
}
]
```

AWS Data Exchange AWS 管理ポリシーの更新

次の表は、このサービスがこれらの変更の追跡を開始 AWS Data Exchange してからの の AWS マネージドポリシーの更新に関する詳細を示しています。このページに対する変更 (および本ユーザーガイドに対するその他変更) に関する自動アラートについては、「[のドキュメント履歴 AWS Data Exchange](#)」ページの RSS フィードをサブスクライブしてください。

変更	説明	日付
AWSDataExchangeProviderFullAccess – 既存のポリシーの更新	データセット通知を送信するための新しいアクセス許可 <code>dataexchange:SendDataSetNotification</code> である を追加しました。	2024 年 3 月 5 日
AWSDataExchangeSubscriberFullAccess 、 AWSDataExchangeReadOnly 、 AWSDataExchangeProviderFullAccess 、 AWSDataExchangeFullAccess – 既存のポリシーへの更新	すべてのマネージドポリシーにきめ細かいアクションを追加しました。新たに追加されたアクション: <code>aws-marketplace:CreateAgreementRequest</code> 、 <code>aws-marketplace:AcceptAgreementRequest</code> 、 <code>aws-marketplace:ListEntitlementDetails</code> 、 <code>aws-marketplace:ListPrivateListings</code> 、 <code>aws-marketplace:GetPrivateListing</code> 、 <code>license-manager:ListReceivedGrants</code> 、 <code>aws-marketplace:TagResource</code> 、 <code>aws-marketplace:UntagResource</code> 、 <code>aws-marketplace:ListTagsForResource</code> 、 <code>aws-marketplace:DescribeAgreement</code> 、 <code>aws-marketplace:GetAgreementTerms</code> 、 <code>aws-marketplace:GetLicense</code>	2023 年 7 月 31 日

変更	説明	日付
AWSDataExchangeProviderFullAccess – 既存のポリシーの更新	リビジョンを取り消すための新しい権限が追加されました <code>dataexchange:RevokeRevision</code> 。	2022 年 3 月 15 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeFullAccess - 既存のポリシーの更新	Amazon API Gateway から API アセットを取得するための新しい権限である <code>apigateway:GET</code> を追加しました。	2021 年 12 月 3 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeSubscriberFullAccess - 既存のポリシーの更新	API アセットにリクエストを送信するための新しい許可である <code>dataexchange:SendApiAsset</code> を追加しました。	2021 年 11 月 29 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeFullAccess - 既存のポリシーの更新	Amazon Redshift データセットへのアクセスを承認し、それらを作成するための新しい許可である <code>redshift:AuthorizeDataShare</code> 、 <code>redshift:DescribeDataSharesForProducer</code> 、および <code>redshift:DescribeDataShares</code> を追加しました。	2021 年 11 月 1 日
AWSDataExchangeSubscriberFullAccess – 既存ポリシーへの更新	データセットの新しいリビジョンを自動的にエクスポートするためのアクセスを制御する新しい許可である <code>dataexchange:CreateEventAction</code> 、 <code>dataexchange:UpdateEventAction</code> 、および <code>dataexchange>DeleteEventAction</code> を追加しました。	2021 年 9 月 30 日

変更	説明	日付
AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeFullAccess - 既存のポリシーの更新	データセットの新しいバージョンを発行するためのアクセスを制御する新しい許可である <code>dataexchange:PublishDataSet</code> を追加しました。	2021 年 5 月 25 日
AWSDataExchangeReadOnly 、 AWSDataExchangeProviderFullAccess 、 AWSDataExchangeFullAccess - 既存のポリシーへの更新	製品とオファターのサブスクリプションの表示を可能にする <code>aws-marketplace:SearchAgreements</code> および <code>aws-marketplace:GetAgreementTerms</code> を追加しました。	2021 年 5 月 12 日
AWS Data Exchange が変更の追跡を開始	AWS Data Exchange が AWS マネージドポリシーの変更の追跡を開始しました。	2021 年 4 月 20 日

でのログ記録とモニタリング AWS Data Exchange

モニタリングは、AWS Data Exchangeの優れたアーキテクチャの性質の重要な部分です。マルチポイント障害が発生した場合は、その障害をより簡単にデバッグできるように、AWS ソリューションの各部分からモニタリングデータを収集する必要があります。には、潜在的なインシデントを計画して対応できるように、のリソースとアクティビティをモニタリングするためのツール AWS Data Exchange がいくつか AWS 用意されています。

でのアクションとイベントのログ記録 AWS Data Exchange は、Amazon との統合によって実現されます CloudWatch。

以下のセクションでは、でのモニタリングとログ記録について説明します AWS Data Exchange。

トピック

- [モニタリング](#)
- [Amazon EventBridge イベント](#)
- [AWSAWS Data Exchange イベントのユーザー通知](#)
- [を使用した AWS Data Exchange API コールのログ記録 AWS CloudTrail](#)
- [今後のログ記録の変更 AWS Data Exchange CloudTrail](#)

モニタリング

モニタリングは、 およびその他の AWS Data Exchange AWS ソリューションの信頼性、可用性、およびパフォーマンスを維持する上で重要な部分です。AWS には、 をモニタリングし AWS Data Exchange、問題が発生した場合には報告を行い、必要に応じて自動アクションを実行するために以下のモニタリングツールが用意されています。

- Amazon CloudWatch Events は、 リソースの変更 AWS を示すシステムイベントの near-real-time ストリームを提供します。CloudWatch Events は、自動イベント駆動型コンピューティングを有効にします。特定のイベントを監視し、これらのイベントが発生したときに他の AWS サービスの自動アクションで応答するルールを記述できます。詳細については、[「Amazon CloudWatch Events ユーザーガイド」](#)を参照してください。
- Amazon CloudWatch Logs を使用すると、Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスやその他のソースからのログファイルをモニタリング、保存 AWS CloudTrail、およびアクセスできます。CloudWatch Logs はログファイル内の情報をモニタリングし、特定のしきい値に達したときに通知できます。高い耐久性を備えたストレージにログデータをアーカイブすることもできます。詳細については、[「Amazon CloudWatch Logs ユーザーガイド」](#)を参照してください。
- CloudTrail は、 によって、または に代わって行われた API コールおよび関連イベントを取得し AWS アカウント、指定した Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにログファイルを配信します。を呼び出したユーザーとアカウント AWS、呼び出し元のソース IP アドレス、および呼び出し日時を特定できます。

Amazon EventBridge イベント

AWS Data Exchange は Amazon と統合されており EventBridge、以前は Amazon CloudWatch Events と呼ばれていました。EventBridge は、アプリケーションをさまざまなソースのデータに接続するために使用できるイベントバスサービスです。詳細については、[「Amazon ユーザーガイド EventBridge」](#)を参照してください。

製品へのアクティブなサブスクリプションを持つサブスクライバーは、プロバイダーが新しいリビジョンを発行するたびに、または既存の製品に新しいデータセットを追加する AWS Data Exchange たびに、 からイベントを受け取ります。イベントには、発行された DataSetId と RevisionIds のリストが含まれています。

プロバイダは、データの更新、データの遅延、スキーマの変更、廃止に関する通知を送信できます。プロバイダーは、購読者がフォローすべきコメントや期待されるアクションを含めることができま

す。サブスクライバーは、これらの通知を Amazon のイベントとして受け取ります。イベントを使用して EventBridge、自動化されたワークフローを構築したり、[AWS ユーザー通知](#)を使用して人間が読み取れる通知を E メールやチャットプログラムに提供したりできます。

データ製品関連のイベントは、プロバイダー AWS リージョン がデータセットを公開した で発行されます。同じでこれらのイベントを使用する EventBridge ルールを設定する AWS リージョンか、[「間での Amazon EventBridge イベントの送受信 AWS リージョン」](#)を参照して、その他のオプションを確認してください。

このトピックでは、次の表に示す各イベントに関する詳細情報を提供します。この表には、プロバイダーが製品にデータセットを追加したり、製品にリビジョンを追加したり、製品へのリビジョンを取り消したり、製品へのアクセスを削除したりしたときに、サブスクライバーが受信するイベントが含まれています。

アクション	サブスクライバーが受信したイベント	関連トピック
ファイルベースのデータセットを製品に追加し、発行する	Data Sets Published To Product	the section called “ファイルベースのデータセットを追加するイベント”
Amazon S3 データアクセスデータセットを製品に追加し、発行する	Amazon S3 Data Access Data Sets Published To Product	the section called “Amazon S3 データアクセスデータセットの追加に関するイベント”
AWS Lake Formation データ許可データセットを追加して公開します。	AWS Lake Formation Data Permission Data Set Published To Product	the section called “AWS Lake Formation データ権限データセットを追加するためのイベント (プレビュー)”
Amazon Redshift データセットを製品に追加し、発行する	Redshift Data Shares Data Sets Published To Product	Amazon Redshift データ共有データセットを追加するためのイベント
Amazon API Gateway データセットを製品に追加し、発行する	API Gateway API Data Sets Published To Product	the section called “Amazon API Gateway API データセットの追加に関するイベント”

アクション	サブスクライバーが受信したイベント	関連トピック
ファイルベースのデータセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Data Set	リビジョンの追加に関するイベント
Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published to Amazon S3 Data Access Data Set	the section called “Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを追加する”
AWS Lake Formation データセットリビジョンを製品に追加して公開します。	Revision Published To Lake Formation Data Permission Data Set	the section called “AWS Lake Formation データセットのリビジョンを追加するためのイベント (プレビュー)”
Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Redshift Data Shares Data Set	Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを追加する
Amazon API Gateway データセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To API Gateway API Data Set	the section called “Amazon API Gateway API データセットのリビジョンをデータセットのリビジョンを追加する”
製品へのリビジョンを取り消します。	Revision Revoked	リビジョンを取り消すためのイベント
Amazon Redshift リソースに対して、サブスクライバーからのアクセスを削除する可能性のあるアクションを実行する	Action Performed On Redshift Data Share By Provider	Amazon Redshift リソースで実行されるアクションのイベント
Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからのアクセスを削除するアクションを実行します	Redshift Data Share Access Lost	Amazon Redshift データ共有にアクセスできなくなった場合のイベント

アクション	サブスクライバーが受信したイベント	関連トピック
データ更新の通知を送信します。	Data Updated in Data Set	プロバイダーが生成するデータ更新通知のイベント
スキーマ変更の通知を送信します。	Schema Change Planned for Data Set	プロバイダーが生成するスキーマ変更通知のイベント
データ遅延の通知を送信します。	Data Set Update Delayed	プロバイダーが生成するデータ遅延通知のイベント
データ廃止の通知を送信します。	Deprecation Planned for Data Set	プロバイダーが生成するデータ廃止通知のイベント
完了済みジョブを自動エクスポートする	Auto-export Job Completed	自動エクスポートジョブのイベントが完了しました
自動エクスポートジョブ失敗	Auto-export Job Failed	自動エクスポートジョブのイベントが失敗しました

Note

AWS Data Exchange は、ベストエフォートベースでイベントを発行します。イベント配信の詳細については、「[からのイベント AWS のサービス](#)」を参照してください。

ファイルベースのデータセットを追加するイベント

プロバイダーがファイルベースのデータセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは、詳細タイプ: Data Sets Published To Product のイベントを受け取ります。

以下は、追加されたファイルベースのデータセットに関する、追加されたイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
```



```
"account": "123456789012",
"time": "2020-07-29T18:24:04Z",
"region": "us-east-1",
"resources": [
  "prod-uEXAMPLEabc1d"
],
"detail": {
  "DataSetIds": [
    "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
  ],
  "DataSets": [
    {
      "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    },
    {
      "Id" : "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product":
  {
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
}
```

Amazon S3 データアクセスデータセットの追加に関するイベント

プロバイダーが Amazon S3 データアクセスデータセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは、詳細タイプ: Amazon S3 Data Access Data Sets Published To Product のイベントを受け取ります。

以下は、追加された Amazon S3 データアクセスデータセットのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "S3 Data Access Data Set(s) Published to Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
```

```
"time": "2020-07-29T18:24:04Z",
"region": "us-east-1",
"resources": [
  "prod-uEXAMPLEabc1d"
],
"detail": {
  "DataSetIds": [
    "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
  ],
  "DataSets": [{
    "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
  },
  {
    "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
    "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
  }
  ],
  "Product": {
    "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
}
```

AWS Lake Formation データ権限データセットを追加するためのイベント (プレビュー)

プロバイダーが AWS Lake Formation データセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプのイベントを受け取ります Lake Formation Data Permission Data Sets Published To Product。(プレビュー)

以下は、AWS Lake Formation データ許可データセットを追加するためのイベント本文の例です。(プレビュー)

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Lake Formation Data Permission Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
```

```
"time": "2021-12-15T18:24:04Z",
"region": "us-east-1",
"resources": [
  "prod-uEXAMPLEabc1d"
],
"detail": {
  "DataSetIds": [
    "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
  ],
  "DataSets": [
    {
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    },
    {
      "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product": {
    "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
}
```

Amazon Redshift データ共有データセットを追加するためのイベント

プロバイダーが Amazon Redshift データ共有データセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Redshift Data Shares Data Sets Published To Product のイベントを受け取ります。

以下は、追加された Amazon Redshift データ共有データセットのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Redshift Data Shares Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
```

```
"resources": [
  "prod-uEXAMPLEabc1d"
],
"detail": {
  "DataSetIds": [
    "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
  ],
  "DataSets": [
    {
      "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    },
    {
      "Id" : "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product":
  {
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
}
```

Amazon API Gateway API データセットの追加に関するイベント

プロバイダーが Amazon API Gateway API データセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Amazon API Gateway Data Sets Published To Product のイベントを受け取ります。

以下は、追加された Amazon API Gateway API データセットのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "API Gateway API Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
```

```
"region": "us-east-1",
"resources": [
  "prod-uEXAMPLEabc1d"
],
"detail": {
  "DataSetIds": [
    "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
  ],
  "DataSets": [
    {
      "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    },
    {
      "Id" : "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product": {
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
}
```

リビジョンの追加に関するイベント

プロバイダーがデータセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Revision Published To Data Setのイベントを受け取ります。

以下は、追加されたリビジョンのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published To Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T04:16:28Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ]
}
```

```
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}
```

Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを追加する

プロバイダーが Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Revision Published To Amazon S3 Data Access Data Set のイベントを受け取ります。

以下は、追加された Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published to S3 Data Access Data Set(s)",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T04:16:28Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ]
}
```

```
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}
```

AWS Lake Formation データセットのリビジョンを追加するためのイベント (プレビュー)

プロバイダーが AWS Lake Formation データセットリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ Revision Published to Lake Formation Data Permission Data Set (プレビュー) のイベントを受け取ります。

以下は、AWS Lake Formation データ許可データセットに追加されたリビジョンのイベント本文の例です。(プレビュー)

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published to Lake Formation Data Permission Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
```

```
"resources": [
  "prod-uEXAMPLEabc1d"
],
"detail": {
  "DataSetIds": [
    "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
  ],
  "DataSets": [
    {
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    },
    {
      "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product": {
    "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
}
```

Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを追加する

プロバイダーが Amazon Redshift データシェアデータセットのリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Revision Published To Redshift Data Shares Data Set のイベントを受け取ります。

以下は、追加された Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published To Redshift Data Shares Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
```



```
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}
```

Amazon API Gateway API データセットのリビジョンをデータセットのリビジョンを追加する

プロバイダーが Amazon API Gateway API データセットのリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Revision Published To API Gateway Data Set のイベントを受け取ります。

以下は、追加された Amazon API Gateway API データセットリビジョンのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published To API Gateway API Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
```

```

    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}

```

次の表は、API Gateway API データセットのリビジョンエラーコードを示しています。

エラーコード	メッセージ	説明
CLUSTER_DELETED	The datashare is unavailable because the provider deleted their cluster. Please contact the provider for more information.	このメッセージは、プロバイダがデータ共有を含むクラスターを削除したためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。
CLUSTER_ENCRYPTION_DISABLED	The datashare is unavailable because the provider disabled encryption on their cluster. Please	このメッセージは、プロバイダがクラスターの暗号化を無効にしたためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。データ共有を

エラーコード	メッセージ	説明
	contact the provider for more information.	使用するには、プロバイダーとサブスクライバーの両方で暗号化が有効になっている必要があります。
DATASHARE_DELETED	The datashare is unavailable because the provider deleted the datashare. Please contact the provider for more information.	このメッセージは、プロバイダーがデータ共有を削除したためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。データに再びアクセスできるように、プロバイダーは新しいデータ共有を作成する必要があります。
DATASHARE_DEAUTHORIZED	The datashare is unavailable because the provider deauthorized the datashare . Please contact the provider for more information.	このメッセージは、プロバイダーがデータ共有の認証を解除したためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。データに再びアクセスできるように、プロバイダーは新しいデータ共有を作成する必要があります。

エラーコード	メッセージ	説明
DATASHARE_PUBLIC_CONSUMER_BLOCKED	You cannot access a non-publicly accessible datashare from a publicly accessible cluster. You must turn off public accessibility on your cluster to access this datashare . Please contact your provider for more information.	<p>このメッセージは、プロバイダーがデータ共有を含むクラスターで [パブリックアクセス可能] オプションを [無効] に設定したときに送信されます。サブスクライバーのクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションが [無効] に設定されている場合、サブスクライバーのデータ共有へのアクセスには影響しません。サブスクライバーがデータ共有にアクセスするには、サブスクライバーがクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションを [無効] に設定するか、プロバイダーがクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションを [有効] に設定する必要があります。</p> <p>データ共有を含むクラスターでは無効にします。サブスクライバーのクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションが [無効] に設定されている場合、サブスクライバーのデータ共有へのアクセスには影響しません。サブスクライバーがデータ共有にアクセスするには、サブスクライバーがクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションを [無効] に設定するか、プロバイダーがクラスターの [パブリッ</p>

エラーコード	メッセージ	説明
		クアクセス可能] オプションを [有効] に設定する必要があります。

リビジョンを取り消すためのイベント

プロバイダーが製品のリビジョンを取り消して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Revision Revoked のイベントを受信します。

以下は、取り消されたリビジョンのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Revoked",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2022-02-17T21:25:06Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "RevocationComment": "example revocation comment",
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
```

```
        "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
        "Name": "Product_Hello_World"
    }
}
}
```

Amazon Redshift リソースで実行されるアクションのイベント

プロバイダーが Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからのアクセスを削除する可能性のあるアクションを実行すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Action Performed On Redshift Data Share By Provider のイベントを受信します。

たとえば、プロバイダーがデータ共有のパブリックアクセシビリティ設定を true から false に変更すると、サブスクライバーはイベントを受け取ります。

以下は、Amazon Redshift リソースで実行されるアクションのイベント本体の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Action Performed On Redshift Data Share By Provider",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:redshift:us-east-1:098765432123:datashare:01234567-2590-7654-1234-f57ea0081234/test_data_share"
  ],
  "detail": {
    "Message": "This is an example message which explains why you may have lost access.",
    "AssociatedProducts": [
      {
        "ProductId": "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "DataSetIds": [
          "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8"
        ],
        "DataSets": [
          {
            "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
            "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
          }
        ]
      }
    ]
  }
}
```

```
    ],
    "Product": {
      "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
]
}
```

Amazon Redshift データ共有にアクセスできなくなった場合のイベント

プロバイダーが自分の Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからのアクセスを削除するアクションを実行すると、サブスクライバーは次の詳細タイプのイベント: Redshift Data Share Access Lost を受け取ります。

たとえば、プロバイダーが Amazon Redshift データ共有を削除したり、クラスターを削除したりすると、サブスクライバーはイベントを受け取ります。

Amazon Redshift データ共有にアクセスできなくなった場合のイベント本文の例を次に示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Redshift Data Share Access Lost",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:redshift:us-east-1:098765432123:datashare:01234567-2590-7654-1234-f57ea0081234/test_data_share"
  ],
  "detail": {
    "Message": "This is an example message which explains why you may have lost access.",
    "AssociatedProducts": [
      {
        "ProductId": "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "DataSetIds": [
          "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8"
        ]
      }
    ],
    "DataSets": [
```

```
    {
      "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    }
  ],
  "Product": {
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
]
```

自動エクスポートジョブのイベントが完了しました

自動エクスポートジョブが、新しく公開されたファイルデータセットリビジョンのすべてのデータを、サブスクライバーが選択した Amazon S3 バケットに移動すると、サブスクライバーは自動エクスポートジョブ完了 イベントを受け取ります。

以下は、自動エクスポートジョブが完了したときのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Auto-export Job Completed",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe7"
    ],
    "Revisions": [{
      "Id": "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe7",
      "Comment": "Revision_Comment_One"
    }],
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe8",
```



```
    ],
    "DataSets": [{
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    }],
    "Product": {
      "Id": "prod-uEXAMPLEeabc1d",
    }
  }
}
```

自動エクスポートジョブのイベントが失敗しました

自動エクスポートジョブが失敗すると、サブスクライバーは 自動エクスポートジョブ失敗 イベントを受け取ります。

以下は、自動エクスポートジョブ失敗 のイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Auto-Export job failed",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEeabc1d"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "Revisions": [{
      "Id": "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
      "Comment": "Revision_Comment_One"
    }],
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
    ],
    "DataSets": [{
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
```

```
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      },
      {
        "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
    }
  }
}
```

プロバイダーが生成するデータ更新通知のイベント

プロバイダーがデータ更新の通知を送信すると、サブスクライバーは「データセット内データ更新」という詳細タイプのイベントを受け取ります。

以下は、プロバイダーがデータ更新の通知を送信したときの通知のイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Updated in Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
      "Name": "Example Data Set",
      "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
    },
    "Product": {
      "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
      "Name": "Example Data Product",
      "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
    },
    "Notification": {
```

```
    "Comment": "This is a test DATA_UPDATE notification.",
    "Type": "DATA_UPDATE",
    "Details": {
      "DataUpdate": {
        "DataUpdatedAt": "2023-07-12T00:00:00Z"
      }
    },
    "Scope": {
      "S3DataAccesses": [{
        "KeyPrefixes": [
          "KeyPrefix"
        ],
        "Keys": [
          "KeyA",
          "KeyB"
        ]
      }]
    }
  }
}
```

プロバイダーが生成するスキーマ変更通知のイベント

プロバイダーがスキーマ変更の通知を送信すると、サブスクライバーは「データセットのスキーマ変更計画済み」という詳細タイプのイベントを受け取ります。

以下は、プロバイダーがスキーマ変更通知を送信したときの通知のイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Schema Change Planned for Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
```

```
    "Name": "Example Data Set",
    "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
  },
  "Product": {
    "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
    "Name": "Example Data Product",
    "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
  },
  "Notification": {
    "Comment": "This is a test SCHEMA_CHANGE notification.",
    "Type": "SCHEMA_CHANGE",
    "Details": {
      "SchemaChange": {
        "Changes": [{
          "Type": "ADD",
          "Description": "This object is being added to the bucket or
a field is being added to the object.",
          "Name": "KeyA"
        },
        {
          "Type": "REMOVE",
          "Description": "This object is being removed from the
bucket or a field is being removed from the object.",
          "Name": "KeyB"
        },
        {
          "Type": "MODIFY",
          "Description": "The usage or meaning of this key prefix is
changing or something is changing about every file under this key prefix.",
          "Name": "KeyPrefix"
        }
      ],
      "SchemaChangeAt": "2023-09-08T13:46:01Z"
    }
  },
  "Scope": {
    "S3DataAccesses": [{
      "KeyPrefixes": [
        "KeyPrefix"
      ],
      "Keys": [
        "KeyA",
        "KeyB"
      ]
    }
  ]
}
```

```
    ]
  }
}
```

プロバイダーが生成するデータ遅延通知のイベント

プロバイダーがデータ遅延の通知を送信すると、サブスクライバーは「データセット更新遅延」という詳細タイプのイベントを受信します。

以下は、プロバイダーがデータ遅延通知を送信したときの通知のイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Set Update Delayed",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
      "Name": "Example Data Set",
      "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
    },
    "Product": {
      "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
      "Name": "Example Data Product",
      "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
    },
    "Notification": {
      "Comment": "This is a test DATA_DELAY notification.",
      "Type": "DATA_DELAY",
      "Scope": {
        "S3DataAccesses": [{
          "KeyPrefixes": [
            "KeyPrefix"
          ]
        }
      ],
    }
  }
}
```

```
        "Keys": [
            "KeyA",
            "KeyB"
        ]
    }
}
```

プロバイダーが生成するデータ廃止通知のイベント

プロバイダーがデータ廃止の通知を送信すると、サブスクライバーは「データセットの廃止予定」という詳細タイプのイベントを受け取ります。

以下は、プロバイダーがデータ廃止の通知を送信したときの通知のイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Deprecation Planned for Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
      "Name": "Example Data Set",
      "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
    },
    "Product": {
      "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
      "Name": "Example Data Product",
      "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
    },
    "Notification": {
      "Comment": "This is a test DEPRECATION notification.",
      "Type": "DEPRECATION",
      "Details": {
```

```

    "Deprecation": {
      "DeprecationAt": "2023-09-08T13:46:01Z"
    },
    "Scope": {
      "S3DataAccesses": [{
        "KeyPrefixes": [
          "KeyPrefix"
        ],
        "Keys": [
          "KeyA",
          "KeyB"
        ]
      }]
    }
  }
}

```

AWS Data Exchange イベントのユーザー通知

[AWS ユーザー通知](#) を使用して、AWS Data Exchange イベントについて通知する配信チャネルを設定できます。指定したルールにイベントが一致すると、通知を受け取ります。Eメール、AWS Chatbot チャット通知、AWS Console Mobile Application プッシュ通知など、複数のチャネルを通じてイベントの通知を受け取ることができます。ユーザー通知コンソールでコンソール通知センターを使用して AWS 通知を確認することもできます。AWS ユーザー通知は集約をサポートしているため、特定のイベント中に受信する通知の数を減らすことができます。詳細については、「[AWS ユーザー通知ユーザーガイド](#)」を参照してください。

AWS ユーザー通知を使用するには、正しい AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可が必要です。IAM アクセス許可の設定の詳細については、[AWS 「ユーザー通知ユーザーガイド」の「ユーザー通知の設定AWS」](#)を参照してください。

次の表は、AWS ユーザー通知を使用して AWS Data Exchange イベントに設定できる通知の詳細を示しています。

アクション	サブスクライバーが受信した通知
ファイルベースのデータセットを製品に追加し、発行する	Data Sets Published To Product

アクション	サブスクライバーが受信した通知
Amazon Redshift データセットを製品に追加し、発行する	Redshift Data Shares Data Sets Published To Product
ファイルベースのデータセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Data Set
製品へのリビジョンを取り消します。	Revision Revoked
Amazon Redshift データセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Redshift Data Shares Data Set
Amazon Redshift リソースに対して、サブスクライバーからのアクセスを削除する可能性のあるアクションを実行します。	Action Performed On Redshift Data Share By Provider
Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからのアクセスを削除するアクションを実行します	Redshift Data Share Access Lost
Amazon API Gateway データセットを製品に追加し、発行する	API Gateway API Data Sets Published To Product
Amazon API Gateway データセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To API Gateway API Data Set
AWS Lake Formation データセットを製品に追加して公開する (プレビュー)	Lake Formation Data Permission Data Sets Published To Product (Preview)
AWS Lake Formation データセットリビジョンを製品に追加して公開する (プレビュー)	Revision Published To Lake Formation Data Permission Data Set (Preview)
自動エクスポートジョブ完了	Auto-export Job Completed
自動エクスポートジョブ失敗	Auto-export Job Failed
データ更新の通知を送信する	Data Updated in Data Set

アクション	サブスクライバーが受信した通知
スキーマ変更の通知を送信する	Schema Change Planned for Data Set
データ遅延の通知を送信する	Data Set Update Delayed
データ廃止の通知を送信する	Deprecation Planned for Data Set

を使用した AWS Data Exchange API コールのログ記録 AWS CloudTrail

AWS Data Exchange は AWS CloudTrail、 のユーザー、ロール、または AWS のサービスによって実行されたアクションを記録するサービスである と統合されています AWS Data Exchange。 は、AWS Data Exchange コンソールからの呼び出しや AWS Data Exchange API オペレーションへのコード呼び出しを含む、AWS Data Exchange API オペレーションへのすべての呼び出しをイベントとして AWS CloudTrail キャプチャします。

証跡を作成する場合は、 の CloudTrail イベントなど、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットへのイベントの継続的な配信を有効にすることができます AWS Data Exchange。証跡を設定しない場合でも、コンソールのイベント履歴 で最新の CloudTrail イベントを表示できます。 で収集された情報を使用して CloudTrail、 に対するリクエスト AWS Data Exchange、リクエスト元の IP アドレス、リクエスト者、リクエスト日時などの詳細を確認できます。

Important

実行できるアクションの一部は、コンソール限定アクションです。AWS SDK または AWS Command Line Interface () に対応する API はありませんAWS CLI。これらは、製品の公開やサブスクライブなどの AWS Marketplace 機能に依存するアクションです。 は、これらのコンソール専用アクションのサブセットの CloudTrail ログ AWS Data Exchange を提供します。CloudTrail ログが提供されるコンソール専用アクションのリストについては、次のリストを参照してください。

詳細については、[「とは」を参照してください AWS CloudTrail。](#)

すべての [AWS Data Exchange APIs](#) および対応するコンソールアクションの CloudTrail イベントに加えて、 は AWS Marketplace-backed コンソール専用アクションのサブセットの CloudTrail 証跡 AWS Data Exchange も提供します。AWS Data Exchange は、次のコンソール専用アクションの CloudTrail ログを提供します。

サブスクライバーアクション

- 製品をサブスクライブする
- サブスクリプション検証リクエストを送信する
- サブスクリプションの自動更新を有効にする
- サブスクリプションの自動更新を無効にする
- サブスクリプション検証リクエストをキャンセルする
- アクティブなサブスクリプションをリストする
- サブスクリプションのステータスを確認する
- ターゲットのプライベートオファーを一覧表示する
- 特定の製品およびオファーの詳細を表示する
- 特定のサブスクリプションの詳細を表示する
- 特定のサブスクリプション検証リクエストの詳細を表示する

プロバイダーアクション

- 製品を公開する
- 製品を非公開にする
- 製品を編集する
- カスタムオファーを作成する
- カスタムオファーを編集する
- サブスクリプション検証リクエストを承認する
- サブスクリプション検証リクエストを拒否する
- サブスクライバーの連絡先情報を削除する
- サブスクリプション検証リクエストをリストする
- 特定のサブスクリプション検証リクエストの詳細を表示する
- データセットの通知を送信

AWS Data Exchange 内の情報 CloudTrail

CloudTrail は、 の作成時に有効になります AWS アカウント。でアクティビティが発生すると AWS Data Exchange、そのアクティビティは CloudTrail イベント履歴 の他の AWS サービスイベントとともに イベントに記録されます。 で最近のイベントを表示、検索、ダウンロードできます AWS ア

カウント。詳細については、「[AWS CloudTrail ユーザーガイド](#)」の「[イベント履歴での CloudTrail イベントの表示](#)」を参照してください。

のイベントなど AWS アカウント、 のイベントの継続的な記録については AWS Data Exchange、trail. CloudTrail uses この証跡を使用してログファイルを S3 バケットに配信します。デフォルトでは、コンソールを使用して証跡を作成すると、すべての に適用されます AWS リージョン。証跡は、すべてのリージョンからのイベントをログし、ユーザー指定の S3 バケットにログファイルを配信します。CloudTrail ログで収集されたデータをより詳細に分析し、それに基づく対応するように、他の AWS サービスを設定できます。詳細については、以下をご覧ください。

- [証跡を作成するための概要](#)
- [CloudTrail サポートされているサービスと統合](#)
- [の Amazon SNS 通知の設定 CloudTrail](#)
- [複数のリージョンからの CloudTrail ログファイルの受信](#)
- [複数のアカウントからの CloudTrail ログファイルの受信](#)

すべての AWS Data Exchange アクションは AWS Data Exchange API リファレンス に記載されています。を除くすべての AWS Data Exchange アクションは SendAPIAsset、 によってログに記録されます CloudTrail。例えば、CreateDataSet、 、および ListRevisionAssets API オペレーションを呼び出すと StartImportAssetsFromS3Workflow、 CloudTrail ログファイルにエントリが生成されます。

各イベントまたはログエントリには、誰がリクエストを生成したかという情報が含まれます。アイデンティティ情報は、以下を判別するために役立ちます。

- リクエストがルートまたは AWS Identity and Access Management (IAM) 認証情報のどちらを使用して送信されたか。
- リクエストがロールまたはフェデレーションユーザーのテンポラリなセキュリティ認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストが別の AWS サービスによって送信されたかどうか。

詳細については、「[CloudTrail userIdentity 要素](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange ログファイルエントリについて

証跡は、指定した S3 バケットにイベントをログファイルとして配信できるようにする設定です。CloudTrail ログファイルには、1 つ以上のログエントリが含まれます。イベントは任意の送信元から

の単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日時、リクエストパラメータなどに関する情報が含まれます。CloudTrail ログファイルは、パブリック API コールの順序付けられたスタックトレースではないため、どの順序でも表示されません。

Note

これらの例は、読みやすさを向上させるためにフォーマットされています。CloudTrail ログファイルでは、すべてのエントリとイベントが 1 行に連結されます。この例は 1 つの AWS Data Exchange エントリに限定されています。実際の CloudTrail ログファイルには、複数の AWS サービスからのエントリとイベントが表示されます。

次の例は、CreateDataSetオペレーションを示す CloudTrail ログエントリを示しています。

```
{
  "eventVersion": "1.05",
  "userIdentity": {
    "type": "AssumedRole",
    "principalId": "AIDACKCEVSQ6C2EXAMPLE:account_name",
    "arn": "arn:aws:sts::123456789012:user/Mary_Major",
    "accountId": "123456789012",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "sessionContext": {
      "attributes": {
        "mfaAuthenticated": "false",
        "creationDate": "2018-06-20T18:32:25Z"
      },
      "sessionIssuer": {
        "type": "Role",
        "principalId": "AIDACKCEVSQ6C2EXAMPLE",
        "arn": "arn:aws:iam::123456789012:role/Admin",
        "accountId": "123456789012",
        "userName": "username"
      }
    }
  },
  "eventTime": "2018-06-20T19:04:36Z",
  "eventSource": "dataexchange.amazonaws.com",
  "eventName": "CreateDataSet",
  "awsRegion": "us-east-1",
  "sourceIPAddress": "203.0.113.12",
  "userAgent": "console.amazonaws.com",
```

```

"requestParameters": {
  "Name": "MyDataSet",
  "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
  "Description": "This is my data set"
},
"responseElements": {
  "Origin": "OWNED",
  "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
  "Name": "MyDataSet",
  "CreatedAt": 1726255485679,
  "UpdatedAt": 1726255485679,
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/
DataSetIdentifier",
  "Id": "DataSetIdentifier",
  "Description": "This is my data set"
},
"requestID": "cb8c167e-EXAMPLE",
"eventID": "e3c6f4ce-EXAMPLE",
"readOnly": false,
"eventType": "AwsApiCall",
"recipientAccountId": "123456789012"
}>

```

今後のログ記録の変更 AWS Data Exchange CloudTrail

このセクションでは、の で API コールを記録するための今後の変更をまとめ AWS CloudTrail ます AWS Data Exchange。この変更の発効日は 2023 年 9 月 1 日以降です。この変更がモニタリング、分析、監査に影響を与えないように、CloudTrail の使用状況を確認することをお勧めします。質問や懸念事項については、[AWS Support](#) にメールメッセージを送信してください。

顧客ペルソナ	イベントの説明	前のeventName	新しいeventName	前のイベントソース	新しいイベントソース
サブスクライバー	製品をサブスクライブする	Subscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com

顧客ペルソナ	イベントの説明	前のeventName	新しいeventName	前のイベントソース	新しいイベントソース
サブスクライバー	サブスクリプション検証リクエストを送信する	Subscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
サブスクライバー	サブスクリプションの自動更新を有効にする	Subscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
サブスクライバー	サブスクリプションの自動更新を無効にする	Unsubscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
サブスクライバー	サブスクリプション検証リクエストをキャンセルする	CancelAgreementRequest	CancelAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
プロバイダー	製品を公開する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com

顧客ペルソナ	イベントの説明	前のeventName	新しいeventName	前のイベントソース	新しいイベントソース
プロバイダー	製品を編集する	StartChangeEvent	StartChangeEvent	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	製品を発行解除する	StartChangeEvent	StartChangeEvent	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	カスタムオファーを作成する	StartChangeEvent	StartChangeEvent	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	カスタムオファーを編集する	StartChangeEvent	StartChangeEvent	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	サブスクリプション検証リクエストを承認する	AcceptAgreementApprovalRequest	AcceptAgreementApprovalRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
プロバイダー	サブスクリプション検証リクエストを拒否する	RejectAgreementApprovalRequest	RejectAgreementApprovalRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
プロバイダー	サブスクリバイバーの連絡先情報を削除する	UpdateAgreementApprovalRequest	UpdateAgreementApprovalRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com

のコンプライアンス検証 AWS Data Exchange

AWS のサービスが特定のコンプライアンスプログラムの対象であるかどうかを確認するには、[AWS のサービス「コンプライアンスプログラムによる対象範囲内の」](#)を参照し、関心のあるコンプライアンスプログラムを選択します。一般的な情報については、[AWS「コンプライアンスプログラム」](#)を参照してください。

サードパーティーの監査レポートは、[を使用してダウンロードできます AWS Artifact](#)。詳細については、「[でのレポートのダウンロード AWS Artifact](#)」の」を参照してください。

を使用する際のお客様のコンプライアンス責任 AWS のサービスは、お客様のデータの機密性、企業のコンプライアンス目的、適用法規によって決まります。では、コンプライアンスに役立つ以下のリソース AWS を提供しています。

- [セキュリティとコンプライアンスのクイックスタートガイド](#) — これらのデプロイガイドでは、アーキテクチャ上の考慮事項について説明し、セキュリティとコンプライアンスに重点を置いたベースライン環境をにデプロイするための手順を説明します。
- [Architecting for HIPAA Security and Compliance on Amazon Web Services](#) – このホワイトペーパーでは、企業が AWS を使用して HIPAA 対応のアプリケーションを作成する方法について説明します。

Note

すべての AWS のサービスが HIPAA に対応しているわけではありません。詳細については、「[HIPAA 対応サービスのリファレンス](#)」を参照してください。

- [AWS コンプライアンスリソース](#) – このワークブックとガイドのコレクションは、お客様の業界や場所に適用される場合があります。
- [AWS カスタマーコンプライアンスガイド](#) – コンプライアンスの観点から責任共有モデルを理解します。このガイドは、複数のフレームワーク (米国標準技術研究所 (NIST)、Payment Card Industry Security Standards Association (PCI)、国際標準化機構 (ISO) など) にわたるセキュリティコントロールにガイダンスを保護し AWS のサービス、マッピングするためのベストプラクティスをまとめたものです。
- 「[デベロッパーガイド](#)」の「[ルールによるリソースの評価](#)」 — この AWS Config サービスは、リソース設定が社内プラクティス、業界ガイドライン、規制にどの程度準拠しているかを評価します。AWS Config

- [AWS Security Hub](#) – これにより AWS のサービス、内のセキュリティ状態を包括的に確認できます AWS。Security Hub では、セキュリティコントロールを使用して AWS リソースを評価し、セキュリティ業界標準とベストプラクティスに対するコンプライアンスをチェックします。サポートされているサービスとコントロールのリストについては、「[Security Hub のコントロールリファレンス](#)」を参照してください。
- [AWS Audit Manager](#) – これにより AWS のサービス、AWS の使用状況を継続的に監査し、リスクの管理方法と規制や業界標準への準拠を簡素化できます。

PCI DSS コンプライアンス

AWS Data Exchange は、マーチャントまたはサービスプロバイダーによるクレジットカードデータの処理、ストレージ、および伝送をサポートしており、Payment Card Industry (PCI) Data Security Standard (DSS) に準拠していることが確認されています。PCI コンプライアンスパッケージのコピーをリクエストする方法など、AWS PCI DSS の詳細については、「[PCI DSS レベル 1](#)」を参照してください。

の耐障害性 AWS Data Exchange

AWS グローバルインフラストラクチャは、AWS リージョン とアベイラビリティゾーンを中心に構築されています。は、低レイテンシー、高スループット、および高度の冗長ネットワークで接続されている複数の物理的に独立および隔離されたアベイラビリティゾーン AWS リージョン を提供します。アベイラビリティゾーンでは、アベイラビリティゾーン間で中断されることなく自動的にフェイルオーバーするアプリケーションとデータベースを設計および運用することができます。アベイラビリティゾーンは、従来の単一または複数のデータセンターインフラストラクチャよりも可用性、耐障害性、および拡張性に優れています。

AWS Data Exchange には、プロバイダーが提供するグローバルに利用可能な単一の製品カタログがあります。サブスクライバーは、使用しているリージョンにかかわらず、同一のカタログを表示できます。製品の基礎となるリソース (データセット、リビジョン、アセット) は、プログラムまたはサポートされているリージョンの AWS Data Exchange コンソールを通じて管理するリージョンリソースです。は、サービスが運用されているリージョン内の複数のアベイラビリティゾーンにデータを AWS Data Exchange レプリケートします。サポートされるリージョンの詳細については、「[グローバルインフラストラクチャのリージョン表](#)」を参照してください。

AWS リージョン およびアベイラビリティゾーンの詳細については、[AWS 「グローバルインフラストラクチャ」](#) を参照してください。

のインフラストラクチャセキュリティ AWS Data Exchange

マネージドサービスである AWS Data Exchange は グローバル AWS ネットワークセキュリティで保護されています。AWS セキュリティサービスと インフラストラクチャ AWS を保護する方法については、[AWS 「クラウドセキュリティ」](#) を参照してください。インフラストラクチャセキュリティのベストプラクティスを使用して AWS 環境を設計するには、「セキュリティの柱 AWS Well-Architected Framework」の [「インフラストラクチャ保護」](#) を参照してください。

が AWS 公開した API コールを使用して、ネットワーク AWS Data Exchange 経由で にアクセスします。クライアントは以下をサポートする必要があります:

- Transport Layer Security (TLS)。TLS 1.2、できれば TLS 1.3 が必要です。
- DHE (Ephemeral Diffie-Hellman) や ECDHE (Elliptic Curve Ephemeral Diffie-Hellman) などの Perfect Forward Secrecy (PFS) を使用した暗号スイート。これらのモードは、Java 7 以降など、ほとんどの最新システムでサポートされています。

また、リクエストには、アクセスキー ID と、IAM プリンシパルに関連付けられているシークレットアクセスキーを使用して署名する必要があります。または、[AWS Security Token Service \(AWS STS\)](#) を使用して、一時的なセキュリティ認証情報を生成し、リクエストに署名することもできます。

AWS Data Exchange およびインターフェイス VPC エンドポイント (AWS PrivateLink)

仮想プライベートクラウド (VPC) と AWS Data Exchange 間のプライベート接続は、インターフェイス VPC エンドポイントを作成することで確立できます。インターフェイスエンドポイントは、インターネットゲートウェイ [AWS PrivateLink](#)、NAT デバイス、VPN 接続、AWS Direct Connect 接続のいずれも必要とせずに AWS Data Exchange API オペレーションにプライベートにアクセスできるテクノロジーである を利用しています。VPC のインスタンスは、パブリック IP アドレスがなくても AWS Data Exchange API オペレーションと通信できます。VPC と 間のトラフィック AWS Data Exchange は、Amazon ネットワークを離れません。

各インターフェイスエンドポイントは、サブネット内の 1 つ以上の [Elastic Network Interface](#) によって表されます。

Note

を除くすべての AWS Data Exchange アクション `SendAPIAsset` が VPC でサポートされています。

詳細については、「Amazon [VPC ユーザーガイド](#)」の「[インターフェイス VPC エンドポイント \(AWS PrivateLink\)](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange VPC エンドポイントに関する考慮事項

のインターフェイス VPC エンドポイントを設定する前に AWS Data Exchange、「Amazon VPC ユーザーガイド」の「[インターフェイスエンドポイントのプロパティと制限](#)」を確認してください。

AWS Data Exchange は、VPC からのすべての API オペレーションの呼び出しをサポートしています。

AWS Data Exchange のインターフェイス VPC エンドポイントの作成

Amazon VPC コンソールまたは AWS Command Line Interface () を使用して、AWS Data Exchange サービスの VPC エンドポイントを作成できます AWS CLI。詳細については、Amazon VPC ユーザーガイドの[インターフェイスエンドポイントの作成](#)を参照してください。

次のサービス名 `com.amazonaws.region.dataexchange` を使用して、の VPC エンドポイントを作成します。

- `com.amazonaws.region.dataexchange`

エンドポイントのプライベート DNS を有効にすると、のデフォルトの DNS 名 `com.amazonaws.us-east-1.dataexchange` を使用して AWS リージョン、に API リクエストを行うことができます。例えば、です `com.amazonaws.us-east-1.dataexchange`。

詳細については、Amazon VPC ユーザーガイドの[インターフェイスエンドポイントを介したサービスへのアクセス](#)を参照してください。

の VPC エンドポイントポリシーの作成 AWS Data Exchange

VPC エンドポイントには、AWS Data Exchange へのアクセスを制御するエンドポイントポリシーをアタッチできます。このポリシーでは、以下の情報を指定します。

- アクションを実行できるプリンシパル

- 実行可能なアクション
- アクションを実行できるリソース

詳細については、「Amazon VPC ユーザーガイド」の「[VPC エンドポイントによるサービスのアクセスコントロール](#)」を参照してください。

例: AWS Data Exchange アクションの VPC エンドポイントポリシー

のエンドポイントポリシーの例を次に示します AWS Data Exchange。このポリシーは、エンドポイントにアタッチされると、すべてのリソースのすべてのプリンシパルに対して、リストされている AWS Data Exchange アクションへのアクセスを許可します。

この VPC エンドポイントポリシーの例では、からの bts の AWS アカウント 123456789012 ユーザーへのフルアクセスのみを許可します vpc-12345678。ユーザー readUser にはリソースの読み取りが許可されますが、その他のすべての IAM プリンシパルに対しては、エンドポイントへのアクセスが拒否されます。

```
{
  "Id": "example-policy",
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "Allow administrative actions from vpc-12345678",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": [
          "arn:aws:iam::123456789012:user/bts"
        ]
      },
      "Action": "*",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:sourceVpc": "vpc-12345678"
        }
      }
    },
    {
      "Sid": "Allow ReadOnly actions",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
```

```
        "AWS": [
            "arn:aws:iam::123456789012:user/readUser"
        ]
    },
    "Action": [
        "dataexchange:list*",
        "dataexchange:get*"
    ],
    "Resource": "*",
}
]
```

AWS Data Exchange での AWS Marketplace Catalog API の使用

この章では、AWS Data Exchange と AWS Marketplace Catalog API の使用に関する補足情報を提供します。AWS Marketplace Catalog API サービスは、プロバイダーが AWS Marketplace のセルフサービスパブリッシング機能にプログラマ的にアクセスするための API インターフェイスを提供します。

この API は、製品を表示して管理するための幅広い操作をサポートしています。製品更新プロセスを自動化するために、API 統合を通じて内部の構築またはデプロイパイプラインを AWS Marketplace に拡張することができます。この API 上に独自の内部ユーザーインターフェイスを作成して、AWS Marketplace の製品を管理することも可能です。

AWS Marketplace Catalog API は、AWS Data Exchange 製品を更新するために使用できます。製品を表示するには、ListEntities および DescribeEntity API 操作を使用できます。AWS Data Exchange 製品を更新するには、新しい変更セットを作成する必要があります。これは、製品の管理に使用される非同期操作を表す Catalog API リソースです。詳細については、「[AWS Marketplace Catalog API リファレンス](#)」を参照してください。

Catalog API の使用時には、以下の点に留意してください。

- Catalog API 内では、各 AWS Data Exchange 製品が [エンティティ](#) として表されます。
- AWS Data Exchange 製品には、EntityType としての DataProduct があります。
- 各製品では、一度に 1 つの変更セットしか実行できません。つまり、最初の変更セットの実行が完了するまでは、2 番目の変更セットを作成できないことになります。

トピック

- [AddDataSets](#)

AddDataSets

Note

タイプ AddDataSets の Catalog API 変更セットを使用して追加されたデータセットには、デフォルトで製品の発行メソッドが設定されます。

データセットを AWS Data Exchange 製品に追加するには、タイプ AddDataSets の変更セットを開始します。これを実行するには、StartChangeSet API 操作を使用して、変更タイプ、製品識別子、製品タイプ、およびデータセットの Amazon リソースネーム (ARN) を含めた詳細を指定することができます。

チュートリアル: 公開済みのデータ製品への新しいデータセットの追加

このチュートリアルでは、公開済みの製品に新しい AWS Data Exchange データセットを追加する手順を詳しく説明します。このチュートリアルのおおまかな手順は以下のとおりです。

トピック

- [IAM 許可をセットアップする](#)
- [AWS Marketplace Catalog API にアクセスする](#)
- [AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得する](#)
- [変更リクエストを開始する](#)
- [変更セットのステータスをチェックする](#)

IAM 許可をセットアップする

手順を開始する前に、AWS Marketplace Catalog API を使用するための AWS Identity and Access Management (IAM) 許可が必要です。これらは、AWS Data Exchange を使用するための許可に加えて必要になる許可です。

1. ブラウザで IAM コンソールに移動し、IAM 許可を管理できる AWS アカウントを使用してサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで [ポリシー] を選択します。
3. [ポリシーを作成] を選択します。

4. [JSON] タブを選択して、以下の許可を入力します。これは、AWS Marketplace Catalog API への完全なアクセス権を提供します。アクセス権は、ユースケースの必要に応じて制限できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "aws-marketplace:CancelChangeSet",
        "aws-marketplace:ListChangeSets",
        "aws-marketplace:DescribeEntity",
        "aws-marketplace:StartChangeSet",
        "aws-marketplace:ListEntities",
        "aws-marketplace:DescribeChangeSet",
        "dataexchange:PublishDataSet"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

5. [次へ: レビュー] を選択します。
6. ポリシーの名前 (**CatalogAPIFullAccess** など) を入力してから、[ポリシーを作成] を選択します。
7. IAM コンソールを使用して、ポリシーをアタッチするユーザー、グループ、またはロールを選択します。

AWS Marketplace Catalog API にアクセスする

AWS Marketplace Catalog API にアクセスするには、以下の HTTP クライアントエンドポイントを使用します。

```
catalog.marketplace.us-east-1.amazonaws.com
```

AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得する

AWS Marketplace Catalog API を使用して新しいデータセットを発行する前に、AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得します。[Product] (製品) ダッシュボードに移動して、データセットを発行する製品 ID をコピーします。 [AWS Marketplace Catalog API](#)

は、**DataProduct@1.0** エンティティタイプと共に `ListEntities` アクションを使用することで、製品 ID を検索するためにも使用できます。

変更リクエストを開始する

変更リクエストを開始してテスト製品にデータセットを追加する

1. 「[AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得する](#)」の手順に従って取得できるエンティティ ID をコピーします。
2. `AddDataSets` 変更タイプを使用して `StartChangeSet` リクエストを実行します。

Note

AWS Marketplace Catalog API での変更セットの使用については、「[変更セットの使用](#)」を参照してください。エンティティの識別子の使用に関する詳細については、「[識別子](#)」を参照してください。

リクエストの例

```
https://catalog.marketplace.us-east-1.amazonaws.com/StartChangeSet
```

リクエストボディの例

```
{
  "Catalog": "AWSMarketplace",
  "ChangeSetName": "Adding Data Set to my test Data Product",
  "ChangeSet": [
    {
      "ChangeType": "AddDataSets",
      "Entity": {
        "Identifier": "entity-id@1",
        "Type": "DataProduct@1.0"
      },
      "Details": "{ \"DataSets\": [ { \"Arn\": \"data-set-arn\" } ] }"
    }
  ]
}
```

レスポンスの例

```
{
  "ChangeSetId": "cs-bnEXAMPLE4mkz9oh",
  "ChangeSetArn": "arn:aws:aws-marketplace:us-east-1:account-id:AWSMarketplace/
ChangeSet/cs-bnEXAMPLE4mkz9oh"
}
```

変更セットのステータスをチェックする

StartChangeSet API 操作を使用して変更リクエストを開始したら、DescribeChangeSet 操作を使用してそのステータスをチェックできます。StartChangeSet API レスポンスで返された変更セット ID を入力します。

リクエストの例

```
https://catalog.marketplace.us-east-1.amazonaws.com/DescribeChangeSet?
catalog=AWSMarketplace&changeSetId=cs-bnEXAMPLE4mkz9oh
```

リクエストボディの例

```
{
  "changeSetId": "cs-bnEXAMPLE4mkz9oh"
}
```

レスポンスの例

```
{
  "ChangeSetId": "cs-bnEXAMPLE4mkz9oh",
  "ChangeSetArn": "arn:aws:aws-marketplace:us-east-1:account-id:AWSMarketplace/
ChangeSet/cs-bnEXAMPLE4mkz9oh",
  "ChangeSetName": "Adding Data Set to my test Data Product",
  "StartTime": "2018-09-20T19:45:03.115+0000",
  "EndTime": "2018-09-20T19:48:12.517+0000",
  "Status": "SUCCEEDED",
  "FailureDescription": null,
  "ChangeSet": [
    {
      "ChangeType": "AddDataSets",
      "Entity": {
        "Type": "DataProduct@1.0",
        "Identifier": "entity-id@1"
      }
    },
  ],
}
```

```
        "ErrorList": []
      }
    ]
  }
```

AddDataSets 例外

AWS Data Exchange で AWS Marketplace Catalog API を使用するときは、以下の例外が発生する可能性があります。

DATA_SET_NOT_FOUND

これは、リクエストされたデータセットが見つからなかった場合に発生します。この問題を解決するには、データセット ARN にタイプミスがないことと、AWS アカウントがデータセットを所有していることを確認してから再試行してください。

INVALID_INPUT

無効な入力の原因で、リクエストを処理できませんでした。この問題を解決するには、リクエストにタイプミスがないことと、製品がデータセットの許容最大数を超えていないことを確認してください。

DATA_SET_ALREADY_PUBLISHED

これは、製品にデータセットが既に追加されている場合に発生します。

DATA_SET_DUPLICATE_PROVIDED

これは、リクエスト内で同じデータセットが複数回提供されている場合に発生します。

のドキュメント履歴 AWS Data Exchange

以下の表は、本リリースの「AWS Data Exchange ユーザーガイド」のドキュメントを説明するものです。このドキュメントの更新に関する通知については、RSS フィードにサブスクライブできます。

RSS の更新を購読するには、使用しているブラウザで RSS プラグインを有効にする必要があります。

変更	説明	日付
既存のポリシーの更新	次の新しい権限がAWSDataExchangeProviderFull Access マネージドポリシーに追加されました:dataexchange:SendDataSetNotification 詳細については、「 AWS マネージドポリシー 」を参照してください。	2024 年 3 月 5 日
データ許可を作成する機能が利用可能になりました	データ所有者は、販売者として登録 AWS Data Exchange しなくても、AWS Marketplace を使用してデータを共有できるようになりました。詳細については、「 AWS Data Exchangeでのデータ許可の作成 」を参照してください。	2023 年 12 月 14 日
プロバイダー生成通知が利用可能になりました	プロバイダーは、データ更新、データ遅延、スキーマの変更、廃止に関する通知を送信できます。サブスクライバーは、自動化されたワークフローを構築したり、AWS ユーザー通知を使用して人間が読み取れる通知を E メール	2023 年 10 月 31 日

ルやチャットプログラムに配信 EventBridge したりするために使用できるイベントとして Amazon でこれらの通知を受け取ります。[詳細については、「プロバイダー生成通知」](#)を参照してください。

[自動エクスポートジョブで利用できる新しいサブスクライバーイベント通知](#)

サブスクライバーは、「自動エクスポートジョブ完了」と「自動エクスポートJob 失敗」の2つの新しいイベントの通知を受け取ることができます。詳細については、「[自動エクスポートジョブが完了したときのイベント](#)」と「[自動エクスポートジョブが失敗したときのイベント](#)」を参照してください。

2023 年 10 月 4 日

[サブスクライバーが Amazon S3 バケットから直接ファイルをダウンロードする機能](#)

サブスクライバーは、AWS Data Exchange コンソールからプロバイダーの Amazon S3 バケットから直接ファイルをダウンロードできるようになりました。詳細については、「[Amazon S3 データ アクセスを含む新しい製品の公開](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 5 日

[AWS Marketplace Agreement Service \(MPAS\) の変更 AWS Data Exchange AWS CloudTrail と移行](#)

AWS Data Exchange は、イベントの変更を引き起こす AWS Marketplace 契約サービスに移行しています AWS Data Exchange CloudTrail。詳細については、「[の AWS Data Exchange CloudTrail ログ記録における今後の変更](#)」を参照してください。

2023 年 6 月 1 日

[AWS ユーザー通知を使用する機能](#)

AWS ユーザー通知は、アカウント、AWS リージョンおよび AWS Management Console サービス全体に関連するすべての AWS 通知を設定して表示するために、内の単一の場所をユーザーに提供します。ユーザーは、電子メール、チャット、モバイルプッシュ通知など、通知の配信チャネルを設定できます。詳細については、「[AWS Data ExchangeのAWS ユーザー通知](#)」を参照してください。

2023 年 5 月 18 日

[Amazon S3 データアクセスを含む製品を公開してサブスクライブする機能](#)

Amazon S3 データアクセスを含むデータ製品の購読と公開が一般に利用可能になりました。詳細については、「[Amazon S3 データアクセスを含む新しい製品の公開](#)」および「[Amazon S3 データアクセスを含む製品へのサブスクライブ](#)」を参照してください。

2023 年 3 月 14 日

[サブスクライバーが Amazon S3 データアクセスデータセットリソースの通知を受信する機能](#)

プロバイダーが Amazon S3 リソースに対してアクションを実行したときに、サブスクライバーが通知を受け取ることができるようになりました。詳細については、「[Amazon EventBridge イベント](#)」を参照してください。

2023 年 2 月 10 日

[Amazon S3 \(テスト製品\) AWS Data Exchange に含めるようにチュートリアルを更新しました \(プレビュー\)](#)

次のチュートリアルでは、カタログを参照して AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品) (プレビュー): チュートリアル: サブスクライブ for Amazon S3 (テスト製品) (プレビュー) AWS Data Exchange を検索してサブスクライブする方法を示します。
[AWS Data Exchange Amazon S3](#)

2023 年 2 月 6 日

2022 年 11 月 30 日

[Amazon S3 データアクセス \(プレビュー\) を含む製品を公開およびサブスクライブする機能](#) [データサブスクライバーが](#) を介して [AWS GlueAWS Lake Formation テーブルにアクセスできる機能 \(プレビュー\)](#)

プロバイダーは Amazon S3 データアクセスを含む製品を作成できるようになりました。詳細については、「[Amazon S3 データ アクセスを含む新しい製品の公開 \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データプロバイダーの Amazon S3 データセットからデータを検索、サブスクライブ、使用できるようになりました。詳細については、「[Amazon S3 データ アクセスを含む製品のサブスクライブ \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、AWS Lake Formation を通じて、基盤となるファイルを抽出 ready-to-use、変換、ロードすることなくクエリおよび分析できるライブのサードパーティー AWS Glue テーブルを検索してサブスクライブできます。詳細については、AWS Lake Formation データセットを含む製品にサブスクライブしてアクセスする (プレビュー) [Amazon S3 データアクセス を含む製品へのサブスクライブ \(プレビュー\)](#) を参照してください。サブスクライバーは、基盤となるファイルを抽出 ready-to-use、変換、ロードすることなく、を通じてクエリおよ

び分析 AWS Lake Formation
できるライブのサードパー
ティー AWS Glue テーブルを
検索してサブスクライブでき
ます。詳細については、[AWS
Lake Formation 「データセッ
トを含む製品をサブスクラ
イブしてアクセスする \(プレ
ビュー\)」](#)を参照してくださ
い。

[現在、イスラエルは適格な管 轄区域となっています](#)

AWS Data Exchangeでイス
ラエルの居住者が販売者とし
ての登録対象になりました。
詳細については、「[プロバイ
ダーとして開始する](#)」を参照
してください。

2022 年 8 月 29 日

[拡張プロバイダープログラム](#)

拡張プロバイダープログラ
ム (EPP) が一般利用可能にな
りました。詳細については、
「[拡張プロバイダープログラ
ム \(EPP\)](#)」を参照してくださ
い。

2022 年 8 月 9 日

[エクスポートファイルのサイズ制限の引き上げ](#)

Amazon S3 へのリビジョンのクロスリージョンエクスポートのファイルサイズ制限が 100 GB から 1,000 GB に引き上げられました。単一のクロスリージョンジョブで Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数が 2,000 から 10,000 に増加しました。詳細については、「エクスポートおよびインポートジョブのガイドライン」を参照してください。

2022 年 8 月 4 日

[類似製品](#)

サブスクライバーは商品詳細ページの下部に類似商品のリストを表示できるようになり、検索結果ページに戻らなくても閲覧を続けることができます。詳細については、「[製品へのサブスクライブとアクセス](#)」を参照してください。

2022 年 7 月 28 日

サブスクライブ後の機能強化

異なるタイプのデータセットを含む製品をサブスクライブすると、サブスクライバーは異なるタイプのデータセットを表示するアイコン付きのカードを別々に表示できるようになりました。サブスクライバーはデータセットに関する詳細情報を確認でき、サブスクリプション後のページから利用資格のあるデータに直接アクセスできます。さらに、S3 データセットを含む製品のサブスクライバーは、サブスクリプション後のページで直接手動または自動エクスポートを設定できます。詳細については、「[製品へのサブスクライブとアクセス](#)」を参照してください。

2022 年 7 月 25 日

リビジョンのエクスポート時にデータセット ID とデータセット名をエクスポートする機能

Amazon S3 バケットにリビジョンをエクスポートする際、プロバイダーとサブスクライバーの両方が、データセット ID とエクスポートされるデータセットの名前をエクスポートできるようになりました。詳細については、「[リビジョンのエクスポート](#)」を参照してください。

2022 年 7 月 14 日

[での Open Data との統合 AWS](#)

の有無にかかわらず、誰でも AWS アカウント [Open Data on AWS](#) プロジェクトからデータ製品を検索および検索できるようになりました。詳細については、「[AWS データセットでのオープンデータの使用](#)」を参照してください。

2022 年 6 月 21 日

[データセットエクスポートの 動画](#)

動画を追加するためのドキュメントのみの更新: からのサードパーティーデータセットの 1 回限りのエクスポート AWS Data Exchange。詳しくは、「[アセットのエクスポート](#)」と「[リビジョンのエクスポート](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 27 日

[API プロダクトの従量制コストを指定し、従量課金制で API プロダクトを購読できます](#)

プロバイダーは API 製品の従量制コストを指定できるようになりました。詳細については、「[APIを含む製品の公開](#)」を参照してください。サブスクライバーは、従量課金制でサードパーティー API を検索してサブスクライブできるようになりました。この機能により、毎月のデータファイルサブスクリプションと比較して、サブスクリプション契約者の初期費用が削減されます。詳細については、「[APIを含む製品の購読とアクセス](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 19 日

[プロバイダーとしてサブスクリプション検証リクエストを表示および編集する機能](#)

プロバイダーとしてのサブスクリプション検証リクエストの表示と編集の方法が明確になるように、ドキュメントのみを更新しました。詳細については、「[プロバイダーのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 6 日

[データディクショナリとサンプルを含むようにチュートリアルを更新しました](#)

次のチュートリアルには、データディクショナリとサンプルが含まれるようになりました: [チュートリアル: で AWS Data Exchange ハートビートをサブスクライブ AWS Data Exchangeする](#)、[チュートリアル: で APIs AWS Data Exchange のをサブスクライブする \(テスト製品\) AWS Data Exchange](#)、[および でのチュートリアル: レジストリイベントパーティショニング \(テスト製品\)をサブスクライブする AWS Data Exchange](#)。

2022 年 4 月 13 日

[データディクショナリとサンプルを含む製品を提供およびサブスクライブする機能](#)

プロバイダーは、データディクショナリとサンプルを含むデータ製品を作成および更新できるようになりました。詳細については、「[データディクショナリとサンプル](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データディクショナリとサンプルを含む製品を購読前に評価できます。詳細については、「[データディクショナリとサンプル](#)」を参照してください。[サブスクライバーは、新しいトピック「サブスクリプションの管理」でサブスクリプションの管理方法について詳しく知ることができます。](#)

2022 年 3 月 31 日

[製品の公開 \(動画\)](#)

動画を追加するためのドキュメントのみの更新: で製品を公開します AWS Data Exchange。詳細については、「[新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

2022 年 3 月 18 日

[既存のポリシーの更新](#)

次の新しい権限がAWSDataExchangeProviderFullAccess マネージドポリシーに追加されました:dataexchange:RevokeRevision
詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2022 年 3 月 15 日

[リビジョンを取り消す機能](#)

プロバイダーは、サブスクライバーのリビジョンへのアクセス権を取り消したり、リビジョンのアセットを削除したりできます。詳細については、「[トークンの取り消し](#)」を参照してください。サブスクライバーは、リビジョンへのアクセスが取り消されたこと、および取り消された理由を通知する Amazon EventBridge イベントを受け取ります。詳細については、「[Amazon EventBridge イベント](#)」を参照してください。

2022 年 3 月 15 日

[API データセットを含む製品の購読に関するチュートリアルを追加しました](#)

次の新しいチュートリアルが追加されました: [チュートリアル: で APIs \(テスト製品\) AWS Data Exchange のをサブスクライブする AWS Data Exchange](#)。

2022 年 1 月 14 日

[Amazon Redshift データセットを含む製品を公開およびサブスクライブする機能](#)

プロバイダーは、Amazon Redshift データセットを作成、ライセンス供与できるようになりました。詳細については、「[Amazon Redshift データセットを含む製品の公開](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データプロバイダーの Amazon Redshift データセットからデータを検索、サブスクライブ、使用できるようになりました。詳細については、「[Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクライブ](#)」を参照してください。サブスクライバーは、プロバイダーが Amazon Redshift リソースに対してアクションを実行したときに通知を受け取ることもできます。詳細については、「[Amazon EventBridge イベント](#)」を参照してください。次のチュートリアルが追加されました: [チュートリアル: AWS Data Exchange でワールドワイドイベントアテンダンス\(テスト製品\)にサブスクライブする](#)。

2022 年 1 月 4 日

既存のポリシーに対する更新

Amazon API Gateway から API を取得する新しいアクセス許可 `AWSDataExchangeProviderFullAccess` および `AWSDataExchangeFullAccess` : が AWS マネージドポリシーに追加されました `apigateway:GET` 。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 12 月 3 日

既存のポリシーに対する更新

API アセットにリクエストを送信する新しいアクセス許可 `AWSDataExchangeProviderFullAccess` および `AWSDataExchangeSubscriberFullAccess` : が AWS マネージドポリシーに追加されました `dataexchange:SendApiAsset` 。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 11 月 29 日

[サードパーティー API を提供 およびサブスクライブする機 能](#)

プロバイダーは、を使用して API データ製品を作成し、AWS Data Exchange AWS Data Exchange を使用してサブスクライバー認証、料金、請求、REST APIs pay-as-you-go へのアクセスを管理できるようになりました。詳細については、「[新しい API データ製品の公開](#)」を参照してください。サブスクライバーは、AWS クラウドでサードパーティー REST API からの API ベースのデータを検索してサブスクライブできるようになりました。AWS ネイティブ認証とガバナンスを使用し、AWS生成SDKs を使用して API コールを行うことができます。詳細については、「[API データ製品のサブスクライブ](#)」を参照してください。

2021 年 11 月 29 日

[既存のポリシーに対する更新 \(パブリックプレビュー\)](#)

Amazon Redshift データセットへのアクセスと作成を許可するための新しいアクセス許可として、AWS `AWSDataExchangeProviderFullAccess` と `AWSDataExchangeFullAccess:redshift:AuthorizeDataShare`、`redshift:DescribeDataSharesForProducer` および `redshift:DescribeDataShares` が追加されました。`redshift:DescribeDataShares`。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 11 月 1 日

[Amazon Redshift データ製品を公開してサブスクライブする機能 \(パブリックプレビュー\)](#)

プロバイダーは、を使用して Amazon Redshift データ製品を作成してライセンスできるようにになりました AWS Data Exchange。詳細については、「[新しい Amazon Redshift データ製品の公開 \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データプロバイダーの Amazon Redshift データセットからデータを検索、サブスクライブ、使用できるようになりました。詳細については、「[Amazon Redshift データ製品のサブスクライブ \(プレビュー\)](#)」を参照してください。

2021 年 10 月 19 日

既存のポリシーの更新

データセットの新しいリビジョンを自動的にエクスポートするためのアクセスを制御するための新しいアクセス許可 `AWSDataExchangeSubscriberFullAccessdataexchange:CreateEventAction`、`dataexchange:UpdateEventAction`、および `AWS` 管理ポリシーに追加されました `dataexchange:DeleteEventAction`。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 9 月 30 日

リビジョンを自動的にエクスポートする機能

サブスクライバーは、リビジョンを自動的にエクスポートできるようになりました。詳細については、「[サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート \(コンソール\)](#)」を参照してください。

2021 年 9 月 30 日

ジョブの使用方法に関する手順を更新

ジョブを使用してアセットのインポートとエクスポート、およびリビジョンのエクスポートを実行する方法を明確にするために、「[AWS Data Exchange のジョブ](#)」セクションが更新されました。

2021 年 9 月 7 日

[データ製品のサブスクリプションを解除する方法に関する手順を追加](#)

「[AWS Data Exchangeでのデータ製品のサブスクリプション](#)」セクションが再編成され、製品のサブスクリプションを解除する方法を明確にするための新しいサブセクションが追加されました。詳細については、「[で製品のサブスクリプションを解除する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

2021年8月11日

[AWS License Manager によるライセンス共有のサポート](#)

購入する製品とライセンスをAWS組織内の他のアカウントと共有できます。詳細については、「[組織内でのライセンスサブスクリプションの共有](#)」を参照してください。

2021年8月4日

[リビジョンを自動的に発行する機能](#)

プロバイダーは、データセットにリビジョンを自動的に発行できるようになりました。詳細については、「[自動リビジョン発行を使用した新しいデータセットリビジョンの発行](#)」を参照してください。既存のデータセットを自動リビジョン発行に移行する方法については、「[既存製品の自動リビジョン発行への移行](#)」を参照してください。

2021年7月22日

[製品説明テンプレートを更新](#)

次の製品説明テンプレートが更新されました: [メディアとエンターテイメントの詳細な説明テンプレート](#)と[小売と場所の詳細な説明テンプレート](#)。

2021年7月19日

より適格な管轄区域	AWS Data Exchange香港特別行政区とカタールがの販売者としての登録対象になりました。詳細については、「 AWS Data Exchange 製品の対象管轄区域 」を参照してください。	2021年6月24日
マネージドポリシーに対する変更を表示する機能	のAWS マネージドポリシーに加えられた変更を確認できるようになりましたAWS Data Exchange。これらは、「 AWS Data Exchange向けのAWS マネージドポリシー 」トピックで追跡されます。	2021年5月25日
支払いスケジューラを追加	支払いスケジュールを使用して、プライベートオファーや更新されたプライベートオファーのサブスクライバーに料金を請求できるようになりました。詳細については、「 プライベートオファーを作成する 」を参照してください。	2021年5月24日
データセットをプログラムの追加する機能を追加	AWS Marketplace Catalog API サービスを使用してデータセットを追加できるようになりました。詳細については、「 AWS Data Exchange と AWS Marketplace Catalog API の使用 」を参照してください。	2020年8月23日

希望通貨のサポート	希望する通貨を使用して AWS Data Exchange サブスクリプションに対して料金を支払うことができます。詳細については、「 料金 」を参照してください。	2020 年 7 月 27 日
より適格な管轄区域	AWS Data Exchange バーレーン、ノルウェー、スイス、アラブ首長国連邦 (UAE) の販売者としての登録資格が付与されました。詳細については、「 AWS Data Exchange 製品の対象管轄区域 」を参照してください。	2020 年 6 月 16 日
データセットのエクスポートに対する暗号化のサポートを追加	AWS Data Exchange は、データセットを Amazon S3 にエクスポートするときに設定可能な暗号化パラメータをサポートするようになりました。詳細については、「 Amazon S3 バケットへのアセットのエクスポート 」を参照してください。	2020 年 4 月 27 日
AWS Data Exchange が一般公開されました	AWS Data Exchange は、お客様が AWS クラウドでファイルベースのデータセットを簡単に AWS 作成、更新、保守、および安全に交換できるようにするサービスです。	2019 年 11 月 13 日

AWS 用語集

AWS の最新の用語については、「AWS の用語集リファレンス」の「[AWS 用語集](#)」を参照してください。

翻訳は機械翻訳により提供されています。提供された翻訳内容と英語版の間で齟齬、不一致または矛盾がある場合、英語版が優先します。